

失敗に関する心理学的研究
—個人要因と状況要因の検討—

甲南女子大学文学研究科心理学専攻

山田 尚子



失敗に関する心理学的研究 一 個人要因と状況要因の検討一

第I部 序論	1
1章 失敗の定義	1
1-1 適切な行為からずれること	3
1-2 適切な行為からのずれに気づくこと	7
1-3 本研究で扱う失敗	13
2章 失敗のメカニズムに関する認知心理学的研究	15
2-1 Reasonのスリップの分類	15
2-2 NormanのActivation-Trigger-Schema(ATS)システムモデル	18
2-3 ReasonのGeneric Error-Modelling System(GEMS)	22
2-4 実験的に誘導されるエラーの研究	25
2-5 問題点	29
3章 本研究の目的	30
第II部 失敗に関する理論的考察	32
4章 諸領域における失敗	32
4-1 環境と身体が支える適切な行為	32
4-2 「できない」失敗と、その適応的意味	34
4-3 社会的・文化的環境における行為の失敗	35
4-4 行為に追い越される意図：フロイトによる失錯行為の研究	37
4-5 本研究における失敗との関連	39
第III部 失敗傾向に関する個人差の研究	40
5章 スリップ傾向に関する研究	41
5-1 Cognitive Failures Questionnaire(CFQ)日本語版の作成及び信頼性の検討	41
5-2 自己評定と他者評定の関係	52
5-3 視覚的探索課題・焦点づけ注意課題における遂行との関係	56
5-4 同異判断課題における教示の効果との関係	63
5-5 まとめ	68
6章 3つの失敗傾向に関する研究	70
6-1 失敗傾向質問紙の作成及び信頼性の検討	70

6-2	失敗傾向の階層構造	79
6-3	パーソナリティ特性との関係	86
6-4	注意のスタイルとの関係	95
6-5	自己評価との関係	100
6-6	自己意識特性・他者意識特性との関係	107
6-7	性格記述語を用いた失敗傾向の検討(1) ー異なる年齢群の比較ー	112
6-8	性格記述語を用いた失敗傾向の検討(2) ー望ましさ及び自己意識特性との関係ー	123
6-9	まとめ	131
第IV部 失敗傾向と状況要因の相互作用に関する研究		135
7	失敗傾向と課題遂行	135
7-1	本章の目的と方法	135
7-2	集団式知能検査における遂行との関係	138
7-3	集団式作業検査における遂行との関係	163
7-4	熟慮ー衝動の認知スタイル課題における遂行との関係	183
7-5	場独立ー場依存の認知スタイル課題における遂行との関係	196
7-6	失敗傾向, 課題状況の認知から遂行を説明するモデルの検討	210
7-7	まとめ	219
8	失敗傾向と適応	223
8-1	失敗傾向と健康状態	223
8-2	失敗傾向と災害時の行動	228
8-3	まとめ	237
第V部 総括		239
9	総括	239
9-1	本研究のまとめ	239
9-2	今後の課題	242
引用文献		245
資料		

第 I 部 序論

1 章 失敗の定義

本研究でとり上げるのは、うまくいかなかった行為である。間違い、誤り、エラー、失策、ミス、錯誤など、さまざまな言葉で表現されるこれらの行為—ここではひとまず「失敗」と呼んでおく—は人間にはつきものだと考えられている。勘違い、もの忘れ、見落とし、失言、判断ミス、簡単な動作の失敗などが、時には滑稽な、時には深刻なものとして人々の日常生活に現れる。またスポーツにおけるエラーや反則、演奏の失敗、テストでの不正解、医療事故、産業・交通場面での事故、道徳に悖る過ちなどが起こる。時には小さな失敗が取り返しのつかない結果を招くこともある。

・妻と口論になった際に抱いていた子どもを敷居の上に落としてしまい、ぐったりした子どもを車で病院に運ぶ途中で対向車線にはみ出して走行し、別の車と正面衝突を起こした。

・子どもを保育園に送るため後部座席に乗せて自宅を出たが勤務先に直行し、子どもが車内にいることを忘れて仕事をして約7時間後、別の仕事のために車を運転して初めて気付いた。

(いずれも新聞記事からの抜粋。傍点は筆者。)

おそらくは当人にも信じられないような失敗の連鎖によってこれらの出来事はいずれも子どもの死亡という最も悲惨な結果を迎えた。このような経験は人間の行うこと、ひいてはその存在のあやうさを浮き彫りにする。人間の行為は常にうまくいくものではないこと、人間は常にうまくやれる存在ではないことを改めて思い知らされる。

しかし人間は失敗をおかして意気阻喪し、取り返しのつかない結果に煩悶する一方で、自他の失敗から何かを学び、次は少しでもうまくやろうと努力することもできる。「失敗は成功のもと」、「試行錯誤」などの言葉からもわかるように、失敗を成功に至る前段階、或いは反面教師としてポジティブに捉えることもあり、過ちを犯してもそれを認めて潔く反省すれば、むしろ望ましい態度と受け入れられることもある。

しかし失敗という現象がすぐれて人間的であるのは、人間が失敗から逃れら

れないからというだけではなく、それが行為の意味に関わることだからでもある。人間の行為は状況の中に位置づけられたものであり(ブルーナー, 1999), 行為の意味は状況に依拠して解釈される。「失敗」も既に行われた行為に対して与えられる, そのような意味のひとつであろう。人間の行為に意味が生じる場所でのみ, それが失敗かどうかを問うことができるという点においても, 失敗は人間的なのである。

Payne (1989) はこれについて「人生の現象に本質を与えるレトリックの働きがある世界でのみ, 人は失敗できる」と述べ, 失敗がどのような意味を持つものとして語られるかを重視している。また下條 (1999) は知覚や認知の錯誤という失敗を正常な精神機能と特殊な環境状況の相互作用の結果と捉えた上で, それが行為者の身体の文脈内におさまっている限りは錯誤ではなく, 「人々や場面に共通の知識, 或いは環境に共通の資源に言及して初めて錯誤は意味をなし, 定義も明確になる」と述べている。従って, 行為者がその状況においてどんな目的や意図をもって行動するかを推測せず, 徹底的に行動のみを記述しようとする行動分析学においては, 「誤りを犯すという行動は存在しない」ことになる (島宗, 1997)

では, ある行為が失敗であると言う時には何が起きているのだろうか。例えば「私は勘違いしていた」と言う場合には, 正しく理解されえた何事かがあったことが前提になっており, 更にその「正しい」理解と自分の理解がくい違っていたという気づきが必要である。同様に, 覚えていた (或いは覚えておこうとしていた) 何事かがあり, それが一旦は忘れられ, それを忘れていたことに気づいた時にももの忘れは成立する。またスポーツや音楽, 演劇その他のパフォーマンスにおける失敗は, それに則ってパフォーマンスが行われるべきルール (または楽譜, 脚本など) からの逸脱が行為者自身, 或いは審判や観客によって気づかれる時に成立する。近年人々の注目を集めている医療事故では, 適切な判断や処置からのずれが, 患者の症状の悪化や最悪の場合は死亡という重大なダメージを招くことで衝撃的な気づきをもたらす。このように, 失敗が成立するための要件を(1)適切な行為からずれること, (2)そのずれに気づくこと, と定義し, 次にそれぞれについて考えてみる。

1-1 適切な行為からずれること

1. 意図、目的、手段について

人間が何らかの意図を持ち、その目的を達成するための手段を講じる時、その意図やそのための目的の設定が適切なものであり、それを適切に達成できれば、その行為はうまくいったと言えるだろう。だとすれば、意図や目的、手段の選択・実行のいずれかが適切でなかった行為をひとまず失敗だと考えることができる。

例えばある人が「明日の朝は7時に起きないといけないので目覚まし時計をセットしよう」と考える時には、「7時に起きる」という目的のために、「目覚まし時計」(事物)とそれを「7時にセットする」(行為)という手段が選ばれている。もし適切な手段が選ばれなかったり、手段が適切に実行されなければ8時に目覚ましをセットしたり、セットすることを忘れてすれば、7時に起きるという目的は達成されにくくなるだろう。またゆっくり寝ていようと決めた休日の前夜であれば、うっかりしていつものように7時に目覚まし時計をセットすれば、行為自体は完全に正しく実行されたとしても、間違えて早く起きてしまうことになる。

ただしある意図を達成するための手段は、その状況の許す範囲において代替可能で可変的なものであり、適切な行為というのも唯一最善の行為ではない。例えばここでは7時に起きるために家族に起こしてくれるよう頼むこともできる。Reason (1990) は *planning* という言葉で目標 (goal) の明確化と、目標を達成するための手段の決定に関わる過程を表わしている。このような表現では、行為に先立って目的や手段を明確化するプロセスに重点が置かれており、プランという言葉は特定の目的-手段のまとまりを指すことが多い。しかし本研究で言うプランは、「...のために~すべし」という形であらかじめ決定され、行為の進行を一方的にコントロールするものとしてではなく、意図に沿いながら行為や環境の変化に応じてある程度の変更や修正の可能性を持ったもの (例えばオリエンテーリングにおけるプラン; 村越, 1992) や、時には行為の後で明らかにされるような暗黙のものまでも含めている。

2. 適切さを規定するもの

行為が状況の中に位置づけられている¹という時、この「状況」はおそらく Koffka (1935) の「行動的環境」や柿崎 (1993) の「生態的環境」のように行為者に経験され、知覚される環境を指している。また行為に意味を付与するという点では箕浦 (1997, 1999) の言う「意味空間」のような内面環境を含めても良いだろう。このような状況は、「物理的環境と人間 (Koffka)」、「現前の事物・事象と知覚者の受容器に与えられる情報とその効果 (柿崎)」、「文化的意味の充満した社会システムと主体 (箕浦)」というように、広義の環境と行為者の相互作用から成り立っている。適切な行為とはまず、人間と環境の相互作用の場、すなわち状況に対して適切な行為であろう。ただしこのように状況の成り立ちそのものが多様である以上、それぞれにとって適切な行為があり、さまざまな性質の失敗があることを考慮しておかなければならない。

まず物理的環境との関わりにおいて適切な行為とはどのようなものかを考えてみる。柿崎 (1993) は、生きている人、すなわち何かを「する」人はそのすることに即して自分のおかれている状況をどのようなものとして捉えるべきか、その中の事象をどのようなものとして見るべきかという課題を常に担っており、この課題解決を達成するのが知覚であると言う。そして「生態的に食べ物であるものをまさに食べ物だと見てそれを食べる」という行為と比較して、「ロウ細工であるものを食べ物だと見てそれを食べようとする」行為を、機能的に妥当 (veridical) でない例として上げている。

日常では見間違い或いは勘違いと呼ばれるような行為だが、この例では環境が提供する資源や価値 (アフォーダンス) と、行為者が環境から見出す意味とが対応しておらず、行為はそのずれの中で進行していると考えることができる。ロウ細工を口に入れて食べ物ではないことが知覚されればこのずれは解消されるが、そのかわり自分の行為が失敗であることが認識されることになる。また暗黙にあったかもしれない「空腹を満たす」という目的も達成されないままである。しかしその行為者がロウを好んで食べる人であるとすれば、この行為は普通の摂食行為と同じであり、失敗ではない。つまりこの行為が veridical かどうかを規定するためには、「それがロウでできている」という物理的現実だけ

¹ “situated” は「状況的」或いは「状況に埋め込まれた」(佐伯, 1993) と訳されることもある。

ではなく、それが行為者にどのような意味を提供するか、行為者がそれをどのように受け取るのかを考慮する必要がある。

また下條（1999）も、物理的に定義される事実だけでは錯視と正しい知覚を区別できない例をあげて、錯誤と正解を決めるのは「脳の来歴」であると述べている。脳の来歴とは生得的に持っている遺伝情報、発達初期の神経系の発達、過去から現在に至る学習、記憶、適応のすべての経緯、環境に対して持つ暗黙の前提などの総体であり、この脳の来歴と環境の間にずれが生じた場合に錯誤が起こると考えている。従って、知覚の錯誤は常に行為者と環境の相互作用の中で定義されることになる。

では文化的・社会的環境の中では失敗はどのように起こるのだろうか。物理的環境と同じように、文化的・社会的な環境と人間の間にも絶え間ない相互作用が生じている。箕浦（1997）が言うように人間は自分の行為や感情が自分の育った文化の影響を受けていることをふだんはそれほど意識していない。しかし法や倫理、道徳、理想、ルール、ある事柄に対して決められた一定の手続きなどが、あるものは強く、あるものは緩やかに人間の行為を規制している。

オースティン（1978）は「約束する」、「賛成する」、「誓う」などのように、言うことが即ち行うことであるというタイプの遂行的発言（performatives）が適切に（happily）機能するための条件について述べている。その条件とは、発言された行為に関する慣習的な手続きが存在し、その手続きに対して関与する人や状況が適切であること、その手続きが正しく完全に実行されること、そして関与する人が、その手続きが持つように構成されているところの意図や感情を持ち、その後も実際にそのように行動することなどである。オースティンはこれらの条件が整わない場合の行為を「不適切（infelicity）」と呼び、どの条件にどんな不備があるかによって不適切行為を分類している。

この条件を「言うこと」以外の行為に当てはめてみると、文化的・社会的な環境における適切な行為とは、その手続きが一般に受け入れられるようなもので、それを行うに相応しい人がその行為に沿った意図や感情を持ち、相応しい状況でそれを正しく実行するなどの条件を満たすものだろう。「一般に受け入れられる」、「相応しい」、「正しく」などはいずれも人々の間で共有され、伝達される規範や基準による評価であり、その規範や基準からずれた行為は不適切とい

うことになる。

先ほどの例で考えてみよう。「7時に目覚まし時計をセットする」という彼(彼女)を含め我々の大多数は、学校や職場に定められた時間まで行くように求められていることを心得ている。それは明白に定められた規則かもしれないし、暗黙に守られている慣習かもしれない。目覚ましをセットし忘れ、寝坊して遅刻することは、それらのルールに対する逸脱であり失敗である。しかし車を飛ばして会社に間に合ったとしても、法定速度をオーバーしていれば交通規則という別のルールに対する逸脱になってしまう。また時間がなかったからと服装を整えないで定時に間に合わせたとしたら、特にきちんとした服装を重んじる場ではそのルールから逸脱してしまうことになる。このように社会的・文化的環境との関わりでは、何が適切な行為で何がそうでないのかの区別は一層複雑になり、状況や行為者によって何が失敗かの判断が異なってくることもあり得る。

以上のことから、おそらくどのような失敗であれ、環境と行為者の相互作用を考える必要があることは明白である。環境内には他者という存在をはじめとして、多義的で流動的な事象が豊富に存在する。そして実際にこれらを受け取るのも「人間」という普遍的な存在ではなく、一々條の言葉を借りるなら、それぞれの脳の来歴を持った一「私」や「あなた」や特定の個別的な誰かである²。この多様で個別的な関わりの中である行為が失敗だとされるなら、それが何からずれているのか、誰にとっての失敗かを問うことが必要になるかもしれない。

3. 行為はなぜずれるのか

次に行為がなぜずれるか、つまり「なぜ失敗するのか」と問うてみよう。ジェイムズ(1957)は人間がその性質上、失敗から逃れることはできないと言う。失敗が人間という存在に内包されたものであるなら、なぜ失敗が起こるのかと問うことは、なぜ人間は斯く在るのかと問うことと同じである。また Payne(1989)によれば、人間はプランとゴールを持ち、そのゴールを達成しようとするから失敗する。つまり人間は何事かを為そうとするから失敗するのだ。な

² 引用部分では著者の表現に従っているが、それ以外で「人間」ではなく「人」と表記する時には、多少ともこのような個別的な意味を持つ主体を表している。

ぜなら何かを為そうとしても人間は自分で思い描くような理想に達していないし、また達することもできないので失敗してしまう。また他者や世界は我々が成功と思うものに同意してくれないことで我々を失敗させる。ここでも人間はその不完全さ故に失敗すると考えられている。

また今井（2001）は特に知覚における錯誤について、知覚システムの性質上、人間にとってそれらの失敗が避けられないことを述べている。例えば錯視は知覚の機能モジュールの自律性と自動性によって起こるものであり、これらは進化や適応には不可欠の特徴である。従って、錯視が起こらない生物になることの負の効用が大きすぎるので、そのような形の進化は人間には起こらないだろうというのである。

では本研究において「人間が不完全なものだから」「人間が何らかの行為を行うから」「人間は失敗するようにできているから」といった答をいくらかでも超えるものを得ることができるだろうか。おそらくそのためには「人間はなぜ失敗するのか」と問うのではなく、先に述べたような個々の状況、個々の失敗の意味、すなわち「なぜその状況で、そのような失敗が起こったのか」を問うていく作業が必要になるだろう。またそのような作業を通して、失敗をいくらかでも防ぐにはどうすればよいか、失敗が起こった後にどのような対処が可能なのかといった手がかりが得られるかもしれない。このような特定の状況における失敗を検討する試みについては、主に第IV部で述べることになる。

1-2 適切な行為からのずれに気づくこと

失敗が成立するためには、ある行為が適切なものからずれるだけでなく、そのずれに誰かがどこかの時点で気づくことが必要である。先の柿崎の例で言えば、ある人がロウ細工を食べ物だと見た時点では、それを見間違いだと言える者はまだ存在しない。行為者はそれが食べ物でないことを知らないし、それがロウ細工であることを知っている人が周囲にいたとしても、行為者がそれを食べ物だと思っていることは知らない。他者の行為が失敗であると気づくためには、まずその行為やその結果が観察可能であるか語られるかなどして、行為そのものに気づけることが前提である。例えばここで行為者が「おいしそうだね」と言ったとすれば、周囲にいる人は行為者がそれを食べ物だと思っていること

に気づくかもしれない。また行為者自身が近寄って仔細に見たり匂いをかいだり、実際にそれを口に入れてみれば食べ物ではないことがわかる。こうして行為者が食べ物だと思ったものが食べ物ではなかったことに誰かが気づいた時に、その行為は「見間違い」だったことになる。

他にも、例えばある言葉の意味をずっと間違えて思い込んでいたというような経験は日常でも見られるが、この「勘違い」にも、会話の中で誰かに指摘されるとか、辞書で偶然その単語を見つけるなどの気づきの瞬間があった筈である。そうでなければ、自分が持っている多くの正しい語彙と区別することはできない。自分の持っている文字通りの意味と、状況（ここでは言語体系を共有する社会・文化やその成員）の持つ意味のずれに気づいてやっとな、「あれは勘違いだった」ことがわかるのだ。

自らが行為の結果や状況を意識的にモニタリングしている時には、行為のずれは行為者自身に比較的容易に気づかれるだろう。そして必要に応じて行為の調整やプランそのものの修正が行われる。しかし、慣れた作業などで自分の行為にそれほど注意を向けていない時や、適切と思い込んだ不適切なプランに従って行動している時などは、失敗は行為者自身には気づかれにくくなり、むしろ行為者より他者のほうが早く気づくこともある。

あるとき、フェルナンダが結婚指輪がないと言い出して、家中大騒ぎになったことがあるが、子供たちの寝室の棚の上のそれを見つけてやったのもウルスラだった。…家族の一人ひとりそれぞれとは知らずに毎日、同じところを通り、同じ動作を繰り返していること…に気づいていたおかげだった。そういう小さな習慣からはずれたときにはじめて、みんなは何かを紛失したりするのだ。

（ガルシア＝マルケス、G. “百年の孤独”，鼓直訳）

人間が他者の行為をどのようなものとして受け取るか、それは受け取る側の状況の成り立ちにも影響される。行為者にとっての状況と、他者にとっての状況が異なれば、行為者にとっては失敗でも他者には失敗と受け取られないことがあり、またその逆の場合もある。

次に上げるのは、ジャズピアニストの山下洋輔がジョン・ケージの“4分33秒”を初めて演奏した時のエピソードである。この曲では演奏者は4分33秒

の間何もせず、ただそこにいるように指示されている。

出て行ってピアノの前に座った。あらかじめお客さんには何の説明もしていない。それをやったら意味がないのだ。始めて十秒位は、まだ大丈夫だった。そのうち弾くだろう、という雰囲気支配的なのだ。ところが、三十秒たち、一分となると、もういけません。これは何か異常な出来事だということを皆、感じはじめる。こいつは一体何をシテオルノカ、という疑惑の気配がヒシヒシと伝わってくるのだ。

(山下洋輔 “ピアニストを二度笑え!”)

コンサート会場において、開演時間が過ぎてピアニストがピアノの前に座っているという状況では、彼が何もしないでじっとしているという行為は、従来の音楽や演奏の概念からは逸脱している。この逸脱はおそらく作曲者（最初にプランを立てた人間）とその曲を選んだ演奏者（そのプランを共有し、実行する人間）が意図したことのひとつであろう。この曲の「演奏」中、聴衆は咳払いや衣擦れなど自然に聞こえてくるさまざまな音に耳を傾けることが求められているが、演奏の意図を知らされていない聴衆にはこのプラン通りの行動をとることは難しいし、おそらく演奏者が曲を忘れたのか、緊張のあまり弾き出せないのか—即ち演奏の失敗ではないか—などと解釈しただろう。なお演奏者は、おそらくはその状況では何かが演奏されるべきという適切さの圧力に負け、指示された時間より早く立ち上がって曲の説明を行ったとのことである。説明を受けた後では聴衆は、少なくともそれがプラン通りの行為であったことを理解しただろう。つまりそのプランとは、「…演奏会場という特定の意味場そのものを生かして、つくることや表現することの何たるかを、根本から問いなおす」ということである（中村、2000）。

上の例のように、意図的にある状況にとって適切でない行為を選ぶ場合³を除けば、適切な行為からずれていたという自他の気づきは行為の後で起こる。それは数秒後かもしれないし何十年後かもしれないが、この気づきによって、遡ってその行為に失敗という意味が付与される。そして人間は失敗に伴ういくつかの変化に直面させられることになる。

そのひとつは情緒的・認知的な反応である。自分の失敗に気がつくとき人間は

³ 冒険、芸術、ある種の犯罪などの行為では、「状況からの逸脱」「適切さからの逸脱」が

多くの場合まず驚き、やがてその失敗がなぜ起こったのかという疑問を持つだろう。自分が思うように行動できなかつたという気づき、或いは状況は自分が思っていたようなものではなかつたという気づきは、時には行為者の自己観や世界観を揺るがすことがあるかもしれない。そして動揺、悲しみ、怒り、恥、後悔、無力感、自責の念…などさまざまな感情が起こる。時が経てばこれらの感情は薄れていくこともあるし、ずっと以前の失敗について同じように強い感情にとらわれ続けることもある。また失敗を深く悔やむ者もあれば、さほど気にしない者もある。失敗の原因を知ろうとする者もあるし、少しでも早く忘れてしまいたいと願う者もある。

また、やってしまった……。ああ、いまいましい。情けない。がっかり、うんざり。溜息をつくばかりで言葉ひとつ出ない。そんな体験はこの季節ざらである。……傘をもって出るのを忘れたとき、あるいは傘を電車の中に置き忘れたときのことである。

(鷲田清一 “夢のもつれ”)

他人に指摘されるまでもなく、自分で自分の犯した誤謬にあとになってはっと気づくことがある。……こういうケースはケアレス・ミスと言うよりはもっと重大な意味を持つミステークであることが多く、従って前者よりはずっと冷や汗の量も多い。しかし、それはそれとして僕の犯す数多くのケアレス・ミスをいっぱい集めてそれを病理的に分析してみると、かなり面白い研究になるのではないかと思うこともないではない。文章にとどまらず、僕は日常生活のあらゆる側面で信じられないような間違いを犯しながら生きているからである。

(村上春樹 “村上朝日堂の逆襲”)

失敗には外的な変化が伴うこともある。その失敗によって自分自身が物理的なダメージを蒙ることもあるし、他者や状況に何らかのダメージを与えてしまうこともある。この外的な変化によって失敗に気づくことも多い。

他者に深刻なダメージを与えてしまう失敗として思い当たるのは、医療や交通の場面における事故であるが、このような失敗では「誰が責任を取るか」という問題が発生することが多く、そのために原因を明らかにすることが求められる。しかし「何が原因か」と「誰に責任があるか」は必ずしも一致する訳ではない。例えば看護婦が薬剤を間違えて注射したことが患者の死の直接的な原

目指されることも多いと思われる。

因であるとしても、その責任は過密業務を改善しようとしなかった病院側にあると判断される場合もある。現場からは、人間は必ず失敗するものであることを前提とするべきであるから、事故は（それを前提として作られてはいない）システムの問題である（寺沢、2000）という声も聞かれる。操作が誤っていればそれ以上操作を進められなくしたり（フルプルーフ）、エラーが起こっても危険な結果を招かないように設計したり（フェイルセーフ）するのは、そのようなシステムに対する改善策である。しかし一方で昨今の報道を見ていると、「誰に責任があるか」という問いが先行しすぎると、「不可抗力である」、「システム全体の問題である」というような答を引き出しやすくなり、何がその失敗の原因かが十分に検討されないでおかれるケースも多いのではないと思われる。個人が負うべき範囲を超えた責任を負わせるためにではなく、類似の事故を防止するために、その状況を構成する物的・人的要因を共に検討することが必要であろう。

責任をとる、物理的にダメージを修復・賠償するなどの手段以外に、人間はどのように失敗に対処することができるだろうか。「健全なる精神状態（ジェイムス、1957）」にある者ならば、長く悔やまず、それを無視・忘却して生活していこうと試みるかもしれない。或いは Payne（1989）が「治療的レトリック」と呼んだ会話行為を通して、その意味を再解釈することもできる。補償（compensation）と慰安（consolation）という二つのパタンを含むこのレトリックによって、人間は失敗の代わりに得るものに気づいたり、修復できない失敗をも受け入れられるように準備することができる。これらの方法は、行為に合わせてプランや状況の方を変化させることで、もともとのプランや状況に対してずれていた行為をずれでなくす方法であるとも言える。

ぼくは今まで自然に対して全く興味がなかった。…そしてこうした人工美はぼくの創作の靈感の源泉にまでなっていた。そしてぼくの生活は、当然、自然のバイブレーションに反し、その結果ついに交通事故のカルマを呼ぶに至った。しかし四ヶ月の入院生活でのさまざまな思索が、ぼくを自然のサイクルに戻してくれた。この時故⁴はぼくの人生の半ばで起こった最も幸運な事件であった。もしこのようなことがなければ、こうしてぼくはインドへ来なかったかも知れない。そしてこのように自然と直面しながら、自然を体感するというこ

⁴ 原文のまま。“事故”か？

かったような気がする。

(横尾忠則 “インドへ”)

自他の失敗を教訓として、或いは娯楽として共有することも、このような再解釈の一例であろう。

失敗は、新たな創造行為の第一歩にすぎません。その失敗と上手に付き合い、うまく活用していくためにも、まずは失敗を恥である、減点の対象であると考え今の日本の失敗文化そのものを変えていく必要があります。

失敗や恥を減点対象としても、起こった失敗が隠蔽されて、より大きな失敗へ種を成長させるだけです。それよりも、失敗の実態をきちんと見据えながら次の失敗が起こらないシステムを作るべきです。

(畑村洋太郎 “失敗学のすすめ”)

またいつ頃からかテレビでは、ドラマやニュースの NG (No Good) シーンやスポーツの「珍プレイ」を集めた娯楽番組が放映されるようになった。日常生活で他人の失敗をじっくり観察したり、あからさまに笑ったりすることは望ましくないとされるが、このような番組では視聴者は、俳優、アナウンサー、プロ選手など自分たちよりうまくできるはずの人々の失敗を観て楽しむことが許されている。また行為者は失敗を見せることによって親しみやすいとか「カワイイ」などの評価を得るかもしれない。渋い演技が売り物の俳優がバラエティ番組で頓珍漢ぶりを披露し、思わぬ人気を博した例はいくつもある。

…別に気取っていうわけではなく、元来私は過去を振り返ることが嫌いなのである。それは羞しいことと失敗のつみ重なりで、できることなら消してしまいたい。

…思い出すと居たたまれないほど恥ずかしくなるが、もし失敗によって物事を覚えるというのがほんとうなら、私の人生は失敗と恥辱の連続によって成立しているといえるだろう。

(白洲正子 “白洲正子自伝”)

まちがいはどこへ行くか／遠くはるかに／世界をこえて／とびちってゆく

世界はなんと／小さく見えることか

錯誤をだきとることの／できるものは／なんとおおきいか

(鶴見俊輔 “まちがいはどこへゆくか”)

ジェイムス (1957) はまた、世間で最も羨望される人々、最も幸福な人々で

さえ、自分の人生を振り返った時には失敗だったと述べるという例を挙げている。勿論それらの人がすべて人生が無意味だったと感じている訳ではないだろう。むしろ失敗を受け入れ、自らの人生が失敗によって成り立っていると言える精神の強靭さに注目するならば、失敗は「人生」や「自己」といった経験の総体を読み解くための鍵にさえなり得るかもしれない。

1-3 本研究で扱う失敗

本章では、失敗が成立する要件を(1)適切な行為からずれること、(2)そのずれに気づくことであると定義し、日常的な例からそれらについて考察を加えた。ただしこの定義による「失敗」には非常に多様な現象が含まれるので、本研究ではその中のどのような失敗を扱うのか、もう少し限定しておくことが必要であろう。

ここでの失敗とは、適切な行為が人と状況の両方にとって潜在的には可能であるが、(何かの理由で)うまくいかなかった行為を指す。言い換えれば人と状況のどちらか或いは両方が、適切な行為のための条件をもともと十分に備えていない場合に生じる不可避的な結果を、ここでは失敗に含めないということである。

…たとえば H-II ロケット八号機のケースである。予算や内外の政治的制約など、限られた条件のもとで開発され、なおかつ成功率という世界中のロケットが背負っている宿命の元で生じた「不具合」は、「失敗」でもなければ「誤り」でもないし、もちろん「過失」や「手落ち」でもない。

(五代富文・中野不二男 “ロケット開発「失敗の条件」”)

行為者の知識や能力が不足しているために正答することが不可能である課題、ある操作を遂行するために必要な身体的条件を備えていない場合、またはある種の錯視がほぼ常に起こる条件が揃っている知覚的状況などにおける「不適切な」行為はここでは扱わない。なぜならそこでは不適切な行為が、人か状況のどちらかの要因によって一義的に規定されるからである。また、例えば正答が存在しない課題といったものも用いない。この場合は行為が不適切であることを決める基準そのものが存在しないことになるからである。

以上の点を踏まえて本研究では、次のような人と状況の関わりの中で起こる失敗を対象とした。まず行為者は、「少なくとも自分の意志や他人の言語指示に従って、やろうと思ったことが簡単にできるまでに発達した成人」（麓，1992）であることを基本とした。実際の研究参加者は短大生・大学生及び一般成人である。また状況については、ある行為が失敗だと判断するための何らかの基準が存在し、比較的容易にその判断が行えることが必要であると考えた。そこで本研究では、上記のような一般的な成人にとって通常は解決可能で、しかも行為の成否を正答か誤答かという形で明瞭に示すことができる課題場面を多く用いた。言い換えればこれらの状況における失敗の多くは、研究者が失敗だと見なすことのできる行為であり、課題内容や手続きによっては参加者自身がそれを失敗と見なしていないものも含まれている。課題を用いる他には災害場面における対処行動の検討も行っているが、ここでは行為者自身が適切でなかったと思う行為を取り扱っている。

2章 失敗のメカニズムに関する認知心理学的研究

1章で見てきたように失敗は我々にとって非常に親しい経験であり、また個々の人間を理解するための手がかりの一つになり得ると思われる。認知心理学的な研究では、人間の複雑な行為を説明するために仮説的なモデルを構成するという方法をとることが多く、失敗はそのための重要な手がかりとして分析される。このようなアプローチでは、適切な行為のメカニズムがモデル化され、失敗はそこからの体系的なずれとして説明される。このようなモデルでは、一般的な失敗の種類や頻度を予測できるという利点がある。

対象となる失敗は、観察や日記法による自然主義的な事例収集、質問紙調査、シミュレーションを含む実験室研究、事例報告などから得られる。自然に生起する失敗の収集は幅広い現象の把握やその分類には適している。また質問紙調査では失敗の種類や頻度、その個人差について大まかに把握することができる。しかしこれらの方法では常に正確な記録や回答が可能な訳ではなく、失敗が生起する状況については詳細に記述されないことも多い。大規模な事故の事例報告から今後の失敗防止にとって有益な情報が得られることもあるが、一般化できる知見を得るにはその数は圧倒的に少ない。またこれらの報告が常に正確で広く利用できるものであるかどうかも問題である。一方、実験室研究やシミュレーションでは統制された状況において特定の失敗を引き起こすことができるが、それが現実の世界でどの程度起こりうるものなのか—すなわちその生態学的な妥当性についても問われなければならない。失敗のメカニズムを探るためにはこれらの方法を相補的に用いることが必要だろう。そこで本章では、失敗（この領域ではエラーと表現されることが多い）に関する認知心理学的研究のいくつかを概観しておく。

2-1 Reason のスリップの分類

Reason (1979) によればエラーとはプランされた行為の失敗である¹。ここでのプランとは、ゴールと、それを達成するために必要な行為の心的表象を指す。彼は、行為はプラン通りに進行したがプランそのものが適切でなかった

(inadequate) 場合や、プランは適切だが行為がプラン通りに進行しなかった場合にエラーが生じると述べ、後者を“Actions Not As Planned(ANAPs)”あるいは“slips of action”として取り上げている。ここではこれらを「スリップ」と呼んでおく。

Reason は 15 才から 46 才までの参加者 35 人に、意図しなかった行為や、ぼんやりしていた (absent-minded) 行為、アクシデント的な行動の記録を 2 週間のあいだ毎日続けるように依頼して、433 の記述を収集した。一人あたりの記述数は 0 から 36、平均は 12 で、有意な性差や年齢差は見られなかった。ほぼ 1 日に 1 つの割合で起こったこれらの記述は次の 5 つのカテゴリーに分類された。

弁別の失敗は対象物の刺激属性の混乱による入力のカテゴリミスである。これは更に知覚的、機能的、空間的、時間的混乱に分けられる。それぞれについて、「歯ブラシにシェービングクリームを出してしまった（形態の類似による知覚的混乱）」、「日光浴をしようとしてサンローションとサングラスを持ってきた。ローションが熱くなるので部屋に置いていこうと思ったのに、気がついたらローションを手に持ち、サングラスを部屋に置いてきていた（機能的類似による混乱）」、「ラジオの代わりに、その側にあった電気ストーブをつけてしまった（空間的近接性による混乱）」、「月曜の朝起きて、仕事着の代わりに日曜日用の服を着てしまった（時間の誤解）」などの例が挙げられている。

プログラム組立の失敗は、行為のプログラム内での要素の置き換えによる失敗である。この失敗は同じプログラム内だけでなく、同時に進行する 2 つのプログラム間や、一方は進行中で一方は記憶に貯蔵されているという 2 つのプログラム間でも起こる。例としては、「お菓子の包みを破き、包装紙を口に入れて、中身をごみ箱に捨ててしまった（行動的スプーナリズム²: プログラム内の要素が置き換わる）」、「オフィスの電話が鳴り、受話器を取り上げて『お入り下さい』と言ってしまった（進行中のプログラム間の混乱）」、「電気ストーブをつけるために、マッチの箱を持ってきてしまった（進行中のプログラムと貯蔵されたプログラム間の混乱）」などが挙げられている。

¹ ここでは原文の“error”を「エラー」、「failure」を「失敗」と訳している。

テストの失敗は、重要なチェックポイントで、行為の進行を照合しそこなうことで起こる。「玄関からミルクを取ってきて、お茶を淹れようとした。カップは出してあったが、そこにミルクを入れる代わりに、ミルクを冷蔵庫に入れてしまった（行為が意図された終結点を越える）」、「お風呂に入る寸前に、まだ下着を着ていたことに気づいた（行為が意図された終結点の手前で終わる）」、「Xという場所に行こうと思っていたのに、気がついたらYに行く道だった（ある分岐点から間違ったルートがとられる）」などがその例である。

サブルーチンの失敗とは、「昼間、部屋を出る時に電灯のスイッチを入れてしまった（不要な行為がシークエンスに付け加えられる）」、「電気ポットに水を入れ、ポットにコードをつないだが、そのコードをコンセントに差し込むのを忘れていた（必要な行為がシークエンスから省略される）」、「蛇口からバケツに水を入れていて、蛇口を閉める前にバケツにふたをしてしまった（正しい行為が誤った順序で行われた）」などのような、行為のサブルーチン内での要素単位のエラーである。

貯蔵の失敗は収集された記述の40%を占める。このスリップは、プランや行為の忘却、或いは誤った再生である。「今お茶を淹れたばかりのポットにまた熱湯を注いでしまった（先の行為の忘却）」、「食料品を買いに行って、その日の朝に買おうと思っていたジュースをかうのを忘れてしまった。（プランの中の具体的な対象の忘却）」、「レシピの2倍の分量でケーキを作ろうとして、最初の材料だけは2倍の分量を入れたが、その他の材料はレシピ通りの分量にしてしまった（古いプランに戻る）」、「寝室に行ったが、何のためにそこに行ったか思い出せなかった（プランの内容の忘却）」などの例がある。

Reasonによれば、行為のコントロールは熟達するにつれて意識的なフィードバックモードから、自動的なフィードフォワードモードへ移行する。ただしこの2つのコントロールモードはどちらも必要で、たとえ熟練した行為でも重要な時間的・空間的チェックポイントでは意識的なコントロールが必要になる。重要なチェックポイントとは、ある行為や状況が2つ以上のプログラムに共通

² 頭音転換とも言う。

して含まれている場合をいうが、もしここで必要な注意が払われなければ行為はより強力なプログラムに沿って進行してしまう（Xに行こうと思っていたのにYに行ってしまった例では、ある地点がその2つのルートに共通しており、Yに行くことの方が頻繁に行われる、慣れた行為だったという場合が多い）。こうしてスリップはその殆どが、(1)よく習熟したルーティン化された行為の実行中に、(2)不適切なコントロールモードにあるか、モード切り替えのタイミングが悪いかによって注意の焦点づけに誤った時に起こり、しかもそのスリップは(3)頻繁に、或いは最近行われた行動のシーケンスの形をとることが多いと考えられる。

ここではプログラムやサブルーチンという用語が示すように、ある行為のプランとは階層的に構成され貯蔵された表象であり、行為はその表象に従って進行すると考えられている。またその進行のコントロールには意識的な注意が大きな役割を演じており、それが十分でない時には、意図した行為の代わりに頻度や新近性の高い行為がほぼ自動的に起こってしまう。これがスリップのメカニズムであるが、こののち Reason は更に詳細なエラーの分類を試み、スリップ以外の失敗をも説明できるような包括的なモデルを提案している(3節参照)。

2-2 Norman の Activation-Trigger-Schema (ATS) システムモデル

Norman (1981) も同じく意図された通りに実行されなかった行為をスリップと定義し、前節で紹介した Reason のスリップ、他の先行研究や事故報告書などの記述、自らが収集した約 200 の例を含めたおよそ 1000 例の分析を行ってエラー生起のメカニズムをモデル化した。Activation-Trigger-Schema (ATS) システムと呼ばれるこのモデルでは、スキーマ、活性化、トリガリングなどの概念が用いられており、それぞれは「行為の運動シーケンスをコントロールする手続きを含む知識構造」、「貯蔵されたスキーマの利用可能性が高まること」、「活性化されたスキーマが何らかのきっかけによって始動されること」を指す。

このモデルによれば、何らかの意図を形成するという事は、その行為によって最高次の親スキーマが活性化されることであり、これによってその下位にある子スキーマが次々と活性化され、その中から条件を満たしたスキーマが始

動されて一連の運動シーケンスが実行される。例えば車で通勤している人の場合、「家に帰る」という意図は、関連する子スキーマ、例えば「オフィスを閉める」「駐車場に行く」「自分の車を探す」「ポケットからキーを出す」「エンジンをかける」「車を発進させる」「正しい速度を保つ」「必要なところで曲がる」…などを活性化させる。更に「オフィスを閉める」というスキーマが「電灯を消す」「さまざまなスイッチを切る」「ドアを閉めて鍵をかける」などの行為に分けられるように、子スキーマを構成する下位の子スキーマも次々に並列的に活性化される。これらの子スキーマは、先行する行為や環境、知覚などによってその条件を満たされることで、適切なタイミングで始動される。例えばキーを回すというスキーマは、キーが正しい向きに、適当なところまで差し込まれてから始動される（そうでなければキーは回らない）。またこれらのさまざまなレベルの要素に応じて、それが正しく進行しているかどうかをチェックする多層的なフィードバックシステムの存在も想定されている。このフィードバックシステムは、意図された行為と実際の行為のずれをもモニタリングするものであり、意図された行為が明確になっていない場合は、その行為自体がうまくいっているかどうかはわかっても、それが正しい＝意図された行為であるかどうかはわからないため、エラーは検出されにくくなると考えられる。

ある行為が習熟されたものであるほど、いったん意図が形成されれば下位の子スキーマが活性化され、始動されるプロセスは行為者が意識しなくても進行する。かと言ってそのプロセスは一旦始動されたら変更できないというような硬直したものではないから、例えば買い物をしてから家に帰るという場合には、ある交差点に来ればいつものルートから外れて右に曲がるというように、新しいスキーマが加えられる。ただしこの時、この新しいスキーマが必要な時に十分活性化されていなかったり、始動されなかったりすれば、誤っていつもと同じ行為が行われてしまい、買い物しないまま家に帰るという結果になってしまう。

このように正しい行為が(1)意図の形成、(2)スキーマの活性化、(3)スキーマのトリガリングという3つの側面から構成され、これらが適切に進行しなかった場合にスリップが生じるとすれば、スリップを大まかに3つに分類することができる。これをさらに詳しく分類したのが表 2-2-1 である。

表2-2-1 Normanによる、予測される原因に基づくスリップの分類

意図形成のエラーによるスリップ

- 0 スリップと分類されないエラー
:意図の決定に関わる側面(ゴール決定や問題解決など)のエラー
- 1 モードエラー :状況の分類が誤っている
- 2 記述エラー :意図の記述が不十分である

スキーマ活性化の失敗によるスリップ

- a 意図しない活性化…進行中の行為に含まれていないスキーマが外的要因によって活性化さ
1 とらわれエラー :進行中の行為の一部が、頻繁に行われ習熟したスキーマに類似して
る場合、後者が優勢になる
- 2 データ駆動型の活性化:外的な事象が不適切なスキーマを活性化させる
- 3 連合による活性化:活性化されているスキーマと連合する別のスキーマが活性化される
- b 活性化の消失…スキーマの活性化が失われ、行為のコントロールも失われる
- 1 意図の忘却
- 2 行為のシーケンス内の要素の順序が誤っている
- 3 シーケンス内のあるステップをとばす
- 4 スキーマの始動の失敗によるスリップ

トリガリングの失敗によるスリップ

- a 誤ったトリガリング…適切に活性化されたスキーマが誤ったタイミングで始動される
- 1 スプーナリズム :スキーマの要素の順序が入れ替わる
- 2 混合 :2つの競合するスキーマの要素が混ざる
- 3 思考が行為を導く:行為には無関係の、考えられていたスキーマの始動
- 4 尚早なトリガリング
- b 始動しそこない…活性化されたスキーマが始動されない
- 1 行為が競合するスキーマに先に占領されている
- 2 活性化のレベルが十分でない(忘却か、或いは最初の活性化レベルが低すぎた)
- 3 始動条件が適合しない(条件が十分に特定化されていないか、現在の条件と違いすぎ

意図形成の失敗のカテゴリーには、スリップと分類されない失敗も含まれている。Normanはこの種の失敗をミステイクと呼び、自動化された行為の失敗であるスリップと対比させ、意図形成における思考の失敗であると述べている(Norman, 1988)。

次に挙げられているモードエラーは、コンピュータがコマンドモードなのにテキストモードだと思って文章を入力しようとした、という例から名づけられた。仁平(1990)は同じように、コンピュータがかな入力モードなのにローマ字入力のつもりでキーを押すという例を上げている。いずれも意図とその時の状況がずれているためにエラーとなる行為である。

記述エラーは意図もしくはその行為の記述が不十分である場合で、汚れたシ

シャツを洗濯籠でなくトイレに投げ入れたという例が示されている。汚れた服を洗濯籠に入れるという行為の中で、洗濯籠の部分が十分に特定化されていなかったため、形がよく似たトイレに服を入れてしまったのである。このエラーは、先述の Reason の分類ではおそらく知覚的混乱と見なされるだろう。Reason の分類が「どのようにまちがうか」に重点を置いているのに対して、Norman が「行為のどの部分が損なわれたためにまちがうか」によってエラーを分類していることがこの例からわかる。

スキーマ活性化の失敗に含まれるとらわれエラー³とは、意図された行為が、それと類似した、より強力な習慣的行為に文字通りとらわれてしまうことを指す。Reason のプログラム組立の失敗にもこのような例が挙げられている。データ駆動型の活性化は外界の事象を処理することで不適切なスキーマが活性化されてしまう。この最も顕著な例は、印刷された文字のインクの色を答えるという行為に対して、その文字が示す色名の処理が元の行為に対して妨害的に作用してしまうストループ現象である。また外界の事象と同じように、記憶の中にあるスキーマ間の連合も不適切な活性化を生じさせることがある。更に、いったん活性化されたスキーマの活性化レベルが時間の経過や外的な妨害因などによって低下すると、意図の忘却が起こる。2 階に上がったが何をしにそこに行ったのかを思い出せなかったという Reason が上げた貯蔵の失敗の例もこのタイプのエラーである。

最後のカテゴリーはトリガリングの失敗である。適切なスキーマが活性化されたとしても、それが誤ったタイミングで始動されたり、まったく始動されないといった不適切なトリガリングはスリップを導く。Norman がトリガリングの失敗だと考えたスプーナリズムや混合などのスリップの例は Reason がプログラム組立の失敗として分類したものの中に見られる。また心の中にあることが誤った行為を導くスリップとしては、ジョギング中に歩数を数えていた人が、別の人を追い越す時に「おはようございます」と言おうとしていたのに「33 (歩)」と言ってしまったという例がある。

以上のように、主に現象面の特徴に基づいた Reason の分類を、そのスリップが行為のどの段階で起こるかという視点から分類し直したのが Norman だ

と言えるだろう。Norman はのちにヒューマン・エラーや産業事故の研究を行うようになり、「人がエラーをするのは、その物がよく考えられていなかったり、デザインが悪かったりする時なのである」と述べ、人間の認知過程の特徴からみたシステムデザインの問題点とその改善策について示唆に富んだ書を著わしている (Norman, 1988)。たとえば現在の状態がコマンドモードなのかテキストモードなのかの表示がわかりにくいワープロソフト (モードエラーの例を参照)、同じ形のスイッチがずらりと並ぶコンソール、一つのボタンが複数の機能を持たされている数多のハイテク家電機……。エラーは、それらの使い方に関する知識が不足している時にも、操作に習熟してきて自動的に行われるようになってからも起こりうる。エラーを防止するためには、必要な情報を外界に分散して呈示したり、適切な操作を自然に導くことで人間の負担を低減し、かつ必要な時には注意を喚起して操作が正しいことをチェックできるようなデザインが求められる。

こののちも Norman の関心は人間とテクノロジーの相互作用の中で生じるエラーに向けられ、特にそれらのテクノロジーをもたらす文化的・社会的背景に重点を置いた考察が続けられている (Norman ; 1992, 1993)。これは、注意や意識といった人間の認知過程からスリップ生起のメカニズムをモデル化しようとした Reason とは異なる観点からのアプローチだが、現実の生活の中で起こるエラーについて考える時には非常に重要な視点を提供するものだと言えるだろう。

2-3 Reason の Generic Error-Modelling System (GEMS)

Reason (1987, 1990) はこのモデルにおいて、まず行動の計画－貯蔵－実行の各段階で起こるミステイク、ラプス、スリップの3つのエラータイプを区別した。このうちミステイクは Norman のミステイクと同様に、目標を明確にしそれを達成するための手段を決定するプランニングのプロセスにおけるエラーである。前節で紹介した日記法による事例収集の研究ではこのタイプのエラーについては言及されていない。一方ラプスとは、プランされた行為がすぐに実

³ 「乗っ取り型エラー」と訳す者もある (野島, 1990)。

行されないでしばらく保持される場合に起こる記憶のエラー，スリップはプラン実行のエラーであり，このラプスとスリップを合わせたものが Norman の言うスリップにあたる．なお海保（1999）はミステイクを「思い込みエラー」，スリップを「うっかりミス」とわかりやすく表現している．

次に Reason は Rasmussen の理論に従い，貯蔵されたスキーマによってほぼ自動的に行われるスキルベースの行動，“if～，then～”形式のルールにコントロールされるルールベースの行動，新奇な状況に対する意識的な分析と貯蔵された知識からそのつどプランが立てられるような知識ベースの行動という3レベルの行動を区別した．このエラータイプと行動レベルの組み合わせから，スキルベースのスリップとラプス，ルールベースのミステイク，知識ベースのミステイクが想定される．スリップとラプスは，前節で紹介したように不注意或いは注意のしすぎ，不適切なコントロールモードなどによると考えられており，これらは総括してモニタリングの失敗と呼ばれる．一方のミステイクは一言でいうと問題解決の失敗である．ルールベースのミステイクは，正しいルールの適用の失敗または誤ったルールの適用によるもので，知識ベースのミステイクには，処理容量の限界による失敗，思考や判断におけるさまざまなバイアスなどが含まれる．これらのエラーの特徴を表2-3-1にまとめた．

表2-3-1 スキルベース，ルールベース，知識ベースのエラーの区分

次元	スキルベースのエラー	ルールベースのエラー	知識ベースのエラー
エラータイプ	スリップ・ラプス	ミステイク	
活動のタイプ	ルーティン化された活動	問題解決的な活動	
注意の焦点	実行中の課題以外の対象	問題に関連する事柄	
コントロールモード	主に自動的処理 (スキーマ) (貯蔵されたルール)		限界のある意識的処理
エラータイプの予測可能性	予測しやすい，“強力で誤った”エラー (行為)	(ルール)	多様
実際にエラーが起こる率	絶対数は多いが，エラーが起こる可能性に対する比率は低い		絶対数は少ないが比率は高い
状況要因の影響	低～中程度の影響．内的要因 (過去の使用頻度)の影響が主		外的要因の影響が主
検出しやすさ	通常は素早く検出される	困難．しばしば外部からの介入で検出される	
変化との関係	知識はあるが，適切な時にアクセスできなかった	変化に関する正確な知識の不足	変化に関する知識がない

※Reason(1987b, 1990)から作成

Reason は、人間の認知的プロセスが、意識的・選択的で容量に限界のある作動記憶と、無意識的・自動的なスキーマからなる知識ベースという2つのモードの相互作用によってコントロールされていると考えた。作動記憶では外界からの刺激入力と知識ベースからの情報の処理が行われ、知識ベースでは意図やその時の状況（活性化の特殊要因）、頻度や新近性（一般要因）によって、いずれかのスキーマが活性化される。このモデルによれば、正しい（correct）パフォーマンスは、正しいスキーマが正しい順序で、正しい時に活性化されることで達成される。

しかし何らかの理由で認知的操作が不十分なもの（underspecification）になった時、認知システムは、類似性マッチングと頻度による憶測⁴と呼ばれる無意識の過程によって、文脈に適合し頻度の高いデフォルト⁵でその不十分さを補う傾向がある。エラーは、このデフォルトが適切でない場合に生じると考えられる。従ってエラーには類似性のバイアスと頻度のバイアスという2つの形態がある。Reason によれば類似度と頻度の情報は意識的な努力なしで処理され、人の年齢や能力、文化的背景、動機づけや課題の教示などには影響されない基本的な要素であるから、この2つのエラー形態も人間のすべての行為において広くみられる。実験室課題でも、例えば単語を短時間呈示する（＝不十分な感覚入力）ことで、この単語に知覚的・意味的に類似した高頻度の単語が誤って再生されやすくなることはよく知られている。Reason（1990）は、不十分な認知的操作が頻度と類似性の情報によって補われ、それがエラーに結びつく例を他にもいくつか上げている（pp.103-109）。

以上のように Reason のモデルでも Norman と同じくスキーマとその活性化の概念が用いられているが、これに加えて作動記憶の概念と、意識的・注意的コントロールモードと無意識的・自動的コントロールモードの区別が重要なものとして取り入れられている。これらは現在の認知心理学においても重要な概念であり、このような共通項を通して、例えば実験場面におけるプライミング効果を説明するモデルを援用してスリップを説明することも可能である（川口，1993）。

⁴ 原文では“similarity matching”と“frequency gambling”。川口（1993）の訳による。

⁵ コンピュータでは、あらかじめ準備された仮の値や初期設定のこと。

またこのモデルの中で Reason が「プランの貯蔵」と表現しているプロセスは、現在の記憶研究の中では展望的記憶として扱われているものに近い。展望的記憶とは最も狭義には未来に行うことを意図した行為の記憶（梅田・小谷津, 1998）であり、この記憶の失敗は、意図の存在やその内容の想起に失敗すること、すなわちし忘れにつながる⁶。梅田らによれば近年は実験室的アプローチを用いた展望的記憶研究の発展がめざましく、意図に関わる情報の符号化、意図の検索・想起と実行など、展望的記憶の各段階におけるさまざまな要因の検討が進められている。その一例を挙げると、渡辺・川口（2000）は「テレビを見る」「買い物に行く」などの日常的な行為と、それを実行する時刻の対を記銘材料として実験を行ない、これらがどの程度再生されるかを調べている。彼らはこの結果から、個人が持つ1日単位の時間的な枠組の表象が、意図の記銘に重要な役割を果たしているのではないかと示唆している。

このように実験室状況で日常的な行為を刺激に用いたり、反対に日常的な場面で人工的な課題を行わせたりする（例 葉書を期日までに返送させる）アプローチは展望的記憶研究でよく用いられる。心理学研究において状況の統制と生態学的妥当性の保持とはしばしば相克するものだが、このような折衷的アプローチは日常場面で見られる行為のメカニズムを検討する方法として、失敗研究にも応用できるところが多い。「正しいパフォーマンスと体系的なエラーは同じコインの表と裏である」とは Reason の言葉だが、言わばコインの表側からの実験的検討によって、裏側にあるエラーのメカニズムに関するモデルを更に精練してゆくことは今後の課題の一つであろう。

2-4 実験的に誘導される失敗の研究

先に述べたエラー研究はどちらも、行為のスリップ (slips of action) の分析に端を発している。Norman が「行為のスリップは言語的スリップに較べて十分に研究されてこなかった」と述べているように、言語的なエラーについてはそれ以前にもフロイトの詳細な分析や心理言語学的な観点から行われた多くの研究があった。ここで最初に紹介するのは、そのような伝統的な研究の流れとは異なり、実験的に誘導された発話の失敗（スピーチエラー）の分析から作動

⁶ 広義には展望的記憶に行為のプランニングやモニタリングまで含める場合もある。

記憶モデルの検証を行おうとした研究である。先の Reason の喩えで言えば、コインの裏側から表側へのアプローチだと言えるだろう。

作動記憶（ワーキングメモリ）は現在の記憶研究だけでなく神経心理学、認知科学などにおいても最も重要なトピックの一つであり、さまざまな研究が行なわれているが、その拠って立つ理論も方法も多様であるために、この概念を明確に定義することは現時点では困難である（苧阪, 2000）。しかし、作動記憶には中央実行系、視空間スケッチパッド、音韻ループの3システムが含まれ、会話、計算、判断、推論などの日常的な認知的プロセスに関わる情報の保持と処理、制御をつかさどるアクティブな記憶であることに関しては現在のところ、およそその理解が得られていると考えてよいだろう。

齊藤（1999）は、読みや計数課題の遂行中に音韻的情報を保持し、構音をコントロールする音韻ループの働きが言語産出システムと関係するものと考え、聴覚刺激の呈示によって音韻ループ内の音韻表象を活性化させることが発話のプロセスに影響を与えるかどうかを調べようとした。この実験では、まず合図音が呈示され、次に視覚刺激（*）が呈示された後でターゲット語（例「しずおか」）を発話するよう求められた。この合図音－視覚刺激－発話のサイクルは1秒に1回の割合で1試行中に10～12回行われる。1試行中には合図音の代わりに干渉語が聴覚的に呈示されることがあり、干渉語としては音韻的に類似するもの（例「しおづけ」）と類似しないもの（例「もちつき」）が設定された。参加者は日本語を母国語とする大学生80名である。実験の結果、音韻的に類似する干渉語は類似しない干渉語より有意に多くのスピーチエラー（例「しおずか」）を誘導し、そのエラーは全体の発話の20%以上に及んだ⁷。つまり、音韻的に類似する干渉語によってスピーチエラーが誘導されたことから、音韻ループ内の音韻表象の活性化が発話に影響することがまず確認されたのである。次にスピーチエラー課題の他に、聴覚的に呈示される数字を用いた記憶範囲課題（音韻ループの機能を反映すると考えられる）や、早口言葉や単語・数字をできるだけ早く言う課題の遂行間の関係を調べたところ、スピーチエラーと記憶範囲課題の遂行との間に弱いが有意な相関が得られた（ $r = -.26$ $p < .05$ ）。つまり記憶範囲のスコアが低いほど誘導されるスピーチエラーが多く起こった。

なお記憶範囲は発話運動プランニングを反映する早口言葉や読みの速さとは正の相関を示した。

このスピーチエラーは、作動記憶（音韻ループ）において外的な音韻刺激の処理と、発話のためのプランニングが同時に行われ、これらが競合するために起こると考えられる。つまり、行為の意図と実行を支えるメカニズムとして作動記憶を想定した Reason のモデルを支持する結果である。またこのエラーは Norman のカテゴリーで言えば、意図した行為の実行が外的な刺激によって妨害され、別の行為のスキーマが活性化されてしまうデータ駆動型のスリップにあたるが、この実験ではどのような刺激（音韻的特徴、時間的特性など）が発話の意図を妨害しうるのか、その特性がかなり詳細に特定化されていると言えるだろう。

なお、同じ単語を速いペースで繰り返し言わせる方法は、日常場面では川口（1993）が「言い間違いを誘発させるゲーム」として紹介している遊びでも用いられている。たとえば「みりん」「みりん」・・・と 10 回繰り返し言った直後に「鼻の長い動物は？」と尋ねられると、つい「キリン」と言ってしまうことは多くの人が経験的に理解できるだろう。また「ヒラマヤ」「ヒラマヤ」・・・と 10 回言させた後に「世界一高い山は？」と聞き、「エベレスト」ではなく「ヒマラヤ」という間違いを誘発する同様の遊びもある。川口は Reason のモデルに基づいてこの言い間違いを、音のよく似た類似スキーマが活性されることで、質問に対して間違った類似性マッチングが行われた結果だと説明している。これらの例で誘発される言い間違い（キリン／ヒマラヤ）は、繰り返し発話される単語（みりん／ヒラマヤ）とは音韻的に類似しており、また質問に対する正答（ゾウ／エベレスト）とは意味的な関連性があることが特徴である（ゾウとキリンは共にサバンナに住み、体の一部が長い動物。エベレストはヒマラヤ山脈の中で最も標高が高い山）。

齊藤の実験での干渉語は音韻的に類似するものだけに限定されていたが、ターゲット語に意味的関連のある干渉語ではエラー生起率はどう変化するのか、また音韻ループでの情報保持の時間的限界（2～3 秒）を超えてからターゲット

⁷ 音韻的類似性から予測されるエラー以外のものを含めると、エラー率は 30%以上に及ぶ。

語を発話する場合には干渉語の効果は消失するのかなど、日常場面での言い間違いの例と考え合わせると興味深い研究である。齊藤の言うように、ここでのスピーチエラーが日常場面において見られる言い間違いと同じ性質のものであるという保証はない。しかし少なくとも、音韻ループと言語システムの関係を探ること、つまり言語システムという既存のモデルとの関係から作動記憶という比較的新しいモデルの妥当性を検討するという目的にとっては、信頼性の高いデータを得られるスピーチエラー誘導の実験手続きは有効な方法であろう。

同様に実験的にエラーを誘発する研究としては仁平（1990, 1991）のものがある。仁平（1991）は同じ文字をできるだけ早く、何度も繰り返し書かせる急速反復書字法を用いることで書字スリップ（書き間違い）が起こることを偶然発見した。このスリップは比較的容易に誘発され、例えば「お」なら50回書くうちに約半数の参加者が何らかのスリップを起こすという。中でも最も多いのは「あ」と書いてしまうスリップである。他にも「大」が「木」、「類」が「数」と書かれてしまう例が挙げられている。この書字スリップの生起には文字の視覚的な類似性よりも、書字の運動シーケンス間の類似性が強く関わっており、「九」を「ノ」から書き始める参加者では「れ」という書き間違いが起こるが、書き順が異なる参加者ではそのスリップは起こらない。

ここでは齊藤の実験の場合とは異なり、意図した行為を干渉する外的な刺激は存在しない。意図を妨害するのは、書いている文字と共通の部分を持つ他の文字を書くための運動スキーマである。つまりこの書字スリップは、進行中の行為に類似しているスキーマが活性化され、代わりに実行されてしまうNormanのとらわれエラーにあたる。仁平は書字スリップの内容を分析することで、これまであまり研究されてこなかった、書字のための運動スキーマ（仁平は「運動記憶のネットワーク」と表現している）がどのように構成されているかを知ることができると考えている。

齊藤と仁平の研究に共通しているのは、発話や書字といった過剰学習された行為を速いペースで何度も繰り返させるという手続きである。通常でも、よく習熟された行為はそうでない行為ほど意識的なコントロールを必要としないが、おそらくこの手続きによって疲労、慣れ、時間的切迫などが生じ、その行為には更に注意を向けられなくなるのだろう。こうして意図した発話や書字に最低

限必要な注意が向けられなくなるという underspecification を，音韻的に類似した語の表象（または類似の運動スキーマ）が補うために起こるのが，これらの実験的エラーであると考えられる。

2-5 問題点

以上のように失敗に関する認知心理学的研究は，現象の記述とその分類，更に失敗生起のメカニズムに関するモデルを構成するまでに至っている。また日常場面で観察されるエラー生起のプロセスを再現する実験的手続きからも，重要な知見が得られている。しかしこれらの研究では失敗生起に関する一般的なメカニズムや「このような（所与の）条件なら一般的に起こるエラー（仁平，1991）」が取り上げられることが多く，個人要因は状況要因ほど検討されていない。また後に述べるように，質問紙法による個人差へのアプローチから得られる知見との統合もあまり成果を上げておらず，質問紙で捉えられる日常場面での失敗の多さと，実験室におけるエラーの多さとは一致しないことが多い。従って 1 章で述べたような個別的な検討を行うためには，従来の失敗研究の方法論や知見を援用しつつ，個人要因を検討する方法の精錬と，状況要因を加えた検討の両方が必要だと考えられる。

3章 本研究の目的

1章で考察したように、本研究では、人がその時おかれた状況とどのように関わるのかを示す切り口として失敗を捉える。失敗とは、現在に至るまでの経験・知識、身体的能力その他さまざまな条件を備えた人がある状況と切り結ぼうとする時に、その状況との相互作用の中で何らかのずれが生じた時に現れると考えられるからである。従ってここでとりあげる失敗とは、常に人と状況の二項から規定されるものに限られる。またこれまでの認知心理学的研究の多くが失敗生起に関する個人内の一般的なメカニズムか、失敗が起こりやすい共通の状況のどちらかを関心の対象としてきているため、本研究ではどんな人が、どんな状況にある時に、どんな失敗が起こりやすいのかという個別的な相互作用について、探索的に調べていくことになる。

同様に個人要因と状況要因の相互作用から認知的遂行を説明するものとしては、Humphreys & Revelle (1984) のモデルがある。このモデルでは、パーソナリティ特性（達成動機、特性不安、衝動性）と状況の調節要因（誘因、自我への脅威、フィードバックのタイプなど）の相互作用の結果として、“personality state” という状態が喚起される。これは状態不安、及び達成に動機づけられた状態を指す。この状態が接近／回避のアプローチの向きや強さを決定し、これによって課題に対する努力が規定される。また衝動性は日内時間や薬物などとの相互作用によって覚醒レベルを規定し、それが情報の保持や短期記憶に影響するパスも想定されている。

このモデルでは理論的根拠に基づいて想定された多くの潜在変数とさまざまな状況要因との相互作用が明確に示されており、反応時間課題、記憶課題、ビジランスなど異なる認知課題の遂行にそれらがどのように影響するかを概念的に理解するためには優れたモデルである。しかし本研究では個々の認知的操作についてではなく、ある状況の中に埋め込まれた行為、ある状況における課題遂行について検討することが目的である。そして個人要因と状況要因を含めた失敗研究は、このような詳細なモデルを構築し、よく統制された課題を用いてその妥当性を検討するという段階には至っていない。従って本研究では人と状況との相互作用の中で生じる失敗に、何らかの「規則性・構造的性」（下條, 1999）

が認められるかどうかを確かめることから始めるのであるから、むしろ Rubin (1989) が提案するように、状況の統制や特定を最低限にとどめ、予期されなかった要因をも見逃さないように事象を十分に観察し、結果に “regularity” を見出そうとする探索的方法のほうが適していると思われるのである。

以上の枠組に従って、本研究では第Ⅲ部において失敗しやすさ—ここでは失敗傾向と呼ぶ—に関する個人要因を捉える方法について検討し、その内容をパーソナリティ特性などとの関係から考察する。次に第Ⅳ部では、さまざまな状況における遂行を詳細に調べ、個人の失敗傾向がどんな遂行と結びつくのかを検討し、そこから失敗における個人要因と状況要因の相互作用について考察する。以上が本研究の目的である。

第Ⅱ部 失敗に関する理論的考察

4章 諸領域における失敗

3章で述べたように本研究ではごく限定された範囲の「失敗」を扱うが、その前にここで心理学及びその近隣領域において失敗に類する行為をどのように捉えているかを概観する。

4-1 環境と身体が支える適切な行為

まず最初に、失敗のみを取り上げる場合には見逃されるかもしれない、適切な行為のメカニズムについて考察しておく。

人間だけでなくすべての生物がそれぞれの環境内で柔軟に適応的行動をとれることに注目し、それを可能にする環境の性質を表わしたのがギブソンのアフォーダンス概念である。アフォーダンスとは環境が生物に提供する対象の価値や意味であり、それがその生物にとって有益なものか有害なものかは環境とその生物との関係によって決定される（ギブソン, 1985）。言い換えればそれは、ある生物が環境内で自己の行為を調整するために利用できる環境の資源（リード, 2000）であり、行為を達成するための豊富な選択肢を保証するものである（鈴木・三嶋・佐々木, 1997）。このような環境との切り結びの中で、アフォーダンスに支えられて人間は適切な行為を行うことが可能になると言ってよいだろう。

佐々木らはこのような行為の調整の例として、「コーヒー課題」の遂行中に見られるマイクロスリップの検討を続けている（佐々木・松野・三嶋, 1997；鈴木・三嶋・佐々木, 1997；鈴木, 2001など）。コーヒー課題とはテーブルの上にある材料を使ってインスタントコーヒーを作るというものであるが、その際に事物を操作する手の動きがしばしば小さな淀みを見せながら進行していくことが観察される。この淀みがマイクロスリップと呼ばれる現象で、手が対象に触れる直前にわずかに停止する「躊躇」、手の動きの方向が急に変化して別の対象に向かう「軌道の変化」、対象への無意味な「接触」、手の機能的な形状の変化である「手の形の変化」の4タイプがある。

例えば鈴木ら（1997）の実験では大学生が「クリームと砂糖を入れたものと、

クリームだけのものの計2杯のコーヒーを作る」という課題を行ったが、テーブルの上にコーヒーの粉、砂糖、クリーム、湯、スプーンしか乗っていない単純条件では平均2.6回、フォークや米、水など余計な対象が加えられた複雑条件では平均5.3回のマイクロスリップが観察された。しかしテーブル上の対象の配置を自分で変更できる条件や、繰り返し同じ課題を行う条件では、マイクロスリップの頻度は1回目に較べて減少した。またマイクロスリップは行為の下位タスクから別の下位タスクに移行する継ぎ目で起こりやすいことも見出された。このことからマイクロスリップの生起は、行為の豊富な可能性に遭遇して行為の選択がスムーズに行かないことを示しているのではないかと考えられる。

他の研究で対象にされるスリップなどの大きな違いは、マイクロスリップがかなりの高頻度で生起するという事実と、最終的な失敗には至らないスリップであるということである。つまりふだんの行為は、常に環境内の多様な可能性と接し、マイクロスリップを伴いながらも当面の目標を達成するように進行する(鈴木, 2001)。これを支えるのがアフォーダンスと、それを受け取る行為者の経験や身体的能力であろう。例えばテーブルに置かれたスプーンは人間にとって手で取り上げる行為をアフォードし、手に持ったスプーンはかき混ぜることをアフォードする。同じく取り上げる行為をアフォードするとしても、液体をかき混ぜる目的にはフォークよりスプーンが適していることを人は行為を通して知る。このように、多様な行為可能性を提供する環境と行為者の関わりの中で常に調整されつつ目標に到達するというかたちも、適切な行為のあり方の一つであろう。

また環境と行為者との、より長期間にわたる関わりの中で特定の行為が獲得されてゆく過程はレイヴとウェンガー(1993)の正統的周辺参加に見ることができる。レイヴらは状況的学習(situated learning)の概念から出発し、実践共同体への参加、すなわち社会的実践の一部として学習を捉える立場をとる。つまりここでの学習は与えられた材料を受動的に内化していくものではなく、社会的実践を行っている共同体(職場や学校など)への参加のあり方の変化、つまりその共同体の成員として何らかの役割を担う中で起こる知識や技能の変化、周囲の事物・人との関係の変化、アイデンティティの変化などを指している。

そのような参加の形態として、レイヴらは西アフリカのある部族の仕立て屋に見られる徒弟制の例を上げている。徒弟は衣服の製造過程を逆に辿るように、まずボタンつけやアイロンかけといった周辺の、しかし必要な（正統的な）作業を与えられる。その後で縫製、裁断という、より十全的な実践のプロセスを学ぶ。この変化は共同体（仕立て屋）の行う実践から見れば周辺のから十全的参加への変化である。しかし同時に徒弟にとっては、仕上げを任されることで衣服の全体像にまず注意を向けさせられ、次に縫うことで布切れ同士が縫い合わされる順序や位置に注意を向けさせられ、布がそのように裁断される論理を理解できるようになったところで裁断のステップに移る、というように、前のステップが現在のステップにいかに関与しているかを考える機会がその都度豊富に与えられることにもなる。そしてこの順序づけによって、重大な失敗経験が最少にとどめられると言う（p.51）。

このような実践への参加を通して徒弟は「知的スキル（knowledgeable skill）」¹を獲得し、「一人前」になる。このように、ある実践における適切な行為は、社会的世界と行為者の間断ない関わりの中で意味づけられ、獲得され、継承されてゆく。そして身体は「具体的な実践の場において、身体技能の習熟、師匠との新しい関係の構築、あるいは何らかの決断、といったことと深く関わっている（野村，2002）」。環境と行為者の身体が適切な行為を支える例としてここに上げた所以である。

4-2 「できない」失敗と、その適応的意味

ここでは適切な行為の可能性が予め損なわれている場合——一旦獲得された適切な行為が何らかの原因でできなくなる場合や、発達が阻害されて適切な行為の獲得に至らない場合——について考えてみる。前者では、老化や損傷によって脳の機能が障害されて起こるさまざまな失認・失行の症状、統合失調症に伴う認知障害などが上げられるだろう。後者では、学習障害（LD）、広汎性発達障害（PDD）、注意欠陥多動障害（ADHD）などに伴う行動上の問題が考えられる。

¹ 高木（1992）による訳。

例えば観念失行は、概念の崩壊によって起こる複雑な系列的動作行為の遂行の障害であるが、この患者では「ティーバッグをカップに入れる前にお湯を注ぐ」、「水を入れずにポットを火にかける」、「紅茶にミルクを少し入れる代わりに、カップいっぱい注いでしまう」などの特徴的な行為が観察される（ゾルタン, 2001）。また後者の例としては、ADHD の子どもで「注意の集中や持続が困難である」、「忘れ物が多い」、「指示を聞かない」、「状況にそぐわない突飛的な言動をとる」などの特徴が見られ（次良丸・五十嵐, 2002）、不注意や行動の症状が不適応的で発達の水準に相応しないことが上げられる。

このような行動はいわゆる健常者の日常生活においてもしばしば見られ、現象としては Reason がスリップの例としてあげているものに類似している。しかしそれが症状や問題行動として言及される場合には「…できない」という形で、適切な行為の困難或いは喪失として表現されることが多い。こうした場合には、適切な行為をできなくさせている器質的な障害の存在が根底にあると考えられるからであろうか（行動の障害であるとされる ADHD の場合でも、脳波異常などから生物学的要因の関与が示唆されている）。実際に、これらの行動が病巣の位置や損傷の重篤度を示唆する手がかりになることも多い。

しかし脳損傷を受けても、その機能の少なくとも一部は自然治癒や各種のリハビリテーションによって回復するし、損傷の程度が激しい場合には広範囲に及ぶ機能の再構成が行われ、これまでとは違うやり方で（失われた機能とは異なる生理的メカニズムによって）状況に対処することが可能なまでに回復する場合さえあるという（鹿島・加藤・本田, 1999）。また LD や ADHD の場合には、個々の子どものニーズに応じて状況を整え、適切な教育や訓練を与える治療プログラムを用いることで行動の改善が期待できると言われている。

このように、状況と切り結ぶ力が失われぬ限り、一見避けられないと思われる失敗にも変化の可能性があることや、それらの行動が実はその時点での条件をフルに生かして状況と関わっていかうとする適応的意味を持つかもしれないことは、本研究においても重要な視点を提供すると思われる。

4-3 社会的・文化的環境における行為の失敗

ここでは 1 章で言及したオースティン（1978）の言語行為論の中から、特に

遂行的発言 (performatives) がうまくいかないことに関する不適切性の理論を取り上げる。

遂行的発言とは、それを口に出して言うことは、その行為を実際に行うことに他ならないというタイプの発言である。例えば結婚の誓約を行う時に言われる「誓います (I do)」や、「私は宣戦を布告する」、「私は明日雨が降るほうに6ペンス賭ける」などがこれにあたる。そして実際にこれらの行為が適切に遂行されたと言えるためには、以下の条件を満たす必要がある。

- A1: 一般に受け入れられた慣習的な手続きが存在する。
- A2: その手続きの発動に対して、参与する人物及び状況が適当 (appropriate) である。
- B1: その手続きが、すべての参与者によって正しく実行される。
- B2: その手続きが、すべての参与者によって完全に実行される。
- Γ1: その手続きの発動に関与する人が、その手続きが持つように構成されているところの考えや感情を持つ。
- Γ2: これらの参与者がその後も実際に (actually) そのように行動する。

これらの条件のうちいずれかに違反する時、遂行的発言は不適切となる。例えば、結婚を禁じられている相手に「あなたと結婚します」と言う場合 (A2)、「君と賭けをしよう」と言っても相手が賭けに応じない場合 (B2)、守る意図がないのに「約束します」と言う場合 (Γ1) などである。どの条件に不備があるかによって、不適切性は次のように分類される。

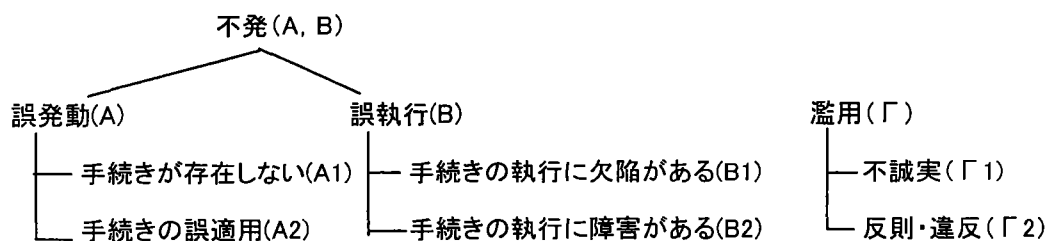


図 4-3-1 オースティンによる行為の不適切性の分類

ここで手続きをスキーマと読み替えてみると、オースティンの分類は2章で紹介した Norman (1981) のスリップの分類 (表 2-2-1) と似た構造を持っていることがわかる。Norman は、ある行為を正しく行うためには意図の形成・

スキーマの活性化・スキーマの発動が適切でなければならず、それが不適切に行われた時にスリップが起こると考えており、ここまではオースティンの不適切性の理論と非常によく似ている。しかし2つの理論は、Normanのモデルではスキーマがどのように活性化・発動するかという個人内での適切さだけが問題されているのに対して、オースティンの理論では慣習的な手続きがその時の状況や関与する人物にとって適切かどうかという社会的・文化的観点を持っているという点で異なっている。

本研究では注意をはじめとして、従来の認知心理学的研究における概念や方法を援用して失敗を検討するが、個人内のプロセスにのみ注目するのではなく、社会・文化的なものも含めて状況についての考察を行うことは先に述べた通りである。

4-4 行為に追い越される意図：フロイトによる失錯行為の研究

失敗と失敗でないもの、あるいは行為と行為でないものを区別する基準として、まず意図や意志が上げられるだろう。レヴィンによれば、何かを意図することで有機体に緊張が発生し、行動に志向性をもたらす。意図は準欲求として、意図された行為が遂行されるまでその緊張を持続させる。このように意図が常に行為に先行すると考えるならば、ひとまずは意図に従って行うことを行為と呼び、行為が意図からずれた時にそれを失敗と呼ぶことができる。また2章で述べたように、意図からずれた失敗と、意図自体が適切でなかった失敗を区別することも可能になる。しかし村田（1992）は「意図が行為に追い越される」現象について述べ、更にその追い越しを合理化する試みとしてフロイトによる失錯行為²の分析を上げている。

フロイト（1970, 1977）は“精神分析学入門”や“日常生活の精神病理学”の中で、言い間違い、為損ない、度忘れ、読み違い、思い違いなど、日常生活で見られる失錯行為の例を数多く上げている。たとえば度忘れなら人の名前を忘れる、物を置いた場所を忘れる、自分の言ったことを忘れるといった例があげられ、「忘却はある不快な動機から生じている」と結論している（1970,

² 原語は Fehlleistung。「錯誤行為」と訳す場合もある。

p.119). つまり、それを覚えておくことが人にとって不快である場合に度忘れが起こるといっているのである。

このような失錯行為は無意識の動機によって生じるもので、更に(1)それが正常範囲内の行為であること、(2)それが瞬時的・一時的な障害であって普通なら正確に実行できるものであり、また他人に指摘されたらそれが間違いであるとしてすぐにわかること、(3)自分の失錯行為に気づいた時にその動機が思い当たらず「不注意から」とか「偶然だ」と言いたくなるようなものであること、とされている。この定義の(2)は本研究で扱おうとする失敗にも共通するものであり、村田もフロイトの失錯行為は認知心理学的研究で扱われるスリップと現象的にほぼ重複すると述べている。

村田にとってフロイトの失錯行為に関する分析が「あらゆる行為の誤りの『合理化』を試みたように」思われる時、この合理化は例えば「手紙を投函しよう」という第一の意図のもとで生じた「投函し忘れる」「宛名を書き忘れる」という行為を、「実はこの手紙を出したくなかったのだ」という第二の意図のもとで見直そうとする作業のことを指す。確かにこのような態度で見れば、無意識的欲望が達成されているという点において失錯行為を成功と見なすことができる。

しかし村田は、第二の意図が常に行為に先行して存在していたと考えるのではなく、「手紙を投函し忘れる」という行為を繰り返す中で、その行為によって行為者が別の状況に放り込まれ、次第に新しい意図（「手紙を出したくない」）が発生するのではないかという考え方を提案する。

行為から遡って意図に考えをめぐらせる場合には、たとえ自分自身の意図であってもこうした不確かさ（uncertainty）が伴うことがある。村田の例のように「私はこの手紙を投函したくなかったんだ」というように新しい意図が形成されるかもしれないし、「私はこの手紙を投函しようと思っていたに違いない、そしてそれを忘れたんだ」というように（Hampshire, 1993）、本来の意図の確かさを再認識しなければならなくなることもある。

このように、その行為の意図に関して行為者自身も不確かであるというような場合、従来の研究のように意図からの逸脱という基準だけでは失敗を定義することは難しい。本研究において失敗成立の第1の要件を「適切な行為からずれること」と広く定義したのはこのような理由からである。

4-5 本研究における失敗との関連

本節で見てきたように、広く失敗と見なされ諸領域で扱われている行動の中には、行為者自身の意図から逸脱した行為、意図から逸脱したのかどうか不確かな行為、また微細な運動系のずれ、社会的な要求を満たさない行為など、さまざまな種類のものがある。

しかしその多様さに関わらずこれらもやはり、行為者の意図やさまざまな心理的・身体的条件と、社会・文化的背景などを含めた状況との兼ね合いを通じて規定される適切な行為からのずれという観点から記述することができる。例えばマイクロスリップは、課題性（インスタントコーヒーを入れる）を帯び、所与の対象を含む状況と、行為者の身体的スキルから決定されるスムーズな動作からのずれに観察者が気づいたものと考えられる。また意図が明瞭に認識されない場合でも「手紙を投函しなかった」という行為は「手紙を出さなければならなかった」という状況の要請からの逸脱として捉えることができるかもしれない。このように、何から規定される適切さからずれたのかという観点は、本研究では扱わない多様な失敗に対しても応用できるのではないかと考えられる。

第Ⅲ部 失敗傾向に関する個人差の研究

ほとんどの人の日常生活において、言い間違いやもの忘れなどのちょっとした失敗はごく普通にみられる。ふだんなら簡単にできるようなことでも、急いでいたり、ぼんやりしていて間違ってしまうことも多い。日常ではこれらの間違いが深刻な結果をもたらすことはそれほど多くないし、中には本人さえ失敗だと気づかないこともあるだろう。しかしこのような失敗の状態を詳細に調べることが有効な場合もある。

たとえば一般には「年をとると、もの忘れがひどくなる」と言われているが、生活の中で実際に起こる失敗との関係を調べることで、加齢によって損なわれるのは主に回想的記憶であり、展望的記憶にはそれほど影響しないのではないかと述べている者もある (Maylor, 1993)。このような研究は、加齢による認知機能低下の様相を捉えるには重要な手がかりとなるだろう。他にも抑鬱症状 (Merckelbach, Muris, Nijman, & Jong, 1996)、統合失調症 (Bosch, Rombouts, & Asma, 1993)、注意欠陥障害 (Biggs, 1995; Nadeau, 1995)、アルコール中毒症 (Brandt & Provost, 1985) などと日常生活における認知的失敗の関係が問題にされることがある。これらの症状や障害に伴う認知的な歪みが日常の失敗として現れるとすれば、その失敗について調べることで症状の重篤度や治療の有効さ、予後などを考慮する際に有効な手がかりが得られる。またヒューマンエラー研究の領域では、エラーを起こさせるような作業環境の特徴を理解すると共に、エラーを起こしやすい個人を把握し、必要な教育や訓練を行うことがエラー防止に有効であると考えられている。これらの研究においては日常の失敗の頻度を調べるために質問紙が用いられることが多い。2章で述べた実験的研究が失敗のメカニズムのモデル化とその検証に有効であるのに対して、質問紙による調査では、それが自己報告に頼っているという限界はあるものの、個人の実際の状態により近づくことができると期待される。

この種の質問紙の中で最も広く用いられているのは、おそらく Broadbent, Cooper, Fitzgerald, & Parkes (1982) が作成した Cognitive Failures Questionnaire (CFQ) だろう。CFQ は 25 の失敗項目を用いて、過去 6 カ月間に起こったそれらの失敗の頻度を尋ねる質問紙である。本研究では失敗に関

する質問紙法アプローチを CFQ の検討から始めた (山田, 1991)。

5 章 スリッパ傾向に関する研究

5-1 Cognitive Failures Questionnaire (CFQ) 日本語版の作成及び信頼性の検討

Cognitive Failures Questionnaire (CFQ) は、本をどこに置いたか忘れる、標識を見落とす、言い間違えるなど 25 項目の日常的な失敗の頻度を尋ねるものである。Broadbent et al. (1982) が言う失敗 (failure) は困難すぎてできない行為ではなく、通常なら簡単にできるような操作がうまくいかなかったことを指す。考案当初、これらの失敗は注意の障害による一時的な症状と考えられており、回答の対象も調査時から過去 6 ヶ月間に限定されているが、1 年以上の間隔で実施された再テスト間で得点がかなり安定していたことから ($r=.54 \sim .80$)、CFQ は一時的な症状だけではなく、注意や行動に関する比較的安定した個人の特性をも測っているのではないかと考えられるようになった。

Broadbent et al. (1982) は CFQ 得点とパーソナリティ特性や精神医学的症状との関係も調べており、これによると CFQ 得点と Eysenck Personality Questionnaire (EPQ) の神経症傾向、外的統制 (external locus of control)、特性不安得点との間には $r=.28 \sim .35$ の有意な正の相関があった。また Middlesex Hospital Questionnaire (MHQ) の不安、抑鬱、強迫的症状、身体的症状との間にもやはり同程度の相関が見出されている。Broadbent らは CFQ 得点がストレスに対する脆弱さ (vulnerability) を示すと述べており、神経症傾向や外的統制、不安や抑鬱が示すように、ストレスによって影響され不安定になりやすい特性、またはそのような状態が失敗につながることを示唆される。

Parkes (1984) は 141 名の看護婦からストレスフルな出来事を収集し、その出来事の重大さと統制可能性を評定させ、あわせてその出来事への対処方略を報告させた。この結果、CFQ の低得点群は状況が統制可能と感じた時に積極的な対処行動を多くとるのに対して、高得点群ではむしろ統制不可能な状況に対する働きかけが多く報告された。この結果から、CFQ 得点に反映されているのはストレスへの脆弱さによってストレスフルな状況に対する適切な認知や対処

が損なわれ、それが失敗につながるというメカニズムではないかと考えられる。本節では CFQ の日本語版を作成し、その信頼性・妥当性の検討を行うと同時に、このメカニズムについても考察する。

【 方 法 】

CFQ 日本語版の作成：CFQ の 25 項目を日本語に翻訳し、心理学研究者 1 名に文章のわかりやすさの判断を求め、更に翻訳を修正した。その際、「必要な物を捨ててしまい、捨てようと思っていた物を残してしまう」という失敗の項目で例に用いられていた「マッチ箱」を「チョコレート」に、「マッチ棒」を「包み紙」に変更した。これは、ライター等の普及でマッチを使うこと自体が少なくなっている昨今では不適當な例ではないかという指摘があったためである。また原版では「非常によくある」から「まったくない」までの反応カテゴリーを 4~0 の数字で示して丸で囲ませるという方法をとっているが、スコアリングの際にはこの数字がそのまま得点となるため、参加者の反応に影響を与えるのではないかと考えてポイントスケールを用いる方法に変更した。教示や項目内容は次の通りである。

教 示：「次の質問は、誰でも時々するようなちょっとした間違いに関するものですが、ある間違いは他のものよりもよく起こることかもしれません。以下の出来事が過去 6 カ月の間にあなたにどのくらいよく起こったか、当てはまると思う答えを選んで○で囲んでください。」

回答形式：「非常によくある」、「かなりよくある」、「時々ある」、「めったにない」、「まったくない」の 5 件法。得点化の際にはこれら 5 つの回答に順に 4, 3, 2, 1, 0 点を与えた。

項目内容：

- 01 本をよく考えないで読み過ぎてしまったために、もう一度読み直さなければならない。
- 02 家の中を歩いてきて、何をするためにそこに来たのか思い出せない。
- 03 道路に出ている看板や標識に気がつかない。
- 04 方向を説明する時、右と左をまちがう。
- 05 人にぶつかる。
- 06 出かける時、明りや火を消したか、鍵をかけたかどうか思い出せない。
- 07 人と会った時、その人の名前を聞きのがす。
- 08 失礼なことを言ったかもしれないと、後になって気づく。
- 09 何かをしているときに話しかけられると聞きのがす。
- 10 かんしゃくを起こして後悔する。

- 11 大事な手紙に何日も返事を書かない。
- 12 よく知っていてもめったに通らない道に出るのに、どこで曲がればいいのか思い出せない。
- 13 スーパーマーケットに行くと、欲しい品物が目の前にあるのに見つけれない。
- 14 正しい意味で言葉を使っているかどうか、急に気になる。
- 15 決心するまでにあれこれ迷う。
- 16 約束を忘れる。
- 17 新聞や本をどこに置いたか思い出せない。
- 18 例えば捨てようと思っていた包み紙を残してチョコレートをうっかり捨ててしまう。
- 19 何かを聞いていなければいけない時にぼんやり空想してしまう。
- 20 人の名前を思い出せない。
- 21 家の中で何かに取りかかっている時に、つい他のことがしたくなってしまう。
- 22 喉まで出かかっているのに、どうしても思い出せない。
- 23 何を買いにその店まで来たかが、思い出せない。
- 24 物を落とす。
- 25 言おうとしていたことを思い出せない。

手続き：調査は次の3回にわたって実施された。

調査1：1989年4月～5月。

実施した尺度：CFQ日本語版、及びモーズレイ性格検査（以下MPI）。MPIはアイゼンクによって作成された質問紙で、80項目から構成されている。外向性（E）、神経症傾向（N）の2尺度と虚偽尺度（L）の得点を求める。

参加者：女子大学生（グループ1）と会社員男女（グループ2）。女子大学生には心理学関連の講義中に記名方式で実施し、145名から有効データを得た。会社員には個別に依頼し、郵送で回収した。回収率は84%で有効データは67名であった。職種は一般事務及び営業で、男性38名、女性29名である。年齢は20～54才で平均は29.1才であった。

調査2：1989年10月。

実施した尺度：CFQ日本語版、及びCAS不安診断検査（以下CAS）。CASはキャテルが作成した質問紙で40項目から構成され、自我統率力の欠如（Q3-）、自我の弱さ（C-）、パラノイド傾向（L）、罪悪感（O）、衝動による緊迫（Q4）の5側面及びこれらの合計得点から不安の強さを捉える。

参加者：グループ1の女子大学生に対して、講義中に記名式で集団実施し、143名から有効データを得た。

調査 3 : 1990 年 5 月 .

実施した尺度 : CFQ 日本語版と、鎌原・樋口・清水 (1982) によって作成された Locus of Control 尺度 (以下 LOC). LOC は 18 項目からなり、得点が高いほど内的統制感が強いことを示すとされている.

参加者 : グループ 1 の女子大学生に対して講義中に記名式で集団実施し、112 名から有効データを得た.

【 結果と考察 】

1. 項目分析

CFQ は原版のスコアリング方法に従い、「非常によくある」から「まったくない」までの回答に順に 4~0 点を与えた. 調査 1 における女子大学生群と会社員群における各項目の平均得点は表 5-1-1 に示した. ほとんどの項目の平均は 1~3 点の範囲内にあり、SD 及び $M \pm SD$ の値からも反応が極端に偏る項目はないと思われる.

次に女子大学生の調査 1 と会社員のデータについて G-P 分析を行った. 個人ごとに 25 項目の合計得点を求め、その上位群・下位群を全体の 25% ずつ選んで各項目の平均得点を比較したところ、すべての項目において上位群の得点が上回った (項目 1 のみ 5% 水準で、残りの項目では 1% 水準で有意差があった). これらの結果は調査 2, 3 でも同じであり、青年から一般成人に実施する際には CFQ の項目の弁別力には問題はないと考えられる. また項目間の相関係数は最も高いもので $r=.50$ であるため、内容が互いに重複する項目もないと考えられる.

表5-1-1 CFQ項目得点の平均値とSD

	会社員 (N=67)		女子大学生(N=145)		全体 (N=212)	
	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD
Q01	1.96	0.79	2.26	0.80	2.17	0.81
Q02	1.55	0.74	1.88	0.78	1.78	0.78
Q03	1.60	0.82	1.71	0.84	1.67	0.83
Q04	1.27	0.86	1.46	1.03	1.40	0.99
Q05	1.34	0.84	1.75	0.81	1.62	0.84
Q06	1.52	0.70	1.55	0.97	1.54	0.89
Q07	1.88	0.77	1.81	0.90	1.83	0.86
Q08	2.16	0.64	2.30	0.80	2.25	0.75
Q09	2.10	0.68	2.30	0.92	2.20	0.77
Q10	1.81	0.93	1.85	0.95	1.83	0.94
Q11	1.58	0.91	1.54	1.07	1.56	1.02
Q12	1.36	0.88	1.41	0.91	1.39	0.90
Q13	1.48	0.73	1.73	0.83	1.65	0.80
Q14	1.84	0.73	1.88	0.95	1.87	0.89
Q15	2.36	0.75	2.87	0.87	2.71	0.86
Q16	1.19	0.70	0.97	0.68	1.04	0.69
Q17	1.70	0.82	1.88	0.90	1.82	0.88
Q18	0.97	0.82	0.94	0.84	0.95	0.83
Q19	1.90	0.78	2.40	0.89	2.24	0.88
Q20	2.09	0.95	1.98	0.91	2.01	0.92
Q21	2.01	0.96	2.47	0.90	2.33	0.94
Q22	2.10	0.68	2.43	0.77	2.33	0.76
Q23	0.88	0.81	0.99	0.75	0.95	0.77
Q24	1.33	0.81	1.30	0.82	1.31	0.81
Q25	1.96	0.66	2.24	0.76	2.15	0.74

2. CFQの因子構造

調査1の女子大生群のデータについて、因子分析（主因子法による因子抽出、プロマックス回転）を行った。固有値の推移は5.27, 2.01, 1.73, 1.50, 1.37…となり、固有値1以上の因子は9個抽出された。第1因子には25項目中22項目が.30以上の負荷を示したが、この1因子では全体の18%しか説明できないため、固有値の推移から判断して次に第3因子までを抽出した。3因子による抽出後の説明率は28%である。

プロマックス回転後の因子パターン行列を表5-1-2に示した。また±.40以上の負荷量は太字で示した。

表5-1-2 グループ1におけるCFQのパターン行列

質問項目	因子1	因子2	因子3
25 言おうとしていたことを思い出せない	0.64	0.11	0.01
22 喉まで出かかっているのにどうしても思い出せない	0.61	0.02	0.05
21 何かに取りかかっている時に、つい他のことがしたくなる	0.55	0.01	0.11
08 失礼なことを言ったかもしれないと後で気づく	0.53	-0.14	0.31
09 何かをしている時に話しかけられると聞き逃す	0.49	0.02	-0.05
10 癩癢を起こして後悔する	0.48	-0.03	0.00
15 決心するまでにあれこれ迷う	0.43	-0.13	0.04
19 何か聞いていなければならぬ時にぼんやり空想してしまう	0.33	0.23	0.07
24 物を落とす	0.32	0.10	-0.15
05 人にぶつかる	0.31	0.07	0.27
04 方向を説明する時、左右を間違う	-0.31	0.65	0.09
12 よく知っていても…どこで曲がればいいのか思い出せない	-0.27	0.62	0.21
17 新聞や本をどこに置いたか忘れる	0.25	0.54	-0.19
18 捨ようと思っていた包装紙を残してチョコレートを捨ててしまう	0.07	0.45	-0.05
02 家の中を歩いてきて何をするためにそこに来たのか思い出せない	0.13	0.41	-0.01
13 スーパーに行き…欲しい品物を見つけられない	0.07	0.41	-0.03
03 道路に出ている看板や標識に気がつかない	0.14	0.39	0.07
06 出かける時、明りや火を消したか、鍵をかけたか思い出せない	0.32	0.32	-0.16
16 約束を忘れる	0.09	0.30	0.11
23 何を買いにその店に来たかが思い出せない	0.22	0.26	0.03
11 大事な手紙に何日も返事を書かない	0.13	0.25	0.11
20 人の名前を思い出せない	-0.03	0.01	0.64
07 人と会った時、その人の名前を聞き逃す	-0.01	0.21	0.59
14 正しい意味で言葉を使っているか急に気になる	0.31	-0.09	0.41
01 本をよく考えないで読み過ぎてしまったために…	0.26	0.14	-0.26

第1因子では言語的な失敗と注意の失敗に関する項目の負荷が特に高い。第2因子には物や場所などの対象に対する失敗項目がまとまっており、第3因子は対人場面での失敗と解釈できる。なお第1因子と第2因子の相関は $r=0.47$ とやや高く、第1因子と第3因子で $r=0.28$ 、第2因子と第3因子で $r=0.16$ である。なお、調査1とほぼ参加者が重複する調査2, 3のデータについても同様に因子分析を行ったところ、第1因子はほとんど同じ項目がまとまったが、第2, 3因子については安定した因子構造は得られなかった。

会社員のデータは67名であり、25項目に対してやや少ないが女子大学生のデータと比較するために同様に因子分析を行った。会社員のデータでもスクリープロットの推移からやはり3因子が妥当であると思われたが、因子構造は女子大学生のものとは異なり、第1因子にもの忘れ、第2因子に注意、第3因子に対人的失敗の項目がまとまった。3因子抽出後の説明率は35%である。因子

間相関は女子大学生のデータよりも高く、第1因子と第2因子で $r=.53$ 、第1因子と第3因子で $r=.50$ 、第2因子と第3因子で $r=.47$ であった。女子大学生では言語と注意の項目が同じ因子にまとまったのに対して会社員では別の因子を構成している。

表5-1-3 グループ2におけるCFQのパターン行列

質問項目	因子1	因子2	因子3
23 何を買いにその店に来たかが思い出せない	0.78	-0.09	-0.01
18 捨てようと思っていた包装紙を残してチョコレートを捨ててしまう	0.77	-0.24	0.01
17 新聞や本をどこに置いたか忘れる	0.62	0.21	0.00
16 約束を忘れる	0.59	-0.07	-0.01
10 痼癢を起こして後悔する	0.44	0.01	0.06
09 何かをしている時に話しかけられると聞き逃す	0.41	0.13	0.06
25 言おうとしていたことを思い出せない	0.35	0.30	0.20
22 喉まで出かかっているのにどうしても思い出せない	0.35	0.13	0.24
21 何かに取りかかっている時に、つい他のことがしたくなる	-0.24	0.91	0.04
19 何か聞いていなければならぬ時にぼんやり空想してしまう	0.17	0.80	-0.20
01 本をよく考えないで読み過ぎてしまったために…	0.27	0.47	-0.26
24 物を落とす	0.24	0.45	-0.02
03 道路に出ている看板や標識に気がつかない	-0.26	0.44	0.20
15 決心するまでにあれこれ迷う	-0.09	0.39	0.19
05 人にぶつかる	-0.13	0.32	0.28
06 出かける時、明りや火を消したか、鍵をかけたか思い出せない	0.15	0.21	0.02
07 人と会った時、その人の名前を聞き逃す	-0.02	-0.14	0.65
13 スーパーに行って…欲しい品物を見つけられない	-0.04	-0.07	0.63
14 正しい意味で言葉を使っているか急に気になる	0.02	0.11	0.45
08 失礼なことを言ったかもしれないと後で気づく	0.00	0.23	0.44
20 人の名前を思い出せない	0.08	0.08	0.43
11 大事な手紙に何日も返事を書かない	0.21	0.03	0.43
02 家の中を歩いてきて何をするためにそこに来たのか思い出せない	0.29	0.02	0.38
04 方向を説明する時、左右を間違える	0.07	0.15	0.33
12 よく知っていても…どこで曲がればいいのか思い出せない	0.26	-0.11	0.31

当初 Broadbent et al (1982) は CFQ の失敗項目を知覚、記憶、行為の3つのタイプに分けられると考えていたようだが、さまざまなグループに CFQ を実施して因子分析を行ったところ、この3つに対応する因子は得られず、またグループによって結果に大きな違いがあったと報告している。このことから彼らは失敗の下位カテゴリーを考えず、25項目の合計得点を全体的な失敗しやすさを示す個人の得点として用いている。

CFQ の因子構造に関しては、その後さまざまな結果が報告されている。

Pollina, Greene, Tunick, & Puckett (1992) は男女大学生 387 名のサンプルで、妨害されやすさ、行為の誤り、空間的・筋感覚的記憶、対人的知能、名前の記憶の 5 因子を見いだした。しかし彼らは 62 才から 75 才の男女 89 名を対象にした調査ではこれとは異なる 5 因子—記憶の失敗、誤った注意の焦点づけ、対人的知能、妨害されやすさ、空間的注意—を報告している (Pollina et al., 1993)。

一方、Larson, Alderton, Neideffer, & Underhill (1997) ではアメリカ海軍兵 2379 名に CFQ を実施して、全般的な認知的失敗と名前の処理の 2 因子が得られている。また Matthews, Coyle, & Craig (1990) は大学生 475 名に CFQ を実施した結果から、1, 2, 7 因子解を提案している。このうち 2 因子解は、ほとんどの項目が高く負荷する全般的な失敗の因子と、人の名前に関する失敗項目だけが負荷する因子からなり、Larson らの結果に近いと言えるだろう。Klumb (1995) はドイツ語項目に新しく 7 項目を付け加えて 213 名に調査を行い、妨害されやすさと運動の失敗（ぶつかる、つまづく、ものを落とすなど）の 2 因子を得ている。

これらの研究と今回の調査結果に共通しているのは、全般的な認知的失敗と解釈できる比較的大きい 1 因子（“a large general factor”；Broadbent, Broadbent, & Jones, 1986）が見出されたことである。そもそも CFQ 項目は日常生活で慣れ親しんだ行動の失敗であり、2 章で紹介した Reason (1990) の分類に従えばこれらの項目の殆どは、進行中の行動に注意が向けられなかったことによって生じるスリップであることがわかる。現象的にはバラエティに富んだ内容のような印象を受けるのに、分析結果が基本的には 1 因子構造を示すのはこのためではないだろうか。つまり CFQ は全般的な失敗しやすさというよりは、スリップを起こしやすい傾向を測っていると考えたほうが妥当ではないかと思われる。従ってここでも、Broadbent らの方法に従って 25 項目全体の合計得点を、個人の失敗しやすさを表す指標として用いることにする。

調査 1 の女子大学生における CFQ の合計得点の平均は 45.9 (SD=9.6) であった。得点の分布は図 5-1-1 に示した。

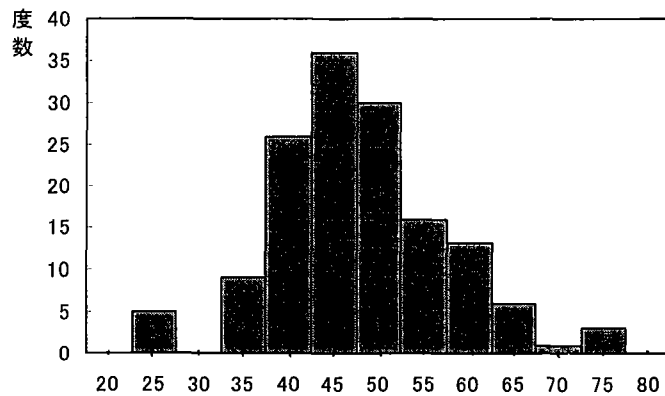


図5-1-1 女子大学生(調査1)におけるCFQ得点の分布

会社員における CFQ 合計得点の平均は 41.94 (SD=10.06) である。男女別に見ると男性の平均が 42.2 (SD=9.9), 女性の平均が 41.6 (SD=10.1) であり, 性差は有意ではなかった ($t=0.24$)。合計得点について Broadbent et al (1982) は看護学生で 52.48, 社会人で 35.02, 36.65 などの平均値を報告しているが, これらは「過去 6 ヶ月間に」という期間の制限がなかったり, インタビュー形式で行われたものであるため, 今回の結果と直接比較することはできない。

3. 信頼性の検討

25 項目の α 係数は調査 1 で $\alpha=.84$ であり, 尺度の内的整合性に問題はないと思われる。次に, 調査 1 から調査 3 で繰り返し調査対象となった者の得点から再検査信頼性を調べた。調査 1 と調査 2 を共に受けた者は 124 名おり, 6 ヶ月の間隔をおいた 2 つの得点の間には $r=.72$ ($p<.01$) の相関があった。調査 1 と調査 3 (13 ヶ月間隔) を共に受けた者は 89 名で, $r=.61$ ($p<.01$) の相関があった。Broadbent et al (1982) の結果と同じく, CFQ 得点はかなり安定していると言えるだろう。

4. 構成概念妥当性の検討

先に述べたようにストレスフルな状況で適切な認知ができないことが失敗につながるのであれば, ストレスへの脆弱さを捉える指標と CFQ 得点の間に関連がみられるだろう。ここでは, 外的なストレスに対して抵抗力が弱く, 柔軟

に対処することが困難であると考えられる外的統制 (external locus of control) と、やはり外的な刺激に影響されて情緒的・認知的に不安定になりやすい傾向である不安との関係から、CFQ の概念的妥当性を検討する。このために調査 1 では外向性と神経症傾向を測るモーズレイ人格検査 (MPI), 調査 2 では自我統率力の欠如 (Q3-), 自我の弱さ (C-), パラノイド傾向 (L), 罪悪感 (O), 衝動による緊迫 (Q4) の 5 側面から不安を捉えるキャテル不安尺度 (CAS), 調査 3 では統制の所在が外的であるか内的であるかを調べる Locus of Control (LOC) 尺度の 3 つを、CFQ と併せて実施した。CFQ については 25 項目全体の合計得点と、調査 1 の因子分析結果から得られた 3 因子 (言語・注意の失敗, 物理的な失敗, 対人場面の失敗) それぞれに ± 0.40 以上の負荷量を持つ項目の合計得点を求めた。

表5-1-4 CFQおよびMPI, CAS, LOCの平均得点と標準偏差 ※()内がSD

尺度名	調査1 (N=145)	調査2 (N=143)	調査3 (N=112)
CFQ-言語・注意の失敗	16.45 (3.75)	15.88 (4.07)	16.06 (3.99)
CFQ-物理的失敗	9.30 (3.30)	9.29 (3.31)	8.96 (3.15)
CFQ-対人場面での失敗	5.67 (2.07)	5.71 (2.02)	5.80 (2.01)
CFQ-全体の合計得点	45.89 (9.67)	45.61 (11.34)	45.38 (11.00)
MPI-外向性(E)	31.54 (10.32)		
MPI-神経症傾向(N)	25.71 (9.50)		
MPI-虚偽尺度(L)	10.72 (5.08)		
CAS-自我統率力の欠如(Q3-)		8.46 (3.73)	
CAS-自我の弱さ(C-)		6.31 (2.98)	
CAS-パラノイド傾向(L)		5.94 (3.23)	
CAS-罪悪感(O)		10.05 (3.25)	
CAS-衝動による緊迫(Q4)		7.64 (3.49)	
CAS-合計得点		38.41 (12.09)	
LOC			49.71 (5.08)

このサンプルの特徴としては、MPI では女子大学生の標準的なデータ (MPI 研究会, 1984) と比較すると E 得点が $0.5SD$ 程度高く、CAS の Q3-, Q4 でも健常群のデータとして示されている値よりおよそ $0.3SD$ 高くなっている。LOC は鎌原ら (1987) が示している女子大学生のデータとほぼ同程度の得点であった。

次にこれらの尺度得点と、CFQ における 3 つの失敗因子の尺度得点との相関

係数を求めた。

表5-1-5 CFQスコアと各尺度得点との相関係数

	CFQ 言語・注意	物理的	対人場面	合計
MPI-E	-0.32 **	-0.13	-0.09	-0.30 **
MPI-N	0.47 **	0.18 *	0.16	0.41 **
MPI-L	-0.40 **	-0.15	-0.12	-0.39 **
CAS-Q3-	0.58 **	0.28 **	0.23 **	0.44 **
CAS-C-	0.41 **	0.22 **	0.22 **	0.33 **
CAS-L	0.38 **	0.24 **	0.27 **	0.37 **
CAS-O	0.43 **	0.30 **	0.18 *	0.39 **
CAS-Q4	0.56 **	0.20 *	0.20 *	0.42 **
CAS-sum	0.66 **	0.34 **	0.30 **	0.54 **
LOC	-0.31 **	-0.17	-0.27 **	-0.35 **

※ *: $p < .05$, **: $p < .01$. $|r| \geq .40$ のものは太字で示した。

CFQ 合計得点は MPI の外向性得点とは負の、神経症傾向とは正の相関を示した。また CAS のすべての下位尺度とも有意な正の相関が見られた。このことは先に述べた不安 (MPI では外向性の低さと神経症傾向の高さで表される) と失敗の関係についての仮説に整合する結果であろう。ここでの LOC 得点は高いほど内的統制であることを示すので、有意な負の相関は外的統制の者ほど CFQ 得点が高いことを示している。この結果も外的な刺激への影響されやすさと失敗の多さとの関係を裏付けるものであり、Broadbent et al (1982) が行った調査の結果とも一致している。

次に CFQ の因子ごとの得点と各尺度との相関を見ると、上に述べたような相関関係は注意と言語の失敗である第 1 因子で特に目立っており、第 2, 3 因子ではそれほど顕著でないことがわかる。不安は注意のコントロールを不安定にさせ、進行中の処理以外の刺激に注意が向きやすくなる (Eysenck & Eysenck, 1985) と言われており、不安が適切な状況認知を妨害するのはこのような注意の性質によるものであると考えられる。CAS の中でも特に Q3- (自我統率力の欠如) 及び Q4 (衝動による緊迫) と第 1 因子との相関が高いことから、不安と関係するのは特に注意のコントロールの失敗であることが示唆される。

【 全 体 の 考 察 】

ここで作成した CFQ 日本語版はオリジナルとほぼ同じ構成概念妥当性を有

していると見なしてよいだろう。なお、CFQ 合計得点、あるいは第 1 因子の尺度得点と L 尺度の得点との間に中程度の負の相関があったが、このことは防衛的態度が強いほど失敗（特に不安による失敗）を少なく報告する可能性があることを示唆している。反対に、例えば自己評価が低い者では自己イメージがネガティブであるために、実際よりも失敗を多く報告することも予想できる。そこで自己報告に依らない、できるだけ客観的な失敗の指標と CFQ 得点との関係を検討することが必要になる。次節ではまず、失敗しやすさに関する他者からの評価と自己評価の関係を調べる。

5-2 自己評定と他者評定の関係

Broadbent et al. (1982) は中間管理職にある男性 67 名とその妻に CFQ と CFO (CFQ-for-Others) を実施し、その結果から、失敗に関する自己報告と判断の機会に恵まれた他者からの評価はかなり共通する傾向があると述べている。ここでは Broadbent らの方法に従って、自己報告と、友人あるいは配偶者による評価との関係を調べた。

【 方 法 】

調査期間：1993 年 11 月～12 月。

実施した尺度：CFQ と、同じく Broadbent et al. (1982) が作成した CFQ-for-Others (以下 CFO) の日本語訳。CFO は他者の行動の頻度を評定するもので次の 8 項目から構成される。回答やスコアリングの形式は CFQ と同じである。

CFO の項目内容

- 1 何かしている時に、ぼんやりと他のことを考えているために間違えてしまう。
- 2 気が散って、何かに集中するのがむずかしそうである。
- 3 忘れっぽくて、どこに物を置いたかや、約束したことや自分のしたことを忘れる。
- 4 自分の関心のあることを熱心に考えていて、まわりで起こっていることに気づかない。
- 5 物を落としたり、人にぶつかったりする。
- 6 ものごとを、なかなか決められない。
- 7 何かする時に、計画が不十分だったり集中できないせいで、混乱してしまう。
- 8 ちょっとしたことにとだわったり、不機嫌になったりする。

参加者：女子大学生 95 名（グループ 3）と、同じ女子大学の卒業生及びその配偶者 62 組（グループ 4）。人数はいずれも有効回答数。

調査の手続き：女子大学生については、あらかじめ十数名に「日頃一緒に行動することが多いのは誰か」を尋ねた結果から、同じゼミに所属し、かつ学籍番号が近い相手が上げられることが多いことがわかったため、この 2 点を基準にペアを設定し、講義中に集団で CFO を用いて自己評定とペアの相手に対する評定を行わせた。また相手への評定の困難度として、「1：その人がどのように行動するかよく知っているのととても答えやすかった」、「2：その人がどのように行動するか少しは知っているのと大体は答えられた」、「3：その人がどのように行動するかまったく知らないのととても答えにくかった」の 3 項目を設定して 1 つを選択させた。また別の週の同じ講義中に集団で CFQ を実施した。

卒業生とその配偶者については、研究者と同期の卒業生から既婚者 99 名を選んで調査依頼の手紙・返送用封筒と共に調査用紙を郵送した。調査用紙は CFQ（自己評定用）、CFO（自己評定用と配偶者の評定用に 2 枚）の 3 枚が一組になったもので、これを 2 組郵送し、夫と妻にそれぞれ回答を求めた。回答に際しては、お互いに相談したり用紙を見たりしないように注意した。有効回答が得られた 62 組（有効回収率 67%）の夫婦の平均年齢は、夫が 32.5 才（SD=3.0）、妻が 29.7 才（SD=0.6）で、平均結婚年数は 4.5 年（SD=1.5）であった。夫は全員が職を持ち、妻は 2 名が会社員と記入した他は主婦あるいは無職と記入されていた。なお調査用紙を返送した者には後日報酬を郵送した。

【 結 果 と 考 察 】

1. 各尺度の基本統計量

CFQ と CFO は共に失敗行動の頻度を「まったくない」から「非常によくある」の 5 件法で尋ね、その回答を 0~4 点でスコアリングするため、25 項目の CFQ では得点レンジは 0~100 に、8 項目の CFO では 0~32 になる。女子大学生の CFQ 得点は調査 1~3 とほぼ同じ値であり、夫婦の得点はそれよりも低い。両群の得点は表 5-2-1 に示した。

表5-2-1 グループ3, 4のCFQ及びCFOの平均得点(SD)

	グループ3	グループ4	
	女子大学生	夫	妻
CFQ(自己評価)	45.57(8.75)	38.32(11.75)	42.31(10.21)
CFO(自己評価)	16.52(3.56)	13.37(3.83)	14.94(3.56)
CFO(他者への評価)	12.23(4.01)	14.13(3.91)	13.61(4.36)

※ グループ3はN=95, グループ4はそれぞれN=62.

CFQ 得点について 1 要因分散分析を行ったところ群間の主効果は有意で (F(2,216)=9.76, $p<.01$), Tukey の HSD 法による多重比較の結果, 女子大学生の得点が夫よりも有意に高いことがわかった. CFO についても同じように分析を行ったところ, 自己評価では群間の主効果が有意で (F(2,216)=16.58, $p<.01$), 多重比較の結果, 女子大学生>妻>夫となった. 他者評価でも群間の主効果は有意であったが (F(2,216)=5.47, $p<.05$), ここでは女子大学生と夫の得点の間にのみ有意差が見られた (多重比較はいずれも $p<.05$).

CFO の項目分析のため, 自己評価・他者評価それぞれについて合計得点の上位群・下位群を約 25%ずつ抽出し, 両群の各項目の平均得点について t 検定を行ったところ, 女子大学生, 夫婦の両グループとも自己・他者評価の両方において全項目で 1%水準で有意差が見られ, 上位群の平均得点が上回った.

次に CFO の 8 項目の内的整合性を調べたところ, α 係数は表 5-2-2 のようになった. いずれの群においても自己評価よりも他者への評価における α 係数の方が高い. CFO で尋ねている失敗は現象としては多様なものであるが, 他者に対してはそのような失敗の性質の違いを越えて一律的な反応をしている可能性が示唆される. なお α 係数と, 自己評価-他者評価の相関を算出する際には, 女子大学生で他者への評価の困難度を 3 (相手がどのように行動するかまったく知らない) と答えた 20 名のデータは除いた.

表5-2-2 CFO項目の内的整合性(α 係数)

	自己評価	他者への評価
	女子大学生	0.68
夫	0.71	0.75
妻	0.71	0.75

※ 女子大学生はN=75

2. 自己評定と他者評定の関係

次に、失敗の頻度に関する自己評価と他者からの評価との相関を調べた。

表5-2-3 他者からの評価(CFO各項目)と自己評価(CFQ得点及びCFO各項目)との相関

CFO(他者からの評価)	グループ3 女子大学生の自己評価		グループ4 夫の自己評価 妻の自己評価			
	CFO	CFQ	CFO	CFQ	CFO	CFQ
ぼんやりしている	0.13	0.25 *	0.27 *	0.33 **	0.12	0.12
集中できない	0.14	0.27 *	0.25	0.13	0.32 *	0.24
忘れっぽい	0.10	0.12	0.32 *	0.26 *	0.37 **	0.21
周りに気付かない	-0.05	0.13	0.37 **	0.17	-0.10	0.33 **
落し物	0.05	0.09	0.10	0.26 *	0.20	0.17
決心しにくい	0.22	0.21	0.24	0.43 **	0.44 **	0.21
混乱する	0.20	0.28 *	0.36 **	0.17	0.16	0.30 *
不機嫌	0.22	0.20	0.57 **	0.33 **	0.28 *	0.22
CFO合計	0.20	0.31 **	0.46 **	0.44 **	0.35 **	0.38 **

※ *:p<.05, **:p<.01. |r| ≥.40のものは太字で示した。

※ グループ3はN=75, グループ4はそれぞれN=62.

全体に、女子大学生同士よりも夫婦間の方が自己評価と他者からの評価の間の相関は高い。大学の友人同士よりも夫婦の方が生活を共にする時間が長く、さまざまな場面で互いの行動を観察する機会に恵まれているためであろう。項目ごとにみると、Broadbent et al (1982) の結果では「ぼんやりしている」、「忘れっぽい」、「周りに気付かない」、「決心しにくい」という項目で、特に夫の自己評価と妻からの評価の間に高い相関が得られているが、今回の結果ではそれに加えて「不機嫌」の項目でも高い相関が見られた。これらの結果からは、他者から観察されやすい失敗とそうでないもの、また関係性(友人間, 配偶者間)による違い、互いの失敗に対する夫と妻の感受性の違いなどいくつか興味深い観点も示唆される。

次に CFO について、他者からの評価の値から自己評価の値を差し引き、評価のずれを求めた(図 5-2-1)。このずれの値がマイナスであれば、他者からの評価が過小評価であることを示す。なお女子大学生については評定の困難度(1~3)ごとに参加者を分けた。評定 1 は 21 人、評定 2 は 54 人、評定 3 は 20 人であった。

各群におけるずれの値には有意差があり ($F(4,214)=15.20, p<.01$)、Tukey の HSD 法による多重比較の結果、女子大学生 3、即ち自分の行動傾向を知らな

い他者から評価されたグループにおけるずれが、女子大学生 1 及び夫、妻のグループよりも大きかった (5%水準で検定)。

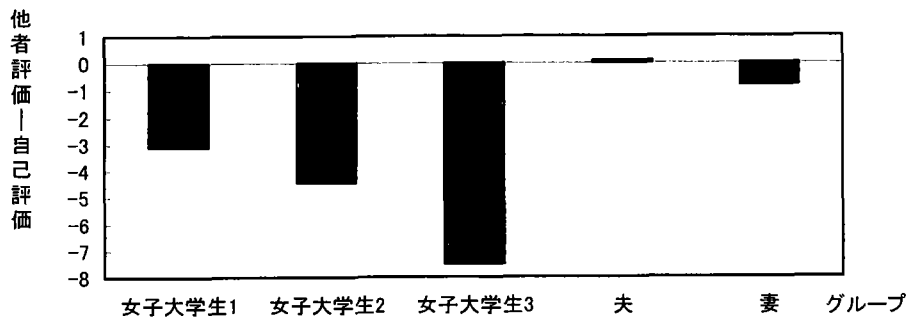


図5-2-1 各群における他者からの評価と自己評価のずれ

【 全 体 の 考 察 】

一般に、ある行動の特徴に関する自己評定と他者からの評定は、他者がその対象人物の行動を観察する機会が多いほど一致しやすくなると考えられる。CFO を用いた失敗行動に関する自己評価と他者からの評価も、行動の特徴をあまり知らない友人よりは親しい友人、更に夫婦というように、行動観察の機会が多いと思われる組み合わせで相関が高くなるという結果となり、他者からの評定を用いて自己評定の妥当性を確認することができた。しかし失敗がもともと他者からは観察しにくいものであるためか、あるいは他者の失敗について答えることへの抵抗や遠慮があるためか、全体に相関はそれほど高いものではない。

そこで次節では、実験課題の遂行という客観的な指標と CFQ 得点との関係を調べることで失敗の自己報告の妥当性を検討する。

5-3 視覚的探索課題・焦点づけ注意課題における遂行との関係

Broadbent, Broadbent, & Jones (1986) は、日常生活における失敗の多さを表す CFQ 得点が高い者と低い者ではそれぞれ特有な注意の様式が見られるのではないかと考え、実験的検討を行っている。この実験では、コンピュー

タ画面上に呈示されるターゲット刺激がアルファベットの「A」であるか「B」であるかの二者択一反応を求める課題が用いられた。刺激の呈示形式には、ターゲット位置を探索させる場合と、シグナル刺激によって予告された呈示位置にターゲットを呈示し、注意の焦点づけを可能にした場合の2条件を設定し、これらの反応時間を比較した。この結果、高得点群ほど探索課題と焦点づけ課題の反応時間の差が小さいことがわかり、高得点群は刺激を探索するような課題に、低得点群は注意の集中を必要とするような課題にそれぞれ適した方略を持つのではないかと Broadbent らは述べている。

また Tipper & Baylis (1987) は、先行試行で無視するように教示されたディストラクターが後続試行でターゲットになる場合、CFQ 低得点群の反応は遅くなるが（ネガティブ・プライミング効果）、CFQ 高得点群ではこの効果は見られないという結果を得た。彼らはこの結果から、CFQ の高得点群における選択的な注意のメカニズムの弱さを示唆している。

以上の先行研究から、ここでは探索と注意の焦点づけ課題とプライミングの手続きを組み合わせを行い、CFQ 高得点群と低得点群の遂行を比較する。CFQ が注意の焦点づけや選択的抑制の弱さというような注意の側面を捉えるものであれば、両群の遂行には先行研究と同じような違いが見られるだろう。更にこの実験では、探索的か焦点づけかという参加者の注意の方略をより明確に捉えるために、シグナルを呈示するがそれとは異なる位置にターゲットが呈示されるという試行を新しく付け加えた。この場合、シグナルの位置に注意を焦点づけておくほど反応は遅れると予測される。シグナルがターゲット位置に対して有効な手がかりになる場合と、そうでない場合という2種類の試行を混在させた場合、CFQ の高得点群と低得点群でシグナルの利用に違いが見られるだろうか。もしも高得点群が注意の焦点づけ方略をあまり用いないとすれば、シグナル以外の位置にターゲットが呈示される時の反応時間の遅れは、低得点群よりも小さくなることが予想される。

【 方 法 】

参加者：グループ1の女子大学生に行った調査1の結果に基づき、145名の中からCFQ合計得点の上位群・下位群を約25%（36名）ずつ選んだ。実

験はこの中から更に 10 名ずつをランダムに選んで行った。

実験期間：1989 年 12 月。

実験装置：刺激の呈示の統制や反応時間の記録には NEC の PC9801XL と付属の 15 インチディスプレイを用いた。更に視距離を一定に保つため、頭部固定器を用いた。

刺激：ターゲットとしてアルファベットの A, B の文字を用いた。またプライムとしては同じく A, B と数字の 1 から 5, ターゲット位置を予告するシグナルとして # を用いた。従ってプライムとターゲットの組み合わせには関連一致 (A-A, B-B), 関連不一致 (A-B, B-A), 無関連 (数字-A, 数字-B) の 3 種類がある。

試行：試行はすべて、ターゲットが「A」か「B」かをできるだけ早く判断して指定されたキーを押す強制選択の反応時間課題である。刺激の呈示形式は次の 4 種類を設定した。(1)ターゲットのみが呈示される base 課題, (2)プライムが呈示された後にターゲットが呈示される search 課題, (3)プライムとシグナルが同時に呈示され, その後シグナルが予告した位置にターゲットが呈示される focus 課題, (4)プライムとシグナルが同時に呈示され, その後シグナルが予告した位置でないところにターゲットが呈示される focus2 課題。いずれの課題も各試行の始めには画面中央に凝視点として「+」が 500ms 呈示され, 同時にビープ音が鳴る。その後プライム画面 (プライムのみ, 或いはプライムとシグナル) が 500ms 呈示され, 次のターゲット画面は反応が終わるまで呈示されている。base 課題の場合は, 凝視点の後すぐにターゲット画面が呈示される。反応が終わると再び警告音とともに凝視点呈示され, 次の試行に移る。

呈示位置：凝視点とプライムは常に画面中央に, シグナルとターゲットは (1)近左, (2)近右, (3)上, (4)下, (5)遠左, (6)遠右の 6 箇所のいずれかに呈示される。画面中央からの距離は(1)と(2)で約 1cm, (3)と(4)で約 7.5cm, (5)と(6)で約 11.5cm である。

手続き：以上の課題を, BASE¹ (練習ブロック), SEARCH, FOCUS, MIX

¹ これ以降, 課題内容や試行は小文字で (例 base), ブロックは大文字で (例 BASE) 表す。

の4ブロックで個人ごとに実施した。試行数はBASEで92（うち20が練習試行）、SEARCHとFOCUSでは78（うち6が練習試行）、MIXでは150（6が練習試行、focus試行とfocus2試行が72ずつ）である。本試行は呈示位置(6)×プライム・ターゲットの組み合わせ(3)×ターゲットの種類(2)×2=72試行で、これらの試行はランダム順に行われた。なお参加者の半数はBASE→SEARCH→FOCUS→MIXの順で、残りの参加者はBASE→FOCUS→SEARCH→MIXの順で実験を行った。参加者には、最初は中央の刺激（プライム）を見ておき、次にターゲットが呈示されたらできるだけ早く間違えないように反応すること、FOCUSでは中央の刺激と一緒に#の記号が呈示され、その後同じ位置にターゲットが呈示されるが、記号だけに注意を向けてしまわず中央の刺激にも注意を向けておくこと、MIXではターゲットは#と同じ位置に呈示されることもあるし、違う位置に呈示されることもある、という教示を与えた。

実験後の評価：実験終了後、MIXブロック中のfocus2試行の割合（0%～100%）と、シグナルをまったくあてにしていなかった～非常にあてにしていたの2項目の評価を求めた。参加者には、下端にそれぞれ「0%」「まったく…」、上端に「100%」「非常に…」と書かれた10cmの線分上で、自分の印象にあてはまると思う位置に線を書きこむよう求め、線分の下端から参加者が書き込んだ線までの距離（mm単位）を評価値として用いた。

【 結 果 と 考 察 】

1. 反応時間

各課題について正反応の反応時間を対数変換し、ターゲットの種類やプライムとの組み合わせはこみにして、位置ごとの平均反応時間を算出した。MIXのfocus試行とfocus2試行の反応時間は別に求めた。なお本試行の3ブロックでの誤反応率には課題間や群間で有意差はなく、いずれの場合も5%以下と小さかった。

反応時間についてCFQ得点（高・低）×ターゲット位置（6箇所）の分散分析を行ったところ、BASEとMIXのfocus2試行では高得点群の反応時間が短く（それぞれ $F(1,18)=27.5, p<.01$ ； $F(1,18)=7.48, p<.05$ ）、FOCUSでは反対

に低得点群の反応時間が短かった ($F(1,18)=5.10, p<.05$). SEARCH と MIX の focus 試行では両群の反応時間に有意な差はなかった. またターゲット位置の主効果はどの場合でも有意ではなかったため, 図には 6 箇所の位置をこみにした課題ごとの平均反応時間を示した.

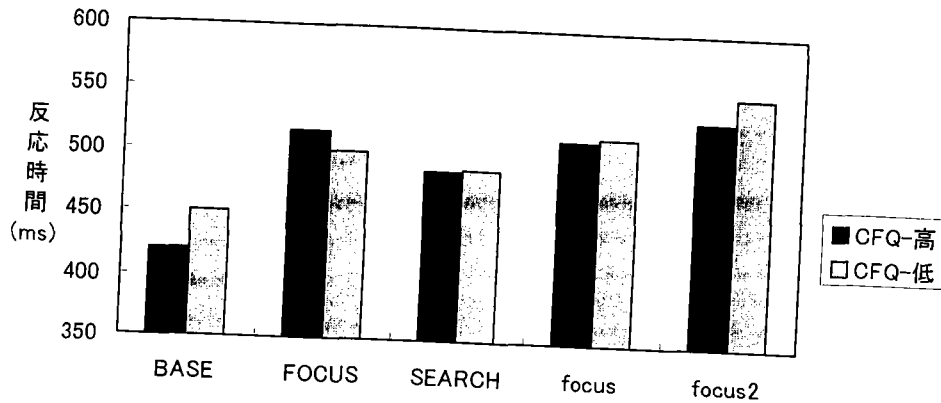


図5-3-1 各課題におけるCFQ高・低得点群の平均反応時間

Broadbent et al. (1986) が探索の速さを示す指標として求めた (SEARCH の反応時間 - FOCUS の反応時間) の値は, 今回の実験では両群とも $-20 \sim -40\text{ms}$ となり, ターゲット位置が予告される課題の方がむしろ反応が遅くなることを示した. ターゲットの探索のみを行う BASE では高得点群の反応時間が早いという結果は, CFQ 高得点群は刺激の探索に適していると述べた Broadbent らの結果と一致している. しかしその他の課題の反応時間を比較すると, 今回の結果はむしろ低得点群の FOCUS での反応の遅さという観点から考察すべきであると思われる (山田, 1993a).

今回の実験の focus 試行はシグナルとプライムが同時に呈示され, 両方に注意を向けておくように教示されたために注意の負荷が高くなり, シグナルのみが呈示される Broadbent らの課題より困難になったと考えられる². このため, 彼らの実験ではターゲット位置を予告することで反応を促進すると考えられたシグナルが, 本実験ではむしろ反応を妨害する効果を持ったのかもしれない.

² Broadbent らの実験でも, 高得点群の一部では focus 試行の反応時間のほうが長くなっている.

実際に、一部の参加者に FOCUS と SEARCH のどちらが困難であったかを実験終了後に尋ねたところ、高得点群 5 名中 4 名が「中央の刺激を見ておくように言われたのでシグナルは邪魔」、「気が散る」という理由で FOCUS を困難だと答えたのに対して、低得点群 5 名中 4 名は「探さなくていいから簡単」、「心構えができる」という理由で FOCUS が容易だと答えた。このことから、同時に呈示されるシグナルとプライムの両方に注意を向けておくことが特に高得点群にとって困難であり、シグナルを手がかりとして利用できなかったために反応が遅れたことが示唆される。

また MIX ブロック中の focus2 試行の割合（実際は 50%）を尋ねたところ、高得点群では 45.7%、低得点群は 49.2%であり、両群の評定に有意な差はなかった。しかしシグナルをどの程度あてにしていたかを尋ねると、高得点群の評定値が 34.2、低得点群が 62.5 で、低得点群の方がよりシグナルを手がかりとして用いていたことがうかがえる ($t(18)=2.75, p<.05$)。このため、シグナルと違う場所にターゲットが呈示される focus2 試行では低得点群の反応が遅れることになったのだろう。

2. プライミング効果

次に、ターゲットとプライムの組み合わせ（関連一致、関連不一致、無関連）ごとの反応時間を求めた。各課題におけるターゲット位置の主効果が有意でなかったため、ここでは位置をこみにした。次に、関連一致条件、関連不一致条件の反応時間から無関連条件の反応時間を差し引いてプライミングスコアを算出した。一般に、この値がマイナスであればプライムによってターゲットへの反応が促進されたことを、プラスであれば反応が妨害あるいは抑制されたことを示すと考えられている。図には SEACH, FOCUS ブロックと、MIX ブロックの focus, focus2 試行におけるプライミングスコアを示した。

関連一致条件の場合、低得点群でわずかに促進効果が見られるが、CFQ 得点（高・低）×課題（4 種類）の分散分析の結果、どちらの主効果も有意ではなかった。

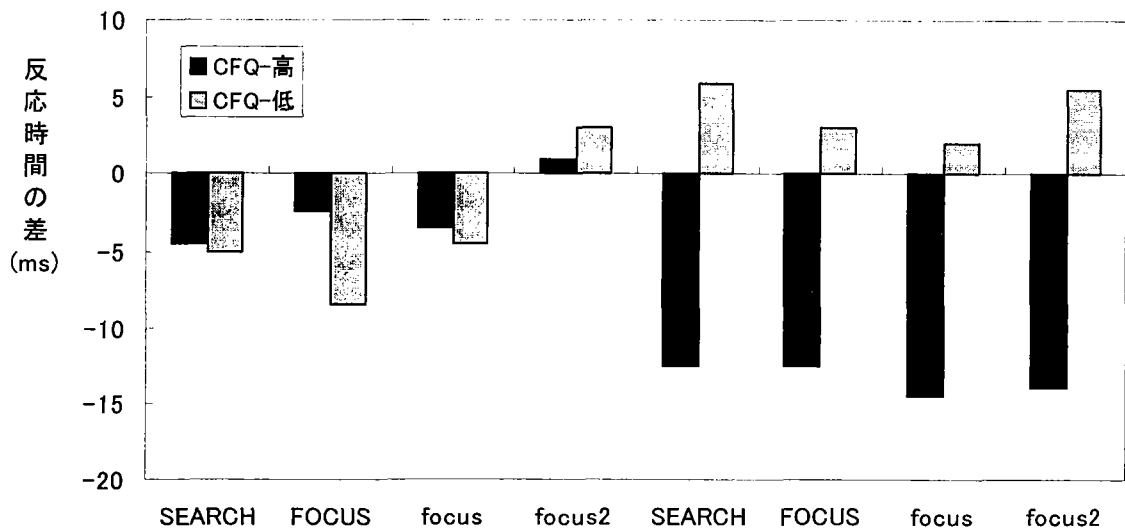


図5-3-2 各課題におけるプライム条件間の反応時間の差
(左:関連一致条件-無関連条件. 右:関連不一致条件-無関連条件)

一方、関連不一致条件の場合、両群の結果は大きく異なる。低得点群では不一致プライムによっていくらか反応が遅くなっているがその差は小さい。しかし高得点群ではすべての課題においてむしろ反応が早くなっており、両群のプライミングスコアには有意な差が見られた ($F(1,18)=12.31, p<.01$)。更に課題をこみにして組み合わせ条件ごとに誤反応率を求めたところ、低得点群では関連一致、関連不一致、無関連の3条件の誤反応率はそれぞれ4.4%、4.3%、3.5%で有意な差はなかったが、高得点群では6.3%、4.0%、3.2%で条件間に有意な差があり ($\chi^2=11.15, p<.01$)、関連一致条件の誤反応率が他の2条件より高かった。

従って高得点群では不一致プライム条件で反応が早くなり、一致プライム条件ではそれより反応が遅れ、しかも誤反応も多いという、通常のプライミング効果とは逆の結果が得られたことになる。見るだけで反応しないようにと教示されたプライムと同じターゲットが呈示された時に反応が遅れるという結果は、ネガティブ・プライミング効果だと解釈することもできるが、この場合もCFQ高得点群でネガティブ・プライミング効果が見られないとする Tipper & Baylis (1987) とは異なる結果となる。ただし2つの実験ではこの効果の時間的特性が異なるため、直ちに矛盾する結果とは言えない。つまり Tipper らの

実験では連続する2試行間で抑制が持続しないことが高得点群の特徴であったのに対して、今回は1試行内の短い時間間隔で抑制が強く生じていたことを示す結果であるため、この2つの特徴を併せ持つのが高得点群の注意の様式であるということもあり得る。この点に関しては、抑制の持続時間に焦点を置いた実験的検討が必要であろう。

【 全 体 の 考 察 】

本節の実験では、CFQ低得点群ではターゲット位置の予告として利用できるシグナル刺激や、反応を促進すると考えられる関連一致プライム刺激が、高得点群においてはそうした効果を持たず、むしろ反応を妨害するのではないかと考えられる。ターゲット以外の刺激に注意を向けておくことは、高得点群にとって、より困難であったのかもしれない。これは1節でも考察したストレスへの脆弱さ、即ち妨害されやすさ(vulnerability)に通じる特徴ではないだろうか。一方、他の刺激はまったく呈示されずターゲットに探索的に反応するbase課題では高得点群の反応が早かったことから、課題の負荷が低くストレスフルでない状況では高得点群の方略が有利に働くこともありうる。そこで次節では課題負荷が異なる状況においてCFQ得点と遂行との関係を検討する。

5-4 同異判断課題における教示の効果との関係

前節の結果から、CFQ高得点群・低得点群それぞれの反応方略が有利に働く状況とそうでない状況があることが示唆された。言い換えれば前節の実験では、参加者がそれぞれの反応方略を用いることがある程度可能であったことになる。それは「できるだけ速く、間違えないように」という教示の多義性や、シグナルの有効性への評価が参加者によって異なっていたことによるものかもしれない。では、ある特定の反応方略を要求される状況ではどうであろうか。そのような状況でも、CFQ得点によって遂行に違いが見られるだろうか。本節の実験では、課題負荷を変化させる操作として参加者に反応の速さと正確さを強調する2種類の教示を与えて遂行の変化を調べ、CFQ得点との関係を探る。教示の効果をより明瞭に捉えるため、課題は単純な同異判断課題を用いた。また前節では

CFQ の高・低得点の 2 群の遂行を比較したが、ここでは中得点群を加えた 3 群を設定した (山田, 1992).

【 方 法 】

参加者：前節の実験とは異なる女子大学生の集団 88 名 (グループ 5) に CFQ を実施し、有効回答の得られた 85 名から CFQ の高・中・低得点群を選び、各群から 6 名、合計 18 名の参加者に実験を行った。各群の CFQ 得点は高得点群で 56.50 (SD=4.99), 中得点群で 44.33 (2.29), 低得点群で 33.67 (4.46) で、3 群の得点間には有意な差があった ($F(2,17)=39.12, p<.01$).

実験期間：1991 年 12 月.

実験装置：刺激の呈示の統制や反応時間の記録には NEC の PC9801XL と付属の 15 インチディスプレイを用いた。反応の記録にはキーボード上の NFER, XFER, スペースキーの 3 つにそれぞれ「同じ」「違う」「スタート」のカバーをかけて用いた。反応には両手を用いるが、どの指でどのキーを押すかは、各参加者で最も押しやすいように決めた。

課 題：12 個のドットを標準刺激として、そのあとで呈示される比較刺激 (9, 11, 12 個) の数が同じか違うかを答える同異判断課題。更に各反応の後にその確信度を「当て推量で」「たぶん」「確かに」の 1 から 3 の 3 段階でさせた。

刺 激：ドットには JIS コード 217C の充実円 (●) を用いた。画面上では直径約 7mm で呈示される。9~12 個のドットは画面上では約 12cm×7cm の範囲内でランダムな配置で呈示される。この範囲は視距離 70cm で視角にして約 $10^{\circ} \times 6^{\circ}$ の広さである。

試 行：各試行は参加者のスペースキー入力によって開始される。このあと警告音とともに+の凝視点が 2 秒間呈示され、ドットが 100ms だけ呈示されて消える。参加者の反応が入力されるとマスキングとしてランダムドットパターンが 100ms 呈示される。その後また画面は消え、ここで確信度の評定が行われる。参加者は口頭で 1 から 3 の数字を答え、実験者がこれを記録する。この後、参加者のスペースキー入力によって次の試行が始まる。

手 続 き：実験は個別に、次の(1)から(6)の手順で行った。

- (1)課題の内容と1試行の呈示形式について説明する。この時、比較刺激には13個以上のものはなく、常に12個以下であることを明確に伝える。
- (2)標準刺激の呈示（マトリックス）：3×4のマトリックスの配置で12個のドットを呈示し、参加者に数を確認させる。
- (3)練習試行：キー押し反応の練習のため、(2)のマトリックス上で7, 9, 11, 12個のドットを呈示して標準刺激と同じか違うかの反応を求める。4種類の比較刺激について各6試行、計24試行を1ブロックとして、連続10試行正答を学習基準とし、基準に達しなかった者は続けて24試行を行う。
- (4)標準刺激の呈示（ランダムパターン）：ランダムな配列で12個のドットを呈示し、参加者に数を確認させる。
- (5)本試行：実験は2ブロックに分かれ、一方ではできるだけ速く反応するように求め、もう一方のブロックではできるだけ正確に反応するように求めた。各ブロックは更に9個と12個の比較刺激を用いるセット1と、11個と12個の比較刺激を用いるセット2に分かれる。それぞれの比較刺激について20試行ずつ行うので1ブロックは80試行、実験全体では160試行になる。セットとブロックの順序は半数の参加者で逆にした。
- (6)方略の確認：実験終了後、各ブロックでの方略について、「できるだけ速く（正確に）反応するように言われた時、どのような方法で判断していたか」を尋ねた。用紙に「ドットの数を読んだ」「ドットの全体的な広さで判断した」の2つを例としてあげ、自分の方略がどちらかにあてはまれば丸をつけ、それ以外の方略を用いていたのであれば自由記述するように求めた。

【 結 果 と 考 察 】

1. 反応時間

ms 単位で記録された反応時間は対数変換した上でドット数をこみにして平均反応時間を求め、CFQ（高・中・低）×教示（速さ・正確さ）の分散分析を行った。教示の主効果（ $F(1,15)=26.90$ ）は1%水準で有意で、速さの教示より正確さの教示において反応時間が長かった。CFQの主効果は $F(2,15)=2.65$ で傾向差にとどまった。CFQ×教示の交互作用は有意ではなかったが、ここでの

関心は CFQ の各得点群における教示の効果を見ることにあつたため、多重比較を行った。図にはドット数をこみにした反応時間 (ms 単位) を示した。

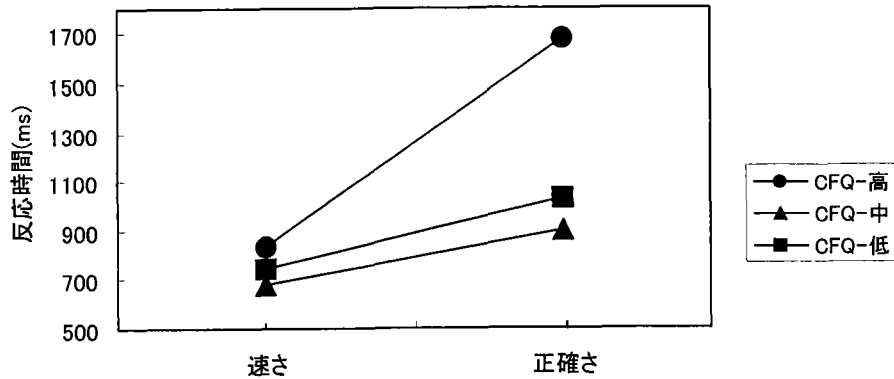


図5-4-1 CFQ各群の教示別反応時間

多重比較の結果、速さの教示下では3群の間に有意な差はないが、正確さの教示下では、高得点群の反応時間が他の2群よりも長くなつてゐることがわかつた ($p < .05$)。正確に反応しようとするために速さが犠牲にされる、いわゆる速さと正確さのトレードオフは高得点群で最も顕著であると思われる。

2. 弁別容易性と判断基準値

CFQ 得点の群ごとに6人のデータをこみにして、ブロック、セットごとに反応の種類 (同じ・違う) × 確信度 (1~3) で6つの反応カテゴリーの頻度を求め、信号検出理論の手続きに従つて判断基準値と弁別容易性の値を算出した。

表5-4-1 CFQ各群の判断基準値(c), 弁別容易性(d')

CFQ	教示	セット1		セット2	
		c	d'	c	d'
高	速さ	1.15	1.60	0.19	0.37
	正確さ	1.44	1.67	0.41	0.48
中	速さ	0.67	1.07	-0.11	0.49
	正確さ	1.00	1.43	0.50	0.34
低	速さ	0.87	1.59	0.18	0.50
	正確さ	2.58	2.95	0.13	0.34

全体にセット 1 (比較刺激がドット 9 個) より, セット 2 (比較刺激が 11 個) の方が弁別容易性と判断基準値が低く, 「同じ」と反応されやすいことがわかる。特に低得点群では, 正確さの教示下においてもこれらの値が著しく低い。なおグループごとの反応度数を χ^2 検定で比較した結果, 正確さの教示下で中得点群の 9 個, 11 個のドットに対する「同じ」反応 (False Alarm) が他の 2 群よりも多かった。

3. 反応の方略

参加者の殆どは例としてあげた「数を数える」「全体の広さで判断」のどちらかを選んでおり, 自由記述もこのどちらかに分類できるものであった。

表5-4-2 方略の分類 (人)

CFQ	教示	ドットを数える	広さで判断
高	速さ	0	6
	正確さ	5	1
中	速さ	0	6
	正確さ	3	3
低	速さ	0	6
	正確さ	2	4

なお, 高得点群の正確さの教示下で「ドットを数える」と答えた 5 名のうち 3 名は「画面を半分に分けて左右に 6 個ずつあるか数える」と答えた。この方略は他の 2 群では報告されなかった。

【 全 体 の 考 察 】

速さを強調する教示の下では, 反応時間, 判断基準, 方略などの指標からみた各群の遂行の差は顕著ではなく, 正確さを強調する教示下で各群の遂行の特徴が明らかになった。おそらく課題が参加者ペースで行われること, 反応の正誤に関するフィードバックが与えられないことなどの要素から本実験ではできるだけ速くという教示の方が参加者にとっては理解しやすく, 教示に従った遂行が容易だったのだと考えられる。

速さを求める教示と比較した場合, 正確さを求める教示下での各群の遂行は

次のように変化する。まず高得点群では反応時間が長くなり、ドット数を数えるという分析的な方略をとる者が増える。一方、中・低得点群では反応時間や方略の変化はそれほど顕著ではない。この2群の差は判断基準にあり、中得点群は他の2群よりも誤った「同じ」反応が多い。この結果から、正確さを要求する教示の下ではCFQ高得点群は時間をかけて正確に、すなわち熟慮的に課題を行っていたと言えるだろう。このように教示の違いによって敏感に反応様式を変えるのは、Broadbentらが言うストレスへの脆弱さ、即ち影響されやすさにもつながる特徴ではないだろうか。一方、低得点群は全体的な方略をとり、反応は速く正確である。速く反応するように教示された時には、判断基準を低くすることでその要求に対処しているようである。今回のように反応の正誤に関するフィードバックもなく、報酬や罰も与えられない実験状況では、効率的な方略だと言えるだろう。

5-5 まとめ

本章では日常生活における失敗行動の頻度を自己報告形式によって測るCognitive Failures Questionnaire (CFQ)の日本語版を作成し、1節では他の性格特性との関係から、また2節では他者評価との関係からその信頼性や妥当性の検討を行った。これらの結果から、CFQ得点は再検査信頼性も比較的高く、行動観察の機会の多い他者からの評定であればある程度一致することがわかった。また失敗の原因であると考えられるストレスに対する脆弱さという特徴も、他の性格特性との関係から確認された。

3節では視覚的注意に関する実験を行い、CFQの高得点群にとってはターゲット以外に呈示されるシグナルやプライムに注意を向けることや、それらを反応の手がかりとして利用することが困難であることが示された。しかしシグナルなしでターゲットの探索を行う場合や、シグナルの有効度が低い場合には、むしろ高得点群の探索的な方略が有効に働く。低得点群は逆にシグナルを手がかりとして用い、注意を焦点づけておく方略を選好するようである。

4節の実験では、正確さを強調する教示の下では高得点群が最も時間をかけ、かつ正確な反応を示したことから、CFQで測られている失敗しやすさはこのような実験状況では現れにくいのではないかと考えられる。CFQで尋ねられるの

は日常生活における慣れた行為の失敗の多さであり、その特徴は、新奇な実験状況での失敗には結びつきにくいのかかもしれない。このように全般的な失敗しやすさを測っているはずの質問紙の得点が実験状況での遂行の失敗を必ずしも予測しないことは、従来の研究でも指摘されてきた (Broadbent et al., 1982; Herrmann, 1982; Reason, 1988)。この点について Reason (1988) は「ほとんどの実験状況はある限定された対象に注意を集中させるもので、同時に複数の対象に注意を向けている日常生活の注意の状態とは異なっている。実験状況の注意の負荷が日常生活に近づけば、遂行と失敗行動の質問紙得点との間に関係を見出すことができる」と述べている。

では、CFQ で測られるような失敗傾向が実際に失敗となって現れるような場面とはどのようなものであろうか。また、実験場面で現れるような失敗傾向を質問紙で測るにはどうすればよいのだろうか。そこで次章では、CFQ より更に広範囲の失敗傾向を捉えるための尺度の作成を試みる。

6章 3つの失敗傾向に関する研究

6-1 失敗傾向質問紙の作成及び信頼性の検討

本研究では失敗を人と状況の相互作用の結果として捉えることは既に述べた。本章ではその相互作用に関わる二項のうち、個人要因を検討する手段として質問紙法を用いる。ある状況において他の人より失敗しやすい人がいるのか、いるとすればその人々は他にどのような特徴を持つのか、といったことを質問紙によって調べるのである。その失敗しやすさが実際にある状況で失敗として現れるかどうかは、その状況の「強さ (Mischel, 1977)」に影響されると考えられる。強い状況とは、そこでどのような行動が要求されるかが明瞭で、そのために必要なスキルの個人差が小さいような状況であり、そこでは行動の個人差が現れにくいと考えられている。反対に「弱い」状況では、その状況をどのように受け取るか、どのような行動が求められるかの解釈に個人差が生じる余地があり、個人の持っている特性や能力の違いが行動に反映されやすい。質問紙ではこのような状況の特定が困難であるから、質問紙で測られる個人の失敗しやすさは、ある状況で実際に失敗として発現するかもしれない失敗傾向として考えておくべきだろう。

次に失敗傾向の内容であるが、前章での検討から CFQ は「うっかりして」「ぼんやりして」といったアクションスリップの項目から主に構成されていると考えられるため、本章ではアクションスリップだけではなく日常生活において経験される、より広範囲の失敗傾向を捉えられる質問紙の作成を試みた。まず参加者の自由報告や産業・交通分野での事故報告書、いくつかの衝動性尺度項目などを参考にして新しい項目を収集・作成した。その際には、Norman (1988) や Reason (1990) の言うミステイクのカテゴリーを念頭におき、何らかの問題解決行動や判断の失敗であること、日常生活でしばしば見られる行動であること、能力の低さに由来するものではないことの3点に注意した。このようにして作成した新項目には、主に次の2つの失敗—ヒューマンエラー研究でいう cognitive narrowing 現象と、非機能的衝動性 (Dickman, 1990) によるもの—が含まれている。

cognitive narrowing とは、航空機の操縦やパワープラントの操作などの高負

荷状況において、処理できる情報の範囲が狭くなる現象である (Robertson, 1985)。注意が適切に配分されないという点ではアクションスリップと同じだが、この場合はその狭められた注意が状況内のある一点に集中してしまい、適切な行動がとれないという結果を招くことになる。例えば警報が鳴り響く発電所で、その原因を探すオペレーターがある一つの仮説だけにこだわって何度もそのチェックをしていると、その間に他の箇所で事故が発生するというようなことが起こる。産業場面ではこのような注意の狭窄を防ぐために作業環境を整え、不安や緊張、疲労などを低減することが提唱されているが、一方では、同じ状況でも cognitive narrowing が起こりやすい人とそうでない人がいることも指摘されており、それは個人が通常用いている情報処理スタイルと関係するといわれている (Robertson, 1985)。先に述べたような、一つの考えにこだわって他の可能性を検討できないというような認知の狭さや硬さ (rigidity) は日常生活の中でも観察される特徴であり、そのために行動に失敗してしまうことも十分考えられる。

非機能的衝動性は Dickman (1990) が見出した特性である。一般に衝動性の高い人は問題解決の際には反応が早くエラーが多いと言われているが、Dickman は遂行を促進するような衝動性もあるのではないかと考え、機能的・非機能的衝動性を測定できる質問紙を作成した。このうち非機能的衝動性とは慎重に行動しなければならない状況で性急に行動してしまう傾向であり、状況に対する見通しの悪さや、計画を立てて意図的に行動することを嫌うといった特徴を伴う。このような特徴も失敗を導くことが多いだろう。

これら 2 つの特徴はいずれも慣れた行動をぼんやりしていてまちがうといった単なる実行の失敗ではなく、たとえば行動の意図形成におけるエラー (Norman, 1981)、固執した思考、作業の容量が十分でないために起こる問題解決場面でのミスチックなどを導きやすいと考えられる。先に述べたようにこのような失敗は CFQ ではカバーされていないため、これらの特徴を示す項目を加えることで、個人の失敗傾向をより包括的に捉えることが期待できる。

なお CFQ では調査時から遡って過去 6 ヶ月を調査対象としているが、今回作成した質問紙では調査期間を限定しなかった。CFQ を用いた調査では 6 ヶ月以上の間隔をおいても再検査間の得点がかなり安定していたことと、一時的な

失敗の多さではなく比較的安定した失敗傾向を測りたいというのがその理由である。

本節では広範囲の失敗項目を用いて新しい尺度を構成し、次に内的整合性や得点の再検査間の相関から尺度の信頼性を検討する。

【 方 法 】

調査期間：1994年～1997年。

実施した尺度：調査には CFQ オリジナル 25 項目の日本語訳¹に新しく作成した 20 項目を付け加えた合計 45 項目からなる質問紙を用いた。参加者は、それぞれの行動がふだんの自分にどのくらいよく起こるかを「非常によくある」、「かなりよくある」、「時々ある」、「あまりない」、「まったくない」の 5 件法で回答する。得点化の際にはこれら 5 つの回答に順に 4, 3, 2, 1, 0 点を与える。項目内容は次の通りである。また調査に用いた用紙は資料として添付した。

教示：「人は誰でも、毎日の生活の中で、いろんな失敗や間違いをします。いつもなら簡単にできるような慣れたことでも、ちょっとした原因で間違えてしまうこともあります。この調査は、いろいろな間違いや失敗が、どのくらいの頻度で起こるのかを調べるためのものです。それぞれの項目を読んで、それらの出来事が、日頃のあなたにどのくらいよく起こることを答えて下さい。答は 5 つのうちから当てはまるものを 1 つだけ選んで、○で囲んで下さい。○は必ずポイントの上につけて下さい。」

項目内容：

- 26 期限までに間に合わせようとして急いだために、仕事が雑になってしまう
- 27 テストなどで、いろいろ考えすぎて時間がなくなってしまう
- 28 早く決めるように急がされると、かえって迷って決められなくなってしまう
- 29 時間に遅れそうになってあせってしまい、忘れ物をする
- 30 テストや面接の時にあがってしまい、落ち着いていたらもっとうまくできたのにと後悔する
- 31 コンピュータやワープロが突然動かなくなり、原因を確かめる前にあわてて電源を切ってしまう
- 32 駅のホームに駆け上がり、行き先を確かめずにちょうど来た電車に乗ってしまう
- 33 買物に行って、どれを買おうか迷ってしまい、結局いいかげんに決めてしまう
- 34 用事が2つ重なると、一度に両方の用事を片づけようとして、かえって時間がかかる

¹ 前章で行った日本語訳のいくつかは修正して用いた。

- 35 責任の重い仕事を任されると、緊張してふだんの力が出せない
- 36 早く決めるように急がされると、よく考えずに決めてしまい後で後悔する
- 37 もう少し待てば増えるとわかっているのに、つい目先の利益を選んで損をする
- 38 細かいことにこだわりすぎて、物事の全体的な局面を見すごしてしまう
- 39 ある考えが頭に浮かぶと、それ以外の可能性について考えられなくなってしまう
- 40 その日の予定が空いているかどうか、確めないで約束してしまう
- 41 頭に浮かんだことを、そのまま言ったり、したりしてしまう
- 42 残りのお金のことはよく考えないで、買物する
- 43 状況が変わっているのに、自分の考え方や態度を柔軟に変えられない
- 44 ささいなことが気になって、かんじんなことを考えるのに集中できない
- 45 単純な作業を繰り返して慣れてくると、気を抜いてしまってかえってミスをする

参加者：調査は上記期間中の心理学関連の講義時間を利用して、数回にわたって、数十名から100名程度の学生の集団に実施され、女子短大生282名、女子大学生218名、男子大学生122名の計622名から有効データを得た(グループ6)。参加者の年齢は18~23才(平均19.3才, SD=1.3)である。

【 結 果 と 考 察 】

1. 尺度構成

まず全45項目を対象に、共通性の初期値をSMCとして主因子法による因子分析を行った。次にこの結果から共通性が.16以下のもの、内容が類似していて項目間相関も高いもの、2つの因子に.30以上の負荷量を示したものなどを除外し、残った38項目について再び分析を行った。固有値1以上の因子は9個抽出され、その推移は8.10, 2.41, 1.94, 1.46, 1.31, 1.19, 1.10・・・となっており、スクリープロット、および項目内容から3因子解が適切と思われたため、3因子でバリマックス回転を行った(表6-1-1)。3因子の累積寄与率は27.2%である。

表6-1-1 失敗傾向質問紙38項目の因子負荷行列(主因子法・バリマックス回転)

N=622

質問項目	因子1	因子2	因子3	共通性
C17手に持っていたものをなにげなくそこに置き、後になってどこに置いたか思い出せなくなる	0.58	0.14	0.17	0.39
C02何か用事があるとその部屋に行ったのに、何をするためだったのか思い出せない	0.57	0.11	0.10	0.35
C22何かを思い出そうとしていて、喉まで出かかっているのにどうしても出てこない	0.55	0.23	0.12	0.37
C23何を買いにその店に来たかが、とっさに思い出せない	0.52	0.14	0.18	0.32
C20人の名前を思い出せない	0.45	0.08	0.09	0.22
C24物をなくしてしまう	0.43	0.11	0.30	0.29
C13スーパーマーケットに行って、ほしい品物が目の前にあるのにすぐに見つけれない	0.42	0.17	0.25	0.27
C19何かを聞いていなければならぬ時に、ぼんやり他のことを空想してしまう	0.41	0.27	0.10	0.25
C01本や新聞を読みながらぼんやりしてしまい、内容を理解するためにもう一度読み直す	0.40	0.19	0.06	0.20
C21何か一つのことをしている時に、つい他のことをしたくなってしまう	0.39	0.24	0.07	0.22
C04左と右をまちがえる	0.39	0.04	0.10	0.16
C11大事な手紙に何日も返事を書かないで置いておく	0.39	0.13	0.19	0.21
C03道路に出ている看板や標識に気がつかない	0.38	0.19	0.17	0.21
C09何かに熱中している時に人から話しかけられると、聞き逃がしてしまう	0.36	0.12	0.20	0.18
C05歩いていて人とぶつかる	0.35	0.12	0.18	0.17
C12久しぶりにある場所に行こうとした時にどこで曲がればいいのか思い出せない	0.31	0.12	0.20	0.15
N36早く決めるように急がされると、よく考えずに決めてしまい後で後悔する	0.13	0.65	0.25	0.50
N28早く決めるように急がされると、かえって迷って決められなくなる	0.15	0.62	0.00	0.41
N35責任の重い仕事をまかされると、緊張してふだんの力が出せない	0.03	0.60	0.18	0.39
N38細かいことにこだわりすぎて、物事の全体的な局面を見過ごしてしまう	0.15	0.58	0.16	0.38
N44些細なことが気になって、かんじんなことを考えるのに集中できない	0.22	0.55	0.09	0.36
C15決心するまでにあれこれ迷ってしまう	0.22	0.52	-0.20	0.36
N30テストや面接の時にあがってしまい、落ち着いていたらもっとうまくできたのにと後悔する	0.15	0.51	0.06	0.29
N43状況が変わっているのに、自分の態度や考えを柔軟に変えるのがむずかしい	0.11	0.43	0.24	0.26
N39ある考えが頭に浮かぶと、それ以外の可能性について考えられなくなってしまふ	0.23	0.40	0.26	0.28
N45単純作業を繰り返して慣れてくると、気を抜いてしまってかえってミスする	0.14	0.38	0.34	0.28
N27テストなどでいろいろ考えすぎて時間が足りなくなってしまふ	0.15	0.35	0.02	0.15
N26期限までに間に合わせようとして急いだために、仕事が雑になってしまふ	0.20	0.34	0.27	0.23
C10かんしゃくを起こして後悔する	0.27	0.30	0.16	0.19
N40その日の予定が空いているかどうか確かめないで約束してしまう	0.19	0.05	0.54	0.34
N42残りのお金のことはよく考えないで買い物をする	0.11	0.04	0.53	0.29
N32駅のホームに駆け上がり、行き先を確かめずにちょうど来た電車に乗ってしまう	0.24	0.04	0.50	0.31
N33買物に行ってどれを買おうか迷ってしまい、結局いいかげんに決めてしまふ	0.12	0.29	0.47	0.32
N37もう少し待てば増えるとわかっているのに、つい目先の利益を選んで損をする	0.09	0.31	0.46	0.32
N31コンピュータやワープロが突然動かなくなり、原因を確かめる前に慌てて電源を切る	0.11	0.11	0.44	0.22
C16人との約束を忘れてしまふ	0.24	0.03	0.35	0.18
N41頭に浮かんだことを、そのまま言ったりしったりしてしまふ	0.24	0.14	0.35	0.20
C18次々にピーナッツやチョコを食べているうちに、うっかり殻や包み紙の代わりに中身を捨てて..	0.24	0.03	0.31	0.15
寄 与	3.80	3.78	2.75	10.33
説 明 率	10.0%	10.0%	7.2%	27.2%

※ 項目番号のCはCFQのオリジナル項目、Nは新しく作成した項目を表す。

なおこの因子構造はプロマックス回転を行った場合の因子パターンとほぼ同じであったが、第1因子に項目4が加わり、第2因子から項目39が外れるた

め²、項目数や内容を考慮してここではバリマックス解を採用した。プロマックス回転を行った場合の因子間相関は、第1因子と第2因子で $r=.52$ 、第1因子と第3因子で $r=.52$ 、第2因子と第3因子で $r=.46$ であった。

第1因子に高い負荷量を持つのはすべてオリジナルの CFQ 項目であるが、その中でも、物を置いた場所を忘れる、しようと思っていたことや言おうとしていたことを忘れる、人の名前を忘れる、何かをしている時にぼんやりしてしまったり注意が他に向いてしまう、など不注意やもの忘れの10項目が.40以上の負荷量を示した。これらは CFQ 項目の中でも特に、実行中の行動への注意が不十分なために起こる失敗である。従って第1因子は CFQ 全体よりも明瞭に“アクションスリップ”の性質を持つ因子と考えられるだろう。

第2因子は、急がされると決心に迷ったり考えずに決めたりする、責任の重い仕事やテストなどではふだんの力が出せない、ものごとの細部にとらわれて広い見方ができない、状況の変化に合わせられない、などの9項目が高く負荷した。このうち8項目が新しく作成した項目である。これらの項目は、ストレスに影響されやすく状況に適した行動がとりにくいことや、認知が狭く硬直化していること、すなわち項目作成時に意図した *cognitive narrowing* 現象をよく表していると考えられるため、第2因子を“認知の狭窄”因子と解釈する。

第3因子は予定を確かめず約束する、所持金を確かめず買い物する、反対方向へ行く電車に飛び乗ってしまう、目先の利益を選んで結局損をする、などのように状況への見通しが悪く、よく確かめないで行動する項目からなっている。これらの6項目はすべて新しく作成したもので非機能的衝動性の特徴と一致すると思われるため、第3因子は“衝動的失敗”の因子と解釈する。

以上のように、因子分析の結果からは新項目作成時の意図にほぼ対応する因子が得られたと考えられる。ここではこれらの因子に .40以上の負荷量を示した25項目から失敗傾向尺度を構成することとし、各因子ごとの項目の合計得点を失敗傾向得点とする。

なおこの25項目で再び因子分析を行ったところ、全項目が先述の分析結果と同じ因子に.35以上で負荷することが確認された。全体の説明率は31.6%と

² 負荷量 $\geq \pm .40$ を基準とした場合。

なる。

3つの失敗傾向尺度を構成する25項目は、得点の平均値±標準偏差の値がいずれも評定値0～4の範囲内にあり、回答の分布が極端に偏った項目はないと考えられる。また各失敗傾向得点によって高得点群・低得点群を約25%ずつ選り出し、尺度内の各項目得点を比較した（G-P分析）。3尺度とも、すべての項目において高・低得点群間に1%水準で有意差が認められ、項目の識別力についても問題はないと思われる。

各下位尺度の内容は以下の通りである。

[アクションスリップ(action slip)]

- 1 本や新聞を読みながらぼんやりしてしまい、内容を理解するためにもう一度読み直す
- 2 何か用事があってその部屋に行ったのに、何をするためだったのか思い出せない
- 13 スーパーマーケットに行き、ほしい品物が目の前なのに、すぐに見つけられない
- 17 手に持っていたものをなにげなくそこに置き、後になってどこに置いたか思い出せなくなる
- 19 何かを聞いていなければならぬ時に、ぼんやり他のことを空想してしまう
- 20 人の名前を思い出せない
- 21 何か一つのことをしているときに、つい他のことがしたくなってしまう
- 22 何かを思い出そうとしていて、のどまで出かかっているのに、どうしても出てこない
- 23 何を買いにその店に来たか、とっさに思い出せない
- 24 物をなくしてしまう

[認知の狭窄(cognitive narrowing)]

- 15 決心するまでに、あれこれ迷ってしまう
- 28 早く決めるように急がされると、かえって迷って決められなくなってしまう
- 30 テストや面接の時にあがってしまい、落ちついていたらもっとうまくできたのにと後悔する
- 35 責任の重い仕事をまかされると、緊張してふだんの力が出せない
- 36 早く決めるように急がされると、よく考えずに決めてしまい、後で後悔する
- 38 細かいことにこだわりすぎて、物事の全体的な局面を見すごしてしまう
- 39 ある考えが頭に浮かぶと、それ以外の可能性について考えられなくなってしまう
- 43 状況が変わっているのに、自分の態度や考え方を柔軟に変えられない
- 44 ささいなことが気になって、かんじんなことを考えるのに集中できない

[衝動的失敗(impulsivity)]

- 31 コンピュータやワープロが突然動かなくなり、原因を確かめる前にあわてて電源を切ってしまう
- 32 駅のホームに駆け上がり、行き先を確かめずにちょうど来た電車に乗ってしまう
- 33 買い物に行って、どれを買おうか迷ってしまい、結局いいかげんに決めてしまう
- 37 もう少し待てば増えるとかわかっていても、つい目先の利益を選んで損をする
- 40 その日の予定が空いているかどうか、確かめないで約束してしまう
- 42 残りのお金のことはよく考えないで、買い物をする

2. 失敗傾向得点の分布と相互相関

各得点の平均値と得点レンジを表 6-1-2 に、得点分布を図 6-1-1～6-1-3 に示した。会社員に CFQ 日本語版を実施した調査では合計得点に有意な性差はみられなかったが (5-1 節参照)、今回も“アクションスリップ”では有意な差はなく、“認知の狭窄”では女子学生の得点がやや高い傾向がみられた ($t=1.84$, $p<.10$)。なお“衝動的失敗”では男子学生の方が有意に得点は高かった ($t=2.10$, $p<.05$)。実際の得点差は 0.95 であり、標準偏差やデータ数の多さを考慮するとそれほど大きい差ではないが、男女の得点傾向が逆になっている点は興味深い。

表6-1-2 失敗傾向得点の平均値(SD)と得点レンジ

	アクションスリップ ^o	認知の狭窄	衝動的失敗
被験者全体 (N=622)	20.11(5.30) 5～38	18.81(5.44) 2～33	7.63(3.84) 0～24
男子学生 (N=122)	19.54(5.38) 6～38	18.00(5.76) 4～33	8.39(4.66) 0～19
女子学生 (N=500)	20.26(5.25) 5～36	19.01(5.35) 2～33	7.44(3.60) 0～24

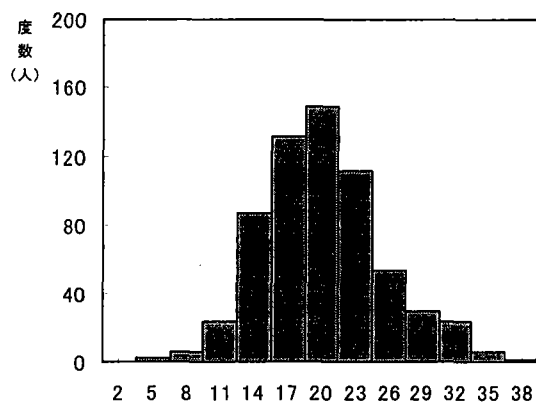


図6-1-1 “アクションスリップ”得点の分布

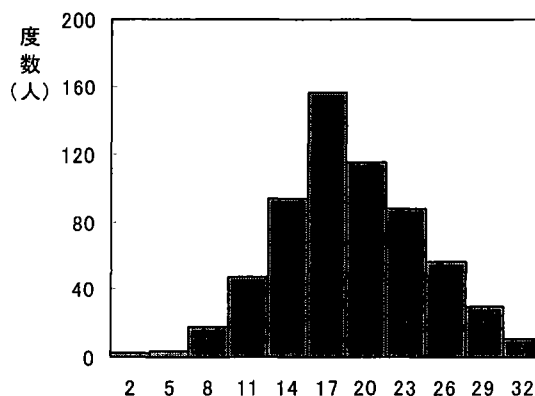


図6-1-2 “認知の狭窄”得点の分布

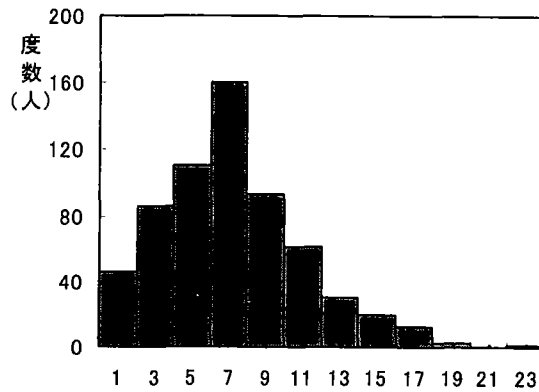


図6-1-3 “衝動的失敗”得点の分布

失敗傾向得点間の相関は，“アクションスリップ”と”認知の狭窄”で $r=.48$ ，“アクションスリップ”と“衝動的失敗”で $r=.43$ ，“認知の狭窄”と”衝動的失敗”で $r=.38$ であった（いずれも $p<.01$ ）。これはプロマックス解での因子間に中程度の相関があったことと整合する。

3. 尺度の信頼性

尺度ごとにクロンバックのアルファ係数を求めたところ，“アクションスリップ”で $\alpha=.79$ ，“認知の狭窄”で $\alpha=.81$ ，“衝動的失敗”で $\alpha=.70$ であり，内的整合性は一応の基準に達していると言えるだろう。

次に女子大学生 2・3 年生 77 名には 2 カ月間隔で，男女大学生 150 名（男子 80 名，女子 70 名）には 6 カ月間隔をおいていずれも講義中に集団で調査を実施した。2 回の調査における尺度得点の相関は下表のように比較的高いものであり，この質問紙で測られる失敗傾向が時間をおいても比較的安定していることが示された。

表6-1-3 失敗傾向得点の再検査信頼性

	2カ月間隔 (N=77)	6カ月間隔 (N=150)
アクションスリップ	0.82	0.61
認知の狭窄	0.78	0.55
衝動的失敗	0.68	0.63

【 全 体 の 考 察 】

個人の記憶の失敗について調べるための質問紙はいくつかある（Herrmann, 1982）が、CFQ は記憶だけではなく知覚や認知における失敗をも含めたものとされている。しかしここでいう“cognitive failure”は、失敗をプランの失敗（ミステイク）と実行の失敗（スリップ）に分けた場合には主に後者を指すと言われており（Reason, 1988）、またいくつかの言語で行われている因子分析的研究の結果からも、CFQ は日常生活で経験するさまざまな失敗を網羅していないのではないかと考えられた。そこで本研究では CFQ を基にして、より広範な失敗を捉える質問紙の作成を試みた。大学生を対象とした調査の結果からは、“アクションスリップ”、“認知の狭窄”、“衝動的失敗”の 3 つの因子が抽出され、日常生活における失敗経験を区別しうることが示された。またこれらの得点が時間をおいても比較的安定していたことから、失敗しやすさに関する個人の特性を示すものと考えられる。本研究ではこれらの失敗しやすさを「失敗傾向」と呼び、さまざまな失敗の生起には、状況要因とこの失敗傾向との相互作用が影響を及ぼすのではないかと考えている。

これらの失敗傾向は、失敗の現象としての特徴に注目した Reason による初期の分類とも、失敗の生起段階に注目する Norman の分類とも異なり、その現象の背景にある注意や認知的プロセスの状態を理論的に包含したものとなっている。従ってこの質問紙の妥当性を更に検討するためには、注意の負荷や課題状況をさまざまに操作して、その遂行とこれらの失敗傾向との関連を調べる検討が必要であろう。

6-2 失敗傾向の階層的構造

失敗傾向質問紙の因子分析の結果、質問紙作成時に想定した 3 つの失敗のカテゴリーにほぼ対応すると考えられる“アクションスリップ”、“認知の狭窄”、“衝動的失敗”の 3 因子が得られた（山田, 1999a）。しかし、各因子の内容を見ると、たとえばアクションスリップには人の名前を忘れる、しようとしていたことを忘れる、置き場所を忘れるといったもの忘れに関する項目とぼんやりして聞き逃す、注意が逸れるといった absent-minded（放心）の状態を表す項

目が混在している。進行中の行為に注意が向けられない場合、その行為そのものや行為の結果に対する記憶痕跡は弱まると考えられるから、不注意ともの忘れの項目群がまとまることは理論的にも整合する結果ではある。しかしこれらの特徴を区別しておくことで、実際の失敗との関係をより明瞭に捉えられる場合もあるかもしれない。そこでここでは、3つの失敗傾向の下位構造を探るための分析を行う。

【 方 法 】

調査期間：1997年～2002年。

実施した尺度：調査には前節で述べた25項目からなる失敗傾向質問紙を用いた。教示や回答方式は45項目のものと同じである。調査に用いた用紙は資料として添付した。

参加者：調査は上記期間中に数回にわたって実施され、短大生・専門学校生466名（男子3名、女子463名）、大学生747名（男子163名、女子584名）の計1,213名から有効データを得た。参加者の年齢は18～24才（平均19.8才、SD=1.2）で、25才以上のデータは除いた。調査は心理学関連の講義中に数十名から200名程度の集団で実施した。

【 結 果 と 考 察 】

1. 探索的因子分析

まず25項目を対象に、共通性の初期値をSMCとした主因子法による因子分析を行ったところ、スクリープロットからは3因子、固有値1の基準からは5因子が示唆されたので、この2つのプロマックス解を比較した。

表6-2-1からわかるように3因子解でも全項目がひとまず想定された因子に負荷するが、“アクションスリップ”では負荷量がやや低い項目が出る。

これに対して5因子解（表6-2-2）では“アクションスリップ”と“認知の狭窄”がそれぞれ2つの因子に分かれ、因子間で移動する項目はない。“衝動的失敗”では項目24の負荷量が0.34となったが、それ以外は一つの因子に0.35以上の負荷量を示すという単純構造も保たれている。そこで全25項目を用いて、“アクションスリップ”と“認知の狭窄”はそれぞれ2つの下位因子から

なり，“衝動的失敗”は1つの因子としてまとまるという階層構造を想定する。

表6-2-1 失敗傾向質問紙25項目の3因子解(主因子法・プロマックス回転)
(N=1213)

* 質問項目	第1因子	第2因子	第3因子
C 08細かいことにこだわりすぎる	0.620	-0.066	0.059
C 02急がされて決めて後悔	0.592	-0.036	0.165
C 05責任が重いと緊張する	0.592	-0.100	0.062
C 12急がされると迷う	0.591	0.100	-0.130
C 15決心するまでに迷う	0.588	0.180	-0.366
C 18あがって失敗する	0.558	0.000	-0.069
C 10些細なことが気になる	0.538	0.083	0.009
C 21考えを柔軟に変えられない	0.445	-0.077	0.178
C 23ある考え以外思いつかない	0.415	-0.017	0.225
A 01置いた場所を忘れる	-0.087	0.665	0.045
A 07喉まで来て思い出せない	0.101	0.606	-0.051
A 04用事を忘れる	-0.012	0.568	0.022
A 11人の名前を思い出せない	-0.071	0.546	-0.028
A 14ものをなくす	-0.077	0.482	0.187
A 09買い物物を忘れる	0.036	0.431	0.098
A 20ぼんやり空想してしまう	0.166	0.360	0.053
A 25他のことがしたくなる	0.142	0.351	0.069
A 17ほしい品物が見つからない	0.054	0.333	0.137
A 22読みながらぼんやりする	0.211	0.272	0.024
I 06残金を考えず買い物	-0.125	0.069	0.557
I 19目先の利益を選んでしまう	0.196	-0.096	0.524
I 03予定を確かめず約束	-0.087	0.131	0.466
I 13違う電車に乗ってしまう	-0.097	0.162	0.434
I 16何をかうか迷う	0.207	0.006	0.408
I 24慌てて電源を切る	0.068	0.042	0.373
因子間相関	第1因子	—	0.541
	第2因子	—	—
			0.485

※ *はN=622の3因子解における因子名。

A: アクションスリップ, C: 認知の狭窄, I: 衝動的失敗。

5因子解の内容から，“アクションスリップ”は先に述べたような“もの忘れ”と“放心”の下位因子に分かれることが確認された。また“認知の狭窄”は、緊張や時間的切迫、責任感など内外のストレスに影響されやすい“妨害されやすさ (vulnerability)”の因子と、思考や注意が硬直化しやすいことを表わす“とらわれ (rigidity)”の因子に分かれると解釈できる。この2つの下位因子が現れたことは“認知の狭窄”の概念的な内容とも整合する結果である。

表6-2-2 失敗傾向質問紙25項目の5因子解(主因子法・プロマックス回転) (N=1213)

* 質問項目	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子	第5因子	
A 01置いた場所を忘れる	0.65	-0.05	0.02	0.01	0.03	
A 04用事を忘れる	0.59	-0.03	-0.01	0.08	-0.01	
A 07喉まで来て思い出せない	0.50	0.15	-0.02	-0.04	0.13	
A 09買い物をする	0.47	0.10	0.11	-0.01	-0.08	
A 11人の名前を思い出せない	0.46	0.04	0.00	-0.11	0.10	
A 14ものをなくす	0.42	0.02	0.21	-0.10	0.06	
A 17ほしい品物が見つからない	0.38	0.03	0.12	0.09	-0.07	
C 12急がされると迷う	0.08	0.73	-0.03	-0.05	-0.06	
C 15決心するまでに迷う	0.08	0.65	-0.28	-0.03	0.09	
C 02急がされて決めて後悔	-0.07	0.57	0.26	0.07	-0.02	
C 05責任が重いと緊張する	-0.04	0.42	0.06	0.26	-0.09	
C 18あがって失敗する	0.03	0.41	-0.06	0.22	-0.04	
I 16何を買うか迷う	-0.14	0.33	0.59	-0.19	0.10	
I 06残金を考えず買い物	0.05	-0.14	0.54	0.00	0.04	
I 03予定を確かめず約束	0.16	-0.08	0.46	0.01	-0.05	
I 19目先の利益を選んでしまう	-0.04	-0.03	0.46	0.27	-0.02	
I 13違う電車に乗ってしまう	0.22	-0.08	0.43	0.02	-0.10	
I 24慌てて電源を切る	0.00	-0.07	0.34	0.13	0.10	
C 08細かいことにこだわりすぎる	0.04	0.22	-0.06	0.58	-0.09	
C 23ある考え以外思いつかない	0.01	-0.04	0.09	0.56	0.06	
C 21考えを柔軟に変えられない	-0.11	-0.02	0.05	0.55	0.16	
C 10些細なことが気になる	0.04	0.22	-0.06	0.37	0.14	
A 20ぼんやり空想してしまう	0.04	-0.04	0.01	0.05	0.62	
A 25他のことがしたくなる	0.06	-0.04	0.03	0.05	0.55	
A 22読みながらぼんやりする	0.07	0.03	-0.01	0.12	0.37	
因子間相関	第1因子	—	0.43	0.46	0.41	0.57
	第2因子	—	—	0.37	0.54	0.45
	第3因子	—	—	—	0.41	0.38
	第4因子	—	—	—	—	0.47

※ *は3因子解における因子名を表す。A:アクションスリップ, C:認知の狭窄, I:衝動的失敗。

2. 確証的因子分析

ここでは共分散構造分析法 (Amos 4.0) を用いて、下位因子を想定した失敗傾向の階層構造を検討した。従来の3因子構造 (図 6-2-1) と比較してみると、どちらのモデルも適合度指標は基準を満たしており受容可能ではあるが、“アクションスリップ”と“認知の狭窄”に下位因子を想定したモデル (図 6-2-2) の方が、適合度がやや高くなることわかる。なお図には標準化推定値を記載した。

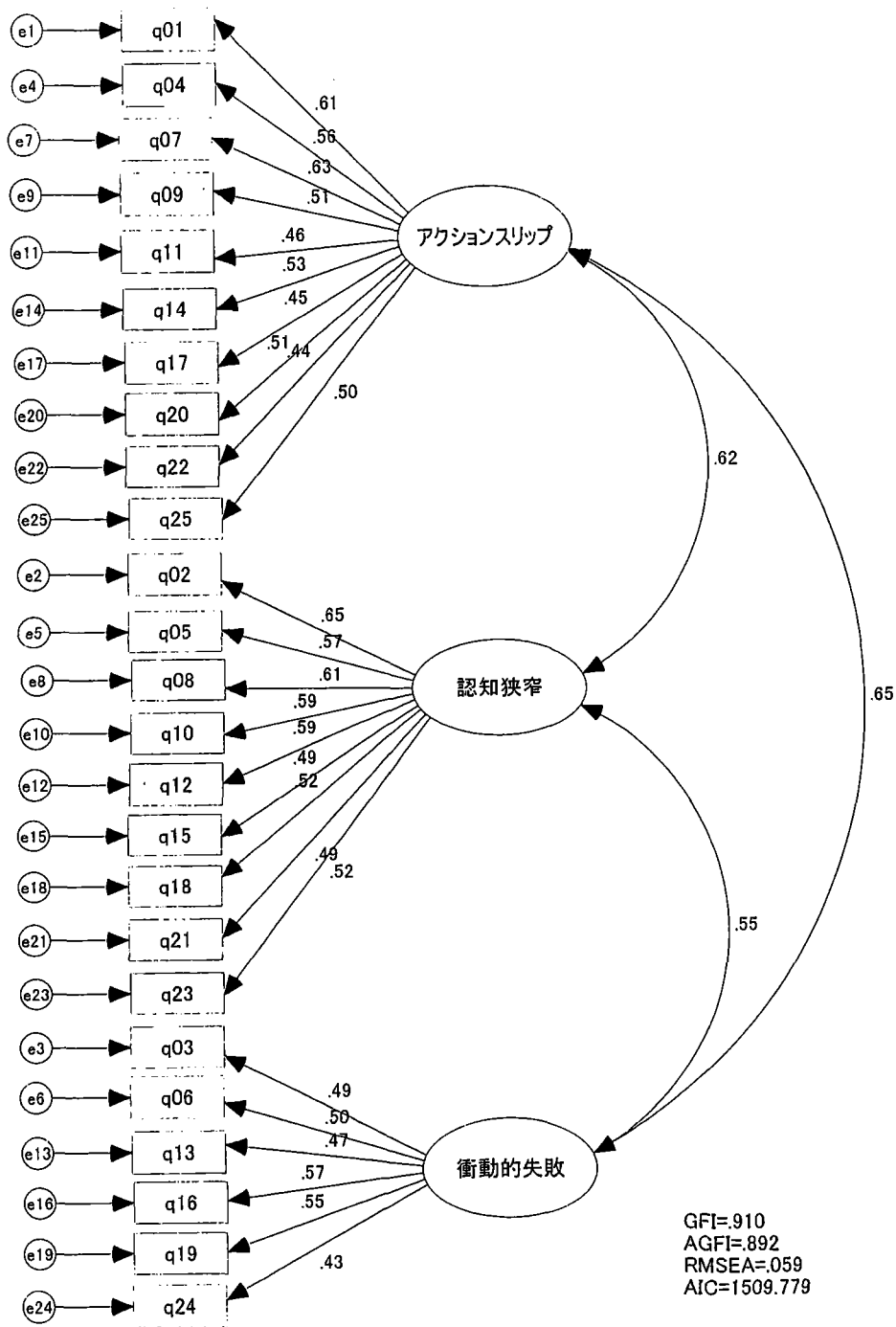


図 6-2-1 失敗傾向質問紙の確証的因子分析(3 因子の場合)

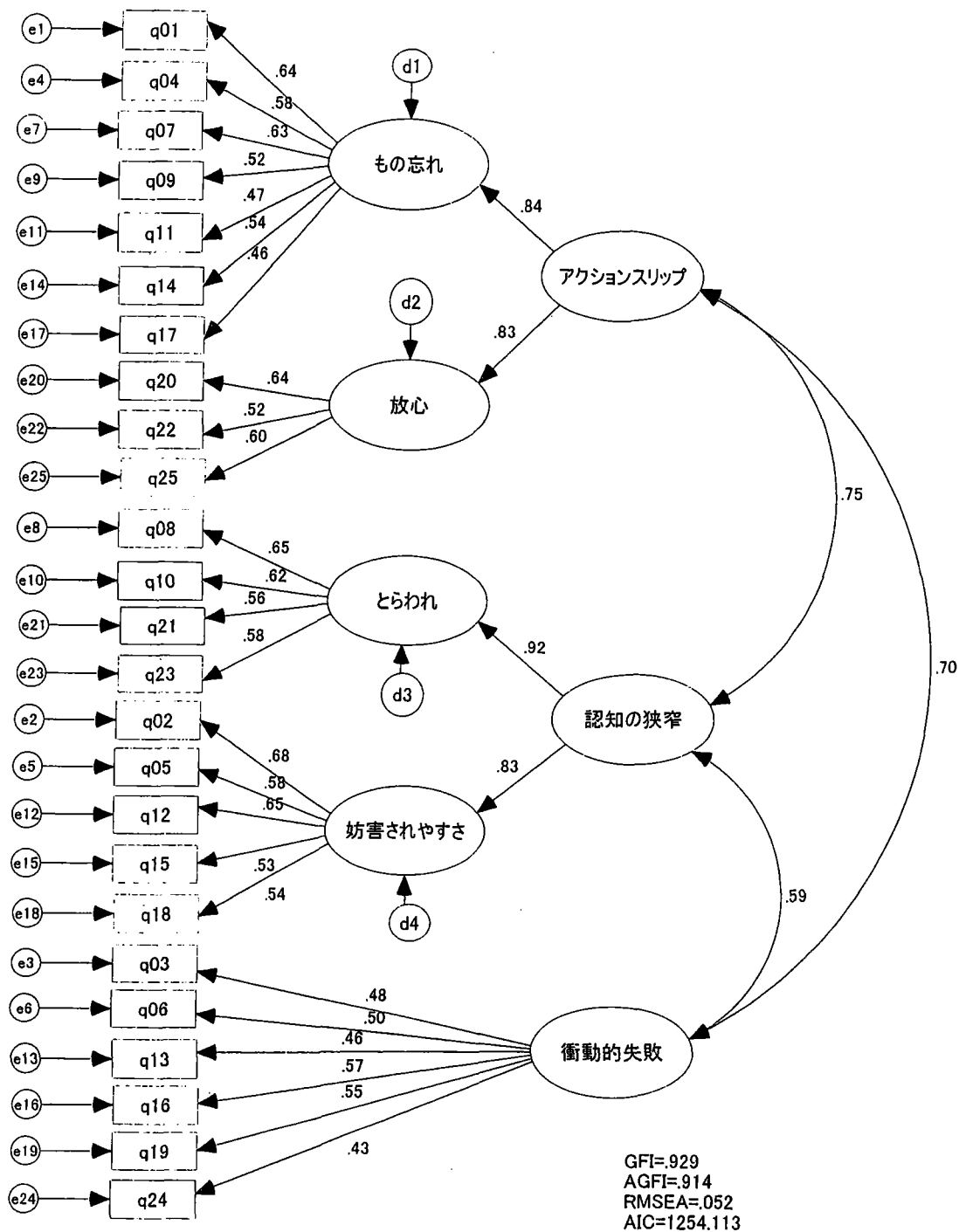


図 6-2-2 失敗傾向質問紙の確証的因子分析(5 因子の場合)

3. 学生サンプルにおける標準データ

ここでは先に報告した 1,213 名の学生集団（男子 166 名，女子 1047 名）における各失敗傾向得点を標準データとしてあげておく。

男女別の得点を比較したところ，“アクションスリップ”，“放心”，“認知の狭窄”，“妨害されやすさ”では 1%水準で有意差が見られ ($t_s=3.11, 4.19, 3.39, 4.26$)，女子の得点が高かった．“衝動的失敗”では反対に男子の得点が高く ($t=2.43, p<.05$)，“とらわれ”では男女の得点に有意な差はなかった ($t=1.35, n.s.$)．しかしこれはサンプルの大きさと実際の得点差を考慮すると，あまり意味のある違いとは言えないだろう．

表6-2-3 失敗傾向得点の平均値(SD)と得点レンジ (N=1213)

	アクションスリップ			認知の狭窄		衝動的失敗	
	もの忘れ	放心		妨害されやすさ	とらわれ		
被験者全体 (N=1213)	20.4(5.3) 5~40	13.1(4.0) 3~28	7.3(2.1) 0~12	18.8(5.3) 2~34	11.2(3.4) 1~20	7.6(2.6) 0~16	7.6(3.7) 0~24
男子学生 (N=166)	19.3(5.6) 5~38	12.6(4.2) 4~26	6.7(2.3) 1~12	17.5(5.7) 4~33	10.1(3.7) 2~20	7.4(2.9) 1~15	8.4(4.5) 0~20
女子学生 (N=1047)	20.6(5.2) 5~40	13.2(4.0) 3~28	7.4(2.0) 0~12	19.0(5.2) 2~34	11.3(3.3) 1~20	7.7(2.6) 0~16	7.5(3.5) 0~24

【 全 体 の 考 察 】

ここでは失敗傾向因子の階層構造を検討した．探索的及び確証的因子分析を行った結果，“アクションスリップ”は人の名前を忘れる，しようとしていたことを忘れる，置き場所を忘れるといった“もの忘れ”の因子と，ぼんやりして聞き逃す，注意が逸れるなどの“放心”の下位因子から構成されることがわかった．また“認知の狭窄”は，内外のストレスによって認知的プロセスが損なわれやすい“妨害されやすさ”と，思考を柔軟に切り替えられない“とらわれ”の下位因子を含むと解釈される．

6-3 パーソナリティ特性との関係

これまでの検討において CFQ や失敗傾向質問紙の得点が時間をおいてもある程度安定していたことから、これらの質問紙が捉えようとしている失敗傾向は比較的安定した個人差であろうと述べた。ではこの失敗傾向とはどのような特徴なのであろうか。本節以降では、失敗傾向の構成概念を明確にするために、パーソナリティ特性や注意のスタイルなどの個人要因との関係を検討する（山田, 1997）。

近年、パーソナリティ特性論においては、5つの主要な特性次元によってパーソナリティを包括的に記述しようとするいわゆるビッグ・ファイブモデルが主流となっている。このモデルに基づくパーソナリティテストの中では Costa & McCrae (1992) の NEO-PI-R が広く用いられており、日本では下仲ら (1999) によって日本語版が作成されている。このテストは外向性、調和性、誠実性、神経症傾向、開放性の5つの次元から構成されている。また辻ら (1997) は欧米中心の5因子解釈に抛らない独自の理論を提唱し、これに基づくテストとして5因子性格検査 (FFPQ 研究会, 1998) を作成した。FFPQ では内向性-外向性、分離性-愛着性、自然性-統制性、非情動性-情動性、現実性-遊戯性の5つの特性が捉えられる。本研究ではこの FFPQ を用いて、失敗傾向との関係を検討する。

さまざまなパーソナリティテストを用いて、それらが共通して測定する特性を明らかにする試みから、外向性と神経症傾向 (FFPQ では情動性がこれに相当する) の2次元がまず確認され、より包括的なパーソナリティ理解のために残りの3次元が付け加えられた経緯はよく知られている。失敗傾向質問紙で測られる失敗傾向は、これらの包括的なパーソナリティ理解の枠組みの中でどのように位置づけられるだろうか。まず、緊張や時間的切迫といった内外のストレスに妨害されて失敗しやすい傾向である“認知の狭窄”は、ストレスに対する反応しやすさを表す情動性と強い関連を示すことが予測できる。また行き当たりばったりに行動してしまう“衝動的失敗”は、自己や環境を統制し、物事を合理的かつ効率的に行おうとする特徴を示す統制性とは反対の傾向であると考えられるし、現在進行中の行為から注意が逸れてしまう“アクションスリップ”の傾向は、現実から離れて興味を引かれるものに向かっていく遊戯性の内

容と共通の側面を持つことが予測できる。特にあとの2点についてはビッグ・ファイブに基づくパーソナリティテストを用いることで検討できると考えられる。

【 方 法 】

調査期間：1997年～2002年

実施した尺度：25項目からなる失敗傾向質問紙、及び5因子性格検査第5版（Five-Factor Personality Questionnaire, FFPQ 研究会, 1998）。FFPQは外向性、愛着性、統制性、情動性、遊戯性の5つの超特性を捉えるもので、これらの超特性はそれぞれ5つの要素特性を備えている。要素特性の内容は表6-3-1に示した。FFPQの質問は150項目で、「全くちがう」「少しちがう」「どちらともいえない」「少しそうだ」「全くそうだ」の5件法で回答を求める。なおFFPQは2002年に改訂が加えられ、第6版では遊戯性の進取－保守で6項目のうち、2項目が新しいものに替えられている。失敗傾向質問紙は1節で述べた方法によって得点化し、“アクションスリップ”、“認知の狭窄”、“衝動的失敗”の3尺度の合計得点を求めた。また2節での分析結果に基づいて“アクションスリップ”では“放心”と“もの忘れ”の下位得点を、“認知の狭窄”については“妨害されやすさ”と“とらわれ”の下位得点を求めた。

表6-3-1 FFPQの超特性および要素特性の内容

外向性－内向性	活動－非活動	支配－服従	群居－独居	興奮追求－ 興奮忌避	注意獲得－ 注意回避
愛着性－分離性	温厚－冷淡	協調－競争	信頼－警戒	共感－非共感	他者尊重－ 自己尊重
統制性－自然性	几帳面－ おおまか	執着－無執着	責任感－ 無責任	自己統制－ 衝動	計画－無計画
情動性－非情動性	心配性－ のんき	緊張－弛緩	抑鬱－非抑鬱	自己批判－ 自己受容	気分変動－ 気分安定
遊戯性－現実性	進取－保守	空想－実際	芸術への関心 －無関心	内的敏感－ 内的鈍感	奔放－堅実

参加者：近畿圏内にある私立の短期大学および大学2校の計3校に在学し、心

理学関連の講義を受講した1回生から4回生。失敗傾向質問紙とFFPQの両方において有効データが得られたのは、FFPQ第5版では女子274名(グループ8・18~24才, 平均19.9才(SD=1.22))であり, 第6版では男子161名, 女子199名の合計360名(グループ9・18~24才, 平均18.8才(SD=1.0))である。

【 結 果 と 考 察 】

1. 各尺度の基本統計量

グループ8, 9における失敗傾向得点を表6-3-2に示した。学生集団の標準データ(表6-2-3)に基づいて算出した得点偏差値は48~53となり, 標準データとの違いはそれほど大きくないと考えてよいだろう。

表6-3-2 グループ8・グループ9における失敗傾向質問紙の尺度得点

	グループ8		グループ9			
	女子 (N=274)		男子 (N=161)		女子 (N=199)	
	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD
アクションスリップ	21.20	5.37	19.61	5.37	21.42	5.27
もの忘れ	13.48	3.98	12.34	4.12	13.66	3.94
放心	7.72	2.16	7.28	2.16	7.76	2.10
認知の狭窄	19.23	5.01	18.02	5.19	19.50	5.11
妨害されやすさ	11.34	3.23	10.57	3.37	11.68	3.35
とらわれ	7.88	2.56	7.45	2.61	7.82	2.53
衝動的失敗	7.85	3.41	7.64	3.86	8.49	3.78

FFPQはマニュアルに従って得点化を行い, 両グループの平均得点を求めた(表6-3-3)。FFPQ第5版及び第6版の標準データの平均値と標準偏差を用いて両グループの得点偏差値を求めたところ, グループ8ではすべての得点偏差値は48~52の範囲にあり, グループ9の得点偏差値は47~53であった。FFPQの結果も標準的なデータから大きく偏ってはいないことが確認できる。

2. 失敗傾向とFFPQの相関

次にグループごとに失敗傾向得点とFFPQの各尺度得点との相関係数を求めた。なおグループ9については男女別に分析を行った。

表6-3-3 FFPQ各特性の平均得点とSD

	グループ8		男子 (N=161)	グループ9		
	女子 (N=274)			女子 (N=199)		
	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD
Ex 外向性	91.04	15.44	91.47	15.85	94.05	15.57
Ex1活動	17.27	4.54	17.70	4.10	17.86	4.02
Ex2支配	16.32	4.79	17.26	4.96	16.53	4.96
Ex3群居	19.50	4.72	18.40	4.83	20.77	4.65
Ex4興奮追求	20.22	4.05	20.41	4.13	20.79	4.38
Ex5注意獲得	17.73	4.04	17.70	3.73	18.09	4.09
A 愛着性	104.51	14.04	98.59	13.04	106.26	14.04
A1温厚	20.00	3.98	19.20	3.79	20.19	3.62
A2協調	20.80	3.47	20.45	3.28	21.53	3.18
A3信頼	21.08	3.74	18.84	4.07	20.81	3.70
A4共感	21.20	3.82	19.71	3.99	21.66	3.70
A5他者尊重	21.44	3.38	20.39	4.06	22.08	3.78
C 統制性	92.03	16.66	91.88	16.38	93.10	15.33
C1几帳面	17.27	5.57	17.30	5.38	17.39	5.41
C2執着	18.69	4.53	18.39	4.65	18.59	3.99
C3責任	19.94	3.75	19.84	3.79	20.30	3.92
C4自己統制	17.09	4.14	17.70	4.18	17.49	3.85
C5計画	19.03	4.20	18.65	4.54	19.34	4.44
Em 情動性	98.40	18.57	98.81	16.43	99.58	17.55
Em1心配性	22.28	4.86	22.54	4.36	22.87	4.63
Em2緊張	19.94	4.54	20.08	4.46	20.10	4.81
Em3抑鬱	17.36	4.92	17.45	5.01	17.40	4.84
Em4自己批判	18.04	5.27	18.82	5.10	17.90	5.25
Em5気分変動	20.77	4.97	19.92	4.26	21.31	5.03
P 遊戯性	109.93	13.23	104.21	13.55	107.16	12.97
P1進取*	21.51	3.62	20.51	3.49	20.47	4.01
P2空想	21.50	4.27	20.37	4.18	20.66	4.00
P3芸術関心	21.36	4.39	19.20	5.15	20.54	4.62
P4内的敏感	24.12	3.36	22.57	4.06	23.90	3.78
P5奔放	21.45	3.69	21.57	4.07	21.59	3.50

* 第6版では進取の2項目が新しいものに改訂された。

グループ8の女子(表6-3-4)では“アクションスリップ”及びその下位項目群である“放心”と遊戯性,中でも空想性との間に有意な正の相関が認められた。“認知の狭窄”では情動性との関係が顕著で,気分変動を除く4下位尺度との間に.30を超える正の相関があり,下位項目群である“妨害されやすさ”と“とらわれ”でも同様の結果が得られた。またこの“妨害されやすさ”は外向性の下位尺度である注意獲得との間に負の相関を示しており,このことは,

緊張して失敗しやすい人は他者から注目を浴びると一層のストレスになるのでそれを避ける傾向があることを示しているのかもしれない。“衝動的失敗”では統制性との負の相関が特徴であるが、下位尺度の中では特に自己統制・計画との間の関連が顕著である。

表6-3-4 グループ8における失敗傾向得点とFFPQ尺度得点(第5版)との相関係数(女子) (N=274)

FFPQ	失敗傾向	アクションスリップ		認知の狭窄				衝動的失敗
		もの忘れ	放心	妨害されやすさ		とらわれ		
Ex 外向性	-0.15 *	-0.14 *	-0.10	-0.28 **	-0.25 **	-0.24 **	0.07	
Ex1活動	-0.18 **	-0.19 **	-0.10	-0.18 **	-0.17 **	-0.13 *	0.05	
Ex2支配	-0.04	-0.02	-0.06	-0.23 **	-0.27 **	-0.12 *	0.02	
Ex3群居	-0.16 **	-0.15 *	-0.12 *	-0.21 **	-0.10	-0.27 **	0.03	
Ex4興奮追求	-0.03	-0.04	0.00	-0.07	-0.01	-0.13 *	0.06	
Ex5注意獲得	-0.09	-0.10	-0.04	-0.28 **	-0.30 **	-0.16 **	0.09	
A 愛着性	-0.10	-0.13 *	-0.03	-0.11	-0.04	-0.17 **	-0.17 **	
A1温厚	-0.05	-0.06	0.00	-0.11	-0.05	-0.14 *	-0.06	
A2協調	-0.03	-0.07	0.04	0.00	0.04	-0.04	-0.19 **	
A3信頼	-0.11	-0.09	-0.09	-0.14 *	-0.06	-0.21 **	-0.16 **	
A4共感	-0.11	-0.12 *	-0.04	-0.13 *	-0.07	-0.16 **	-0.12	
A5他者尊重	-0.10	-0.14 *	-0.01	-0.04	0.01	-0.09	-0.14 **	
C 統制性	-0.25 **	-0.24 **	-0.18 **	-0.09	-0.07	-0.09	-0.44 **	
C1几帳面	-0.29 **	-0.28 **	-0.20 **	-0.07	-0.06	-0.07	-0.31 **	
C2執着	-0.09	-0.09	-0.07	-0.04	-0.06	0.00	-0.27 **	
C3責任	-0.14 *	-0.14 *	-0.08	-0.13 *	-0.09	-0.15 *	-0.24 **	
C4自己統制	-0.19 **	-0.17 **	-0.16 **	-0.11	-0.05	-0.14 *	-0.43 **	
C5計画	-0.20 **	-0.19 **	-0.16 **	-0.01	-0.01	-0.01	-0.39 **	
Em 情動性	0.22 **	0.18 **	0.20 **	0.46 **	0.41 **	0.38 **	0.15 *	
Em1心配性	0.14 *	0.11	0.15 *	0.42 **	0.37 **	0.36 **	0.06	
Em2緊張	0.10	0.12	0.04	0.38 **	0.44 **	0.20 **	-0.01	
Em3抑鬱	0.19 **	0.16 **	0.19 **	0.37 **	0.28 **	0.37 **	0.15 *	
Em4自己批判	0.12 *	0.09	0.14 **	0.33 **	0.30 **	0.27 **	0.13 *	
Em5気分変動	0.25 **	0.22 **	0.23 **	0.23 **	0.17 **	0.24 **	0.23 **	
P 遊戯性	0.32 **	0.25 **	0.34 **	-0.04	-0.07	0.00	0.07	
P1進取	0.18 **	0.15 *	0.18 **	-0.17 **	-0.15 *	-0.15 *	0.10	
P2空想	0.33 **	0.27 **	0.33 **	0.08	0.03	0.11	0.04	
P3芸術関心	0.17 **	0.13 *	0.17 **	-0.05	-0.06	-0.03	-0.11	
P4内的敏感	0.17 **	0.13 *	0.18 **	0.00	-0.02	0.03	0.00	
P5奔放	0.23 **	0.16 **	0.27 **	-0.02	-0.06	0.04	0.22 **	

※ *: p<.05, **: p<.01. |r| ≥.40のものは太字で示した。

これらの結果は予測されたものとほぼ一致し，“アクションスリップ”の注意の逸脱，“認知の狭窄”のストレスに対する弱さ (vulnerability)，“衝動的失敗”の計画性の欠如といったそれぞれの失敗傾向の特徴をよく表している。

次にグループ9の男子の結果を表6-3-5にまとめた。

表6-3-5 グループ9における失敗傾向得点とFFPQ尺度得点(第6版)との相関係数(男子) (N=161)

FFPQ	失敗傾向	アクションスリップ		認知の狭窄			衝動的失敗
		もの忘れ	放心	妨害されやすさ	とらわれ		
Ex 外向性	-0.03	-0.04	0.01	-0.22 **	-0.20 **	-0.17 *	0.08
Ex1活動	0.09	0.05	0.14	0.02	0.02	0.03	0.17 *
Ex2支配	-0.10	-0.06	-0.12	-0.32 **	-0.32 **	-0.23 **	-0.06
Ex3群居	-0.08	-0.09	-0.01	-0.18	-0.12	-0.21 *	0.03
Ex4興奮追求	0.08	0.09	0.03	-0.09	-0.10	-0.06	0.07
Ex5注意獲得	-0.07	-0.11	0.04	-0.19	-0.19 **	-0.13	0.11
A 愛着性	-0.12	-0.09	-0.14	-0.06	0.02	-0.14	-0.11
A1温厚	-0.11	-0.10	-0.10	-0.04	0.01	-0.09	-0.06
A2協調	-0.05	-0.04	-0.05	0.06	0.14	-0.06	-0.05
A3信頼	-0.21 **	-0.15	-0.23 **	-0.06	-0.04	-0.07	-0.11
A4共感	-0.04	0.01	-0.12	-0.16 *	-0.11	-0.18 *	-0.05
A5他者尊重	0.00	-0.01	0.03	0.03	0.09	-0.07	-0.09
C 統制性	-0.37 **	-0.35 **	-0.26 **	-0.23 **	-0.24 **	-0.14	-0.44 **
C1几帳面	-0.34 **	-0.36 **	-0.17 *	-0.16 *	-0.19 *	-0.07	-0.21 **
C2執着	-0.24 **	-0.21 **	-0.21 **	-0.09	-0.09	-0.07	-0.26 **
C3責任	-0.24 **	-0.20 **	-0.20 **	-0.20 **	-0.21 **	-0.14	-0.36 **
C4自己統制	-0.25 **	-0.21 **	-0.24 **	-0.19 *	-0.18 *	-0.15	-0.44 **
C5計画	-0.25 **	-0.26 **	-0.13	-0.20 *	-0.23 **	-0.10	-0.37 **
Em 情動性	0.44 **	0.43 **	0.29 **	0.58 **	0.55 **	0.44 **	0.32 **
Em1心配性	0.27 **	0.25 **	0.21 **	0.49 **	0.47 **	0.36 **	0.17 *
Em2緊張	0.24 **	0.24 **	0.15	0.43 **	0.47 **	0.24 **	0.13
Em3抑鬱	0.41 **	0.42 **	0.23 **	0.43 **	0.39 **	0.35 **	0.27 **
Em4自己批判	0.31 **	0.31 **	0.17 *	0.49 **	0.44 **	0.41 **	0.26 **
Em5気分変動	0.32 **	0.28 **	0.26 **	0.21 **	0.17 *	0.20 *	0.30 **
P 遊戯性	0.07	0.03	0.12	-0.23 **	-0.25 **	-0.14	0.00
P1進取	0.00	-0.04	0.08	-0.37 **	-0.30 **	-0.35 **	0.04
P2空想	0.13	0.04	0.24 **	-0.04	-0.14	0.10	-0.06
P3芸術関心	-0.04	-0.05	-0.01	-0.15	-0.19 **	-0.06	0.00
P4内的敏感	-0.07	-0.09	-0.01	-0.23 **	-0.22 **	-0.18 *	-0.13
P5奔放	0.23 **	0.25 **	0.10	0.01	0.02	-0.01	0.16 *

※ *:p<.05, **: p<.01. |r| ≥.40のものは太字で示した。

表 6-3-4 と比較すると、ここでは“アクションスリップ”と遊戯性(空想)との相関が低くなっており、情動性(特に抑鬱と自己批判)及び統制性(特に几帳面)との関係が見られる点が最も顕著な相違である。つまりここでは“アクションスリップ”は自己に対するネガティブな評価と、几帳面でないという点から強く特徴づけられている。

また“認知の狭窄”が情動性と正の相関を持つ点は先と同じだが、ここではそれに加えて“妨害されやすさ”と外向性の支配，“とらわれ”と遊戯性の進取との間に負の相関が認められた。これらは，“認知の狭窄”が人や新しい事物に対して働きかけられない特徴と関連していると解釈できるかもしれない。

表6-3-6 グループ9における失敗傾向得点とFFPQ尺度得点(第6版)との相関係数(女子) (N=199)

FFPQ	失敗傾向	アクションスリップ		認知の狭窄			衝動的失敗
		もの忘れ	放心	妨害されやすさ	とらわれ		
Ex 外向性	0.06	0.10	-0.04	-0.13	-0.10	-0.12	0.16 *
Ex1活動	-0.01	-0.01	-0.02	-0.05	-0.06	-0.03	0.09
Ex2支配	0.06	0.08	0.00	-0.21 **	-0.24 **	-0.11	0.01
Ex3群居	-0.07	-0.01	-0.15 *	-0.07	0.01	-0.14 *	0.14 *
Ex4興奮追求	0.13	0.16 *	0.01	-0.03	0.02	-0.09	0.18 **
Ex5注意獲得	0.10	0.11	0.02	-0.07	-0.07	-0.05	0.15 *
A 愛着性	-0.08	-0.02	-0.15 *	-0.14 *	-0.03	-0.25 **	0.04
A1温厚	-0.09	-0.04	-0.16 *	-0.17	-0.07	-0.26 **	-0.03
A2協調	-0.05	-0.02	-0.09	-0.02	0.10	-0.17 *	0.05
A3信頼	-0.09	-0.04	-0.16 *	-0.18 *	-0.12	-0.21 **	0.03
A4共感	0.06	0.11	-0.06	-0.08	0.00	-0.17 *	0.10
A5他者尊重	-0.12	-0.09	-0.13	-0.10	-0.01	-0.18 *	0.00
C 統制性	-0.33 **	-0.29 **	-0.28 **	-0.16 *	-0.12	-0.17 *	-0.38 **
C1几帳面	-0.38 **	-0.38 **	-0.25 **	-0.14	-0.11	-0.13	-0.29 **
C2執着	-0.17 *	-0.12	-0.21 **	-0.04	-0.05	-0.01	-0.15 *
C3責任	-0.11	-0.07	-0.13	-0.22 **	-0.18 **	-0.20 **	-0.23 **
C4自己統制	-0.20 **	-0.17 *	-0.18 **	-0.16 *	-0.10	-0.18 **	-0.34 **
C5計画	-0.24 **	-0.23 **	-0.18 **	-0.02	0.02	-0.07	-0.34 **
Em 情動性	0.19 **	0.08	0.33 **	0.46 **	0.39 **	0.43 **	0.13
Em1心配性	0.09	0.00	0.21 **	0.44 **	0.38 **	0.38 **	0.00
Em2緊張	-0.01	-0.07	0.10	0.40 **	0.37 **	0.32 **	-0.07
Em3抑鬱	0.17 *	0.10	0.25 **	0.23 **	0.16 *	0.25 **	0.09
Em4自己批判	0.09	-0.01	0.25 **	0.31 **	0.27 **	0.27 **	0.07
Em5気分変動	0.34 **	0.27 **	0.34 **	0.29 **	0.21 **	0.32 **	0.36 **
P 遊戯性	0.20 **	0.16	0.18 **	-0.08	-0.07	-0.07	0.25 **
P1進取	0.09	0.09	0.05	-0.25 **	-0.21 **	-0.22 **	0.17 *
P2空想	0.30 **	0.19 **	0.40 **	0.21 **	0.18 *	0.19 **	0.17 *
P3芸術関心	-0.02	-0.01	-0.03	-0.22 **	-0.19 **	-0.19 **	0.08
P4内的敏感	0.07	0.08	0.01	-0.02	0.00	-0.04	0.18 *
P5奔放	0.24 **	0.22 **	0.20 **	0.08	0.05	0.09	0.26 **

※ *:p<.05, **:p<.01. |r| ≥.40のものは太字で示した。

グループ9の女子の結果は表6-3-6に示した。この結果はグループ8(女子のみ)とほぼ同じ傾向を示した。

【 全 体 の 考 察 】

“衝動的失敗”が統制性、特に自己統制や計画といった行動の意志的なコントロールに関わる側面と強い関連を持つことは、男女に共通して見られた特徴である。また気分変動との関係は、気分が変わりやすいことで行動が持続しにくく、行き当たりばったりの行動が失敗につながりやすいと解釈できる。2 特性モデルに基づく理論において衝動性はしばしば外向性と神経症傾向の高さから特徴づけられ、情緒的な不安定さと活動性の高さが衝動的行動に結びつくと考えられているが、ここでの“衝動的失敗”は外向性との関係はあまり強くない、それよりも計画性や持続性の欠如が特徴であることが示唆された。FFPQでは行動のコントロールに関わる側面を統制性という概念で捉えることが可能であるため、“衝動的失敗”のこのような内容を明瞭にすることができたと言えよう。

次に“アクションスリップ”では、下位項目群の“もの忘れ”と“放心”でいくらか異なった結果が得られている点が興味深い。すなわち“もの忘れ”と几帳面さとの間に負の相関が見られ、“放心”と気分変動及び空想（男子では相関はやや低い）との間に正の相関が見られたことである。“もの忘れ”には、しようと思っていたことを忘れる、人の名前を忘れるといった記憶の失敗を尋ねる項目の他に、物を置いた場所を忘れる、物をなくすといった項目が含まれており、こうした物の管理の失敗は几帳面でないほど多くなると考えられるので妥当な結果であろう。一方“放心”は進行中の行為から注意が逸れる内容であるので、気分や思考が今の状態から移ろいやすいことと関連があるのも尤もであると考えられる。

最後に“認知の狭窄”は情動性の心配性や緊張と強い関連を持ち、男子ではこれに加えて抑鬱や自己批判も同じ程度の相関を示すことが示された。“認知の狭窄”は進行中の行為に十分な注意が充てられないことで起こる失敗であると概念化されているが、不安やストレスなどが注意を妨害し、適切な行動を取りにくくさせることは実験的にも確かめられている（Eysenck & Eysenck, 1985）。テスト不安が課題遂行にどのような影響を及ぼすかを調べた研究では、テスト不安に含まれる緊張や生理学的変化などの情動的側面（emotionality）と、自己の遂行や能力に関する否定的な予測や評価である認知的側面（worry）

を区別しており、遂行の失敗に主に関わるのは worry であると述べている。つまり課題に無関連なそれらの情報に注意が向けられることで処理容量が不足し、適切な遂行が損なわれるのである。また emotionality も、自分自身の生理学的な反応だけに注意がとらわれてしまうような場合には遂行を妨害すると考えられる。

また強い不安を持つ臨床的患者群に対してストループ課題や両耳分離聴課題を実施し、患者が持つ危害に対する不合理な信念（不安スキーマ）によって注意が恐怖刺激のほうに不適切に向けられてしまい、課題への遂行が妨害されることを示した研究もある（Williams, 1997）。更に抑鬱の場合にも同様に自己焦点づけ注意（self-focused attention）が高まることを示唆する研究もある（Ingram, 1990a, 1990b）。これらの知見はいずれも、ストレス場面では注意の不適切な焦点づけが起こるという不安や抑鬱の認知的側面を示している。従って緊張や心配性との間に相関が見られたことは、“認知の狭窄”の概念的内容をひとまず裏付けるものと言えるだろう。

しかし抑鬱・自己批判と失敗傾向の関係においてはかなり顕著に性差がみられた。即ち、男子では“認知の狭窄”だけでなく“アクションスリップ”・“衝動的失敗”と抑鬱・自己批判との間にもかなりはっきりと相関が認められているのに対して、女子ではこれらの相関は弱い、ほとんどみられなかった。男子において抑鬱・自己批判との関係が失敗傾向の性質の違いを越えて認められたことは、先述のような注意の不適切さ以外のものを反映している可能性がある。

人は取り返しがつかないような事態が起こった時にメランコリーに陥ると木村（1972）は述べており、失敗が多ければそれだけ憂鬱な状態を経験しやすいと考えられる。しかしメランコリーへの陥りやすさや回復の早さには個人差があって、ちょっとした失敗でもくよくよと考え込む人から、かなりの失敗をしてもすぐに元気を取り戻す人もいると木村は言う。従って一つめの可能性として、女子に較べて男子は—どんな失敗であれ—失敗することによって憂鬱な状態を経験しやすいのではないかという推測が成り立つ。

もう一つは、抑鬱や自己批判が高い人は自己評価がネガティブであるために、自身についてのネガティブな情報である失敗の頻度を実際よりも多く報告しが

ちなのではないか、という可能性である。

Larsen (1992) は、神経症傾向の高さが心身の症状の報告に同様の影響を及ぼすと考え、神経症傾向がその時 (concurrent) 報告された症状の重さと、回想された (retrospective) 症状の重さに及ぼす影響を検討している。参加者は 8 週間の間、頭痛、腰痛、悪寒、疲労感、焦燥感など 24 項目からなるチェックリストを用いて 1 日 3 回、症状を報告するよう求められた。そしてこの期間が終わると、同じリストを用いて過去 8 週間について 7 件法で症状の重さを回想して答えた。パーソナリティを測るためには Eysenck Personality Inventory 改訂版 (EPI-R) が用いられた。これらの指標を用いてパス解析を行ったところ、神経症傾向は症状の回想 (再生) に強い影響を及ぼすことがわかった。このことから Larsen は、神経症傾向の高い者では自己に関するネガティブな情報の再生が実際よりも多くなる可能性について述べている。

また Rabbitt & Abson (1990) は、50~85 才の男女を対象として加齢に伴う記憶の低下を質問紙調査と実験の両方を用いて検討した結果、失敗行動の報告は加齢に伴う認知機能の低下よりもむしろ自信や自尊心の低さを反映している可能性があることを示唆している。

以上の研究は、抑鬱や自己批判といったネガティブな自己評価が失敗行動全般の報告を高めることを示唆するものだが、その効果の性差については言及していない。しかし今回の結果では、抑鬱と失敗傾向の相関は男子にのみ見られているため、失敗というものが男子において、よりネガティブなものとして捉えられている可能性がある。そこで 4 節でまず注意の特徴と失敗傾向の関係を検討した後に、5 節では自己評価の指標を用いて情動性と失敗傾向の関係を更に検討する。

6-4 注意のスタイルとの関係

失敗傾向質問紙で捉えられる 3 つの失敗傾向の概念的内容は、注意という観点からみるとそれぞれ異なる特徴を持っている。まず“アクションスリップ”は、ある行為の遂行に十分な注意が向けられない状態で起こると考えられる。例えばよく習熟した行為はほぼ自動的 (Shiffrin & Schneider, 1977) に進行し、

意識的なコントロールを持続することは必要でなくなるが、行為の下位シーケンスが切り替わったり状況が変化したりする時には注意が必要になる。このような時に注意が行為に向けられていないと、習慣的にはより強力だがその時には意図されていない行為が間違っ^て進行してしまうことがある。アクションスリップが起こるこうした状態を *absent-minded* と呼び、文字通り「心^{こゝろ}に在らず」と訳すとこれは「心が他のことにとらわれていて、眼前のことに集中できない」状態を指す（広辞苑第5版）。

一方“認知の狭窄”は適切な行動をとるために必要なだけの情報に注意を向けられなくなる状態であり、時間的切迫や評価場面など、注意を妨害するような要因が存在する状況において起こりやすくなると考えられる。例えば、病的なものに限らず抑鬱気分や不安が高くなっている時にはしばしば自己焦点的注意（*self-focused attention*）が高まっていることが観察される（Ingram, 1990b）が、このように注意がある対象に強く焦点づけられるような場合、それ以外の対象には十分に注意が向けられにくくなることは経験的にも理論的にも知られている。

ある行為の遂行に必要な注意が向けられていないという点では“アクションスリップ”と“認知の狭窄”は共通の特徴を持つと言ってもよいだろう。しかし注意という概念が持ついくつかの次元を区別して言うならば、“アクションスリップ”ではそれが注意の選択性や集中に欠けるためであり、“認知の狭窄”ではある一点に過度の選択的注意や集中が向けられるためだと考えられる点で、この2つを区別することができる。これに対して“衝動的失敗”は意図的な計画性や統制性の低さによって特徴づけられ、このような注意の不適切さを伴うものではないと考えられる（山田, 1998a）。

本節では質問紙を用いて測られる注意の特徴との関係から、これらの失敗傾向の内容を確認することを目的とする。

TAIS は Nideffer (1977) によって作成されたテストで、注意や対人関係をコントロールする能力を測るとされている。原版は 17 下位尺度・144 項目から構成されており、うち 6 尺度が注意の特徴、2 尺度が行動をコントロールする能力、残り 9 尺度は対人関係場面での行動の特徴を捉えるためのものである。日本語版は加藤・細川 (1995) によって大学生 705 名のデータをもとにして標

準化が行われており、104項目17下位尺度から構成される。ここでは特に注意の特徴と行動をコントロールする能力に関する尺度を用いて、失敗傾向との関係を検討する。

【 方 法 】

調査期間：1995年10月～12月

参加者：一般心理学の講義を受講する女子短大生（グループ10）。すべての回答が有効であったのは74名で、年齢のレンジは18～22才（平均19.3才、SD=1.1）であった。

実施した尺度：失敗傾向質問紙とTAIS（Test of Attentional and Interpersonal Style）日本語版（加藤・細川、1995）を約2ヵ月の間隔をおいて実施した。TAIS日本版は17の下位尺度（104項目）から構成されるが、ここでは10下位尺度（69項目）を抜粋して用いた¹。調査に用いた尺度の名称と高得点が示す特徴、及び項目の例を以下に示した。参加者は各項目に対して「いつもそうだ」、「かなりそうだ」、「時々そうだ」、「かなりちがう」、「まったくちがう」の5件法で回答し、それぞれの回答に4, 3, 2, 1, 0点を与える。

尺度内容

BET(Broad external attention): 広く—外部への注意(6項目)²

外界からの多くの刺激を同時に有効に統合できる。

「群集をすばやく見渡して、特定の人顔を見つけるのが得意だ」

BIT(Broad internal attention): 広く—内部への注意(7項目)

いくつかの異なった領域のアイデアや情報を有効に統合することができ、また分析的である。

「ちょっとした情報から、いくらでもアイデアを出せる」

NAR(Narrow attention): 注意の焦点が狭い(7項目)

勉強や読書などをする際に有効に注意を狭めて集中できる。

「すぐ何かに注意したり、集中したりできる」

OET(External overload): 外部刺激によるオーバーロード(10項目)

外界の情報によって混乱したりオーバーロードになることによって失敗を犯しやすい。

¹ TAISの部分使用をご許可頂いた加藤孝義先生に感謝いたします。

² 下位尺度間で重複する項目があるため、この項目数を合計すると69を超える。

- 「次々と、あれやこれやの仕事(作業, 勉強)に手を出す」
- OIT (Internal overload): 内部刺激によるオーバーロード(6項目)
 内部の刺激によって混乱しやすい傾向。一度にあまり多くのことを考えすぎて失敗しやすい。
- 「自分の考えにとらわれて、まわりで起こっていることに気づかないようになる」
- RED (Reduced attention): 注意の焦点が縮小(10項目)
 注意を狭くしすぎて課題に関連した情報をすべて含めることに失敗してミスを犯しやすい。
- 「一つのことを思いつめると、他のことは考えられない」
- INFP (Information processing): 情報処理(12項目)
 いろいろなことを考え、多量の情報を処理できる。
- 「大勢の人がいる部屋で、同時にいくつもの会話を聞くことができる」
- BCON (Behavior control): 行動のコントロール(11項目)
 衝動的傾向があり、反社会的行動と見なされるような行動にはまる傾向がある。
- 「怒ると我を忘れてしまい、時々人を傷つけるようなことを言う」
- CON (Control): コントロール(14項目)
 対人場面において自分をコントロールすることができるし、またコントロールが必要だと考えている。
- 「他の人に対してどう接したらよいかを決める時には、相手の立場に立ってみる」
- OBS (Obsessive): 執着性(5項目)
 何の解決も運動もしないで、ある特定の事柄を繰り返し心配する傾向がある。
- 「しゃべったり実行したりする前に、それについての情報を全部知りたい」

【 結 果 】

1. 各尺度の基本統計量

グループ 10 における失敗傾向質問紙の平均得点を表 6-4-1 に示した。女子学生の標準データ(表 6-2-3)と比較すると、得点偏差値は“アクションスリップ”及びその下位尺度で 46~48 とやや低い。

表6-4-1 グループ10における失敗傾向質問紙の尺度得点

	平均値	SD	得点偏差値
アクションスリップ	18.80	5.23	47
もの忘れ	12.28	3.73	48
放心	6.51	2.09	46
認知の狭窄	18.01	4.42	48
妨害されやすさ	11.15	3.25	50
とらわれ	6.86	2.06	47
衝動的失敗	7.92	3.52	51

TAIS については標準データそのものの報告はないが、大学生集団のデータから作成されたプロフィール用紙にグループ平均得点をプロットしてみると、T 値（得点偏差値）は概ね 47～52 の範囲であった。

2. 失敗傾向と TAIS の相関

失敗傾向得点と TAIS の下位尺度得点との相関係数を求めたところ、次の結果が得られた。

表6-4-2 失敗傾向とTAIS下位尺度との相関係数 (N=74)

TAIS	失敗傾向 アクションスリップ			認知の狭窄			衝動的失敗
	もの忘れ	放心		妨害されやすさ	とらわれ		
BET	-0.15	-0.25 *	0.06	-0.27 *	-0.28 *	-0.13	-0.03
BIT	-0.18	-0.25 *	-0.01	-0.37 **	-0.35 **	-0.25 *	-0.13
NAR	-0.05	-0.06	-0.03	-0.14	-0.07	-0.19	-0.06
OET	0.52 **	0.49 **	0.42 **	0.45 **	0.44 **	0.27 *	0.18
OIT	0.35 **	0.41 **	0.15	0.33 **	0.30 **	0.24 *	0.17
RED	0.44 **	0.47 **	0.27 *	0.47 **	0.45 **	0.29 *	0.17
INFP	-0.22	-0.30 **	0.00	-0.36 **	-0.37 **	-0.20	-0.05
BCON	0.20	0.16	0.21	-0.04	-0.05	-0.01	0.41 **
CON	-0.15	-0.27 *	0.10	-0.28 *	-0.31 **	-0.10	0.04
OBS	0.20	0.17	0.18	0.28 *	0.29 *	0.15	0.04

※ BET:外部への広い注意, BIT:内部への広い注意, INFP:情報処理, NAR:注意の狭い焦点, OET:外部刺激によるオーバーロード, OIT:内部刺激によるオーバーロード, RED:注意の焦点の縮小, BCON:行動のコントロール, CON:コントロール, OBS:執着性
 ※ *:p<.05, **:p<.01. |r| ≥.40のものは太字で示した。

【 考 察 】

TAIS で捉えられる注意の特徴と関連がみられたのは、“アクションスリップ”と“認知の狭窄”であった。まず“アクションスリップ”はOET, OIT, REDの3尺度と有意な正の相関を示した。これらの尺度はそれぞれ、外界の情報によって注意がとらわれやすい傾向(OET)、自己内部の情報に注意がとらわれやすい傾向(OIT)、注意を狭くしすぎて必要な情報の統合に失敗する傾向(RED)を示し、全体としては注意の不適切な焦点化の傾向を示すとされている(加藤・細川, 1995)。従って“アクションスリップ”得点の高い者ほど、自己内部にせよ外界にせよ、進行中の行動以外の対象に注意がとらわれやすく、そのために失敗行動が生じやすくなると解釈できる。しかしこの傾向は特に“も

の忘れ”にあてはまり，“放心”では OIT, RED との相関はそれほど高いものではない。

次に“認知の狭窄”は、OET, OIT, RED の 3 尺度に加えてさらにいくつかの尺度と有意な相関を示した。まず BET, BIT, INFP は外界からの情報や自己内部のアイデアなど多くの情報を処理できる注意の広さを示す尺度であるが，“認知の狭窄”得点はこれらとは有意な負の相関を示した。つまりこの得点が高い者は、注意が逸れやすいだけでなく、もともと内外の情報の多さを処理しきれない特徴を持っていると考えられる。しかしこの傾向は“妨害されやすさ”にはみられるが，“とらわれ”ではこれらの相関は低くなっている。また“妨害されやすさ”が高い者は、対人場面において自分の行動や状況をコントロールすること (CON) が難しいと考えているようである ($r=-.315$, $p<.01$)。

最後に“衝動的失敗”は先の 2 つの失敗傾向とは異なり、TAIS の下位尺度とはほとんど相関がなく、衝動的な行動をとりやすい傾向 (BCON) とのみ有意な相関を示した。先に述べたように，“衝動的失敗”がある時点での注意の不適切さによるものではなく、意志的な統制の欠如によるものだとすれば、これも妥当な結果であろう。

6-5 自己評価との関係

3 節では大学生男子群において抑鬱や自己批判とすべての失敗傾向の間に中程度の正の相関が認められ、自己評価がネガティブな者ほど自己に関するネガティブな情報を多く報告するという先行研究から、女子に較べると男子は失敗をネガティブなものとして捉えているのではないかという可能性が示唆された。ここで用いた FFPQ の抑鬱や自己批判の下位尺度は「私は欠点だらけの人間だ」「落ち込みやすい」「何かがうまくいかないと自分を責める」などの質問項目から構成されており、全般的な自己評価のネガティブさを示すと考えられる。そこで本節では自己評価をいくつかの側面から捉え、それらと個々の失敗傾向との関係を調べることで 3 節の結果をより詳細に検討することを目的とする。

自己評価を測る方法の中で最も広く用いられているのは Rosenberg (1965) の自尊感情 (self-esteem) 尺度であろう。Rosenberg のいう自尊感情とは「自

分はこれでよい (good enough)」と感ずることであり、尺度は「私は自分に満足している」「私は少なくとも他人と同じくらいの価値がある人間だと思う」など 10 項目から構成される (翻訳は桜井(2000)による)。自尊感情尺度の因子構造については 2 因子解を唱える者もあるが、概ねは 1 因子構造と見なし、単一の自尊感情得点を算出する方法がとられている。従ってこの場合の自己評価とは全般的な自己受容の程度を示すものであり、失敗傾向とその報告に影響するのが自己評価のどのような側面であるかを調べたいという本節の目的には合致しない。

そこでここでは自己評価を捉える手段としてラスムッセンの自我同一性尺度 (Rasmussen's Ego Identity Scale; 以下 REIS とする) の日本語版 (宮下,1987) を用いる。自我同一性尺度はエリクソンの発達段階の理論に沿って作成された自己報告形式の質問紙で、最初の 6 段階における心理社会的発達課題を解決している程度を測ろうとするものである。その 6 段階とは、(1)基本的信頼 vs.基本的不信、(2)自律性 vs.恥・疑惑、(3)自主性 vs.罪悪感、(4)勤勉性 vs.劣等感、(5)同一性 vs.同一性混乱、(6)親密 vs.孤立である。質問紙はこれらの 6 段階に対応した 6 下位尺度から構成され、高得点ほど各段階における課題を達成している程度が高いことを示すように配点されている。

REIS を用いる理由は、この尺度が、どのように自我同一性が確立されているかを自己報告によって複数の側面から捉えることを目的としており、これらを参加者自身の自己評価の指標として用いることができると考えたからである。また自律性 vs.恥・疑惑の下位尺度では、大便の排泄に関するトレーニングの過少あるいは過剰によって生じる挫折感から恥や失敗の感覚が生じるという理論的背景から、「私は授業などで指されるのではないかと心配である。もし答えられないと他人が私のことをどんなふうに思うか気になるので (逆転項目)」、「何かした後で、それが正しかったかどうか心配になることが多い (逆転項目)」、「友人の前で失敗しても、別にくよくよしない」などの質問が含まれており、個人が失敗をどのくらい脅威と感じているかを捉えられるのではないかとと思われる。失敗をネガティブなものと捉えていれば、自己評価の低さと失敗の報告の多さとの間に相関が見られるだろう。自己のどのような側面でその関係が見出せるのか、また前節の結果から男子においてその関係が顕著であると予測で

きるので、ここではその性差についても検討してみる。

【 方 法 】

調査日時：2001年6月

参加者：失敗傾向質問紙，FFPQ（5因子性格検査）第6版に回答したグループ9の大学生男女に対して講義中に集団でREIS（ラスムッセンの自我同一性尺度日本語版）を実施した。すべての調査において有効な回答が得られたのは男子45名，女子42名の合計87名である。参加者の年齢は18～22才（平均18.5才，SD=0.8）である。

実施した尺度：失敗傾向質問紙，FFPQ（第6版）については先に述べた。REISは6下位尺度・67項目から構成される自己報告形式の質問紙で，日本語版は宮下（1987）によって信頼性と妥当性の検討が行われている。回答形式は「非常にそう思う」，「かなりそう思う」，「ややそう思う」，「どちらとも言えない」，「ややそう思わない」，「かなりそう思わない」，「まったくそう思わない」の7件法で，得点化の際にはこれらの回答に順に7～1点を与えた。教示や各下位尺度の項目例は以下の通りである。

教 示：次の項目のそれぞれについて，あなたにどの程度あてはまるかを考え，あてはまる選択肢の数字を○で囲んで下さい。

項目の例：

基本的信頼感 vs. 不信感(11項目)

「普通，人間はお互いに正直に，かつ誠実に関わりあっている」

「将来うまくいくかどうかを考えると今まで絶好のチャンスを逃してしまってきたように思う」

自律性 vs. 恥・疑惑(11項目)

「友人の前で失敗しても，別にくよくよしない。」

「私がこれまで下した判断や決断は，だいたいにおいて正しかった」

自主性 vs. 罪悪感(11項目)

「隠しておけるなら，家族や自分の育ちについて他人にしゃべりすぎないほうがいい」

「私はこれまで，学校のクラブ活動や生徒会活動に進んで参加するほうではなかった」

勤勉性 vs. 劣等感(12項目)

「働くということは，人間が生きていくために我慢しなければならない必要悪である」

「もし必要ならば，1つのことに注意を集中するのは難しいことではない」

同一性 vs.同一性拡散(12項目)

「私には将来のはっきりした目標や計画がない。えらい人の判断に従っていけば無難である」

「今と違う顔つきや体つきであってほしいとはめったに思わない」

親密性 vs.孤立(10項目)

「私はとても話しやすい人間のようにだし、自分でもそう思う」

「私は、強く感情が揺り動かされることもあるが、人前では決してそれを悟られないようにする」

【 結 果 と 考 察 】

1. REIS の基本統計量

失敗傾向質問紙と FFPQ については、既に前節で同グループの得点と標準データとの比較を行っているので、ここでは省略する。REIS 各尺度の平均得点と、宮下(1987)で報告されている結果(男女こみ)を合わせて表 6-5-1 に示した。

表6-5-1 REIS日本語版の各下位尺度における平均得点とSD

	男子		女子		宮下(1987)	
	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD
基本的信頼感vs.不信感	45.38	8.12	47.31	6.21	49.2	6.9
自律性vs.恥・疑惑	43.91	8.87	40.38	8.37	44.8	8.0
自主性vs.罪悪感	51.11	8.50	53.69	7.27	54.4	6.6
勤勉性vs.劣等感	53.93	10.62	50.67	8.00	53.0	8.8
同一性vs.同一性拡散	49.98	13.04	49.76	8.41	54.7	8.4
親密性vs.孤立	43.18	8.07	43.64	7.01	44.9	7.5

※宮下(1987)は大学生245名(男子83名,女子162名)のデータ

今回のサンプルの得点は、男子の勤勉性得点を除けば宮下のデータよりも全体にやや低かった。また自律性において男子の得点の方が高い傾向があった($t(85)=1.91$, $p<.10$) 以外は、得点に有意な性差は見られなかった。

2. 失敗傾向と情動性及び REIS との相関

男女別に失敗傾向得点と FFPQ の情動性の各尺度得点及び REIS 得点との相関係数を求めた(表 6-5-2)。男子の場合、REIS と“アクションスリップ”及

表6-5-2 失敗傾向、情動性、REISの間の相関係数 (対角線上側が男子(N=45)、下側が女子(N=42))

	AS	CN	IM	Em1	Em2	Em3	Em4	Em5	REIS1	REIS2	REIS3	REIS4	REIS5	REIS6
AS	--	0.59 **	0.51 **	0.43 **	0.34 *	0.73 **	0.56 **	0.47 **	-0.60 **	-0.39 **	-0.35 *	-0.54 **	-0.38 *	-0.20
CN	0.15	--	0.39 **	0.60 **	0.40 **	0.68 **	0.63 **	0.42 **	-0.71 **	-0.54 **	-0.38 *	-0.54 **	-0.55 **	-0.53 **
IM	0.46 **	0.41 **	--	0.10	0.11	0.34 *	0.20	0.42 **	-0.29	-0.05	-0.04	-0.22	-0.11	-0.06
Em1	-0.01	0.60 **	0.12	--	0.59 **	0.52 **	0.51 **	0.44 **	-0.52 **	-0.65 **	-0.38 *	-0.47 **	-0.35 *	-0.38 *
Em2	-0.09	0.63 **	0.03	0.43 **	--	0.51 **	0.59 **	0.36 *	-0.55 **	-0.57 **	-0.19	-0.45 **	-0.40 **	-0.40 **
Em3	-0.03	0.10	0.02	0.49 **	0.18	--	0.73 **	0.45 **	-0.74 **	-0.51 **	-0.53 **	-0.51 **	-0.55 **	-0.51 **
Em4	0.20	0.23	0.21	0.39 *	0.32 *	0.69 **	--	0.25	-0.72 **	-0.61 **	-0.48 **	-0.67 **	-0.70 **	-0.51 **
Em5	0.33 *	0.21	0.48 **	0.36 *	-0.07	0.37 *	0.39 *	--	-0.28	-0.19	-0.03	-0.29 *	-0.12	0.01
REIS1	-0.05	-0.16	-0.13	-0.10	-0.14	-0.07	0.07	-0.31 *	--	0.50 **	0.45 **	0.48 **	0.69 **	0.57 **
REIS2	-0.04	-0.65 **	-0.19	-0.64 **	-0.62 **	-0.29	-0.41 **	-0.20	0.00	--	0.32 *	0.68 **	0.66 **	0.56 **
REIS3	0.17	-0.29	0.03	-0.38 *	-0.22	-0.41 **	-0.18	-0.17	0.12	0.46 **	--	0.38 *	0.53 **	0.64 **
REIS4	-0.15	-0.38 *	-0.37 *	-0.20	-0.40 **	-0.25	-0.23	-0.12	0.35 *	0.25	0.30 *	--	0.61 **	0.46 **
REIS5	-0.12	-0.27	-0.19	-0.44 **	-0.10	-0.54 **	-0.29	-0.18	0.19	0.32 *	0.35 *	0.45 **	--	0.63 **
REIS6	0.17	-0.34 *	0.10	-0.50 **	-0.29	-0.40 **	-0.25	-0.13	0.10	0.54 **	0.68 **	0.20	0.41 **	--

※ AS:アクシヨンスリップ, CN:認知の狭窄, IM:衝動的失敗, Em1:心配性, Em2:緊張, Em3:抑鬱, Em4:自己批判, Em5:気分変動

REIS1:基本的信頼感, REIS2:自律性, REIS3:自主性, REIS4:勤勉性, REIS5:同一性, REIS6:親密性。

※ *:p<0.05, **:p<0.01. r_{≥40}のものは太字で示した。

び“認知の狭窄”は概ね負の相関を示しており、特に“認知の狭窄”では REIS のすべての得点との間に中程度の負の相関が認められた。また REIS の下位尺度の中では、失敗への予期や不安を表す項目を含む自律性よりも基本的信頼感の方が全体に失敗傾向との相関が高かった。この尺度には他者や人生といったいわば外界への信頼感を示す項目とともに、「私は、本当に欲しい物をがまんして待つことができない方だ（逆転項目）」、「本当の幸せや成功につながるチャンスを逃してきたような気がする（逆転項目）」といった自分自身の行動や生き方に対する、全般的でポジティブな評価を表す項目も含まれている。従って、男子においてこの得点と失敗傾向の間に負の相関が認められたことは、ネガティブな自己評価と失敗報告の多さの関連を示す前節の結果と一致すると考えてよいだろう。一方、女子では男子に較べると全体に相関は低く、“認知の狭窄”と REIS の自律性の間に中程度の相関が見られた程度である。

予測していたように REIS と失敗傾向との関係は男子において顕著であった。しかし男子では情動性下位尺度の内部相関や、情動性と REIS の間の相関も比較的高かったため、特に特に自己評価に関係すると思われる抑鬱・自己批判得点の影響を除いた上で REIS の基本的信頼感・自律性と“アクションスリップ”・“認知の狭窄”との相関を求めた（表 6-5-3）。

表6-5-3 抑鬱・自己批判得点をコントロールした場合の失敗傾向とREISの偏相関係数(男子N=45)

	0次の相関係数		抑鬱得点をコントロール		自己批判得点をコントロール	
	AS	CN	AS	CN	AS	CN
REIS1	-0.60 **	-0.71 **	-0.13	-0.41 **	-0.34 *	-0.47 **
REIS2	-0.39 **	-0.54 **	-0.03	-0.30 *	-0.08	-0.25
REIS3	-0.35 *	-0.38 *	-0.06	-0.03	-0.12	-0.11
REIS4	-0.54 **	-0.54 **	-0.29	-0.30 *	-0.27	-0.20
REIS5	-0.38 *	-0.55 **	0.04	-0.29	0.01	-0.20
REIS6	-0.20	-0.53 **	0.28	-0.30 *	0.12	-0.31 *

※ *: $p < .05$, **: $p < .01$. $r \geq .40$ のものは太字で示した。

表 6-5-3 からわかるように、抑鬱・自己批判得点をコントロールすると“アクションスリップ”と REIS の間の相関は 1 つを除いてすべて有意なものではなくなった。また“認知の狭窄”では基本的信頼感、自律性、親密性などで依然として有意な相関が得られているが、ゼロ次の相関に較べると値は小さくなっている。この結果は、女子において唯一有意であった“認知の狭窄”と自律性の相関 ($r=-.65, p<.01$) が、抑鬱・自己批判得点をコントロールした後もほとんど変化がなかったこと (それぞれ $r=-.65, -.62$) と較べると対照的である。

【 全 体 の 考 察 】

男子においては、失敗の種類に関わらず、その報告が自己に対する全般的でネガティブな評価 (抑鬱・自己批判) に影響される傾向が強いが、女子では“認知の狭窄”のみが、自分がうまくやれないのではないかという感覚 (自律性) と関連を示し、全般的な自己に対する評価 (抑鬱・自律性) にはほとんど影響されないと考えられる。“認知の狭窄”は評価場面でうまくやれない内容の項目を含むため、女子にとっても失敗と受け取られやすいのかもしれない。

北山・高木・松本 (1995) や Kitayama et al. (1997) は日本と欧米文化においては「成功」と「失敗」を何に帰因¹するかで異なるパターンが見られることを述べている。即ち、欧米では自己高揚的・自己防衛的バイアスが観察されるのに対して、日本ではこれらと逆の自己卑下的・自己批判的バイアスが見られ、成功の理由は運や状況と見なされ、失敗は努力や能力のなさが理由と見なされがちであるという。東洋文化において優勢である相互協調的自己観 (Markus & Kitayama, 1991) は、社会的関係を維持しその一員でいるために自分のネガティブな側面に対して敏感でいること、それを受け入れた上で自己を向上させる努力を払うことを暗黙に要請する。従ってこのような文化においては、人は失敗という事態に直面した時、それを自らの能力や努力の不足によるものとして受けとめ、それを補うべく努力することが求められるのである。表 6-5-4 において、抑鬱や自己批判得点の影響を除いた後でも“認知の狭窄”と REIS の親密性の間に有意な負の相関があったことから、男子では“認知の狭窄”的な

¹ 北山らは原因帰属と訳されることが多い“causal attribution”に“帰因”という語をあてている。

失敗の多さは親密な対人関係の維持にマイナスであると受け取られていることが伺える。

北山ら（1995）の研究では性差に関する言及はないが、行動の成否に関わる価値には男女間で違いがあるとする説もある。Atkinson（1957）によれば、一般にある行動への動機づけの強さは、達成したいという動機と失敗を回避したいという動機の合成力と捉えられる。しかし Horner（1974）は、女性の場合にはこれらに加えて成功を回避しようとする動機を併せ持つと考えた。女性は成功することで女らしさを失うと感じ、社会的に拒絶されることを恐れるため、男性ほど一律的に成功を価値あるものとはしないというのである。つまり失敗は、男性にとっては常に回避すべきネガティブな事象であり、女性にとっては成功を回避するために敢えて選ばれる結果であるかもしれないのだ。堀野（1995）のレビューによれば、その後の研究において成功恐怖は性別そのものというよりは性役割に影響されるものだと考えられるようになってきており、測定方法によっては必ずしも女性のみに見られるものではないとする研究もある。しかしもし、今回のサンプルの女性（大部分は大学1年生）が同年代の男性ほど強く成功のみを求めるように動機づけられていないとすると、失敗を自己に対するネガティブな評価材料として受け取る必要も男子ほどではないと考えられるから、本節の結果で見られた性差を説明することができるのではないだろうか。これらの結果については7、8節で再び検討を加える。

6-6 自己意識特性・他者意識特性との関係

4節では“アクションスリップ”と“認知の狭窄”が注意の不適切な焦点づけと関連を持つことが示され、これらの失敗では進行中の行為に十分な注意が向けられていないことを裏付ける結果となった。では、そのような時に注意はどこに向けられているのだろうか。先に述べたような自己焦点的注意はその一つの可能性であろう。また他者の存在に気を取られて行為に集中できないということも日常ではしばしば経験される。そこで本節では、自分自身あるいは他者に注意を向けやすい特性を自己意識・他者意識として捉え、失敗傾向との関連を調べる。前節と同様に、注意の特徴との関連は“アクションスリップ”と

“認知の狭窄”において見られ、“衝動的失敗”では顕著でないことが予測される。

【 方 法 】

調査期間：1997年～1998年

参加者：心理学関連の講義を受講する女子大学生及び女子短大生（グループ11）。すべての回答が有効であったのは122名で、年齢のレンジは19～22才（平均19.8才，SD=0.9）であった。

実施した尺度：失敗傾向質問紙と、自己意識尺度及び他者意識尺度（いずれも辻，1993）を約1ヵ月の間隔をおいて実施した。自己意識尺度はフェニグスタインらのSelf-Consciousness Scale（SCS）を基に作成されたもので、私的自己意識、公的自己意識、社会的不安の3つの下位尺度から構成されている（27項目）。他者意識尺度は内的他者意識、外的他者意識、空想的他者意識の3下位尺度から構成される（22項目）。いずれの質問紙においても参加者は各項目に対して「全くそうだ」、「そうだ」、「どちらともいえない」、「ちがう」、「全くちがう」の5件法で回答し、それぞれの回答に5, 4, 3, 2, 1点を与える。辻（1993）で述べられている各尺度の内容と項目例を以下に示した。

自己意識尺度：

私的自己意識（7項目）

感情、動機、思考など、経験している本人にしか観察できない私的な自己への注意傾向。

「自分の動機や気持ちをいつも分析している」

「知らぬ間に自分の感情や心の動きに注意を向けている」

公的自己意識（8項目）

自己の外見、行動スタイル、自己が他者に与える印象などへの注意や関心。

「自分が他の人にどう思われているかが気になる」

「自分の外見には気を配っている」

社会的不安（6項目）

公的自己を意識した時に生じる緊張やとまどいや不安。

「人前で話すのは不安である」

「新しい場面に慣れるのに時間がかかる」

他者意識尺度：

内的他者意識（7項目）

他者の気持ちや感情などの内面情報を敏感に感じ取り、理解しようとする意識や
関心。

「人のちょっとした気分の変化でも敏感に感じてしまう」

「他者の態度や表情を気をつけてみるようにしている」

外的他者意識(4項目)

他者の化粧や服装、体型やスタイルなど外面に現れた特徴への注意や関心。

「他者の服装や化粧などが気になる」

「人の体型やスタイルなどに関心がある」

空想的他者意識(4項目)

他者について空想をめぐらせたりしながら、その空想的イメージに注意を焦点づけ、
それを追いかける傾向。

「人のことにしばしば思いをめぐらす」

「いつも人のことを意識したり考えたりしている」

【 結 果 と 考 察 】

1. 各尺度の基本統計量

グループ 11 における失敗傾向得点は女子学生の標準データと比較すると得
点偏差値は 44~55 となり、特に“妨害されやすさ”が低く、“衝動的失敗”が
高くなっている。

自己意識尺度・他者意識尺度については辻(1993)で報告されている分析結
果を参照して各下位尺度の得点を求めた(表 6-6-2)。比較のために標準データ
も記載したが、今回のサンプルのデータはこれに近い値であった。

表6-6-1 グループ11における失敗傾向質問紙の尺度得点

	平均値	SD	得点偏差値
アクションスリップ	20.54	4.98	50
物の忘れ	13.61	3.76	51
放心	6.93	2.13	48
認知の狭窄	16.88	4.99	46
妨害されやすさ	9.42	3.37	44
とらわれ	7.46	2.29	49
衝動的失敗	9.22	3.16	55

表6-6-2 自己意識尺度・他者意識尺度得点の平均値とSD

	グループ11		辻(1993)の標準データ	
	平均値	SD	平均値	SD
自己意識尺度				
私的自己意識	23.66	3.86	22.16	5.46
公的自己意識	29.15	4.65	28.09	6.00
社会的不安	18.85	4.04	18.44	3.45
他者意識尺度				
内的他者意識	24.05	4.05	22.62	4.84
外的他者意識	12.58	2.67	12.09	2.63
空想的他者意識	11.09	2.89	10.55	2.75

※グループ11はN=122. 標準データは自己意識尺度でN=82, 他者意識尺度でN=71(いずれも女子大学生).

2. 失敗傾向と自己意識尺度及び他者意識尺度との相関

失敗傾向得点と自己意識・他者意識の各尺度得点との相関は表 6-6-3 に示した。

表6-6-3 失敗傾向と自己意識・他者意識との相関係数

(N=122)

失敗傾向	アクションスリップ			認知の狭窄				衝動的失敗
	もの忘れ	放心		妨害されやすさ		とらわれ		
私的自己意識	0.20 *	0.22 **	0.07	0.17 *	0.14	0.16	0.07	
公的自己意識	0.10	0.13	0.02	0.24 **	0.23 **	0.17 *	0.07	
社会的不安	0.13	0.04	0.22 *	0.39 **	0.42 **	0.24 **	-0.06	
内的他者意識	0.05	0.06	0.02	0.09	0.08	0.08	-0.18 *	
外的他者意識	0.11	0.08	0.12	0.33 **	0.26 **	0.32 **	0.09	
空想的他者意識	0.17 *	0.12	0.19 *	0.32 **	0.29 **	0.27 **	0.09	

※ *: p<.05, **: p<.01. |r| ≥.40のものは太字で示した。

まず“アクションスリップ”と私的自己意識、及び空想的他者意識との間に有意だが弱い相関が得られた。この2つの特性は、対象が自己の感情や動機であるか、他人の感情であるかの違いはあるが、共にそれに注意を向けていろいろと考えをめぐらせるという特徴を表している。これらはどちらも他者の現実の存在を必要としない、いわば個人の内的な関心のありようを示すものである。

一方“認知の狭窄”では公的自己意識、社会不安、外的他者意識、空想的他者意識との間に相関がみられた。このうちはじめの3つは他者が現実中存在することによって喚起される注意の特徴であるから、“アクションスリップ”に較べると他者の存在によって注意が妨害されやすい特徴が現れていると考えられ

る。おそらくそれは他者から見た自分がどうであるのかを意識し（公的自己意識）、それによって不安が生じる（社会的不安）ためだと考えられる。また他者意識とも相関が見られているが、この場合の他者への注意とは他者の外見がどうであるか（外的他者意識）、他者がどう思っているのかと想像する（空想的他者意識）という程度にとどまり、他者が実際にどう考え感じているかに積極的に注意を払っている（内的他者意識）のではない。

最後に“衝動的失敗”は内的他者意識とのみ有意な負の相関を示したが、相関係数としてはごく弱いもので、前節と同様に注意に関する尺度とはほとんど関連がないと解釈してもよいだろう。

【 全 体 の 考 察 】

自己や他者に向ける注意の特性を捉える自己意識尺度及び他者意識尺度との関連を調べたところ、“アクションスリップ”は私的自己意識と弱い相関を示した。進行中の行為から注意が逸れることが“アクションスリップ”の特徴と考えられるが、これは自身の感情や動機など個人内の対象へ注意を向けやすい傾向といくらか関係していると思われる。これに較べると“認知の狭窄”では、公的自己意識、社会的不安、外的他者意識、空想的他者意識との間に相関が認められ、内的な対象よりは他者の存在によって注意が妨害されやすいこととの関連が強く示された。他者の存在を意識しやすければそれだけ行為へは注意が向けにくくなることが考えられる。このように2つの失敗傾向はどちらも注意の不適切な焦点づけを伴うと考えられるが、その対象は自己の内的な経験であるのか、それとも他者の存在であるのかという点で異なる傾向を示した。

最後に“衝動的失敗”はこのような注意の特徴とはあまり関係がなく、この失敗傾向が示すような見通しの悪さや計画性の欠如が、ここでいうような注意の焦点づけの不適切さによるものとは考えにくい。3節での結果を考え合わせると、おそらく“衝動的失敗”には意志的統制の弱さが関わっているものと思われる。

6-7 性格記述語を用いた失敗傾向の検討(1) 一異なる年齢群の比較一

日常生活において「おっちょこちょい」、「ドジ」、「ずさんな」、「うっかりした」、「軽はずみな」など、失敗しがちな人物やその行動を形容する言葉は枚挙に遑がない。また「慎重な」、「手堅い」、「正確な」、「注意深い」など、失敗に結びつきにくいであろう特徴を表す言葉も同様に多く見聞きする。「重要な個人差は、それぞれの言語においてそれを形容する言葉を持つだろう」という基本的な名辞仮説 (fundamental lexical hypothesis) は、パーソナリティにおけるレキシカル研究の前提となるものであるが、この仮定に従えば失敗傾向も重要な個人差のひとつだと考えることができる。

レキシカル研究では、辞書などから抽出した性格記述語 (personality descriptors) を用いて自分自身や他者に対する評定を求め、主に因子分析を用いてどのような次元が見出されるかが検討される。パーソナリティ特性理論における5因子モデルの席捲に伴い、ドイツ語、英語、スペイン語、イタリア語、フランス語、中国語などさまざまな言語で行われるようになり、性格記述語の因子とビッグ・ファイブの対応を調べる研究も多い。

ではレキシカル研究において、失敗傾向に関する言葉はどのように扱われているのだろうか。日本語における先駆的な研究である青木 (1974) の個性表現辞典によると、全般的な失敗の多さを表す「誤りが多い」という言葉は「頭の悪さ」カテゴリーに属している。このカテゴリーには他に「忘れっぽい」、「ぼかんとした」、「とんちんかん」、「ドジを踏む」、「視野が狭い」、「無能な」、「鈍い」なども含まれており、「頭のよさ」カテゴリーと反対の、比較的望ましくない内容を表すとされている。なおこのカテゴリーは、類似語をまとめて語群を作り、さらに類似した語群をまとめていくという方法で作成されたものである。

青木が想定した「頭の悪さ」「頭のよさ」のカテゴリーは、おそらくレキシカル研究における知性 (Intellect) 因子に対応するものだろう。先述の NEO-PI-R や FFPQ のように質問紙形式でパーソナリティを捉える場合には狭義の「性格」を対象としており、第5因子はパーソナリティの知的側面を表す「開放性 (Openness)」や「遊戯性 (Playfulness)」と解釈されているが、個人差の記述がそもそもの出発点であるレキシカル研究では知性や知能もパーソナリティの一部として広く捉えられており、第5因子の内容は「教養 (Culture)」や「知

性 (Intellect)」と解釈されてきた。

しかし評価語を除かず、形容詞以外に動詞、名詞、慣用句まで含んだ包括的な性格記述語のリストを用いた最近のレキシカル研究 (辻, 2001) では、「どじな」、「そそっかしい」、「うっかりした」などの言葉は、「品のある」、「エレガントな」や「大人っぽい」「自立した」などの言葉とまとめ、「知性」とは別の、洗練や社会的成熟を表わす因子を構成する (山田・藤島, 2001)。

この他のレキシカル研究においては失敗傾向に関わる性格記述語が含まれないことが多く、それらがどのような評価次元を構成するのかを比較することができない。例えば現在のレキシカル研究において広く用いられている Goldberg (1992) の性格記述語のリストにおける知性因子は以下の言葉から構成されている。

ポジティブ項目 : deep, artistic, innovative, imaginative, bright, introspective, complex, philosophical, creative, intellectual

ネガティブ項目 : shallow, uninquisitive, unimaginative, unintelligent, unsophisticated, unreflective, imperceptive, simple, uncreative, unintellectual

ここでのネガティブ項目には「un-」「im-」の接頭辞がつく言葉が多く、知性の対極は「知性的でない」、「創造的でない」、「想像力がない」ことから特徴づけられており、失敗傾向に関する言葉は含まれていない。

また辞書から性格記述語を抽出し、綿密な分析によって構成された和田 (1996) の Big Five 尺度では、知的側面を含む O 尺度は「頭の回転が速い」、「臨機応変な」、「好奇心が強い」などポジティブ項目だけからなり、ここでも失敗に関わる項目は含まれていない。

近年のレキシカル研究で失敗に関わる言葉が現れにくくなっていることの原因としては、青木 (1974) のカテゴリーが示すように失敗に関わる言葉がネガティブな評価につながりやすいため、分析対象から評価語を除く研究ではそれらの言葉が除外されていることが考えられる。また、「よく忘れる」、「すぐ失くす」、「うっかりする」などのように、動詞 (副詞を伴う場合もある) の形をとる失敗傾向に関する表現が、形容詞中心の研究では対象外になっている可能性

もある。

そこで本章では、特に失敗傾向に関わると思われる性格記述語を用いて自己評価を求め、それらの言葉がどのような構造を持つのかを探る。前節において失敗と自己評価の関係において性差が見られたことを考え合わせると、失敗に関わる言葉が一概にネガティブな意味を持つかどうかには疑問が残る。そこで本節では性別や年齢の異なる参加者群で性格記述語の構造を比較し、次節ではそれらの性格記述語の望ましさを判断との関係から、失敗傾向質問紙における自己報告の妥当性について検討を加える。

【 方 法 】

調査期間：1993年（グループ12, 13）、1996年（グループ14, 15）

参加者：参加者は次の4群である（人数はいずれも有効回答数）。

グループ12・私立女子短大1回生92名。年齢は18～19才（ $M=18.2$, $SD=0.3$ ）。

グループ13・データ処理関連の企業に勤務する専門職及び事務職の女子会社員67名。年齢は20～47才（ $M=33.0$, $SD=8.4$ ）。

グループ14・私立大学1～3年生の男子学生121名。年齢は18～24才（ $M=19.6$, $SD=1.2$ ）

グループ15・グループ14と同大学の女子学生122名。年齢は18～23才（ $M=20.2$, $SD=1.2$ ）。

調査方法：短大生及び大学生には心理学関連の講義中に集団で調査を実施した。

会社員には部署ごとに書面で依頼し、会社の休憩室に置いた封筒で回収した。会社員のみ無記名方式である。

性格記述語リスト：性格記述語を用いた既存の尺度から、特に行動の特徴をよく表すような言葉を選んだ。参考にしたのは、Self-Differential尺度（長島・藤原・原野・斎藤・堀, 1967）、Masculinity-Humanity-Femininity (M-H-F) スケール（伊藤, 1978）、自己概念測定尺度（加藤・高木, 1980）、日本版 Bem Sex Role Inventory (BSRI, 安達・上地・浅川, 1985)、人格の二面性尺度（桑原, 1986）などである。さらに辞書を参照し、これらの尺度に含まれていない言葉もいくつか加えて55項目からなるリストを作成し

た。参加者は、それらの単語が自分にどのくらいあてはまるかを回答する。教示や回答形式は次の通りである。

教示：「ここには、人の性格や行動を表現する言葉がいくつか書かれています。これらの言葉は、あなたにどのくらいあてはまるでしょうか？ 5 つの答のうちから一つを選んで○をつけてください。『自分がこうだったらいいのに』とか『私ははこうあるべきだ』というのではなく、日頃のあなたについて答えてください。」

回答形式：「非常によくあてはまる」、「ややあてはまる」、「どちらとも言えない」、「あまりあてはまらない」、「まったくあてはまらない」の 5 件法。得点化の際にはこれら 5 つの回答に順に 5, 4, 3, 2, 1 点を与えた。

【 結 果 と 考 察 】

1. 性格記述語に対する評定の基本統計量

55 項目の性格記述語に対する評定値の平均値を群ごとに求めた(表 6-7-1)。項目ごとに平均値±SD の値を求めたところ、いずれも 1~5 の範囲を超えるものではなく、ひとまず分布の極端な偏りはないものと考えられる。よって以下の分析ではすべての項目を分析の対象とした。

2. 性格記述語の因子分析

次に、性格記述語の評定値をもとに群ごとに因子分析を行った。主因子法による因子の抽出を行ったところ、どの群でも固有値の推移から 5 因子が妥当と判断されたので(図 6-7-1: 第 20 因子までの固有値を表示)、プロマックス回転を行い、その因子パターンを比較した。5 因子による説明率はグループ 12 から順にそれぞれ 41.8%, 49.3%, 39.8%, 45.4%である。

表6-7-1 4群における性格記述語の平均評定値

性格記述語	グループ12		グループ13		グループ14		グループ15	
	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD
1. おっとりした	3.36	1.22	3.30	1.13	3.01	1.11	3.30	1.15
2. 決断力のある	2.90	1.01	2.90	0.92	2.76	1.11	2.73	1.11
3. 短気な	3.49	1.19	3.24	1.06	3.18	1.15	3.38	1.15
4. 器用な	2.72	1.08	2.93	1.13	3.03	1.08	2.98	1.15
5. 思い切りの悪い	3.13	1.09	2.72	1.01	3.17	1.07	3.17	1.20
6. 無責任な	2.67	1.01	2.13	0.69	2.77	1.09	2.61	0.96
7. 分別のある	3.39	0.81	3.31	0.63	3.31	0.90	3.65	0.68
8. おっちょこちょいの	4.14	0.69	3.76	0.82	3.30	1.02	3.75	1.04
9. 正確な	2.77	0.84	3.13	0.85	3.10	0.83	3.25	0.78
10. 大胆な	3.03	1.01	2.81	1.00	3.09	0.96	3.08	1.10
11. ふざけた	3.14	1.09	2.67	0.99	3.36	1.00	2.84	1.07
12. 冷静な	3.03	0.94	3.00	0.87	3.34	1.05	3.12	0.98
13. まじめな	3.34	1.02	3.60	0.95	3.31	1.02	3.50	0.84
14. 無能な	2.86	0.78	2.61	0.94	2.71	0.84	2.79	0.86
15. 用心深い	3.41	1.07	3.45	0.80	3.86	0.94	3.67	1.02
16. うっかりした	3.71	0.90	3.58	0.78	3.36	0.89	3.62	0.89
17. むこうみずな	3.10	0.88	3.03	1.03	2.92	0.83	2.87	1.07
18. 忘れっぽい	3.57	1.06	3.58	1.05	3.22	1.03	3.40	1.07
19. ぬけた	3.67	0.98	3.25	1.01	2.94	0.99	3.44	1.05
20. 確実な	2.97	0.76	2.96	0.77	3.11	0.82	3.01	0.91
21. てきばきした	2.80	1.08	2.99	1.04	2.87	0.88	2.91	0.99
22. ていねいな	3.16	0.94	3.09	0.87	3.17	0.92	3.34	0.89
23. なまけた	3.49	1.01	2.90	1.06	3.26	1.09	3.29	1.04
24. 有能な	2.60	0.83	2.69	0.78	3.05	0.78	2.81	0.73
25. せかせかした	3.03	1.10	2.88	1.05	2.83	0.96	2.76	1.06
26. 努力家	3.02	1.03	3.12	1.02	3.00	1.12	2.93	1.23
27. 軽はずみな	3.22	0.98	3.00	0.89	3.16	1.09	2.81	1.12
28. きちんとした	3.05	1.02	3.12	0.81	3.21	1.06	3.28	0.98
29. 能率的な	2.74	0.89	2.81	0.82	3.09	0.91	2.92	0.91
30. もの覚えのいい	2.83	1.09	2.67	0.96	3.01	1.11	2.95	1.02
31. 慎重な	3.43	0.95	3.33	1.06	3.52	0.98	3.40	0.94
32. 積極的な	3.01	0.99	3.04	1.04	2.82	0.97	3.20	1.05
33. 自分に厳しい	2.73	1.14	2.73	1.05	2.66	0.99	2.80	1.08
34. 無気力な	3.03	1.13	2.73	0.98	3.09	1.00	2.76	1.09
35. 完全主義の	2.78	1.11	2.72	1.00	3.29	1.02	3.09	1.14
36. 衝動的な	3.30	0.92	3.18	0.87	3.21	0.97	3.21	1.09
37. 勤勉な	2.30	0.95	2.79	0.96	2.53	1.03	2.64	0.99
38. 感情的な	3.54	1.14	3.24	1.12	3.57	1.05	3.48	1.14
39. 不注意な	3.43	0.83	2.94	0.83	3.26	0.88	3.29	0.93
40. ぼんやりした	3.52	1.06	3.31	1.03	3.16	0.97	3.47	1.00
41. 注意深い	3.43	1.01	3.30	0.87	3.44	0.97	3.37	0.87
42. だらだらした	3.13	1.09	2.87	0.97	3.07	1.03	3.21	1.04
43. 臨機応変な	3.13	0.93	3.25	0.96	3.07	0.89	3.10	0.97
44. ドジな	4.04	0.80	3.64	0.83	3.05	0.91	3.53	1.00
45. ぐずぐずした	3.05	1.14	2.57	0.91	2.94	0.92	2.83	1.02
46. のんびりした	3.74	1.10	3.34	1.17	3.40	0.96	3.60	0.94
47. 気の長い	2.92	1.22	3.10	1.07	3.18	1.10	3.09	1.08
48. 頭の回転が早い	2.65	1.03	2.64	1.08	2.93	1.01	2.80	0.96
49. のんきな	3.83	1.05	3.43	1.03	3.17	1.05	3.61	0.94
50. ルーズな	3.26	1.12	2.64	1.01	3.04	1.14	3.21	0.96
51. だらしない	2.95	1.04	2.78	0.95	2.80	1.00	3.00	0.95
52. 不器用な	3.35	1.11	2.96	1.07	2.88	1.08	2.98	1.01
53. なげやりな	3.08	1.05	2.84	0.98	3.06	1.04	2.72	1.00
54. 判断力のある	2.88	0.94	2.82	0.80	3.13	0.85	3.03	0.89
55. 神経質な	3.34	1.14	3.21	1.12	3.60	1.04	3.14	1.24

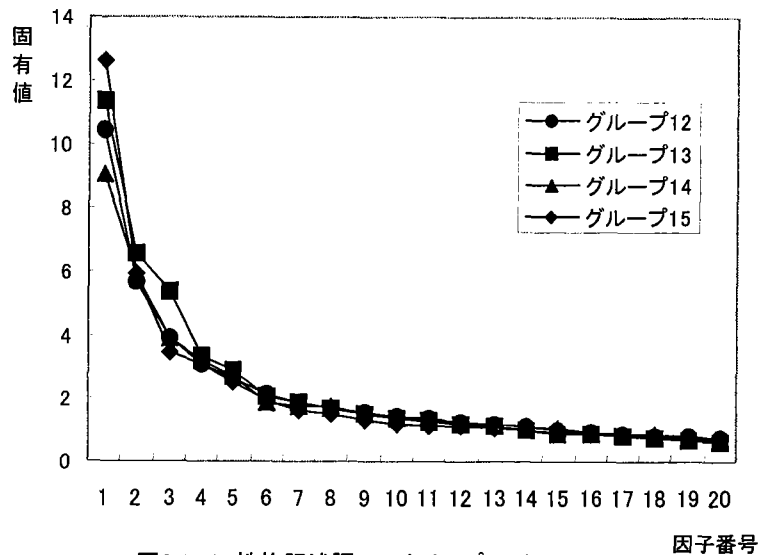


図6-7-1 性格記述語のスクリープロット

表 6-7-2 は各群における 5 因子構造の比較である¹。群間で内容が似ていると思われる因子同士が縦に並ぶように、因子の順序は変えて表記してある。各因子の欄には±.40 以上に負荷した項目を、負荷量の大きい順に記載した。また 4 群で共通して同じ項目がまとまった箇所は太字で示した。

4 群で共通して「頭の回転が速い」、「判断力のある」、「決断力のある」、「臨機応変な」、「能率的な」、「有能な」、「もの覚えのいい」の 7 項目がまとまった因子は、“知性・有能”の因子と解釈できる。この因子はグループ 13, 14, 15 では第 1 因子に現れており、この 3 群では更に「積極的な」、「大胆な」、「思い切りの悪い(-)」が共通している。

次の因子では「慎重な」、「用心深い」、「完全主義の」、「注意深い」、「神経質な」の 5 項目のまとまりを“細心”と解釈した。これにグループ 13, 14, 15 の 3 群では「まじめな」、「ていねいな」、「きちんとした」が加わり、更にグループ 13, 15 では「勤勉な」、「自分に厳しい」、「確実な」も高く負荷するため、この因子を“細心・統制”とする。

¹ 4 群の因子パターンは資料として巻末に添付した。

表6-7-2 性格記述語の構造の比較

	II 知性・有能	V 細心	IV 気の長さ	III 怠惰	I 失敗・スロー
12 ・ 女子 短大 生	頭の回転が早い もの覚えのいい 臨機応変な 決断力のある 能率的な 判断力のある 有能な 自分に厳しい 無能な(-)	神経質な 用心深い 完全主義の 慎重な 注意深い	短気な 感情的な 気の長い(-) 衝動的な 大胆な 積極的な 冷静な(-)	無責任な ていねいな(-) 無気力な 努力家(-) なまけた ふざけた せかせかした きちんとした(-)	のんびりした のんきな ぼんやりした おっとりした ぬけた うっかりした てきばきした(-) ぐずぐずした おつちよこちよいの ドジな 忘れっぽい 不注意な
	I 知性・有能	II 細心・統制	III 気の長さ	V 怠惰	IV 失敗・無能
13 ・ 女子 会 社員	判断力のある 大胆な 決断力のある 能率的な 頭の回転が早い むこうみずな ふざけた 有能な 積極的な 臨機応変な 衝動的な 感情的な 分別のある もの覚えのいい 思い切りの悪い(-)	慎重な 完全主義の 用心深い 注意深い きちんとした ていねいな 勤勉な 努力家 自分に厳しい 確実な 器用な 神経質な 正確な まじめな	せかせかした(-) のんびりした のんきな おっとりした 気の長い 短気な(-) てきばきした(-) ぐずぐずした 冷静な ぼんやりした	なげやりな だらしない だらだらした なまけた 無気力な ルーズな 無責任な	ぬけた ドジな うっかりした 無能な 忘れっぽい 不注意な 軽はずみな おつちよこちよいの
	I 知性・有能	III 細心・統制	V 気の長さ	II 怠惰	IV 失敗・無能
14 ・ 男子 大 学 生	判断力のある 決断力のある 積極的な 頭の回転が早い 大胆な 臨機応変な 能率的な てきばきした 有能な 器用な 思い切りの悪い(-) もの覚えのいい	神経質な 慎重な 用心深い まじめな 完全主義の 正確な ていねいな きちんとした 注意深い 冷静な 分別のある	のんびりした 気の長い おっとりした のんきな 感情的な(-) 短気な(-)	なまけた だらだらした ルーズな なげやりな ふざけた だらしない 無責任な 自分に厳しい(-) 勤勉な(-) 忘れっぽい ぐずぐずした	ドジな おつちよこちよいの うっかりした せかせかした ぬけた 不注意な 無能な
	I 知性・有能	II 細心・統制	V 気の長さ	IV 怠惰	III 失敗・のんき
15 ・ 女子 大 学 生	頭の回転が早い 臨機応変な 積極的な 判断力のある 決断力のある 不器用な(-) 能率的な 冷静な 有能な 大胆な 思い切りの悪い(-) てきばきした ぐずぐずした(-) もの覚えのいい 器用な	慎重な 注意深い 完全主義の 用心深い きちんとした 神経質な ていねいな まじめな 分別のある 自分に厳しい 勤勉な 確実な むこうみずな(-)	気の長い(-) おっとりした(-) せかせかした のんびりした(-) 短気な 感情的な	だらだらした ルーズな なまけた だらしない 無気力な 努力家(-) 無責任な なげやりな	おつちよこちよいの うっかりした ぬけた ドジな 不注意な のんきな ぼんやりした 忘れっぽい

※ I ~ Vは各群の分析結果における因子番号

次の因子では、4群に共通したのは「短気な(-)」、²「気の長い」のみである。グループ 13, 14, 15 ではこれに「のんびりした」、「おっとりした」が加わり、全体として“気の長さ”の因子と解釈できる。ただしグループ 13 ではこれに「ぐずぐずした」「てきぱきした(-)」「せかせかした(-)」も加わり、行動のテンポの意味合いも含まれている。

次の因子でも4群に共通したのは「なまけた」、「無責任な」の2項目のみであるが、グループ 13, 14, 15 ではこれに「なげやりな」、「だらしない」、「だらだらした」、「ルーズな」が加わり、“怠惰”の因子と解釈した。グループ 14 では更に「ぐずぐずした」、「忘れっぽい」がこの因子に高く負荷している。

最後にあげた因子では、「うっかりした」、「ぬけた」、「ドジな」、「おっちょこちょいの」、「不注意な」など失敗傾向に関する言葉が共通してまとまった。ここで興味深いのは、グループ 12 ではこの因子に「のんびりした」「のんきな」「おっとりした」というテンポの遅さを表す項目が高く負荷しているのに対して、グループ 13, 14 では「無能な」が加わることである。グループ 15 では「のんきな」、「ぼんやりした」が加わるため、どちらかいうとグループ 12 の因子内容に近く、この女子学生の2群では「無能な」は“知性・有能”に含まれる。

ここで用いた性格記述語のリストは主に行動の表面的な特徴を示す言葉から構成されたものなので、パーソナリティ特性を網羅するような従来のレキシカル研究の結果とは一致しない。例えば失敗傾向と対人性にあまり関連がないであろうことは3節でも述べたが、ここでも対人関係を本質とするような協調性の因子は現れていない。このような因子を構成する言葉がそもそもリストに含まれなかったのであろう。従来のレキシカル研究で得られるビッグ・ファイブと対応すると考えられるのは“知性・有能”（「知性」因子に対応する）と“細心・統制”及び“怠惰”（「勤勉誠実性」のポジティブ・ネガティブの両極を表す）である。

次に因子間相関を表 6-7-3 にまとめた。相関は高いもので±.40 前後である。失敗の因子に注目すると、グループ 12, 13, 15 の女性参加者群では、“知性・有能”や“細心・統制”の因子と負の相関関係にあり、“怠惰”とは正の相関を

² 負荷量の符号が逆になっているグループもある。

示すのに対して、グループ 14 の男性参加者群では“怠惰”とのみ正の相関を示した。

表6-7-3 各群における因子間相関

	知性・有能	細心・統制	気の長さ	怠惰	失敗
知性・有能	--	0.11	-0.12	-0.25 *	-0.34 **
細心・統制	0.12	--	-0.28 **	-0.31 **	0.04
気の長さ	-0.15	0.10	--	0.41 **	0.15
怠惰	-0.13	-0.22	0.09	--	0.22 *
失敗	-0.34 **	-0.37 **	0.13	0.37 **	--

※対角線より上がグループ12, 下がグループ13

	知性・有能	細心・統制	気の長さ	怠惰	失敗
知性・有能	--	0.35 **	-0.19	-0.31 **	-0.03
細心・統制	0.17	--	0.09	-0.13	0.06
気の長さ	0.11	-0.28 **	--	0.12	0.00
怠惰	-0.30 **	-0.46 **	0.13	--	0.30 **
失敗	-0.26 **	-0.36 **	0.13	0.36 **	--

※対角線より上がグループ14, 下がグループ15

3. 失敗傾向と性格記述語因子との相関

性格記述語の構造と失敗傾向の関係を調べた。失敗傾向質問紙はグループ 14, 15 でのみ実施していたので、大学生男女の比較となる。性格記述語の 5 因子について、男女で共通して同じ因子に±0.40 以上に負荷した項目内容を表 6-7-4 に、またこれらの項目得点を合計した各因子の得点を表 6-7-5 に示した。

表6-7-4 性格記述語の因子内容(グループ14, 15の共通項目)

知性・有能(10)	頭の回転が早い, もの覚えのいい, 臨機応変な, 決断力のある, 能率的な, 判断力のある, 有能な, 積極的な, 大胆な, 思い切りの悪い(-)
細心・統制(8)	慎重な, 完全主義の, 用心深い, 注意深い, まじめな, きちんとした, ていねいな, 分別のある
情緒的安定(4)	気の長い, 短気な(-), のんびりした, おっとりした
怠惰(6)	怠けた, 無責任な, 投げやりな, だらしない, だらだらした, ルーズな
失敗(5)	おっちょこちよい, うっかりした, ぬけた, ドジな, 不注意な

※()内は項目数

これら 5 つの得点を比較してみると、性差は“失敗”得点においてのみ見られ、男子よりも女子の方が有意に得点が高かった ($t(241)=3.68, p<.01$)。

表6-7-5 グループ14, 15における性格記述語因子の平均得点

	()内はSD				
	知性・有能	細心・統制	気の長さ	怠惰	失敗
グループ14	29.79 (6.11)	27.11 (4.78)	12.40 (2.96)	18.00 (4.63)	15.90 (3.40)
グループ15	29.46 (6.38)	27.30 (5.09)	12.61 (3.17)	18.04 (4.31)	17.64 (3.94)

※ グループ14:男子大学生121名, グループ15:女子大学生122名

次に、性格記述語による自己評価の次元と失敗傾向の関係を全体的に捉えるために、性格記述語因子の合計得点と失敗傾向得点を用いてジョイント因子分析を行った。主因子法による因子の抽出を行い、固有値が1以上の因子はグループ14では2因子、グループ15では3因子が抽出された。それぞれプロマックス回転を行った結果が表6-7-6の因子パターンである。この3因子解、2因子解による説明率はそれぞれ46.1%、42.1%である。

表6-7-6 性格記述語因子の項目得点と失敗傾向得点のジョイント因子分析

グループ14				グループ15		
	因子1	因子2	因子3		因子1	因子2
衝動的失敗	0.81	0.27	-0.19	認知の狭窄	0.95	-0.19
アクションスリップ	0.72	0.07	0.05	知性・有能	-0.71	0.11
認知の狭窄	0.71	-0.23	0.19	アクションスリップ	0.46	0.24
失敗	0.55	-0.17	0.05	失敗	0.40	0.34
怠惰	0.44	-0.14	-0.10	細心・統制	0.07	-0.73
気の長さ	0.08	-0.04	0.08	怠惰	0.11	0.61
知性・有能	0.02	0.74	0.14	衝動的失敗	0.23	0.42
細心・統制	-0.03	0.16	0.78	気の長さ	0.21	-0.39

※ 性格記述語の因子名は灰色で示した。また±.40より大きい負荷量は太字で示した。

グループ14では性格記述語の因子のうち、ネガティブな内容を示す“怠惰”と“失敗”は3つの失敗傾向すべてと同じ因子に負荷し、ネガティブな自己評価因子とも言うべき広範な因子にまとまっているが、ポジティブな内容の“知性・有能”と“細心・統制”はそれぞれ単独で因子を構成している。一方グループ15では“知性・有能”と“失敗”が“認知の狭窄”及び“アクションスリップ”が同じ因子にまとまり、“細心・統制”と“怠惰”が“衝動的失敗”と同じ

因子を構成するというように、失敗傾向の内容の違いを反映した結果になっている。つまりこれまでの結果と同様に、ここでもやはり男子では内容の異なる失敗を一様にネガティブなものに見なす傾向があるのではないかと考えられるのである。またその反面でポジティブな側面への評価次元は細分化されており、ポジティブな側面への感受性の細やかさがうかがえる。

【 全 体 の 考 察 】

ここでは特に、“失敗”の因子を構成する言葉に群間で違いが見られた点に注目する。男子大学生と女性会社員では“失敗”の因子に「無能な」というネガティブな能力評価を表す言葉が含まれるのに対して、女子短大生と女子大学生では「のんきな」、「ぼんやりした」などが含まれ、更に女子短大生では「のんびりした」、「おっとりした」が加わって、ネガティブな意味は更に弱くなっている。男子大学生では失敗の自己報告とネガティブな自己評価の間に関係があることが前章において示唆されており、性格記述語を用いた評定でもこれと一致する結果が見られたと考えてよいだろう。また女子会社員でも同じ結果が得られたことから、失敗傾向と自己評価の関係は、単に性別や年齢によって異なるのではなく、個人のおかれた状況によって影響されることがうかがえる。

成功不安の研究でも示されるように、男子に較べると女子にとっての失敗はそれほどネガティブな事象ではないのかもしれない。このことは5節においても述べたが、これを支持するような風潮は日常生活でしばしば観察される（山田，1994）。例えば少女漫画では「ドジ」で「おっちょこちょい」の主人公がかわいい人物として描かれ、かっこいいボーイフレンドを手にいれるという成功のストーリーが繰り返し描かれている。もし失敗したとしても、女は子どもっぽく振舞うことで許してもらえる（小倉，1994）という期待もあるかもしれない。しかし学校を卒業し、就職や結婚などを経て北山ら（1995）の言う社会的関係に参加するようになると、失敗は自他からネガティブな評価を受ける材料になってくるのではないだろうか。なおここでは「女子」としているが、これは堀野（1995）が言うような社会・文化が持つ性役割としての女性のことであり、失敗をどの程度ネガティブなものとして捉えるかの個人差は必ずしも生物学的な性別だけで生じるのではないことは言うまでもない。

この他にも失敗の意味が社会的・文化的背景によって異なることを示す例がある。Benet-Martinez & Waller (2002) がアメリカの大学生³を対象に、評価的な性格記述語（「一流の」、「優雅な」、「下品な」、「まぬけな」など）だけを用いてその意味的類似性や自己評価を尋ねたところ、Distinction（卓越・非凡）、Depravity（墮落・邪悪）、Worthlessness（無価値）、Stupidity（愚鈍）、Unconventionality（非因襲）の5因子が得られた。その中で「fallible（誤りやすい）」という言葉は「first-class（最高の）」、「supereminent（卓越した）」、「faultless（欠点のない）」、「demigod（半神半人）」などが構成する Distinction 因子にマイナスの負荷を示した。つまりここでは、失敗しやすいことは（神のような）完全無欠な理想状態にとっては瑕疵であるかもしれないが、それはむしろ人間らしさを表しており、「uncapable（無能な）」、「blunderhead（どじな）」のようにネガティブな知的評価（Stupidity）を表すものではないようである。この結果と青木（1974）の「頭の悪さ」カテゴリーを比較する時、ジェイムス（1957）がいうように失敗を人間の本質に根ざす不可避的なものと見なす宗教的な観点と、「失敗を恥や減点対象と考える日本の失敗文化（畑村, 2000）」の対比を考え合わせると一層興味深い。

6-8 性格記述語を用いた失敗傾向の検討(2) 一望ましさ及び自己意識特性との関係一

失敗傾向と性格記述語の構造との関連を検討することによって、特に男子大学生では、内容に関わらず失敗を一様にネガティブなものとして捉える傾向があることが示唆された。ネガティブな事柄に対する自己報告は何らかの反応バイアス（例えば望ましさなど）によって歪められる可能性がある。失敗に関する自己報告にも同様のバイアスが影響するのだろうか。

一般に、自己の内面的な特徴に注意が向けられること、すなわち私的自己意識が高められることで自己認知が正確になり、また外的情報に惑わされにくくなり、自己報告の信頼性が高まると言われている（辻, 1993; 辻ら, 1997）。従

³ 男女の別は記載されていない。

って、もし失敗に関する自己報告に何らかの反応バイアスが影響するとすれば、私的自己意識特性の高い者ではこのような反応バイアスは弱く、低い者ではバイアスが強く働くという違いが見られるのではないかと考えられる。

そこで本節では、前節で用いた性格記述語に対する望ましさを求め、同じ言葉に対する自己評定や失敗傾向の自己報告との関係が、性別や私的自己意識の高低によって異なるのかを調べる。

【 方 法 】

調査期間：2002年10月～12月

実施した尺度：失敗傾向質問紙、自己意識尺度（辻，1993）に加えて、前節で使用した性格記述語のリストを用いて、(1)5件法で自分自身に対するあてはまりを評定させるもの（自己評定）と、(2)「非常に望ましい」、「やや望ましい」、「どちらとも言えない」、「あまり望ましくない」、「全く望ましくない」の5件法でその性格記述語の表わす特徴の望ましさを評定させるもの（望ましさを評定）の4種類の尺度を用いた。

調査方法：心理学関連の講義中に、上記の質問紙を1～3週間の間隔において性格記述語の自己評定、失敗傾向質問紙、自己意識尺度、性格記述語の望ましさを評定の順で実施した。

参加者：グループ9の男女大学生を対象として調査を実施した。有効データは163名（男子90名、女子73名）で、平均年齢は19.05才（SD=1.06）である。

【 結 果 と 考 察 】

1. 各尺度の基本統計量

以下に各尺度の男女別の平均得点を示した。男女の得点を比較したところ、“アクションスリップ”では女子の得点が高い傾向があり($t(161)=1.73, p=.09$)、自己意識尺度の公的自己意識得点では女子の得点有意に高かった($t(161)=3.26, p<.01$)。

表6-8-1 グループ9における失敗傾向質問紙及び
自己意識尺度の平均得点 ()内はSD

	男子 (N=90)	女子 (N=73)	
アクションスリップ	18.97 (5.79)	20.47 (5.16)	+
もの忘れ	11.99 (4.45)	12.95 (3.76)	
放心	6.98 (2.37)	7.52 (2.24)	
認知の狭窄	17.88 (5.73)	18.30 (4.34)	
妨害されやすさ	10.22 (3.64)	10.75 (3.15)	
とらわれ	7.66 (2.78)	7.55 (2.01)	
衝動的失敗	7.99 (3.60)	7.89 (3.14)	
私的自己意識	21.58 (4.55)	22.56 (4.56)	
公的自己意識	28.87 (5.66)	31.42 (3.97)	**
社会的不安	20.00 (4.30)	19.93 (4.10)	

性格記述語による自己評定と望ましき評定の結果については、前節の表6-7-4に示した“知性・有能”，“細心・統制”，“気の長さ”，“怠惰”，“失敗”の5因子ごとに評定値の合計を求め、項目数で除して得点を求めた。これらの得点には有意な性差は認められなかった。

表6-8-2 グループ9における性格記述語因子の得点
()内はSD

	男子 (N=90)	女子 (N=73)
自己評定		
知性・有能	2.94 (0.65)	2.93 (0.73)
細心・統制	3.47 (0.65)	3.39 (0.64)
気の長さ	3.21 (0.99)	3.04 (0.84)
怠惰	3.00 (0.80)	2.94 (0.74)
失敗	3.38 (0.64)	3.52 (0.79)
望ましき評定		
知性・有能	4.23 (0.66)	4.20 (0.63)
細心・統制	3.65 (0.47)	3.70 (0.44)
気の長さ	3.63 (0.68)	3.68 (0.58)
怠惰	1.77 (0.69)	1.70 (0.61)
失敗	2.28 (0.65)	2.30 (0.68)

またこれらの評定得点の分布には男女で目立った違いが認められなかったの
で、以下に男女込みの得点分布図を記載した。自己評定得点がいずれもあまり

偏っていないのに対して、望ましき評定ではまず“知性・有能”がかなり右に偏っていることがわかる（歪度=-1.45）。反対に“怠惰”の望ましき得点は右、すなわち望ましくない方向に偏っている（歪度=1.04）。

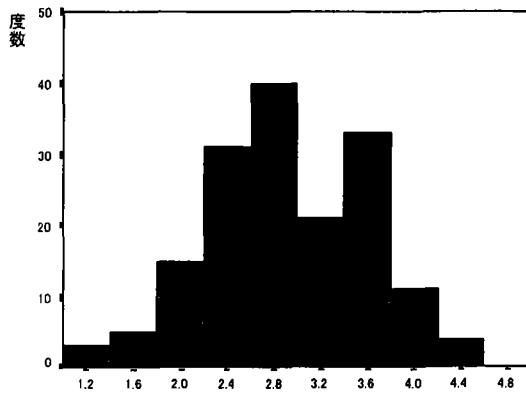


図6-8-1a “知性・有能”の自己評定得点

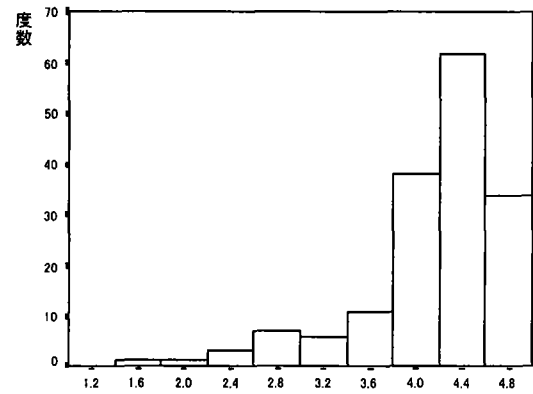


図6-8-1b “知性・有能”の望ましき得点

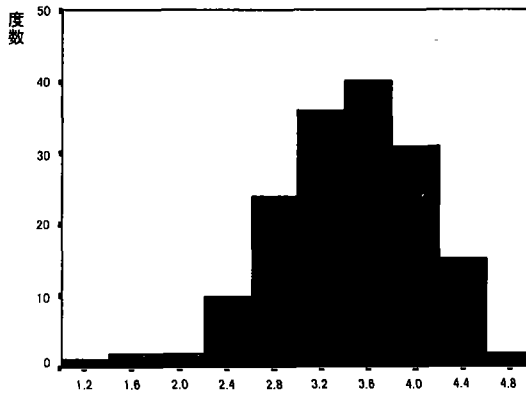


図6-8-2a “細心・統制”の自己評定得点

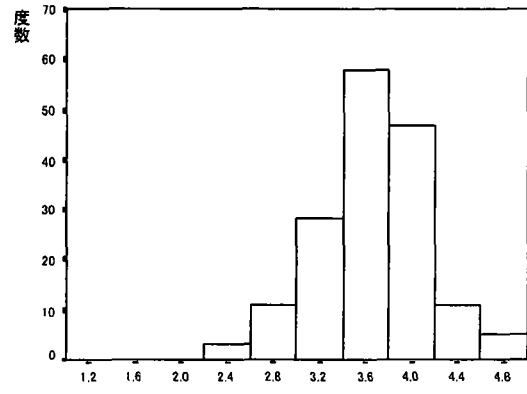


図6-8-2b “細心・統制”の望ましき得点

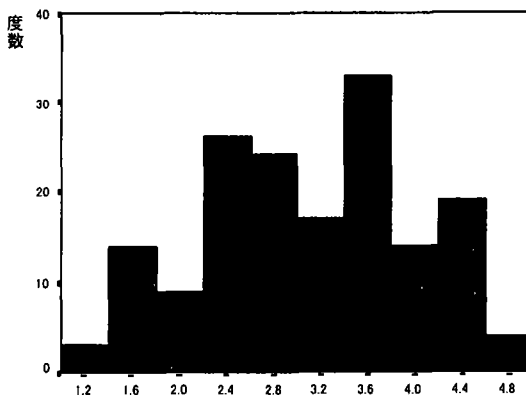


図6-8-3a “情緒的安定”の自己評定得点

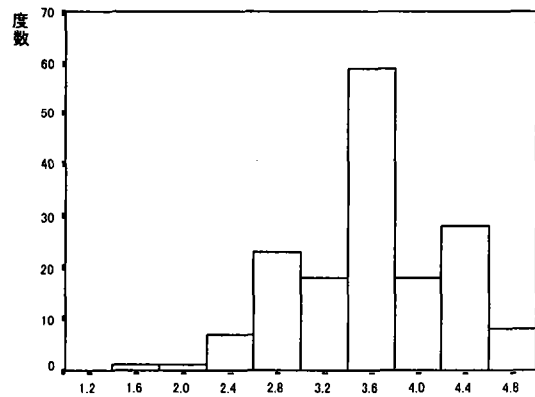


図6-8-3b “情緒的安定”の望ましき得点

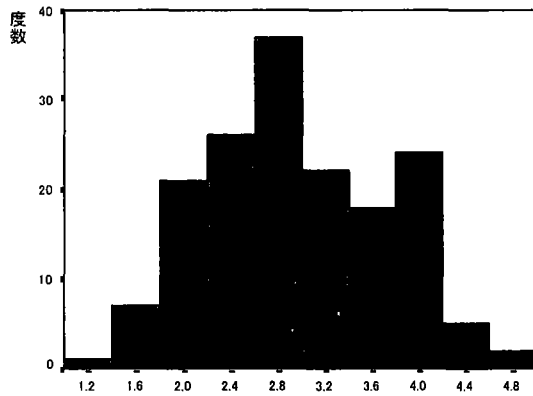


図6-8-4a “怠惰”の自己評定得点

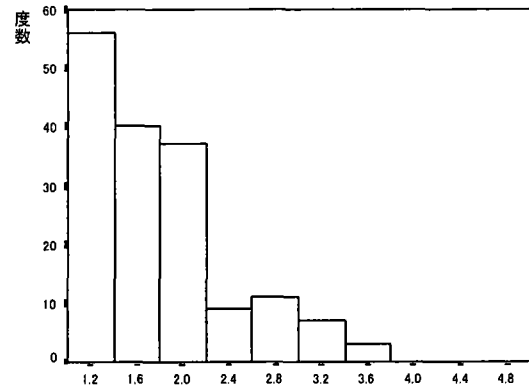


図6-8-4b “怠惰”の望ましき得点

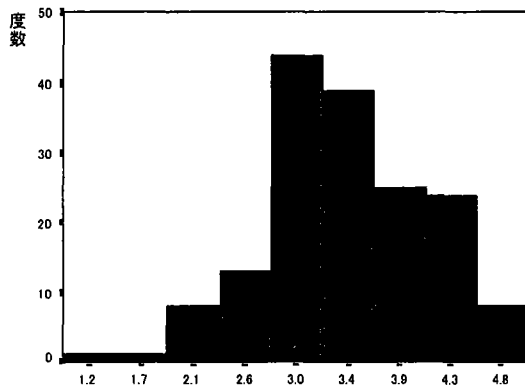


図6-8-5a “失敗”の自己評定得点

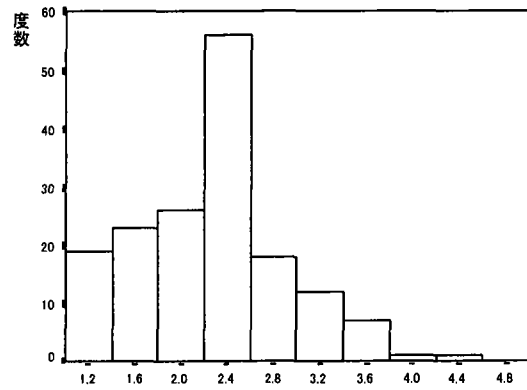


図6-8-5b “失敗”の望ましき得点

“失敗”因子の望ましきの平均得点は中点（「どちらとも言えない」=3）よりやや低いですが，“怠惰”の望ましき得点の分布に較べると偏りは小さい。

2. 性格記述語における自己評定と望ましきの相関

性格記述語における自己評定と望ましき評定の相関は表6-8-3の通りである。

女子では“細心・統制”と“怠惰”で2つの評定間に有意な正の相関が認められたが、男子ではこれらの相関はいずれも有意ではなかった。

表6-8-3 性格記述語に対する望ましき評定と自己評定の相関

	男子 (N=90)	女子 (N=73)
知性・有能	-0.07	0.15
細心・統制	0.15	0.32 **
気の長さ	0.19	0.15
怠惰	0.15	0.24 *
失敗	0.03	-0.03

※ *:p<.05 ; **:p<.01

そこで次に辻 (1993) による標準データの平均値によって参加者を私的自己意識の高得点群と低得点群に二分し、再び望ましき評定と自己評定の相関を求めた。なお私的自己意識得点は、5つの性格記述語因子の望ましき及び自己評定の得点、失敗傾向得点とはごく一部を除いて有意な相関はなかった⁴。

表6-8-4 性格記述語に対する望ましき評定と自己評定の相関(性別×私的自己意識)

私的自己意識	男子		女子	
	高 (N=41)	低 (N=49)	高 (N=35)	低 (N=38)
知性・有能	-0.12	0.00	0.29	-0.03
細心・統制	0.33 *	-0.01	0.47 **	0.16
気の長さ	0.38 *	-0.03	0.15	0.18
怠惰	0.32 *	0.05	0.29	0.22
失敗	0.08	-0.01	-0.18	0.10

※ *:p<.05 ; **:p<.01

男子では私的自己意識の高得点群で“細心・統制”、“気の長さ”、“怠惰”において、女子でも高得点群で“細心・統制”において中程度の有意な正の相関がみられた。もし予測に反して、私的自己意識特性の高い者で望ましい特徴ほど自己にあてはまると評定するというバイアスが働いているとすれば、“知性・有能”という最も望ましい特徴でも同様の相関が見出されると考えられるが、女子の高得点群では弱い相関のみ、男子高得点群では殆ど相関がなかった。

ここでは性格記述語に対して「一般にどのくらい望ましいか」ではなく、「あなたはどのくらい望ましいと思うか」と尋ねたために、いわゆる社会的望ましきではなく、個人的望ましき (青木, 1971) とも言うべき私的な望ましきの判断が行われたのではないかと考えられる。私的自己意識が高まると私的な基準

⁴ 男子で私的自己意識と“気の長さ”の望ましきに $r=.268(p<.05)$ の相関が見られた。

と自己とのズレが意識されやすくなり、そのズレを低減するために自己の行動をできるだけ基準に近づけようと努力することで態度・信念と行動の一致度が高くなると言われており（辻，1993），これを考え合わせると，私的自己意識特性の高い者ではふだんから自身の望ましさを基準に行動を一致させようとしているために望ましき評定と自己評定の相関が高くなったのではないかと考えられる。パーソナリティのビッグ・ファイブで言えば勤勉統制性に対応する“細心・統制”や“怠惰”といった，行動の意志的側面で特にこれらの相関が顕著であることもこの解釈を裏付けると思われる。

しかしここでの関心である“失敗”因子では，私的自己意識特性の高低に関わらず，自己評定と望ましき評定の間に有意な相関は見出されなかった。つまり“失敗”因子に含まれる「おっちょこちょい」，「ドジな」，「不注意な」などの特徴では個人的望ましきは，自己評定に影響しないとひとまず考えてよいだろう。

3. 失敗傾向と性格記述語における評定との相関

次に，性格記述語因子に対する望ましき評定と失敗傾向との関係を調べた。

表 6-8-5 “失敗”因子の望ましき評定と失敗傾向の相関(性別×私的自己意識)

私的自己意識	男子		女子	
	高 (N=41)	低 (N=49)	高 (N=35)	低 (N=38)
アクションスリップ	0.01	-0.06	-0.24	-0.10
もの忘れ	0.08	-0.03	-0.29	-0.08
放心	-0.10	-0.10	-0.08	-0.10
認知の狭窄	0.16	-0.10	0.09	-0.28
妨害されやすさ	0.22	-0.06	0.04	-0.30
とらわれ	0.02	-0.12	0.11	-0.14
衝動的失敗	0.08	0.14	0.02	-0.02

上と同様に性別及び私的自己意識特性の高低別に，“失敗”因子の得点と失敗傾向得点の相関を求めたのが表 6-8-5 である。ここからわかるように，性別や私的自己意識の高低に関わらず，“失敗”の望ましきと失敗傾向質問紙における自己評定の間には有意な相関は見られなかった。

以上の結果から，「おっちょこちょい」，「ぬけた」，「ドジな」，「不注意な」などの特徴に対して個人が持っている望ましきの基準は，自己の内面的な特徴に

注意を向ける傾向の強さや性別に関わらず、失敗傾向質問紙での自己報告にほとんど影響を及ぼしていないと考えられる。

しかし“失敗”因子の自己評定と失敗傾向に対する自己評定の相関を上と同じ方法で求めたところ、次のような結果になった。

表 6-8-6 “失敗”因子の自己評定と失敗傾向の相関(性別×私的自己意識)

私的自己意識	男子		女子	
	高 (N=41)	低 (N=49)	高 (N=35)	低 (N=38)
アクションスリップ	0.43 **	0.44 **	0.35 *	0.54 **
もの忘れ	0.40 **	0.45 **	0.29	0.51 **
放心	0.25	0.28 *	0.30	0.43 **
認知の狭窄	0.24	0.35 *	0.31	0.29
妨害されやすさ	0.21	0.37 **	0.18	0.16
とらわれ	0.22	0.24 *	0.34 *	0.40 *
衝動的失敗	0.21	0.37 **	0.22	0.28

※ *:p<.05; **:p<.01

男子では、私的自己意識の高得点群では“失敗”因子と“アクションスリップ”及び“もの忘れ”との相関が有意であるだけだが、低得点群ではすべての相関が有意になっている。女子ではこれほど顕著ではないが、やはり低得点群の方が、性格記述語と質問紙得点の相関が全体に高くなっている。このことから、私的自己意識特性の高い者は低い者に較べて、性質の異なる失敗行動を弁別してその頻度を回答することができているのではないかと考えられる。この4群ごとに失敗傾向得点間の相関を求めてみると、やはり私的自己意識の低得点群では異なる失敗傾向間の相関が高く、先述の解釈と一致する結果になった。

表6-8-7 失敗傾向得点間の相関(性別×私的自己意識)

私的自己意識	男子		女子	
	高 (N=41)	低 (N=49)	高 (N=35)	低 (N=38)
AS - CN	0.67 **	0.62 **	0.52 **	0.64 **
AS - IM	0.40 **	0.56 **	0.45 **	0.69 **
CN - IM	0.32 *	0.42 **	0.33 n.s.	0.42 **

※ AS:アクションスリップ, CN:認知の狭窄, IM:衝動的失敗

※ *:p<.05; **:p<.01

【 全 体 の 考 察 】

ここでの結果から、失敗傾向質問紙における自己報告は、「おっちょこちょ

い」、「ぬけた」、「ドジな」、「不注意な」などの性格記述語に対する望ましさによる影響をあまり受けず、これらの特徴が望ましくないと判断しても、そのことで失敗の頻度を少なく報告するといった反応の歪みに直接結びつく訳ではないようである。この結果は、私的自己意識特性と性別によって参加者を4群に分けた場合でも同様であった。私的自己意識特性の高い者は自己の内面的な特徴に敏感で自己認知が正確であるために、自己報告がより正確になると考えられているが、私的自己意識特性が低い者と比較しても望ましさと自己報告の関係に違いは見られなかった。

しかし、性格記述語に対する自己評定と失敗傾向質問紙における自己報告との関係には、私的自己意識特性の高低でいくらか違いが見られた。高得点群の男女では、失敗に関する性格記述語に対する自己評定と失敗傾向質問紙の“アクションスリップ”との相関が顕著であるが、低得点群の男子ではその他の失敗傾向とも有意な相関が認められた。女子でも低得点群の方が全体に相関は高くなっているが、男子ほど明らかな違いではない。性格記述語に対する自己評定は、自己の全般的・抽象的なイメージについて判断を求めるものだと思われるが、自分自身にあまり注意を向けず自己認知が精細でないであろう低得点群では、その全般的なイメージが具体的・個別的な失敗行動の頻度の報告に影響する可能性があるのではないだろうか。また、“失敗”に対する望ましさ得点そのものにおいては性差はなかったが、前節での結果も考え合わせると、男子の方がこのような全般的イメージの影響は強いのではないかと考えられる。

従って失敗傾向質問紙の実施にあたっては、特に内省力の乏しい参加者が十分に自己の実際の行動を顧みて回答することができるような教示等が必要であろう。

6-9 まとめ

一般に、人の行動を規定するのは個人の特性と状況の相互作用であり、行動理解のためにはこの両者を詳細に分析することが必要であると言われている。同様に失敗の研究においても、個人の失敗傾向と状況の相互作用を詳細に考えていく必要があるとすれば、本章の1節で作成した質問紙によって全般的な失

敗しやすさではなく3つの異なる失敗傾向を捉えることは有意義なことと思われる。この3つの失敗傾向とは、もの忘れや不注意の多さを示す“アクションスリップ”，ストレスに影響されやすく状況に適した行動がとりにくい“認知の狭窄”，計画性のなさから起こる“衝動的失敗”である。

失敗傾向を把握することによって、その人がどんな状況でどのような失敗を起こしやすいかを予測できるだけでなく、それらの失敗を防止するために状況や人にどのように働きかければよいかの手がかりが得られる可能性もある。特に産業、交通、医療などの場面では単なるうっかりミスが深刻な結果をもたらすことがあり、失敗の防止が重要な課題となる。そのためには失敗が起こりやすい状況を理解し、それを改善する努力と共に、個人の失敗傾向を考慮に入れた教育や訓練を行えば、より効果的ではないだろうか。またこのような個人の特徴は人事の採用や配属決定においても有効な資料になりうる。日常生活においても、もの忘れが多い、気が散りやすい、急いでいる時に失敗しやすいなどのように自分の特徴をふだんから把握していれば、大事な予定は手帳に書きこむ、仕事中には気の散りそうなものを遠ざけておく、時間に余裕をみて行動するといったように、失敗しそうな状況でそれを防ぐための方略を意識的にとることもできるだろう。

2節では更に失敗傾向因子の階層構造を検討した。探索的、及び確証的因子分析を行った結果、“アクションスリップ”は人の名前を忘れる、しようとしていたことを忘れる、置き場所を忘れるといった“もの忘れ”の因子と、ぼんやりして聞き逃す、注意が逸れるなどの“放心”の下位因子から構成されることがわかった。また“認知の狭窄”は、内外のストレスによって認知的プロセスが損なわれやすい“妨害されやすさ”と、思考を柔軟に切り替えられない“とらわれ”の下位因子を含むと解釈される。

3節では質問紙で測られる失敗傾向と性格特性の関係について検討した。その結果、“アクションスリップ”は気分変動や空想性とは正の、几帳面とは負の相関を示した。“認知の狭窄”は情動性の心配性や緊張と強い相関を示し、更に男子では抑鬱や自己批判とも同程度の相関があった。また“衝動的失敗”は自己統制や計画といった、統制性の意志的側面と負の相関を示すことがわかった。以上の結果は、それぞれの失敗傾向の概念的な特徴とよく一致し、失敗傾向質

問紙の妥当性を示すものと思われる。

4 節では、失敗傾向質問紙で捉えられる 3 つの失敗傾向を注意という観点から比較した。全般的な注意の特徴を捉える TAIS (Test of Attentional and Interpersonal Style) との関連から、“アクションスリップ”と“認知の狭窄”は共に、自己内部や外界からの刺激が多くなることによって注意がとらわれてしまい、必要な情報の統合に失敗しやすくなる傾向と関連があることが示された。“認知の狭窄”はそれだけではなく多くの情報を処理できることを示す注意の広さの尺度とも負の相関を示した。従って“認知の狭窄”は刺激が多すぎる時に混乱してしまうだけでなく、もともと多くの情報を処理しきれないという特徴との関連があると考えられる。なお“衝動的失敗”は TAIS で測られる注意の特徴とは関連がなかった。

5 節では失敗傾向と自己評価、及び情動性の相関における性差を検討した。その結果、男子においては自己に対する全般的でネガティブな評価(抑鬱・自己批判)が、失敗の種類に関わらず全般的な (general) 影響を及ぼす傾向がみられたが、女子では“認知の狭窄”のみが「自分がうまくやれないのではないかという感覚(自律性)」と領域特异的 (domain-specific) な関連を示し、全般的な自己に対する評価(抑鬱・自律性)にはほとんど影響されないことが示された。

6 節では失敗傾向と自己意識特性及び他者意識特性との関係を調べ、抑鬱や不安に伴うとされる不適切な自己焦点づけ注意が、“アクションスリップ”や“認知の狭窄”と関連するのか検討した。“アクションスリップ”は私的自己意識と弱い相関を示し、進行中の行為から注意が逸れることが自己の内的対象に注意が向きやすいことと関連している可能性が示唆された。これに対して“認知の狭窄”では公的自己意識や社会的不安、他者意識などとの相関が認められ、内的な対象よりは他者の存在によって注意が妨害されやすいこととの関連が顕著であると考えられる。

7 節と 8 節では、失敗傾向と自己評価の関係について、失敗しやすさを表わすような性格記述語を用いた検討を行った。7 節では男女学生と女子会社員の間で自己評定の構造を比較したところ、男子大学生と女子会社員では、「ドジな」、「おっちょこちょいの」、「うっかりした」などの言葉が「無能な」と同じ

因子を構成するのに対して、女子学生ではこれらの言葉は「のんきな」、「ぼんやりした」などの言葉とまとめ、男子や女子成人では失敗に関わる言葉が一層ネガティブな意味を持つのではないかと考えられる。

そこで8節では、これらの性格記述語の望ましき評定と私的自己意識特性との関係から、失敗傾向に関する自己評定の信頼性について考察した。失敗をネガティブなものとして捉えることで、失敗傾向の自己評定に何らかのバイアスが働くことが予測できるからである。私的自己意識が高い者は自己認識が正確で、自己評定がより信頼できると考えられているが、今回の結果では私的自己意識特性の高低や性別に関わらず、失敗に対する望ましき評定は自己評定と相関がなく、望ましきによる反応バイアスが働いているという結果は見出されなかった。しかし性格記述語による自己評定と失敗傾向の関係には、私的自己意識の高・低群及び男女間でいくらか違いが見られた。即ち、私的自己意識特性の低い男子は「ドジな」、「おっちょこちょいの」、「うっかりした」などの言葉がすべての失敗傾向と有意な相関を示したのである。私的自己意識特性が高い男女ではこれらの言葉は主に“アクションスリップ”と相関があり、これは言葉の内容を考慮すると妥当な結果であると思われる。つまり自己への内省力が低い者は失敗の種類に関わらず失敗傾向質問紙に一律的に回答する可能性が示されるので、調査実施の際には自己の行動に充分注意を向けさせるような手続きが必要であろう。

以上のように第Ⅲ部では失敗傾向を比較的安定した個人の失敗しやすさと捉え、質問紙を用いてその測定と妥当性の検討を行ってきた。この失敗傾向をひとまず特性に近いものとするならば、次はその失敗しやすさがどの程度の通状況間一致性を持つのかを問うことができる。他より失敗しやすい人がいるとしても、その人がいつも失敗する訳ではない。失敗の生起に「個人の失敗しやすさ」と「失敗が起こりやすい状況」の両方が関わっているとすれば、そのようなダイナミックな相互作用を捉えるためには、どのような状況で失敗が起こりやすいかを探る状況別の検討が不可欠であると考えられる。そこで第Ⅳ部では、課題場面や災害場面など異なる状況における失敗と失敗傾向との関連を検討する。

第Ⅳ部 失敗傾向と状況要因の相互作用に関する研究

7章 失敗傾向と課題遂行

7-1 本章の目的と方法

第Ⅲ部では失敗傾向を「ある状況において失敗に結びつきやすい特徴」として捉え，“アクションスリップ”，“認知の狭窄”，“衝動的失敗”の3つの失敗傾向の質問紙による測定を試みた。ここでは，どのような状況においてこれらの失敗傾向が実際に失敗として現れやすいのかを探り，それぞれの失敗が起こるメカニズムについて考察することを目的とする。

繰り返し述べているように，失敗しやすい人が常に失敗するという訳ではない。現在のパーソナリティ研究においても，あるパーソナリティ特性をもつ者がどんな状況でも常に同じ行動をとるといような素朴な通状況間一貫性は仮定しておらず（辻ら，1997），行動を規定する状況要因の検討を重視する相互作用論的・状況論的研究の必要性が説かれている（渡邊，1999）。ここではこのような相互作用論的・状況論的な観点から失敗傾向の検討を行う。

“アクションスリップ”は進行中の行為から注意が逸れてしまう *absent-minded* な状態で起こると考えられるが，これは親しんだ状況で慣れた行為を行う時に多く見られるもので，新奇な問題解決場面でぼんやりしたり，空想に夢中になるといったことはそもそも起こりにくいだろう。反対に“認知の狭窄”は，何らかのストレスがかかるような状況において，更に関係のない対象に注意が向けられてしまって十全な問題解決ができなくなることであるから，もともと認知的・情緒的負荷が低い状況では起こりにくいと考えられる。また“衝動的失敗”に関わる意志的統制の弱さは，見通しや計画を立てて行動することが必要な場面では失敗につながるかもしれないが，速さのみが求められるような場面ではむしろプラスに働くこともあり得る。ここではいくつかの異なる課題状況を用いて，失敗傾向，状況，およびその相互作用としての遂行の特徴という三項の関係を比較することで，これらの予測を確かめてゆく。その方法論的枠組は次のようなものである。

1. 状況について

失敗傾向における個人差を検討しやすいのは、ある者は失敗するが別の者は失敗しないというように、そこで生じる行動に個人間で違いが見られるような状況であろう。誰でも失敗してしまうような状況や、反対に誰も失敗しそうな状況では、個人の失敗傾向を検討することは難しい。

このように行動に個人差が現れにくい状況を Mischel (1977) は「強い (powerful)」状況と呼んでいる。強い状況とは、望ましい行動に関して人々が同じような予測を持ち、その反応に対して適当な誘因が存在し、またその反応のために人々がほぼ同程度のスキルを有することを要求するといった特徴を備えているもので、その例としては「赤信号」が上げられている。つまり、おそらくすべての運転者が赤信号の意味を理解し、その意味に従うように動機づけられ、それを見た時には停車できるスキルを持つため、その行動を同調性や注意深さといった特性から推測する必要がないというのである。ただし強い状況と言っても、実際にはすべての運転者が赤信号で常に停車する訳ではないことは多くの交通事故から明らかであり、失敗について考える際には強い状況における例外的な行為（ここでは赤信号で停車しないという行為）が、重要な個人の特徴を示す場合もあることは考えておく必要がある。

第IV部ではいくつかの検査や実験課題を用いるが、そもそも課題場面を設定し参加者に何らかの問題解決を要求しているという点で、これらの状況はある程度「強い」ものになるだろう。しかしその中でも課題内容の親近性、困難度、教示内容などによって個々の課題状況の強さに違いが生じるのではないかと考えられる。

また以上のような課題状況の外的特徴に加えて、参加者自身がその課題状況や自身の遂行をどのように認知しているを捉えておく必要もあるだろう。同じ課題状況でも困難度や望ましい遂行の認知には個人差があるかもしれない。ここでは Hart & Staveland (1988) や Bloem & Damos (1985) が用いているメンタルワークロード (人間工学 vol.29, 1993 参照) の測定法を応用し、更にいくつか項目を付け加えて課題状況や自身の遂行に対する主観的評価を求める。評定内容は、課題の困難度、時間的プレッシャー、エラーへの不安、遂行の成功、緊張、速さと正確さのトレードオフの6項目である。各項目では、以下の

ように対になった2文を呈示する。

課題は・・非常に簡単 — 非常にむずかしい
時間的なプレッシャーは・・まったく急がされなかった — 非常に急がされた
まちがえることは・・まったく気にならなかった — 非常に気になった
自分の遂行は・・まったくの失敗だった — 非常にうまくいった
検査中・・非常にリラックスしていた — 非常に緊張していた(理由は自由記述)
回答に際しては・・多少まちがっても早くしようと思った — 多少遅くなくても正確にしようと思った

対の2文の間には中央に短い目盛が刻まれている10cmの直線をおき、参加者は各項目に対する自分の印象にあてはまると思う位置に縦線を書き込む。左端から参加者が書き込んだ線までの距離(1~100mm)を測り、これを評定値として用いる。

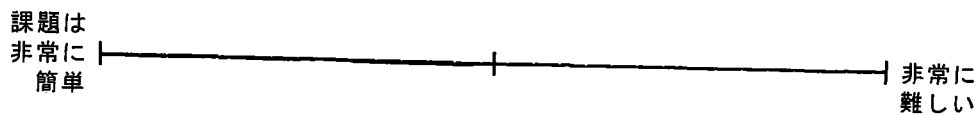


図 7-1-1 課題状況や遂行に対する評価を求める評定尺度(一部)

2. 遂行の特徴について

ここでは参加者の遂行を次の二つの観点から検討する。第一に、それぞれの検査や課題が本来測っている構成概念に沿って参加者の遂行を評価する。その概念とは知能、作業スタイル、認知スタイルなどであり、これらと失敗傾向の関係性を調べることは、行動的指標から失敗傾向質問紙の妥当性を検討することになる。

第二に、それぞれの状況で適切でないと見なされる遂行を広く失敗として捉え、その頻度や内容を調べる。例えば正答がある課題に対してそれ以外の反応を出すことは誤答と見なせる。また一定時間内で反応することが求められている場合、それができなければ、たとえ反応の内容が正しかったとしても適切でない反応と見なせる。ただしこの場合、それらの遂行が誰にとっての失敗であるのかに留意しておかなければならない。課題内容を把握し、正答の存在を知っている研究者にとっては失敗の定義は容易であるが、もし参加者がその状況

で要求される遂行について明確なイメージを持たなかったり、自分の反応が正しいか誤っているかについての情報も与えられないとすれば、参加者自身は自分の遂行が失敗であるという認識を持たないまま課題を終えるということもあり得るだろう。言い換えれば、参加者自身がどんな遂行を失敗と見なすかは、その状況でどんな行動が要求されていると認知していたかを表すのではないかと考えられる。このような観点から、遂行をどの程度成功・失敗と受け取っているかや、反応の速さと正確さのどちらを重視していたかなどを尋ねる項目を主観的評価に加えることにした。

7-2 集団式知能検査における遂行との関係

失敗傾向質問紙では、項目作成の基となった Cognitive Failures Questionnaire (CFQ ; Broadbent et al., 1982) と同様に、能力の低さに由来する失敗ではなく、別の状況ならうまくできるような行為がうまくいかない現象を取り上げている。従って、この質問紙で測られる失敗傾向と能力との関連はあまり強くないことが予測される。ここでは京大 NX 式知能検査を用いて、失敗傾向が能力とは独立の構成概念であること一少なくとも同一の概念ではないこと一をまず確認する。次に、この検査場面で起こる誤答を分析し、これらと失敗傾向との関係を検討する。

【 方 法 】

実施日時：1996年、1997年、2000年の3回にわたって実施した。

参加者：心理学関連の講義を受講する女子大学生3・4年生（グループ16）。

3～4週の間隔をおいて失敗傾向質問紙と希望者に京大 NX 式知能検査（以下 NX と表記）を実施した。NX を受検したのは合計 160 名で、うち 125 名には検査後に NX の課題状況や遂行に対する評価を求める質問紙を実施した。失敗傾向質問紙と NX の組み合わせでは 138 名から、また NX、失敗傾向質問紙、課題評価の組み合わせでは 104 名から有効データを得た。京大 NX 式知能検査（NX15-）：12 下位検査から構成される、B5 版の冊子形式の集団知能検査。年齢に応じていくつかの種類があり、ここでは 15 才

以上用のものを用いた。下位検査の内容は、言語性課題（類似語・反対語、文章完成、マトリックス、乱文構成、単語完成）、空間性課題（重合板、折紙パンチ、図形分割、ソシオグラム）、数的推理課題（計算法、符号交換）、日常記憶課題の4つの領域に及んでいる。教示や練習問題の実施などを含めて検査の実施時間は約50分程度であった。NXでは各検査における正答数を偏差値に換算し、その合計から知能指数（IQ）を求める。NXの実施にあたっては手引きに従い、検査者の合図に従って行うこと、むずかしくてわからない問題は飛ばしてもよいことなどを説明した。各下位検査の内容と例題は以下に示した。

1 類似反対語

ここでの課題は、左の言葉と似た言葉か反対の意味を持つ言葉を選択肢の中から選んで、その番号を解答欄の（ ）に記入することである¹。参加者には「おもい」の反対語として「かるい」が、次の例では「あがる」の類似語として「のぼる」が正答として例示される。それぞれの問題が類似語と反対語のどちらを探すものなのかは示されない。例と練習問題ではひらがなのみだが、本試行では漢字も使われている。制限時間は1分で25問ある。選択肢の数は5である。

2 重合板

¹ NXでは回答選択肢の番号は左から順に1,2,3・・・ではなくランダムに割り当てられている。

文字盤は固定されており，数字盤はその上で自由に動かせるが裏返されることはないと教示される．本試行では文字盤と数字盤の配列が 4×4 のものが用いられる．制限時間は3分で12問ある．

3 計算法

課題は，問題の計算を行った時に用いる符号を答えることである．例の計算は $100 - 10 - 15$ となるため，正答は(2)である．例と練習問題では符号の数は2個だが，本試行では1個から3個の問題がある．制限時間は1分30秒で12問ある．選択肢の数は5である．

4 マトリックス

枠内の言葉の上下や横の関係から，☆の位置にあてはまると思う言葉を選択肢の中から選ぶ問題である．例では父と兄が男なので，母と姉は「女」というのが正答である．制限時間は1分で15問ある．選択肢の数は5である．

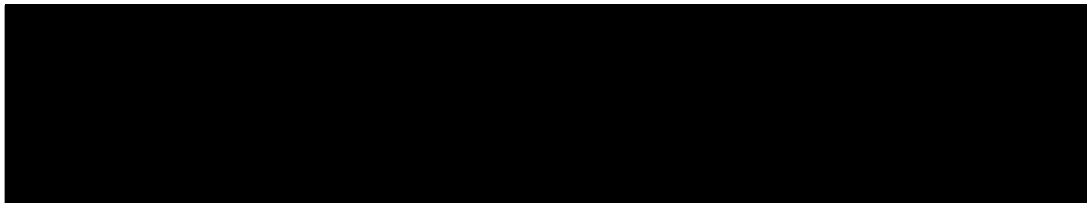
5 文章完成

この課題では，文章を完成させるために欠落部分にあてはめる言葉を選択肢から選ぶ．本試行でも例と同様に1問に2箇所の欠落がある．制限時間は1分30秒で12問ある．選択肢の数は6である．

6 日常記憶

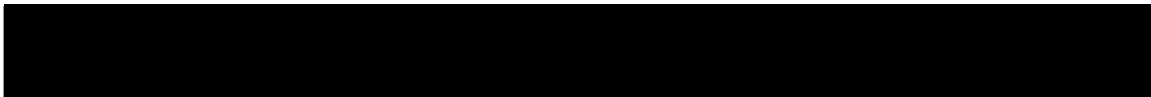
ここでは検査者が約2分間に問題文を音読し、参加者はそれを聞きながら自分でも問題文を読む。そしてすぐに検査7を行い、その後で検査6の問題文の内容について答える。問題は選択肢の中から回答を選ぶものと、参加者自身が答を再生するものの2種類がある。例や練習問題はない。制限時間は1分で10問ある。

7 折紙パンチ



正方形の紙を左にある図のように折りたたんで穴を開け、その紙を広げたらどのようなになっているかを選択肢の中から選ぶ課題である。制限時間は1分で12問ある。選択肢の数は5である。

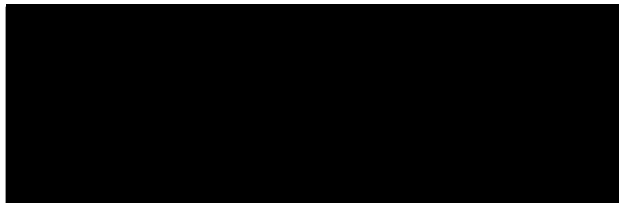
8 符号交換



この課題では、書かれている式の中の+と-、×と÷を入れ替えて計算した場合の正しい答が出されている選択肢を選ぶ。例では選択肢の答は順に $3+2=5$, $4\div 2=2$, $7-4=3$, $6\times 3=18$, $5\times 2=10$ となるので正答は(6)である。制限時間は1分で12問ある。

9 図形分割


例



図形を1本の直線で切り、2つの部分を組み合わせて正方形を作る課題である。完成する正方形の大きさも示されている。制限時間は2分で図形は13問

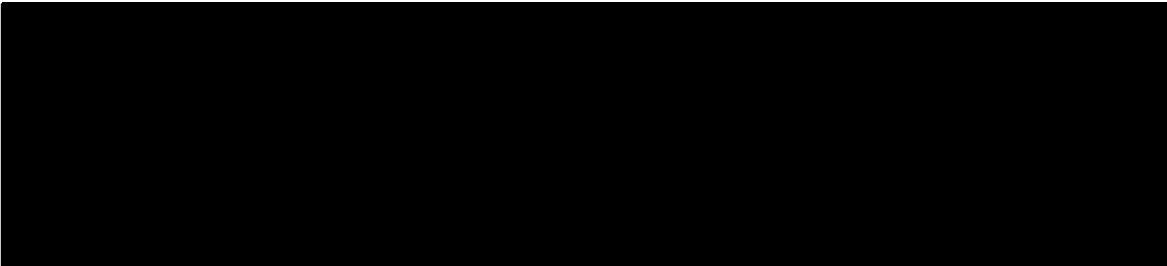
ある。参加者が自由に直線を書き込むので選択肢はない。

10 乱文構成



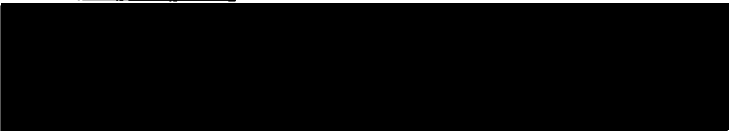
課題は、ランダムな順に並べられている文章を正しく構成し、その文章が示す答を選択肢の中から選ぶというものである。例では「ゆきは なにいろ ですか」という文になるので、(3)の白が正答である。制限時間は2分で12問ある。選択肢の数は5である。

11 ソシオグラム



人物を○，人物同士の仲がよい関係を黒線，仲が悪い関係を網掛けの線で表したソシオグラムを呈示し，問題の文章が表している人物を番号で答える課題である。本試行では3つのソシオグラムに関する8問の問題があり，ソシオグラムは順に複雑になっていく。制限時間は2分30秒である。

12 単語完成



1文字が欠落した4～5文字の単語が呈示され，そこに文字を書き入れて単語を完成させる課題である。制限時間は40秒で，30問用意されている。下位検査中で唯一，「できるだけ早くするように」と教示される課題である。

【 結 果 と 考 察 】

1. 失敗傾向と知能の関係

ここでは NX と失敗傾向質問紙の回答に欠損のなかった 138 名のデータを用いる。失敗傾向得点については女子学生の標準データから得点偏差値を求めたが、標準データと近い値であることが確認された。

表7-2-1 グループ16における失敗傾向質問紙の尺度得点

	平均値	SD	得点偏差値
アクションスリップ	21.91	5.41	53
もの忘れ	14.10	4.24	52
放心	7.80	1.92	52
認知の狭窄	19.59	5.20	51
妨害されやすさ	11.60	3.34	51
とらわれ	7.99	2.56	51
衝動的失敗	7.55	3.54	50

NX 各下位検査の知能偏差値の基本統計量は表 7-2-2 に示した。NX 下位検査の偏差値は 53～60 であり、全体の IQ も 114 とやや高い²。

表7-2-2 NX下位検査の知能偏差値の平均値とSD

	平均値	SD	最小値	最大値
1 類似反対語	53.15	8.52	29	77
2 重合板	55.78	10.49	33	85
3 計算法	54.48	8.68	36	86
4 マトリックス	54.70	8.33	37	74
5 文章完成	59.25	8.71	38	77
6 日常記憶	58.59	8.51	30	69
7 折紙パンチ	57.15	12.30	23	90
8 符号交換	55.29	9.48	20	75
9 図形分割	55.05	12.07	33	77
10 乱文構成	57.60	9.21	32	84
11 ソシオグラム	55.20	9.18	29	75
12 単語完成	60.65	8.07	36	72
全体のIQ	114.79	11.63	90	145

次に各領域の偏差値合計と全体の知能指数 (IQ) と失敗傾向得点との相関を

² 大学生サンプルでは子安(1984)でも平均偏差値が 55 程度になる下位検査があることが報告されている。

求めた。“認知の狭窄”得点はIQ及び空間性知能の偏差値合計と弱い負の相関を示した。CFQでは知能との間に-0.15程度の相関が得られており(Broadbent et al., 1982), 今回の結果はほぼ同じ程度と見なせるだろう。

表7-2-3 失敗傾向得点とNX偏差値合計・IQとの相関 (N=138)

NX偏差値合計	アクションスリップ		認知の狭窄				衝動的失敗
	もの忘れ	放心	妨害されやすさ		とらわれ		
言語性	0.00	0.00	-0.01	-0.11	-0.10	-0.09	0.00
空間性	-0.07	-0.05	-0.08	-0.19 *	-0.19 *	-0.14	-0.14
数的推理	-0.06	-0.04	-0.08	-0.14	-0.12	-0.12	-0.03
全体のIQ	-0.06	-0.05	-0.07	-0.20 *	-0.17	-0.17 *	-0.10

※ *:p<.05.

これらの値は5%水準で有意ではあるが低いもので、失敗傾向と知能の間に共通する部分があまり大きくないことを示している。

次に、下位検査ごとに知能偏差値と失敗傾向との相関を調べた。

表7-2-4 失敗傾向得点とNX下位検査の偏差値との相関 (N=138)

NX下位検査	アクションスリップ		認知の狭窄				衝動的失敗
	もの忘れ	放心	妨害されやすさ		とらわれ		
1 類似反対語	0.02	0.03	0.00	0.02	-0.01	0.05	0.05
2 重合板	0.01	0.02	0.00	-0.11	-0.11	-0.08	-0.07
3 計算法	0.00	0.03	-0.05	-0.12	-0.14	-0.06	-0.01
4 マトリックス	-0.03	-0.02	-0.02	0.04	0.00	0.09	-0.03
5 文章完成	0.09	0.05	0.12	-0.14	-0.11	-0.14	0.01
6 日常記憶	-0.09	-0.06	-0.12	-0.10	0.01	-0.22 **	-0.18 *
7 折紙パンチ	0.01	0.05	-0.06	-0.11	-0.14	-0.04	-0.07
8 符号交換	-0.09	-0.09	-0.07	-0.08	-0.04	-0.11	-0.03
9 図形分割	-0.10	-0.08	-0.12	-0.23 **	-0.20 *	-0.19 *	-0.13
10 乱文構成	-0.13	-0.12	-0.11	-0.22 **	-0.20 *	-0.19 *	-0.05
11 ソシオグラム	-0.14	-0.17	-0.03	-0.12	-0.11	-0.10	-0.13
12 単語完成	0.06	0.07	0.00	-0.04	0.01	-0.08	0.01

※ *:p<.05, **: p<.01.

“アクションスリップ”ではどの下位検査とも有意な相関はなかった。比較的短い制限時間(40秒~3分)で次々に新しい課題を行っていくような検査場面では、ぼんやりしたり他のことに注意を向けるような余地はないと思われるので、これは妥当な結果であろう。

“認知の狭窄”では図形分割及び乱文構成との間に負の相関が見られた

($p < .01$). これは下位項目群である“妨害されやすさ”と“とらわれ”に共通の傾向である。なお“とらわれ”では日常記憶との間にも負の相関が見られた ($p < .01$)。また“衝動的失敗”も日常記憶と負の相関を示した ($p < .05$)。

これらの値は相関係数としては低いものであるが、“認知の狭窄”と図形分割の相関は、空間性領域全体との相関よりも係数が高くなっている。そこで図形分割以外の3つの空間性課題（折紙パンチ、重合板、ソシオグラム）の偏差値合計を求めてみると、“認知の狭窄”との相関は $r = -.151$ となり (n.s.)、表 7-2-3 に示した値よりも低くなる。従って、空間性知能全体というよりは、図形分割という特定の課題における遂行と“認知の狭窄”との間に関連があると考えられるべきだろう。また同様に“認知の狭窄”と乱文構成との相関も言語的知能全体との関係を表すものではなく、課題特有の結果であると考えられる。

日常記憶は日常生活における“もの忘れ”とは相関がなかったが、これは刺激文を記憶させて妨害課題（検査 7）の後に再生させるという課題が日常場面よりは実験室状況での記憶課題に近いからと思われる。“とらわれ”や“衝動的失敗”との相関も、このような課題状況を考慮した上で検討する必要がある。

以上のような課題特有の結果を含めても、失敗傾向と知能との相関は全体に低いものであった。従って、失敗傾向質問紙で測られる失敗しやすさは、知能の低さによるものではないとひとまず考えておいてよいだろう。

2. NX における課題状況と反応の分析

今回の参加者は知能検査を受けることを自ら希望してその場に臨んでおり、またこれまでに何度も検査を受けた経験から、そこでは自身の能力が測られることや、優れた遂行が高い評価につながることも認識していると考えられる。このように要求される遂行が明瞭であり、その遂行に対して動機づけられているような状況を Mischel (1977) が強い状況と呼んだことは先に述べた。強い状況の条件としては他にも、人々がその遂行に必要なスキルを同じ程度持っていることがあげられているが、ここでの参加者が同じ大学に在籍する同年齢の学生であり、極端に知能指数が低い者がいなかったことを考えると、この条件もほぼ満たしていると考えていいだろう。従って NX の課題状況では一知能の個人差を表すものを除けば一遂行の個人差は現れにくいことが予測される。

しかし前節でみたように、失敗傾向と偏差値の相関は下位検査間でいくらか異なっていた。これらの相関係数を、失敗傾向が遂行に及ぼす影響の強さを示すものとして解釈するなら、この結果は下位検査の課題状況の強さに違いがあることを意味するのではないだろうか。だとすれば、比較的弱い課題状況では遂行に個人差がみられるかもしれない。そこでここでは下位検査を制限時間、問題数、問題解決に必要な操作や処理の内容、選択肢の有無や種類などの点から比較し、課題状況の特徴を探る。また NX では制限時間内の正答数から偏差値を算出するため、本来は誤答には関心が払われない。しかしここでは反応数（反応の速さ）、誤答の多さとその種類、反応の省略（その問題に答えないで飛ばすこと）などの指標を用いて、失敗傾向との関連を検討する。

まず反応の指標として、下位検査ごとに各参加者の正答数、誤答数、反応の省略数をカウントした。これら3つの度数を合計したものが全体の反応数である。さらに誤答と省略は反応数で除して誤答率と省略率を求めた。反応数、誤答率、省略率の平均値などは表 7-2-5 に示した。またこれらの指標の分布は図から確認する（資料参照）。

偏差値に関しては、日常記憶（図 7-2-6a）と単語完成（図 7-2-12a）でいくらか右に偏っているのを除けば、それほど大きい偏りは認められない。

表7-2-5 NX下位検査における各指標の平均値とSD (N=138)

	反応数				誤答率			
	平均値	SD	最小値	最大値	平均値	SD	最小値	最大値
1 類似反対語	12.67	3.28	4	23	0.10	0.10	0.00	0.50
2 重合板	8.42	1.91	4	12	0.23	0.17	0.00	0.70
3 計算法	5.54	1.74	1	10	0.32	0.19	0.00	0.80
4 マトリックス	8.40	1.93	5	15	0.15	0.13	0.00	0.50
5 文章完成	19.44	3.56	11	24	0.13	0.09	0.00	0.41
6 日常記憶	11.94	0.34	10	12	0.14	0.12	0.00	0.50
7 折紙パンチ	7.32	1.78	3	12	0.15	0.16	0.00	0.86
8 符号交換	7.87	1.21	3	11	0.04	0.08	0.00	0.33
9 図形分割	9.91	3.07	3	13	0.20	0.21	0.00	0.89
10 乱文構成	7.23	1.86	3	12	0.14	0.16	0.00	0.60
11 ソシオグラム	6.03	1.13	3	8	0.15	0.17	0.00	0.75
12 単語完成	25.30	5.00	9	30	0.01	0.02	0.00	0.11

表7-2-5 NX下位検査における各指標の平均値とSD(続き)

		省略率			
		平均値	SD	最小値	最大値
1	類似反対語	0.02	0.05	0.00	0.24
2	重合板	0.04	0.09	0.00	0.43
3	計算法	0.03	0.07	0.00	0.33
4	マトリックス	0.02	0.08	0.00	0.71
5	文章完成	0.01	0.02	0.00	0.13
6	日常記憶	0.01	0.04	0.00	0.25
7	折紙パンチ	0.02	0.06	0.00	0.50
8	符号交換	0.00	0.02	0.00	0.14
9	図形分割	0.16	0.16	0.00	0.62
10	乱文構成	0.12	0.05	0.03	0.25
11	ソシオグラム	0.02	0.07	0.00	0.43
12	単語完成	0.08	0.07	0.00	0.34

反応数は制限時間内に答えた問題数と省略した問題数の合計で、参加者が何らかの判断を下すことのできた問題の数であるから、反応数が多いほど回答が速いことを示すとひとまず考えてよいだろう。類似反対語、計算法、符号交換を除く9つの下位検査では、何名かの参加者は制限時間内に用意された問題のすべてに何らかの反応（回答するか、飛ばすか）を行うことができたようである。なお日常記憶では反応数の分布に天井効果が認められる（図7-2-6b）。

誤答率の分布は2つのパターンに大別できる。誤答率が0もしくは0に近いところほど度数が多く、誤答率が高くなるにつれて度数が減っていくものと、平均付近の度数が多く左右の度数が低いものである。後者は重合板（図7-2-2c）、計算法（図7-2-3c）、文章完成（図7-2-5c）で見られる。

省略率は多くの下位検査で平均が0に近く、分布も0付近に集中している形が多いが、図形分割（図7-2-9d）、単語完成（図7-2-12d）では平均が他の検査よりも高く、分布の形もやや異なる。

これらの遂行と課題状況の特徴を合わせたのが表7-2-6である。ここから、NXの下位検査の中ではおそらく単語完成が最も強い課題状況を有しているのではないかと考えられる。その理由の一つは、平均偏差値が約60とかなり高く誤答率は約1%と低かったこと、つまり問題解決に必要なものが単語レベルの知識という単純なものであり、その知識に大きな個人差がないために多くの参加者にとって容易な課題であったと考えられるためである。また制限時間が

最も短く、さらに 12 検査中で唯一「できるだけ早く答えるように」と教示されることによって、反応の速さが要求されていることが参加者にとって明瞭になると考えられるためでもある。

表7-2-6 NX下位検査の課題状況及び反応の指標(平均値)

(N=138)

下位検査	制限時間	問題数	選択肢の数	処理の内容	偏差値	エラー率	省略率	RT(概算)*
1 類似反対語	1分	25	5	単語の意味の検索	53.15	0.10	0.02	4.7秒
2 重合板	3分	12	(14)	空間イメージの操作(心的回転)	55.78	0.23	0.04	21.4秒
3 計算法	1分30秒	12	5	四則演算	54.48	0.32	0.03	16.2秒
4 マトリックス	1分	15	5	単語間の関係抽出	54.70	0.15	0.02	7.1秒
5 文章完成	1分30秒	24	6	文章完成(穴埋め)	59.25	0.13	0.01	4.6秒
6 日常記憶	1分	12	5~8**	記憶の再生	58.59	0.14	0.01	5.0秒
7 折紙パンチ	1分	10	5	空間イメージの操作	57.15	0.15	0.02	8.2秒
8 符号交換	1分	12	5	規則の変更を伴う四則演算	55.29	0.04	0.00	7.6秒
9 図形分割	2分	13	なし	空間イメージの操作	55.05	0.20	0.16	12.1秒
10 乱文構成	2分	12	5	文章の構成(アナグラム)	57.60	0.14	0.12	16.6秒
11 ソシオグラム	2分30秒	8	5~6	関係の空間的な把握	55.20	0.15	0.02	24.9秒
12 単語完成	40秒***	30	なし	単語の完成(穴埋め)	60.65	0.01	0.08	1.6秒

* 制限時間を平均反応数で除し、1問あたりの反応時間の概算を求めた。

**選択肢がない問題もある

***この検査のみ、「できるだけ速く答えるように」と教示する。

これと比較すると、図形分割では回答選択肢がなく、可能な反応のレポーターが与えられていない。このため図形を二分割する直線のすべてが可能な反応になる³。しかし正答の直線は1本しかないため、それだけ可能な(possible)

³ 重合板や日常記憶では選択肢はないが、可能な反応の範囲はある程度限定されている。

誤答の種類も多い。図形分割における省略率の高さは、可能な誤答を回避しようとする反応が多かったことを示すのではないだろうか。またソシオグラムは概算ではあるが1問あたりの所要時間が最も長かった課題であり、課題が困難であったことや、参加者によって異なる問題解決の方略が用いられる余地があったことを示すと考えられる。

以上の結果から下位検査間で課題状況や反応の特徴に違いがあることが示唆されたので、次にこれらの反応の特徴と失敗傾向との相関を調べた。誤答率と省略率に関しては角変換した値を用いた結果を示したが、誤答数と省略数を用いた場合には1箇所を除いて⁴ほぼ表7-2-7と同じ結果が得られている。

表7-2-7 失敗傾向とNX下位検査における反応数との相関 (N=138)

NX下位検査	失敗傾向 アクションスリップ			認知の狭窄		衝動的失敗	
	もの忘れ	放心		妨害されやすさ	とらわれ		
1 類似反対語	-0.06	-0.02	-0.12	-0.06	-0.07	-0.04	0.03
2 重合板	-0.08	-0.09	-0.04	-0.13	-0.14	-0.09	-0.05
3 計算法	-0.02	0.01	-0.06	-0.09	-0.08	-0.08	-0.09
4 マトリックス	-0.04	-0.06	0.02	-0.07	-0.11	0.00	-0.02
5 文章完成	0.06	0.05	0.06	-0.19 *	-0.14	-0.20 *	-0.01
6 日常記憶	-	-	-	-	-	-	-
7 折紙パンチ	-0.09	-0.07	-0.09	-0.23 **	-0.25 **	-0.13	-0.07
8 符号交換	-0.11	-0.09	-0.11	-0.16	-0.09	-0.20 *	-0.02
9 図形分割	0.00	0.00	0.00	-0.15	-0.15	-0.11	-0.09
10 乱文構成	-0.06	-0.02	-0.14	-0.20 *	-0.18 *	-0.18 *	-0.16
11 ソシオグラム	0.04	0.04	0.02	-0.12	-0.12	-0.09	-0.03
12 単語完成	0.01	0.03	-0.03	-0.10	-0.06	-0.13	0.00

※ *: $p < 0.05$, **: $p < 0.01$.

※ 日常記憶では反応数に明らかに天井効果が認められたので、相関を求めなかった。

反応数と“アクションスリップ”及び“衝動的失敗”はほぼ無相関であるが、“認知の狭窄”では文章完成、折紙パンチ、乱文構成で弱い負の相関が認められ、“認知の狭窄”得点の高い者はこれらの課題において反応に時間がかかることが示唆される。

予測通り遂行と失敗傾向の相関は全体に低かったが、興味深いのは図形分割の誤答率と“認知の狭窄”との間に有意な正の相関が見られたことである。

⁴ 乱文構成の省略数は“もの忘れ”と $r = 0.192$ ，“アクションスリップ”と $r = 0.178$ ($p < 0.05$) の相関を示した。

表7-2-8 失敗傾向とNX下位検査における誤答率との相関

(N=138)

NX下位検査	失敗傾向 アクションスリップ		認知の狭窄			衝動的失敗	
	もの忘れ	放心	妨害されやすさ		とらわれ		
1 類似反対語	-0.20 *	-0.16	-0.20 *	-0.19 *	-0.15	-0.20 *	-0.06
2 重合板	-0.06	-0.07	-0.01	-0.05	-0.05	-0.03	0.06
3 計算法	-0.03	-0.03	-0.01	0.07	0.11	0.00	-0.08
4 マトリックス	0.07	0.04	0.11	-0.09	-0.09	-0.07	0.02
5 文章完成	-0.06	-0.01	-0.15	-0.02	0.01	-0.05	-0.01
6 日常記憶	0.00	-0.03	0.07	0.02	-0.07	0.14	0.05
7 折紙パンチ	-0.03	-0.04	0.00	-0.05	-0.05	-0.03	0.11
8 符号交換	0.03	0.00	0.07	0.02	-0.02	0.07	0.08
9 図形分割	0.11	0.08	0.12	0.25 **	0.24 **	0.19 *	0.15
10 乱文構成	-0.09	-0.07	-0.11	-0.09	-0.05	-0.10	-0.11
11 ソシオグラム	0.11	0.15	-0.03	0.02	0.04	0.00	0.06
12 単語完成	-0.10	-0.09	-0.09	-0.02	0.01	-0.06	-0.01

※ *: p<.05, **: p<.01.

図形分割では課題自体の困難さに加えて、回答選択肢が用意されていないために参加者は自力で正答を導かなければならない。他の課題では強い確信がなくても回答を選ぶことができ、偶然それが正答である可能性もあるが、この課題ではランダムに反応すれば誤答につながる可能性が高く、所謂“response uncertainty” (Kagan, 1987) が高く、遂行に対する不安が喚起されやすい状況であると考えられる。“認知の狭窄”は、ストレスなどによって処理容量が有効に使えない時に、可能な選択肢を検討して適切な行動を選ぶことが困難になる傾向なので (山田, 1999a), この得点の高い者はこうした課題状況では回答を吟味して正答に到達することが困難なのではないかと考えられる。

表7-2-9 失敗傾向とNX下位検査における省略率との相関

(N=138)

NX下位検査	失敗傾向 アクションスリップ		認知の狭窄			衝動的失敗	
	もの忘れ	放心	妨害されやすさ		とらわれ		
1 類似反対語	-0.01	0.03	-0.11	-0.04	-0.01	-0.07	0.00
2 重合板	-0.02	-0.04	0.01	0.14	0.11	0.14	-0.01
3 計算法	-0.07	-0.11	0.06	0.02	0.06	-0.04	-0.16
4 マトリックス	-0.11	-0.11	-0.07	-0.07	-0.06	-0.08	-0.04
5 文章完成	-0.16 *	-0.18 *	-0.06	-0.04	-0.05	-0.01	-0.14
6 日常記憶	-0.03	0.01	-0.08	0.16	0.11	0.17 *	0.09
7 折紙パンチ	-0.17 *	-0.22 **	0.02	0.01	0.05	-0.04	-0.15
8 符号交換	0.03	0.01	0.07	0.03	-0.02	0.08	0.08
9 図形分割	0.02	0.01	0.02	0.02	0.00	0.04	-0.03
10 乱文構成	0.03	-0.01	0.10	0.14	0.11	0.14	0.15
11 ソシオグラム	0.19 *	0.17 *	0.16	0.09	0.02	0.16	0.20 *
12 単語完成	-0.06	-0.06	-0.05	-0.13	-0.18 *	-0.03	0.03

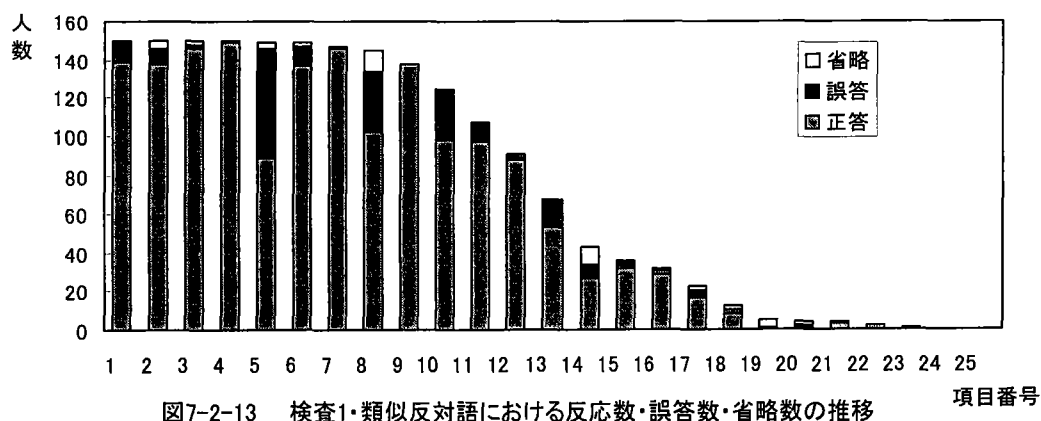
※ *: p<.05, **: p<.01.

またソシオグラムにおいて省略率と“アクションスリップ”及び“衝動的失敗”との間に、弱いながらも正の相関が認められたことも興味深い。ソシオグラムは先述のように1問あたりの所要時間が最も長いと考えられる課題で、そうした状況では、集中が続かない（“アクションスリップ”）、状況を把握することなく素早く決定してしまう（“衝動的失敗”）などの傾向に見られるような、ある種のスパンの短さが反応の省略に関係する可能性が考えられるからである。1問あたりの平均所要時間が次に長い乱文構成でも、省略数を用いた場合にはやはり“アクションスリップ”との間に正の相関が認められた。

3. 失敗傾向とNXにおける誤答との関係

下位検査内の項目ごとに、前節で用いた反応の指標と誤答の種類を調べた。ここでは下位検査ごとの有効データを用いたため合計の参加者数は異なる⁵。図には項目の系列順に正答、誤答、省略の度数を積み上げグラフで示した。各項目の内容と誤答の種類及びその度数は資料として添付した。

1 類似反対語



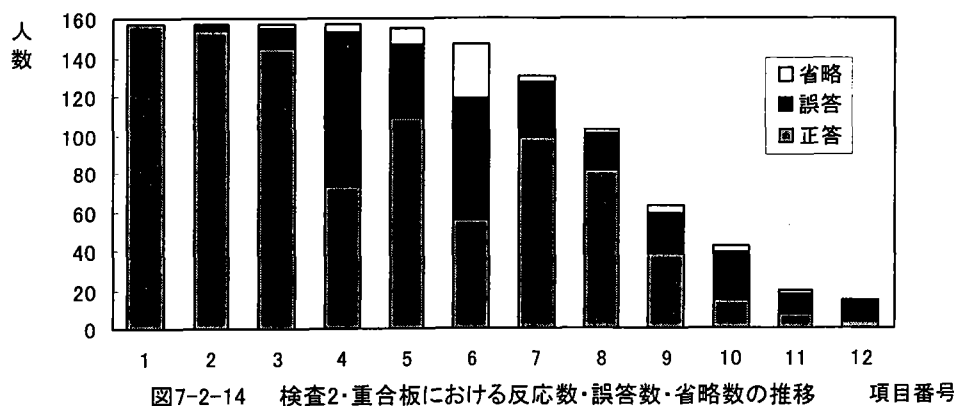
この図から、項目によって誤答率にかなり差があることがわかる。最も誤答率が高いのは「気分」の類似語として「気持ち」を選ぶ項目5で、147名中57名が誤答であった。そしてそのうち56名が「感情」を選んでいて、

⁵ いくつかの下位検査でデータが欠損している参加者が数名あったため。

次いで誤答率が高いのは「工夫」の類似語として「考案」を選ぶ項目 8 で、145 名中 31 名が誤答、うち 29 名は「発明」を選んでいて、「儉約」の反対語で「浪費」を選ぶ項目 10 では 124 名中 26 名が誤答であり、うち 25 名が「貯金」を選んだ。また「てつだい」の類似語として「てだすけ」を選ぶ項目 13 も誤答率はほぼ同じで、67 名中 14 名が誤答でその全員が「おつかい」を選んでいて。

これらの高頻度の誤答に見られる共通点は、それが同義語ではないにしても問題の単語と意味的に強い関連を持つ単語であること、そして正答の選択肢よりも左の位置に呈示されていることである。日本語の横書きの表記形式上、おそらく参加者は左の選択肢から先に検討していくと考えられる。そしてある選択肢を正答だと判断すれば時間的切迫感によってそれ以降の選択肢を検討しないで次に進んだのかもしれない。このように多数の参加者で同じ誤答が見られ、その原因もある程度推測できる場合、これを尤もらしい (plausible) 誤答と呼ぶことにする。

2 重合板



この課題は制限時間が 3 分と下位検査中で最も長い、最後の問題まで到達した参加者は 1 割に満たない。図からは項目 4 で急に誤答率が高くなっていることがわかる。課題内容を見ると、項目 1, 2 では文字盤の上に数字盤をそのまま重ねただけで答えられる問題であり、項目 3 は数字盤を右に 90° 回転して重ねればよい問題である。しかし項目 4 では数字盤を 1 行上にずらせるというイメージ操作が必要になる。つまり参加者はここで初めて、文字盤と数字盤が

きっちりと重ならない問題に遭遇する。反応した 157 名中 80 名が間違えており、そのうち 64 名が基準になる行をはさんで 1 行上の文字を答えているという結果も、数字盤を 1 行ずらすという操作がうまく行われなかったことを示している。次の項目では数字盤を 1 行上にずらし、さらに 1 列右にずらせることが必要であるが、ここでは 155 名中 38 名が誤答であり、そのうち 10 名は 1 行上にずらせただけで答えたと思われる誤答であった。

項目 6 も誤答率がかなり高い。この問題では、数字盤を 180° 回転した上で 1 行上・1 列左にずらすことが必要になる。147 名中 64 名が誤答であり、このうちで最も多かったのは 1 行上にずらせただけで答えたと思われる誤答であった (25 名)。全体に、数字盤に加える操作が多くなるほど誤答率が高くなり、その種類も増えるようである。

またこの課題では、「なんという数字がくるか」という問題に対して文字を答えたり、文字を問うているのに数字を答える誤答もみられた。この種の誤答は項目 3 で 1 名、項目 5 で 7 名、項目 6 で 6 名に見られた。項目 3 は初めて数字盤の回転が必要になる問題であり、項目 5, 6 については先述のように必要な操作が多く困難度の高い問題だと考えられる。このように問題の負荷が高くなると文字盤と数字盤を区別して操作することが困難になるのかもしれない。

3 計算法

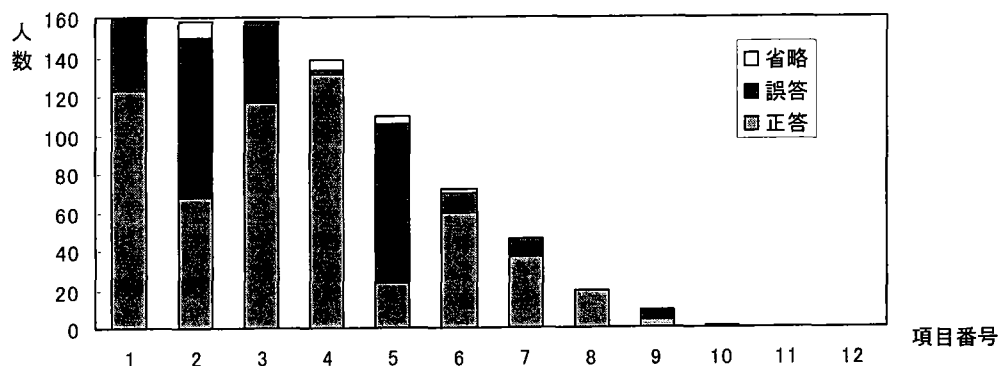
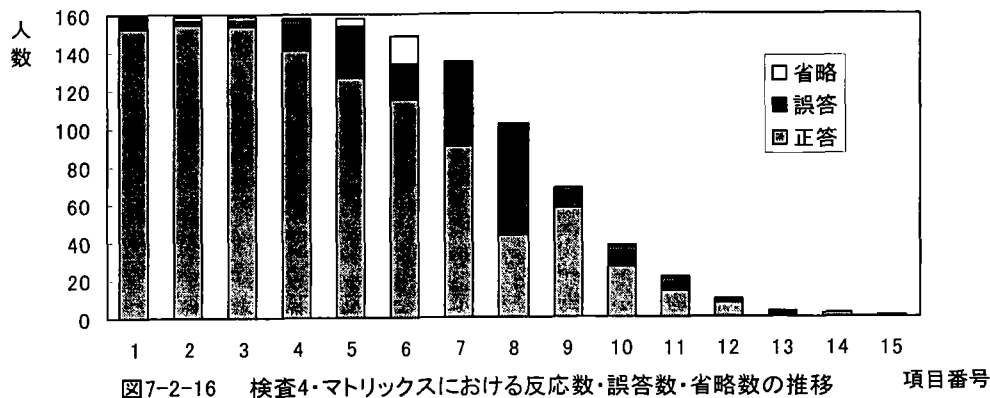


図7-2-15 検査3・計算法における反応数・誤答数・省略数の推移

他の課題に較べて全体の誤答率は高いが、項目ごとに見た場合には誤答率にかなり差がある。特に誤答率の高い項目 1, 2, 3, 5 のうち、2, 3, 5 では正

答の選択肢が5つのうち4番目に呈示されており、大多数の誤答は正答の前にある選択肢に集中している。中でも項目2は、158名中82名が誤答であり、そのうち65名が「×ー」の正答に対して「ー×」を選んでいる。また項目5では110名中82名が誤答で、そのうち72名が「ー×ー」の正答に対して「×ー」を選んだ。この課題でも、正答に似た内容で、しかも正答より左に呈示される選択肢が間違っ選ばれやすいようである。

4 マトリックス



この課題では項目3まで誤答率はあまり高くない。項目4では「温帯」について「あたたかい」と答えるところを「むしあつい」「しめっぽい」と答えた者が全体の約5%ある。「寒帯」が「さむい」,「熱帯」が「あつい」という他の対も考え合わせれば、湿度ではなく温度の特徴を答えることがより適切であることがわかる問題であるが、「蒸し暑い」「湿っぽい」は温帯の特徴として、より馴染み深いのかもしれない。

項目7, 8では誤答率がかなり高くなっている。項目7では「えんぴつー紙ー書く」と「のこぎりー木ー☆」の対になっており、正答は「切る」であるが、135名中43名が誤答であり、そのうち41名が「けずる」を選んでいった。この誤答は明らかに「えんぴつ」を「けずる」という意味的な連想からもたらされたものであろう。項目8は「日ー月ー年」と「分ー時ー☆」の対で、上段の組み合わせで時間の単位が一つずつ長くなっていることから、選択肢の中で適切な答えは「日」である。しかし「日」は既に問題の中で使われており、また下

段の組み合わせが「分」と「時」というより短い時間に関する単位であるため、間違っ「秒」を選んだ者が多かった。項目 8 では 102 名の反応のうち 58 名が誤答で、うち 39 名がこの誤答を選んでいた。

5 文章完成

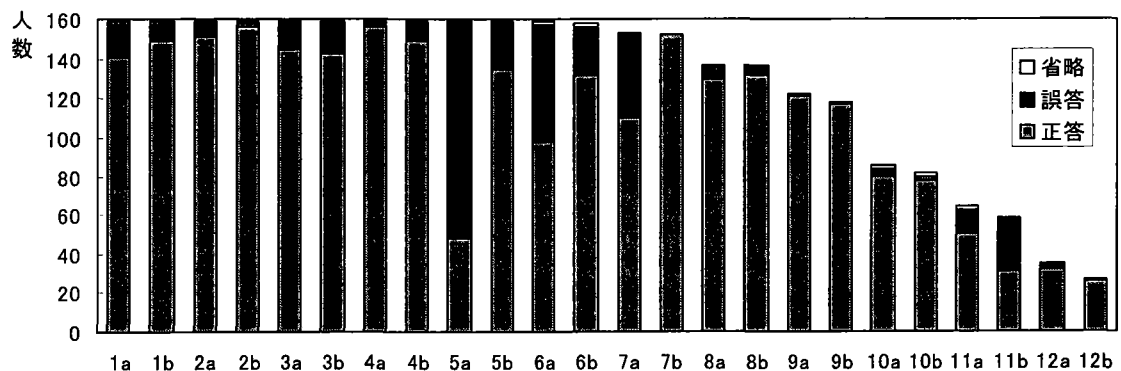


図7-2-17 検査5・文章完成における反応数・誤答数・省略数の推移

項目番号

誤答率が著しく高いのが項目 5 の最初の穴埋め部分である。この問題では 159 名中 111 名が誤答であり、しかもそのうち 105 名が同じ反応であった。この文章を正しく完成させると「友だちに話しかけても 応じて くれな_いので 気ま ずい 思いをした」となる。これに対して、後半も含めて最も多かった誤答で文章を完成させると「友だちに話しかけても 返事を くれな_いので ひどい 思いをした」となる。約 70% の参加者がこの選択肢を選んだことを考えると、「返事をくれな_い」は大学生の日常的な言葉遣いからすれば間違いとは言えないのかもしれない。

6 日常記憶

この課題ではほとんどの参加者が制限時間内にすべての問題に回答している。この課題では回答選択肢がある問題（再認）と、自由に答を書く問題（再生）とがあり、誤答率の低い項目 2, 4, 6 は選択肢がある問題である。再生問題では、何かが行われる曜日を答える問いが 3 問あり（項目 1, 3, 7）、文章中に出た曜日以外の誤答もかなり出ている。またある日付を答える問題（項目 5）では、文章中に出てきたもう一つの日付を答える間違いが誤答の約半数を占めた

が、一度も文章中に出てこなかった数字が答えられている間違いも少なくない。選択肢が用意されていない問題では、これらのようにランダムな誤答が生じやすいようである。

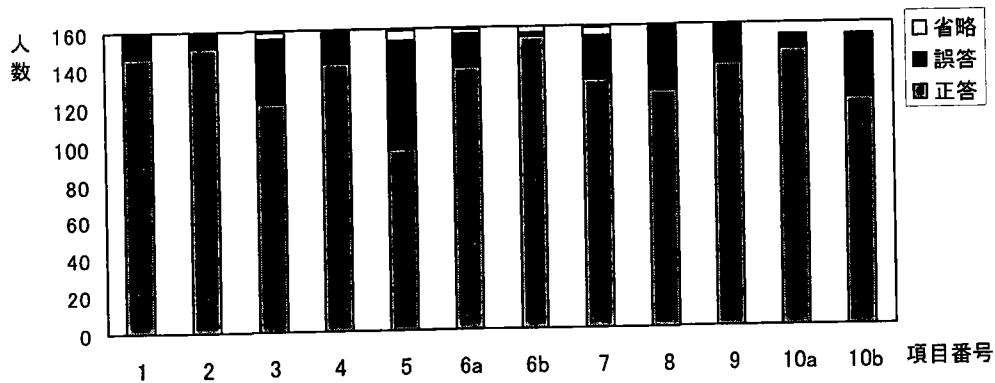


図7-2-18 検査6・日常記憶における反応数・誤答数・省略数の推移

7 折紙パンチ

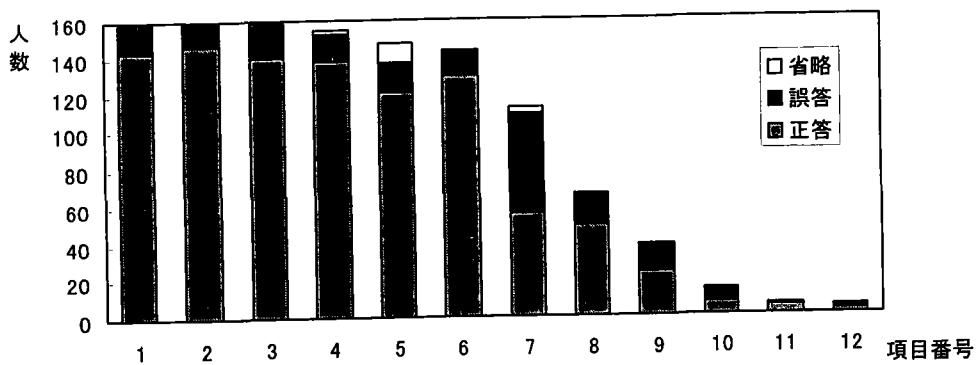


図7-2-19 検査7・折紙パンチにおける反応数・誤答数・省略数の推移

この課題では、項目間の誤答率の差はあまり大きくない。例外は項目7で、112名中53名が誤答であった。誤答の内訳は3つの選択肢で29名、11名、10名と目立って偏っているわけではない。この問題では他の問題とは違って、正答の選択肢が左に示された折紙を広げてから上下を逆にした向きで示されている。そして先述の3種類の誤答はいずれも折り紙をそのまま広げた向きで描かれた選択肢であった。つまりこの問題は、それまで必要なかった、折紙を展開してから回転するという操作が初めて必要になった問題であり、これまでのや

り方に頼っていた参加者では正答を出すことが困難であったと思われる。

8 符号交換

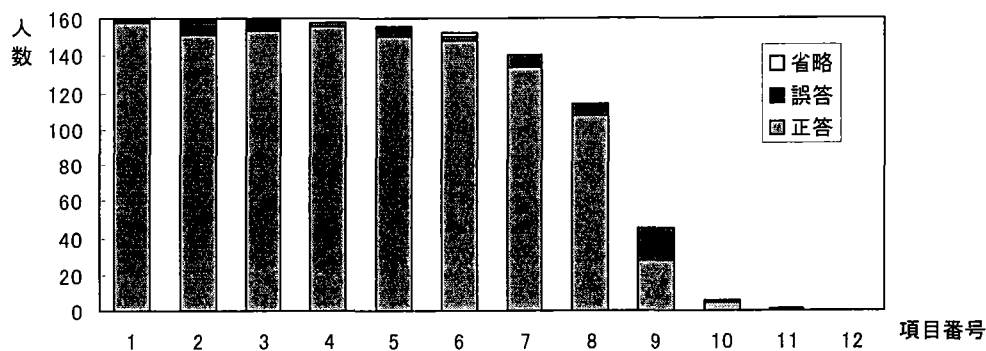


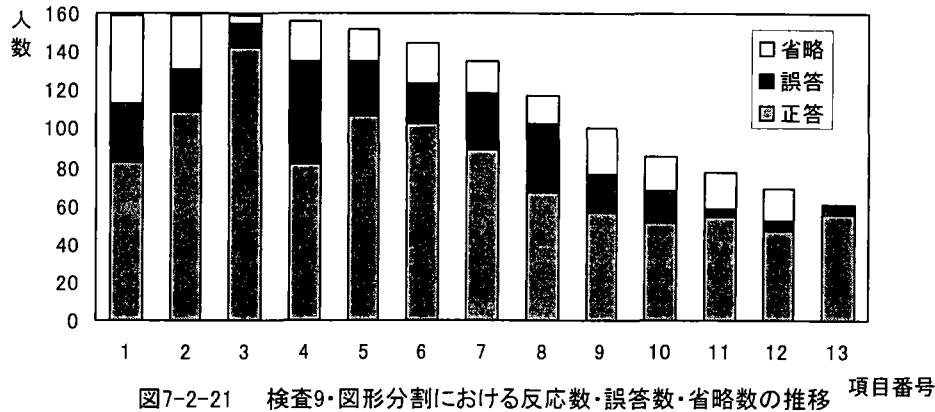
図7-2-20 検査8・符号交換における反応数・誤答数・省略数の推移

この課題では全体に誤答率・省略率ともに低いが、項目9で反応数が急激に減っており、また誤答率も他の項目に較べると高いことがわかる。項目9では45名中18名が誤答であった。誤答の内訳は、「 $13+4\div 3=3$ 」を選んだ者が8名、「 $15\times 5+7=10$ 」を選んだ者が8名であった。項目8までは符号を1個だけ使う式であったのが、項目9では符号が2個に増える。そして2つの誤答は、最初の符号は教示通りに交換し、2番目の符号はそのままで計算した場合に出る答が書かれた選択肢であった。変換する符号の数が増えるという課題の変化に対応できなかった誤答と言えるだろう。

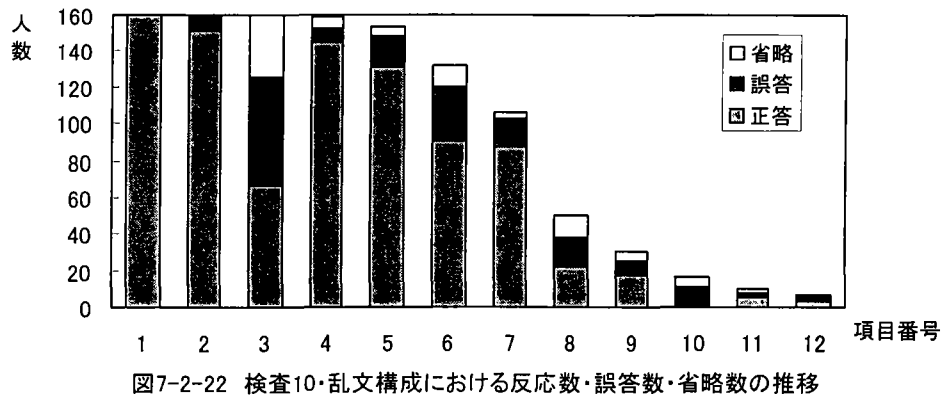
9 図形分割

この課題では他の課題に較べると全体に誤答率・省略率が高い。最も誤答率が高いのは項目4であるが、この図形は屈点が4個と少なく（標準図形の正方形と同じ数）、正方形と同じままで保たれている辺が2辺あり、正方形と較べると三角形の領域が不足することがわかりやすいためか、誤答した53名中39名が、違う箇所から三角形を分離させる線を引いている。同様に項目2も屈点が4個で正方形の輪郭もほとんど変化がなく、三角形の領域が余ることがすぐにわかるような図形であり、誤答22名中11名が三角形の分離のさせ方で間違っている。このように比較的容易な問題では尤らしい誤答が見られるが、屈点

の数が増えて輪郭の変化が大きくなると誤答のバリエーションも増えるため、
明らかな傾向は認めにくくなる。



10 乱文構成



この課題では項目3における反応傾向が他の項目と著しく異なっている。問題は「何年ですか 1947年 昭和13年は ですが 昭和22年は」と呈示されており、これを正しく構成すると「昭和22年は1947年ですが、昭和13年は何年ですか」で正答は「1938年」である。この問題では160名中59名が誤答であり、そのうち41名は「1956年」を選んでいった。これらの参加者はおそらく「昭和13年は1947年ですが、昭和22年は何年ですか」という文章を構成し、そして $1947 + (22 - 13)$ と計算して1956年という答を導いたのだろう。昭和13年ではなく、昭和22年が1947年であることを確認しなかったための誤答と思われるが、この誤答では西暦と昭和という二つの年号の差が

共に9年になり一見正しいように見えるため、それ以降の選択肢が検討されることがなかったのだろう。「1956年」が一番左に呈示される選択肢である。

11 ソシオグラム

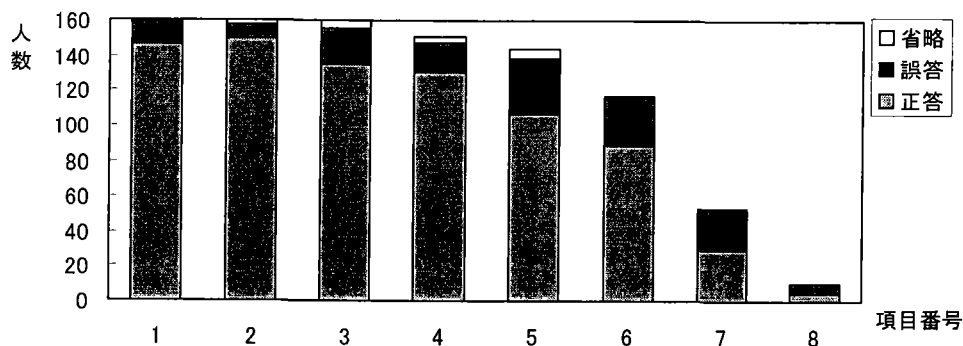


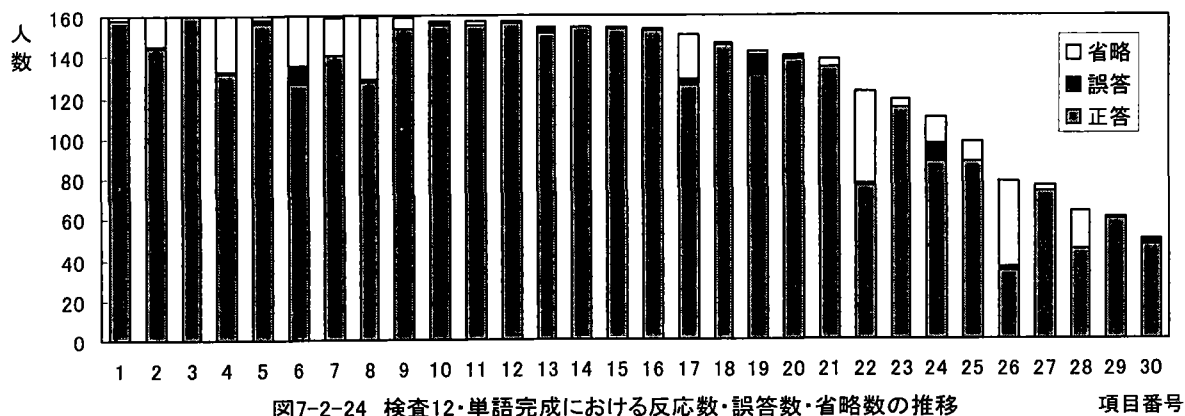
図7-2-23 検査11・ソシオグラムにおける反応数・誤答数・省略数の推移

この課題では3つのソシオグラムが順に複雑になっていく。問題1, 2, 3のソシオグラムでは名前の情報があらかじめ与えられており、円の数は5である。問題4, 5では名前の情報がなく、円の数は5であり、問題6, 7, 8では名前の情報がなく円の数が6に増える。また、問題も「友人の最も少ない人は何番ですか（問題1）」のような単純なものから、「木村君も田中君もそろって、山田君や竹中君と仲が悪い。私は逆にこの2人とも仲がいい。私は何番ですか（問題8）」のように条件の多いものになっていく。問題1, 2は条件が一つだけであり、すべての円についてその条件を満たしているかを調べることはそれほどむずかしくないだろう。問題3では初めて複数の条件をともに満たす円を探さなければならず、その困難さのためか省略率がいくらか高くなっている。

12 単語完成

この課題では誤答率が非常に低く、それに比して省略率は他の下位検査の中でもやや高い。回答選択肢は用意されていないが、もし間違ったら単語として読めないのであるから、参加者自身にも誤答であることは明白にわかるだろう。このような状況では、適切な文字を思い浮かばなければ、間違えよりもむしろその問題を飛ばすことを選ぶのかもしれない。

誤答の主なものを見ると、項目6「さわ^やかな」で「ざ」と答えた者が7名、項目19「^よろこぶ」で「ね」と答えた者5名、「ほ」と答えた者が3名、項目24「く^ちびる」で「た」と答えた者が6名であった。項目6の誤答は「沢魚」だろうか、「かわざかな（川魚）」からの音韻的・意味的連想かもしれない。項目19はおそらく「ろ」と「こ」の順序を間違えて「ねころぶ」「ほころぶ」と完成させたつもりの誤答だろう。項目24は「くたびれる」かもしれない。



以上の検討から誤答の生起につながる状況側の要因をいくつかあげることができる。それは(1)課題の困難度が高くなる場合、(2)問題解決の方略を途中で変えなければならない場合、(3)尤もらしいが誤った反応の選択肢（意味的関連があるもの、正答より左に呈示されるものなど）がある場合などである。そこで次に、頻度の高かった誤答とそれ以外の誤答を区別して失敗傾向との関係を調べてみた。NX全体では187項目あるが、そのうち参加者の半数（80名）以上が回答した127項目の中で、回答のうち10%以上の割合で同じ誤答が現われたのは24項目であった（資料参照）。これを便宜的に高頻度の誤答の基準とし、NX全体における全誤答数、高頻度の誤答数⁶、それ以外の誤答数という3種類の誤答数をカウントした。

表7-2-10 誤答数の平均値とSD

	平均	SD	レンジ
全誤答数	16.16	7.36	1~48
誤答数1	5.86	2.19	0~12
誤答数2	10.30	6.33	0~41

※誤答数1:高頻度の誤答の数。 誤答数2:全誤答数－誤答数1

誤答数 2 が左寄りの分布となったのに較べると、誤答数 1 の分布は歪みが小さい。なおこれらの 2 変数の相関は $r=.34$ ($p<.01$) であった。

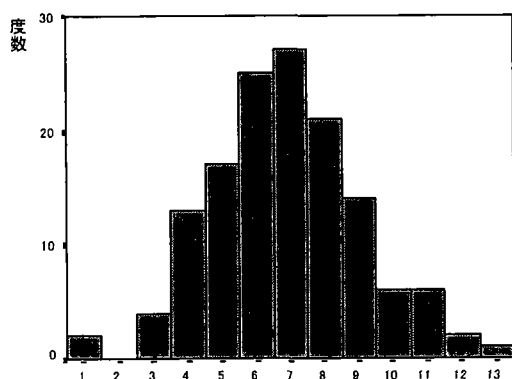


図7-2-25 誤答数1の分布

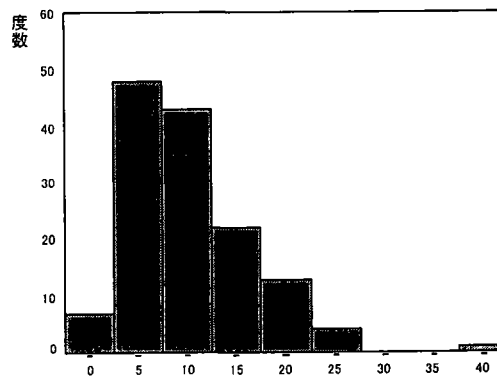


図7-2-26 誤答数2の分布

この 2 種類の誤答数と失敗傾向, IQ, 及び課題評価の指標との相関を求めたところ, 誤答数はいずれも失敗傾向得点とは無相関であった。課題評価との関係を見ると, 誤答数 1 では時間的プレッシャー, 緊張, 正確さ重視といずれも弱い負の相関が認められた ($r_s=-.23, -.20, -.21$)。つまり, 課題状況に対してあまり緊張せず, それでいて早く反応しようとした者ほど誤答 1 が多かったことになる。先に述べたように誤答 1 は正答よりも先に呈示される尤もらしい選択肢が選ばれ, それ以降の検討が省略されたと考えられる誤答であるから, 課題をそれほど脅威的でないと認識した時にはそのような方略が採られやすくなるのではないかと推測できる。

誤答 1 が間違いやすい誤答と考えられるのに対して, 誤答 2 はそれ以外の誤答の集合であるからその性質は明らかではないが, IQ とごく弱い負の相関があり ($r=-.19, p<.05$), 「できない」誤答が含まれている可能性もある。

【 全 体 の 考 察 】

知能と失敗傾向の間には, 予測していたように弱い相関しか認められなかった。本節での最初の目的は, 質問紙で測られる失敗傾向は能力の低さによるで

⁶ 24 項目あるので, この誤答数の理論レンジは 0~24 となる。

きない失敗を捉えているのではないという形で消去法的に失敗傾向の構成概念を明確化していくことであったが、これはひとまず確かめられたと考えてよいだろう。

次に個々の下位検査における誤答と失敗傾向の関係を調べたところ、課題状況が比較的弱い場合には、誤答や省略といった遂行の特徴と失敗傾向の間に弱い有意な相関が認められることがわかった。自らで可能な反応を探し出し、それを吟味して正答に至ることが求められる課題では、“認知の狭窄”と誤答率の間に正の相関が得られた。“認知の狭窄”はストレス場面において関連情報を広く検討して問題解決を行うことに失敗するという特徴を持つので、選択肢が用意されていない課題ではそのような特徴が誤答につながったのだと解釈できる。また一反応あたりの所要時間が他に較べて長い課題では、“アクションスリップ”及び“衝動的失敗”と省略率の間に正の相関がみられた。集中が続かない（アクションスリップ）、状況を完全に把握する前に先へ進んでしまう（衝動的失敗）といった特徴が、反応せずに次の項目に移るという形で現れたのかもしれない。

更に項目レベルで誤答の種類と頻度を調べたところ、誤答の中には頻度が高く、その間違いに至ったプロセスを想像しやすいものがあった。このような誤答は能力の高さ（IQ）とは関係がなく、参加者が課題状況を容易なものと判断した時に、十分な検討を行わず、正答らしく見える選択肢を選ぶことによって起こるのではないかと考えられた。しかし実際にはこのような尤もらしい（plausible）誤答だけではなく、頻度が低く、なぜその反応が導かれたかがわかりにくい誤答も多かった。Reason（1990）の表現に従えば前者を予測可能な“constant errors”，後者を予測困難な“variable errors”と呼ぶこともできるだろう。後者の場合、問題の読み間違い、答の書き間違いといったレベルのものから、その項目を正答する能力がないなど、さまざまな要因が可能であり、誤答のバリエーションも広がることが予想できる。集団式知能検査という方法ではこれ以上の指標がないため誤答分析は頻度の高いものに限られたが、可能な（possible）誤答の中でなぜその誤答が起こったのかのについて個別的に検討してみることで、新たな予測要因が見出される可能性があるかもしれない。

7-3 集団式作業検査における遂行との関係

内田クレペリン精神検査（以下 UK）の課題内容は一桁の数字の加算作業を連続的に行うという単純なものであるが、作業量水準の高低やその変動のパターン、誤りの量などから個人の諸行動の根底にある特徴を捉えることができると考えられており（日本・精神技術研究所, 1973）、仕事場面での成績、事故傾向、犯罪傾向、学業成績、性格特性などとの関連が検討されている。前節で用いた京大 NX 式知能検査に較べると UK には(1)課題内容そのものが単純で容易である、(2)同じ課題を長時間行いつづけるという特徴があり、こうした課題状況下での遂行と失敗傾向との関連を検討するのが本節の目的である。

UK では、作業曲線や作業量水準、誤答数などが健常な参加者に共通して見られる「定型」からどの程度隔たっているかを判定する曲線類型判定と、それらの検査結果に臨床的観察なども交えながら個人の心的活動性の具体的様相を捉える個別診断的判定が行われる。

定型とされる検査結果には次のような特徴が見られる。

- ・休憩前(前期)の作業曲線が U 字型あるいは V 字型である。
- ・休憩後(後期)の作業曲線は右下がりである。
- ・前期の作業量よりも後期の作業量が全体に増加する(特に後期の始め)。
- ・作業曲線には適度な同様(ギザギザ)がある。
- ・誤答が殆どない。
- ・作業量が極端に低くない。

結果が定型となるような人は、仕事を与えられた時には熱心に取り組み、長時間ムラなく緊張を持続することができ、誤りも少ないと考えられている。反対に UK における「非定型」の遂行とは、作業量が少ない、誤りが多い、作業量の変動が大きすぎる(もしくは小さすぎる)、休憩後の作業量低下などの特徴を持ち、そのような人は日常生活でも仕事を行う際に誤りやすく、やる気や緊張の持続に問題があると思われる。また非定型の顕著なものは、諸種の精神病患者、精神薄弱者、異常性格者、災害頻発者、問題行動者などに多く見られるとされている。

そこでここでは曲線類型判定で用いられるいくつかの数量的指標を用いて、UK における作業の特徴と失敗傾向との関連を検討する。前節でも述べたが、

検査場面に置かれるということ自体が状況の強さを規定するから、健常である程度の能力を有する参加者の遂行の多くは定型に近いものになるだろう。おそらく失敗傾向との関係もそれほど顕著なものではないと予測される。しかし課題状況の違いに注目し、UKで行う課題の容易さとそれが長時間に及ぶ単調さや疲労という点を考慮するならば、慣れた作業を行う際に起こりやすいとされる“アクションスリップ”とUKの遂行との関係に関心が持たれる。

【 方 法 】

実施日時：1999年10月～12月。

参加者：心理学関連の講義を受講する女子大学生3・4年生（グループ17）。

希望者に対してUK及び課題状況や遂行に対する評価を求める質問紙を実施し、4週の間隔をおいて失敗傾向質問紙を実施した。UKの受検者は55名、失敗傾向質問紙の回答者は56名で、UKと失敗傾向質問紙の組み合わせでは51名から有効データを得た。

内田クレペリン精神検査（UK）：横に並んだ数字を1字目と2字目、2字目と3字目というように順に加算し、答の一桁目を数字の間に書きこんでいき、1分ごとの合図に従って次の行に移る。練習2分—前半15分—休憩5分—後半15分で実施される。遂行に際しては特に速さや正確さを強調するような指示は与えられず、「熱心にやって下さい」と教示される。また書き間違った時には訂正するように説明される。

【 結 果 と 考 察 】

1. 各測度の基本統計量

失敗傾向質問紙の尺度得点は表7-3-1に示した。女子学生の標準データから算出した得点偏差値は49～53で、“アクションスリップ”がいくらか高く、残りの得点については標準データにごく近い値であった。

表7-3-1 グループ17における失敗傾向質問紙の尺度得点
(N=51)

	平均値	SD	得点偏差値
アクションスリップ	22.00	5.18	53
もの忘れ	14.02	3.85	52
放心	7.98	2.08	53
認知の狭窄	18.51	4.55	49
妨害されやすさ	10.82	2.89	49
とらわれ	7.69	2.66	50
衝動的失敗	7.57	3.53	50

UK についてはさまざまな数量的指標が考案されており，ここでは以下の指標を求めた．*のついているものは前・後半ごとにその指標を算出した．

平均作業量* …1分ごとの作業量の平均値．

誤答数* ……誤答の総数．

平均誤謬率* …(1行あたりの平均誤答数/1行の平均作業量)×100．

後期増減率 …(後半の平均作業量/前半の平均作業量)×100．

Pf(Profile Fluctuation)値…実際の作業曲線と期待値のずれの大きさを表す¹．

表7-3-2 内田クレペリン精神検査における各指標の基本統計量

	グループ17 (N=51)			参考資料 (N=82)	
	平均値	SD	レンジ	平均値	SD
平均作業率(全体)	61.21	11.42	39.23~86.33	52.2	14.0
平均作業量(前半)	57.02	11.25	35.27~81.33	—	—
(後半)	65.40	11.75	42.93~91.33	—	—
誤答数(全体)	9.24	8.97	0~49	27.0	23.1
誤答数(前半)	4.39	5.26	0~32	—	—
(後半)	4.84	4.94	0~27	—	—
平均誤謬率(前半)	0.54	0.66	0.00~3.86	—	—
(後半)	0.53	0.58	0.00~3.11	—	—
後期増減率	115.24	6.01	102~134	—	—
Pf値	9.75	5.52	3.35~37.43	9.8	5.2

※ 参考資料は瀧本・山田・臼井(1985)より引用．被験者は販売業に従事する10代～60代の女性．

表 7-3-2 には参考資料として瀧本ら (1985) が報告している女性のデータを

併記した。この結果と較べると今回のデータは Pf 値では殆ど差がないが、作業量は多く、誤答数がかなり少なくなっている。作業量による量級段階の判定では最も高い㊤段階と分類される者が 28 名あり、以下 A 段階 18 名、B 段階 5 名で C、D 段階に分類される者はいなかった。このことから今回の参加者の遂行が比較的水準の高いものであったことがわかる。

これらの指標の分布を図 7-3-1~7-3-6 に示した。前・後半ごとに指標を求めた場合は、比較のために数値軸の目盛を揃えた。

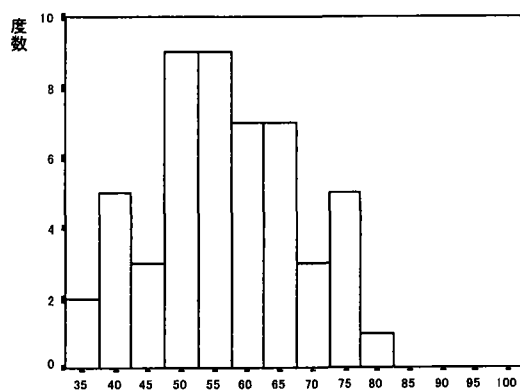


図7-3-1a 平均作業量(前半)の分布

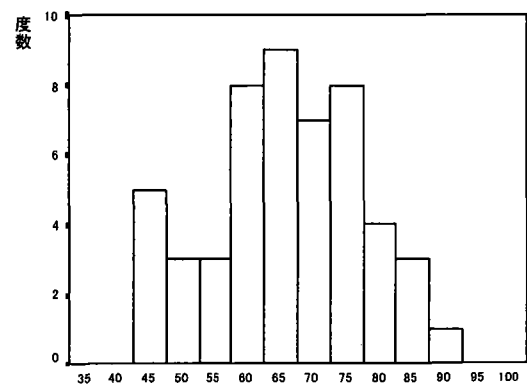


図7-3-1b 平均作業量(後半)の分布

作業量は前半から後半へ全体に増加している。前半・後半の作業量の相関係数は $r=.97$ ($p<.01$) と非常に高い。

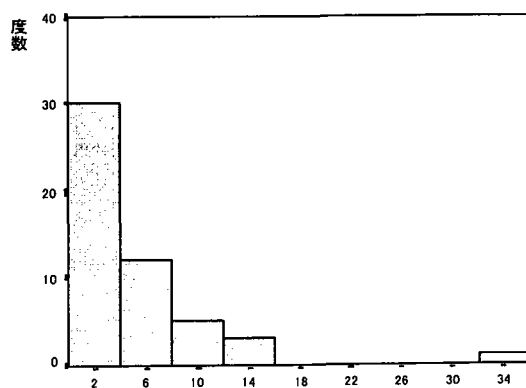


図7-3-2a 誤答数(前半)の分布

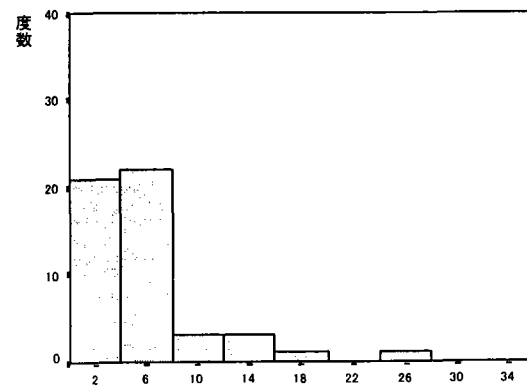


図7-3-2b 誤答数(後半)の分布

¹ 中塚 (1991) で紹介されている方法に従って算出した。

前・後半の誤答数の相関は $r=.55$ ($p<.01$) で有意であるが、作業量ほど安定していない。分布図からは誤答数が 0~4 の参加者が後半になると少なくなっていることがわかる。平均誤謬率でも同様の推移が見られる。

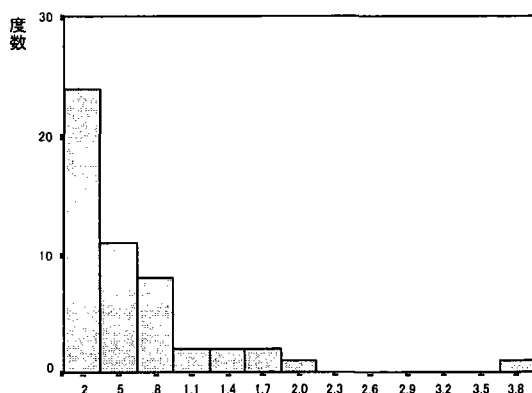


図7-3-3a 平均誤謬率(前半)の分布

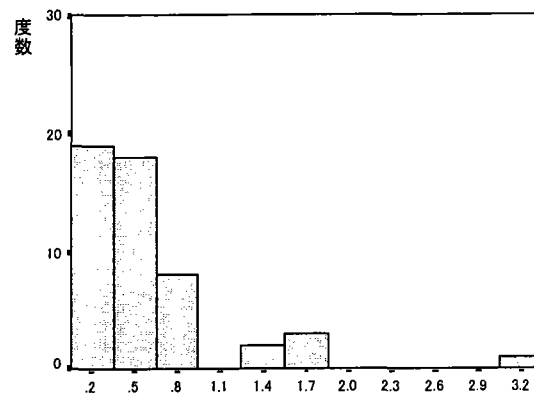


図7-3-3b 平均誤謬率(後半)の分布

図 7-3-4 から、後半では前半の作業量の 10~20%程度増加している参加者が多いことがわかる。また図 7-3-5 からは Pf 値がかなり高い参加者が数名いることが読み取れる。このような参加者では非定型的特徴が強いと思われるので、遂行の個別的な検討が必要になるだろう。

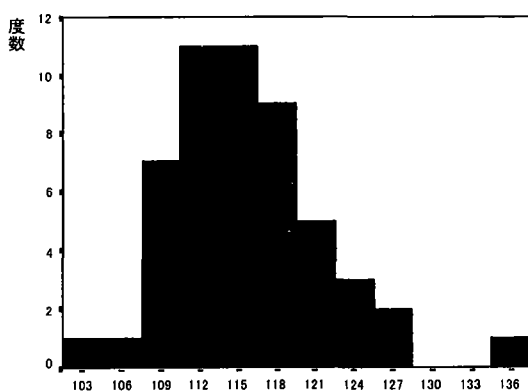


図7-3-4 後期増減率の分布

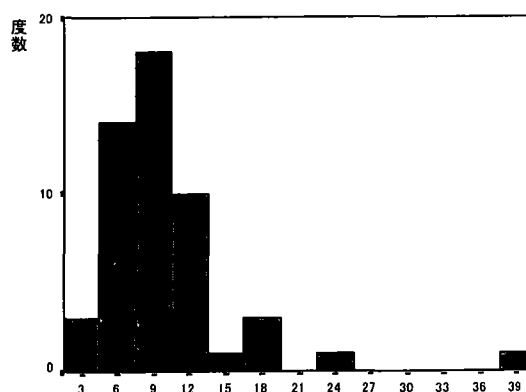


図7-3-5 Pf値(曲線変動値)の分布

2. 失敗傾向と UK における遂行との関係

まず失敗傾向と前節で求めた数量的指標との相関を求めた。その際、平均誤謬率の値には角変換を行った。

表7-3-3 失敗傾向得点とUKの指標との相関係数

(N=51)

UK	失敗傾向	アクションスリップ		認知の狭窄			衝動的失敗
		もの忘れ	放心	妨害されやすさ	とらわれ		
平均作業量(前半)	-0.23 +	-0.22	-0.17	0.14	0.15	0.08	-0.26 +
平均作業量(後半)	-0.24 +	-0.23	-0.18	0.16	0.17	0.10	-0.25 +
誤答数(前半)	0.14	0.22	-0.05	-0.23 +	-0.23 +	-0.15	-0.02
誤答数(後半)	0.27 *	0.28 *	0.17	-0.21	-0.17	-0.17	0.00
平均誤謬率(前半)	0.18	0.22	0.05	-0.14	-0.21	-0.02	0.12
平均誤謬率(後半)	0.22	0.21	0.14	-0.25 +	-0.27 +	-0.14	0.08
後期増減率	0.09	0.10	0.06	0.02	-0.01	0.05	0.16
Pf	0.20	0.14	0.24 +	0.15	0.17	0.07	0.11

※ *: $p < .05$, +: $p < .10$.

作業量、誤答数、Pf値の間にはいずれも有意な相関は認められなかった。作業量と失敗傾向の間にはごく弱い相関があり ($p < .10$)、"アクションスリップ" や "衝動的失敗" 傾向が高いほど作業量が少ないことが示唆された。また Pf 値と "アクションスリップ" にも弱い正の相関 ($p < .10$) があった。これらは定型からのずれの大きさを表す指標であり、"アクションスリップ" 得点が高いほど作業量にムラが出る傾向があることが示唆される。しかしこれらの相関はあまり高くなく、UK が本来測ろうとしている作業水準や定型性と失敗傾向の関係はあまり強くないことが確認された。

ここで唯一有意であったのが "アクションスリップ" と後半の誤答数との相関で、"アクションスリップ" 得点が高いほど後半における誤答が多いことを示している。このことは、容易で単純な作業を長時間行う際にはアクションスリップ傾向が失敗に結びつきやすいのではないかという予測と一致する。山田・瀧本 (1989) でも、UK では前半よりも後半のほうが遂行に個人差が現れやすいことが指摘されており、おそらく作業時間が長くなるほど学習効果や動機づけの維持など個人要因の影響が強くなり、個人差が発現しやすくなるのではないかと思われる。

誤答について他の失敗傾向を見ると、"認知の狭窄" ではごく弱いながら負の相関が得られており、"アクションスリップ" とは反対の傾向を示した。課題内容が容易な時には、ある程度の緊張をもって一つの処理だけに集中するような

やり方をとっていけば誤答が出にくくなるのかもしれない。また“衝動的失敗”は誤答の指標とは殆ど無相関であった。

なお UK での誤答数の分布には偏りが見られたため、失敗傾向得点を個人要因とした誤答数の比較も行った。大学生女子 1162 名の標準データから各失敗傾向得点の上位・下位 25%にあたる得点を算出し、今回の 51 名のサンプルをその得点に従って高・中・低得点群の 3 群に分けた。このうち“アクションスリップ”によって群分けした場合に 3 群の平均誤答数（後半）は 7.5, 3.7, 4.3 となり、高得点群で誤答数が多い傾向が見られた ($F(2,48)=3.06$, $p=.056$)。

3. UK における誤答の分析

前節では計算間違いを誤答としてカウントしたが、参加者自身にとって計算間違いは常に誤答であることが意識されるだろうか？ 短時間でできるだけ早く加算作業を行うことを要求されるため、おそらく多くの参加者は検算などせずに、「 $7+6=3$ のように覚えていった」、「初めは頭の中で暗算をして解いていたけど、慣れてくるとするする答が出てきたように感じた」¹のように、慣れるにつれてあまり注意を払わずに作業を進めていったと思われる。このような方略をとる場合、間違った数字と答の組合せがルールとして用いられれば、参加者自身はそれを誤答とは気づかないまま機械的に誤答を繰り返すだろう。こうした場合、ある数字の組合せで何度も同じ誤答が起こることが予想される。西川（1971）はこれを「誤りぐせ」と呼んだ。この誤答の発生メカニズムは“アクションスリップ”のそれと非常によく似ているため、本節では誤答の内容を分析し、このような高頻度の誤答とそれ以外のものを区別して失敗傾向との関係を調べてみる。

またここでは、自分が書きかけている（或いは書き終わった）数字が間違いであると気づいて正しい数字に訂正している反応の検討も行う。その反応は UK の標準手続きでは誤答ではなく評価材料として考慮もされないが、誤答との関連を考えれば興味深い反応である。検査後の報告では「自分が何を書こうとしているのかわからなくなった」、「数字が変な風に見えてきた」、「頭では 4

¹ いずれも参加者による検査後の報告。

を書きたいのに3と書くことがよくあった」などのように、同じ文字を連続して書かせる書字スリップの誘発実験（仁平；1990）で見られるような意図のブロッキング、意味の飽和、運動の自走などがUKの課題状況でも起こっていることがうかがえる。「先の計算間違いに気づいてもそのままにってしまった」と報告した参加者もいた。このような状況で間違いを訂正しているのは、計算結果や自分の手の動き、書いた数字などをある程度モニタリングしており、それを正しいもの書き直すという意志的な関わり方を示すのではないかと考えられる。

まず全参加者のすべての訂正反応をカウントした。平均訂正数は前半で11.29個（レンジ1~39個，SD=7.73），後半で15.10個（0~53個，SD=11.20）と誤答数よりかなり多く見られる。

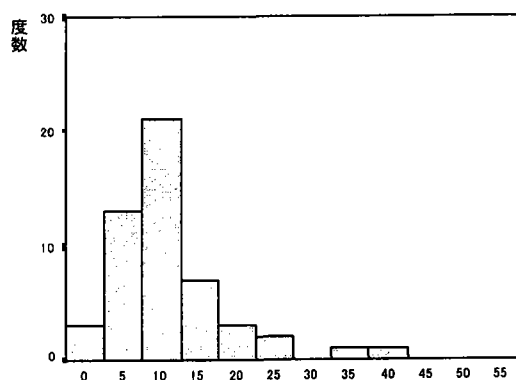


図7-3-6a 訂正数(前半)の分布

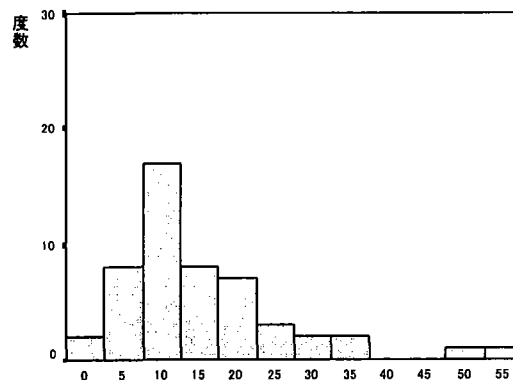


図7-3-6b 訂正数(後半)の分布

また誤答数には前・後半で有意な差はなかったが、訂正数は後半の方が有意に多くなっている ($t(50)=4.29, p<.01$)。

次に参加者全員の検査結果をチェックし、数字の組合せと誤答及び訂正反応の種類を調べた。誤答の中にはUKのテキストで紹介されているような一貫した計算方法の間違い（上下の数字を加算する，引き算をするなど）は見られなかった。

図7-3-7には数字の組合せ別に参加者全員の誤答数と訂正数を合計した度数を示した。この際、同じ組合せでも順序の違うものは別々にカウントした。グラフに「3+4」とあるのは3と4の組合せであり、次の列は4と3の組合せ

における誤答・訂正の度数を示している。数字の組合せは合計した数が小さいものから順に並べた。

図からわかるように、合計が 11 から 14 になる組合せで訂正数が著しく多くなっている。誤答数でもそれほど顕著ではないが同様の傾向が見られる。

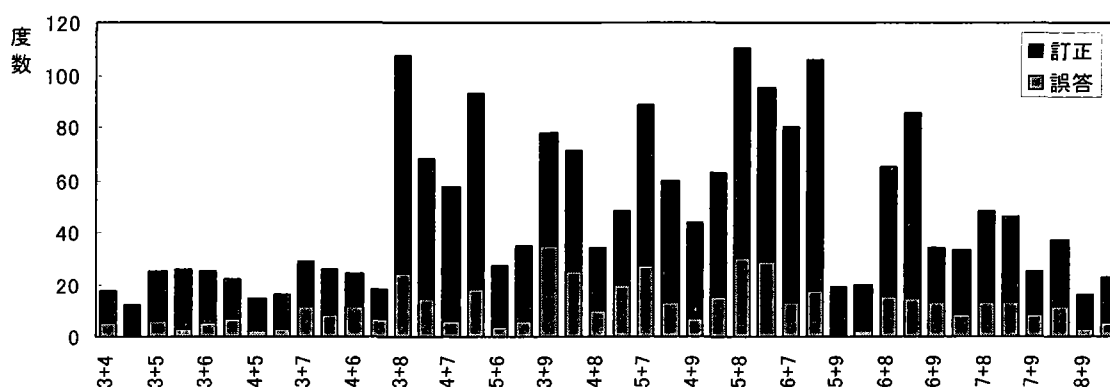


図7-3-7 数字の組合せ別の誤答数・訂正数

次に、それぞれの組合せにおいてどんな誤答が多く見られるのかを表 7-3-4 にまとめた。同じ数字の組合せは込みにして度数をまとめた。訂正反応は、最初に書いた誤りの数字が読み取れないものも多くあるため、ここではカウントしていない。

頻度の高い順に見ると、3 と 9 の組合せで 1 と答えたものが最も多く ($f=52$)、次いで 5 と 7 で 3 ($f=37$)、5 と 8 で 2 ($f=32$)、3 と 8 で 2 ($f=29$)、4 と 8 で 3 ($f=21$)、…となり、正答が 1 から 4 になる組合せにおいて正答±1 の誤答が著しく多いことがわかる。UK では二つの数字の合計が 10 を超える場合には下一桁だけを記入し、十の位の「1」は書かないように求められる。「1」を書く動作を抑制することと正答±「1」の誤答の多さの間は何らかの関係があるのかもしれないが、これは推測の域を出ない。

次に参加者ごとに誤答の内容を調べ、誤答の種類と最も多かった誤答の頻度をカウントした。例えば「9 と 4 で 1」、「6 と 8 で 3」、「4 と 9 で 1」、「7 と 9 で 5」、「9 と 4 で 1」という 5 つの誤答を出した参加者では、誤答の種類は 3 (「9 と 4」と「4 と 9」は同じ種類と見なす)、最大頻度は 3 となる。

表7-3-4 数字の組合せ別の誤答の種類と度数

組合せ	誤答									
	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9
3+4, 4+3	1				1	1				2
3+5, 5+3	1		3	2	1	1				1
3+6, 6+3	3		1		1				7	
4+5, 5+4					1	2		1	1	
3+7, 7+3		8	2			3		2		4
4+6, 6+4			1		2	2	3		2	8
3+8, 8+3	2		29	4						3
4+7, 7+4	1		6	16			1			
5+6, 6+5	1			1	3	1			1	3
3+9, 9+3		52		2	1		2	1		2
4+8, 8+4		4		21	2			3		
5+7, 7+5	2			37					1	
4+9, 9+4	1	6	8			5	2			
5+8, 8+5		3	32		18	1		1	4	
6+7, 7+6	1	9	1		10	4	3	1	1	
5+9, 9+5						2				1
6+8, 8+6		1	1	17		4	4	2		
6+9, 9+6		1	3	1	6		1	9		
7+8, 8+7		2	5	6	1		4	4		4
7+9, 9+7			1	2	1	6		4	5	
8+9, 9+8		1				3			2	2

※ 灰色の部分はそれぞれの組合せにおける正答。

これらの指標を用いるのは、全体の誤答数には誤りぐせによる誤答が含まれる可能性があるため、誤答の種類をカウントすることで誤りぐせに影響されない誤答のバリエーションの広さを捉えることができるのではないかと考えたためである。また最大頻度は先に述べたように、誤ったルールを機械的に用いるほど大きくなると予測できる。なおここでは全体の誤答数が0である5名のデータを除き、残りの46名について分析を行った。

表7-3-5 誤答の種類と最大頻度 (N=46)

	平均値	SD	レンジ
誤答の種類	6.43	3.63	1~18
誤答の最大頻度	3.67	5.22	1~32

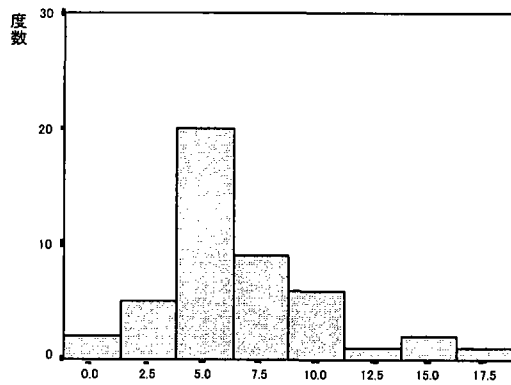


図7-3-8 誤答の種類分布

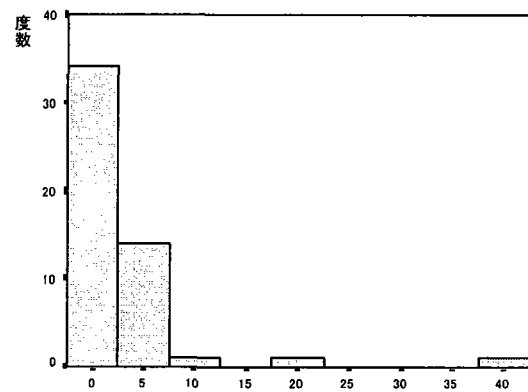


図7-3-9 誤答の最大頻度の分布

誤答の最大頻度は殆どの参加者で 0~7 の範囲内にあるが、ここでも極端に値の大きい参加者が認められる。最大頻度の上位 3 人（頻度はそれぞれ 38, 18, 12）で頻繁に起こる誤答の内容を調べると「3 と 9」、「4 と 8」、「5 と 8」の組合せで正答±1 の数を書いた誤答であった。

誤答や訂正に関するこれらの指標と失敗傾向の相関は次の通りである。“アクションスリップ”の下位尺度である“もの忘れ”は、誤答の種類及び最大頻度との間に正の相関を示した ($r_s=0.32, p<.05$; $0.26, p<.10$)。“もの忘れ”得点が高いほど誤答の種類が多く、また同じ誤答を繰り返し出す傾向があることになる。

表7-3-6 失敗傾向と誤答・訂正に関する指標との相関係数

(N=46)

UK	失敗傾向	アクションスリップ			認知の狭窄			衝動的失敗
		もの忘れ	放心		妨害されやすさ	とらわれ		
誤答の種類	0.26 +	0.32 *	0.05	-0.24	-0.21	-0.19	0.05	
誤答最大頻度	0.21	0.26 +	0.04	-0.21	-0.15	-0.21	-0.11	
訂正数(前半)	-0.09	-0.05	-0.14	-0.13	-0.04	-0.19	-0.21	
訂正数(後半)	-0.10	-0.03	-0.20	-0.13	0.00	-0.23	-0.16	

※ *: $p<.05$, +: $p<.10$.

訂正数は失敗傾向とはいずれも有意な相関を示さなかったが、誤答に関する指標との関係は興味深いものであった。訂正数は誤答の最大頻度とは相関がなかったが、誤答の種類との間には有意な正の相関が認められた。

表7-3-7 誤答・訂正に関する指標間の相関係数

	誤答の 種類	誤答最 大頻度	訂正数 (前半)
誤答最大頻度	0.38 **	—	—
訂正数(前半)	0.34 *	0.15	—
訂正数(後半)	0.30 *	0.09	0.83 **

※ **:p<.01, *:p<.05.

誤答の種類は全体の誤答数から誤りぐせの要素を除いた間違いのバリエーションの指標であるから、誤りぐせを“constant error” (Reason, 1990) とするならば、誤答の種類は“variable error”の範囲の広さを示すものと考えられる。また訂正数はモニタリングがもう少し不十分であれば誤答になっていたかもしれない反応であるから、自身の反応に注意を向けていた程度を表すのと同時に、間違いやすさを表す指標でもあるだろう。従って両者の間に相関があったことから、自身の反応へのモニタリングが不十分になった時、間違いやすさは不規則な誤答として現れるのではないかという解釈が可能である。

一方、最大頻度は誤りぐせの強さを示す指標と考えられる。従ってこれと訂正数に相関がなかったことは、誤りぐせによる規則的な誤答は、コントロールされた遂行とは異なるメカニズム、すなわち自動的な一少なくともそれに近い一反応のメカニズムによって起こっていることを示すとは考えられないだろうか。

Pf 値と“アクションスリップ”には弱い正の相関 ($p<.10$) があった。これらは定型からのずれの大きさを表す指標であり、“アクションスリップ”得点が高いほど作業量にムラが出る傾向があることが示唆される。参加者による課題評価と併せて考えると、このことはより明瞭に示される。表 7-3-8 はこれまで検討してきた指標と課題評価との相関であるが、ここで注目したいのは、誤答の種類は「時間的プレッシャー」及び「エラーの不安」とは有意な負の相関を示し ($r_s=0.30, 0.29$ 。いずれも $p<.05$)、誤答の最大頻度ではこの相関が認められなかったという点である。つまり、時間的な切迫感や誤答への不安が低いほど規則性のない誤答は増える傾向にあるが、誤りぐせによる規則的な誤答はこれとは無関係に出現すると考えられるのである。

表7-3-8 UKにおける遂行の指標と課題評価との相関

(N=51)

	作業量 (前半)	作業量 (後半)	誤答数 (前半)	誤答数 (後半)	誤答の 種類	誤答最 大頻度	訂正数 (前半)	訂正数 (後半)	後期 増減率	Pf
作業量(後半)	0.97 **									
誤答数(前半)	-0.03	-0.05								
誤答数(後半)	-0.18	-0.20	0.55 **							
誤答の種類	-0.06	-0.08	0.64 **	0.68 **						
誤答最大頻度	-0.08	-0.10	0.83 **	0.76 **	0.43 **					
訂正数(前半)	0.30 *	0.24 +	0.42 **	0.08	0.39 **	0.19				
訂正数(後半)	0.33 *	0.29 *	0.30 *	0.06	0.34 *	0.12	0.84 **			
後期増減率	-0.45 **	-0.24 +	-0.03	-0.03	0.01	-0.04	-0.29 *	-0.24 +		
Pf	-0.08	-0.17	-0.02	0.00	-0.06	0.01	-0.02	-0.10	-0.23	
課題困難度	-0.01	-0.02	-0.14	0.12	0.21	-0.16	0.13	0.21	-0.01	0.15
時間的プレッシャー	0.08	0.08	-0.10	-0.31 *	-0.30 *	-0.10	0.14	0.19	-0.09	0.16
エラーの不安	-0.18	-0.18	0.03	-0.17	-0.29 *	0.07	-0.17	-0.13	-0.01	0.05
遂行の成功	0.21	0.24 +	-0.04	0.22	0.14	0.06	-0.12	-0.13	0.05	-0.16
緊張	0.08	0.04	0.12	-0.15	-0.19	0.10	0.30 *	0.25 +	-0.18	0.25 +
速さ/正確さ	-0.24 +	-0.27 +	-0.09	0.14	0.13	-0.06	-0.17	-0.17	-0.01	0.11

	課題 困難度	時間的 プレッ シャー	エラー の不安	遂行の 成功	緊張
時間的プレッシャー	0.04				
エラーの不安	-0.03	0.38 **			
遂行の成功	-0.04	-0.42 **	-0.12		
緊張	0.01	0.72 **	0.44 **	-0.48 **	
速さ/正確さ	0.27 +	-0.30 *	0.20	0.27 +	-0.34 *

※ **:p<.01, *:p<.05, +:p<.10.

以上の結果から、UKでの遂行においてはそれぞれの失敗傾向が異なる影響を及ぼすことが示唆される。UKのように容易な課題を連続的に行う状況では、“認知の狭窄”のストレスがかかると過度に集中する特徴が課題遂行に有利に働く（＝作業量の増加、誤答の少なさ）のだろう。しかしその状況では同時に“アクションスリップ”が示すように自身の遂行にあまり注意が払われなくなることとも考えられる。そうした場合に労力の少ない機械的な反応のルールが用いられると規則的な誤答が増えるのではないかと考えられる。

4. 個別的検討

本節ではUKにおける遂行に顕著な特徴の認められた参加者について、失敗傾向や課題評価との関連を個別的に検討する。

(1) 作業水準が高い参加者

今回の参加者の中で作業水準が最も高かった者の作業曲線を図に示した¹。

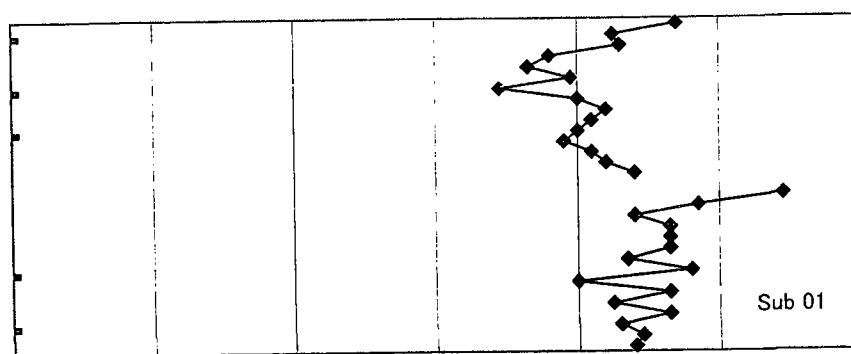


図 7-3-10a 参加者 01 の作業曲線と誤答数

この参加者では誤答も少なく、作業量の量級判定では最高のⒶ判定の基準を大きく上回っている。非定型特徴の強さを示す Pf 値も 6.09 と低めであり、定型がかなり保たれている。

¹ ここでは参加者を番号で示す。

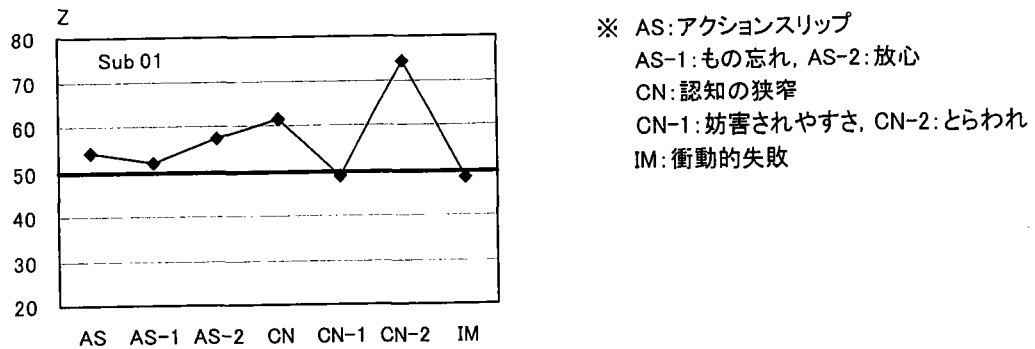


図 7-3-10b 参加者 01 の失敗傾向プロフィール

この参加者の失敗傾向得点の偏差値プロフィール²を見ると“認知の狭窄”の中でも“妨害されやすさ”はほぼ平均であり、特に“とらわれ”得点が高くなっている。“とらわれ”の特徴はある考えや方法を固持することで状況の変化に対応しきれない場合もあるが、今回のように課題状況が容易で変化がない場合には、むしろ作業水準の維持に役立つのかもしれない。

この参加者は「数字の羅列にとっても緊張」しながらも「手が痛くなり吐き気をもよおすまで」作業を続けたと報告している。

(2) 誤答が多い参加者

最も誤答数が多かったのは参加者 35 であり、前半 32 個、後半 17 個で合計 49 個の誤答が見られた。このうち 38 個は「3 と 9」あるいは「9 と 3」を「1」と答えたもので、誤答にはっきりと規則性が認められる。また訂正数は前半 21 個、後半 30 個で合計 51 個あるが、そのうち上記の組合せでの訂正は 8 個しかなく、この誤答が本人に気づかれにくいアクションスリップ的な性質のものであることを示すと思われる。

Pf 値は 10.0 であるから、定型からのずれはほぼ平均程度である。誤答の多さ以外には特に非定型を示す特徴は認められない。作業量水準もほぼⒶ段階に達している。

² 女子学生 1162 名の標準データをもとに算出した。

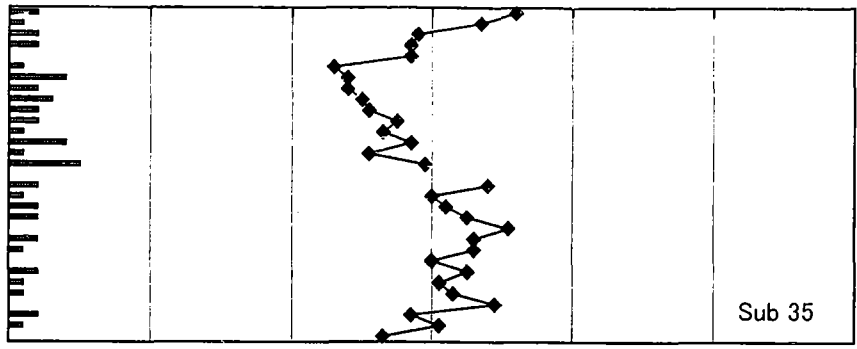


図 7-3-11a 参加者 35 の作業曲線と誤答数

この参加者の失敗傾向得点の偏差値は，“アクションスリップ”，特に“もの忘れ”で高くなっているが，残りの失敗傾向についてはむしろ平均よりもかなり低い．前節で述べた“アクションスリップ”傾向と誤りぐせの関連が明瞭に示された例だろう．

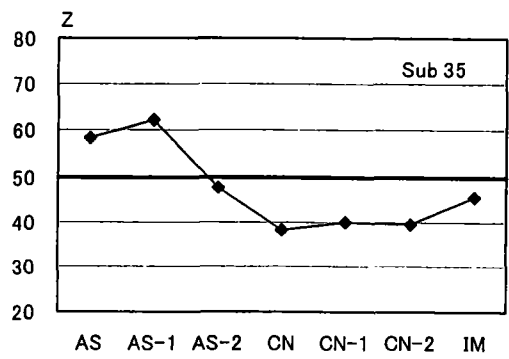


図 7-3-11b 参加者 35 の失敗傾向プロフィール

次に誤答が多かった参加者 09 では全誤答数が 39 個あり，その中で「4 と 8」で「3」とする誤答が 18 個あった．そしてその組合せで反応の訂正が行われているのは 3 個のみである．

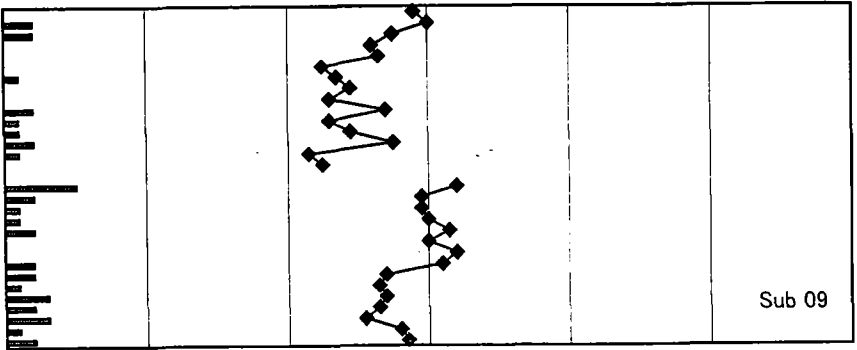


図 7-3-12a 参加者 09 の作業曲線と誤答数

Pf 値は 8.2 であるから平均よりやや低く，定型からあまりずれていない．作業量水準は A 段階である．

この参加者の失敗傾向プロフィールでは，参加者 35 よりも顕著に“アクションスリップ”及びその下位尺度得点の突出が認められる．

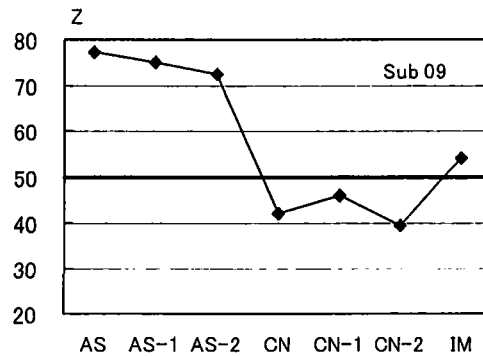


図 7-3-12b 参加者 09 の失敗傾向プロフィール

(3) 非定型的特徴が見られた参加者

この参加者の Pf 値は 22.53 とかなり高く，特に前半で作業曲線の変動が大きい．

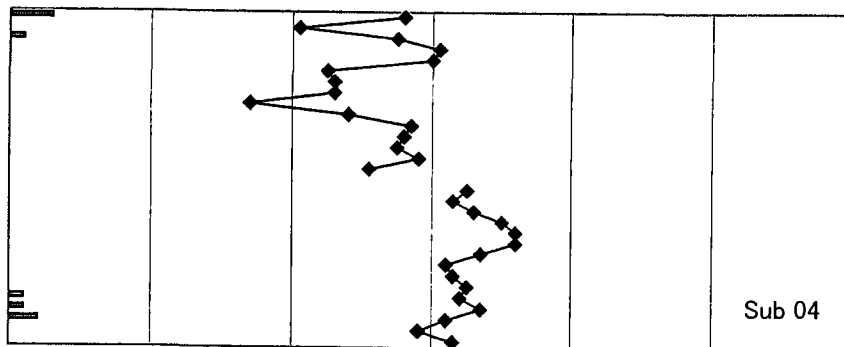


図 7-3-13a 参加者 04 の作業曲線と誤答数

この参加者の失敗傾向得点のプロフィールは“妨害されやすさ”が高く，“とらわれ”が低いことが特徴である．このプロフィールからは，外界からの刺激に妨害されやすく，考えや行動が一つのものととらわれにくい特徴が示唆される．このような集中の困難が，作業曲線の定型からの逸脱につながったのでは

ないかと思われる。

この参加者は「やっていくうちにいろんな余計なことを考えてしまったり、数字が変な風に見えてきたり、非常に計算に時間がかかったりする時がおそってきた」と報告している。

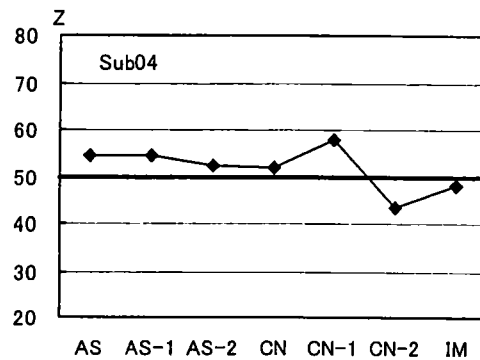


図 7-3-13b 参加者 04 の失敗傾向プロフィール

(4) 誤答・訂正が少ない参加者

この参加者では検査全体で誤答がゼロ，訂正が 1 個であり，反応がよくコントロールされている。

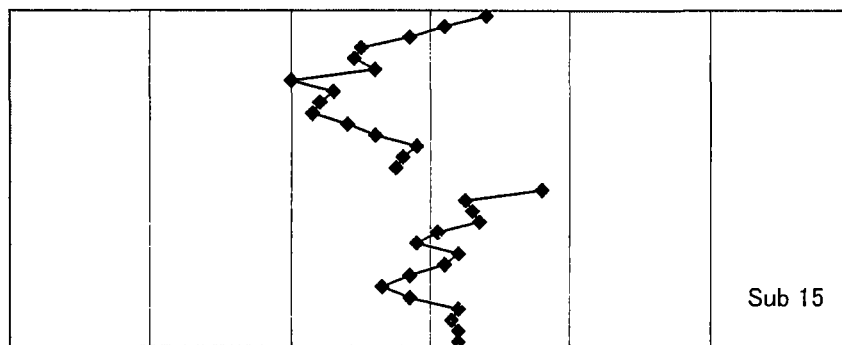


図 7-3-14a 参加者 15 の作業曲線と誤答数

作業量の水準はⒶ段階にわずかに及ばないが十分な高さがあり，Pf 値も 9.90 と平均程度であって定型もまざまず保たれている。

失敗傾向プロフィールは“とらわれ”でやや低くなっているが，それ以外の得点はほぼ $Z=50$ に近く，顕著な特徴がないことがこの参加者の特徴であると

も言える。UK の標準マニュアルでは定型を出す人の特徴を一言で「中庸」と表していることを考えると興味深い一致である。またこの参加者は検査について「こんなことで何がわかるんだろうと思った」と報告し、多くの参加者のように精神的・身体的負担の大きさについては言及していない。

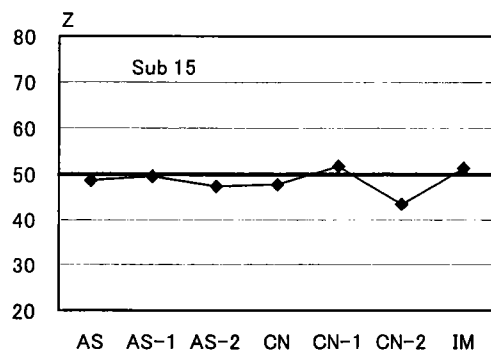


図 7-3-14b 参加者 15 の失敗傾向プロフィール

【 全 体 の 考 察 】

ここでは内田クレペリン精神検査（UK）を用いて、その作業中に見られる遂行のずれについて考察した。この検査では、「心的活動のバランスがよく、性格や行動に問題のない人々」の検査結果を「定型」と呼んでいる。定型では前半は初頭努力—疲労による作業量低下—作業興奮による作業量の増加という経過を辿り、その作業曲線はU字型またはV字型となる。休憩後の後半では疲労回復と習熟によって非常に高い初頭努力が見られるが、その後は疲労の現れが強くなり、作業量は低下する。またこれに加えて誤答が殆どないという点も定型の特徴だとされている（日本・精神技術研究所, 1988）。

ただし定型は健常者における平均ではなくむしろ理想的・規範的な結果であり、数の上では少ないと言われている。このように、ある状況において適切と見なされる（しかし誰もが常にそうできる訳ではない）行動からのずれは本研究における失敗の定義に通じるものであり、ここでは定型からのずれに注目して失敗傾向との関連を検討した。

その中でも特に興味深いのが誤答である。この検査で要求されるのは一桁の数字の足し算であり、ある年齢以上の健常者であれば通常は殆どまちがえるこ

とはないだろう。しかしそれを連続的に長時間行わせ、しかも1分ごとの区切りをつけることで時間的な切迫感も与えるという課題状況ではどうだろうか。単純でよく習熟された作業を繰り返し、しかも素早く行わせるという状況は、アクションスリップを誘発する実験のそれによく似ている。従ってUKではアクションスリップの性質を持つ誤答が起りやすいのではないかと考えられた。

全行の合計誤答数について報告されている研究が少ないので比較材料は十分ではないが、今回のサンプルは全体として誤答数が少ないようである。作業量水準も比較的高く、大学生という比較的高い能力を有している集団であれば尤もな結果であろう。全体の誤答数の分布からも、UKにおける誤答の生起がやはり非常に確率の低い性質のものであることが示された。しかしどの数字の組合せでどんな誤答が起こっているかを調べてみると、誤りぐせとも言うべき規則性を持った誤答が一部で認められることがわかった。

一人の参加者が繰り返し同じ誤答を出す場合、その頻度はその誤りぐせの強さを示すと考えられる。この最大頻度は失敗傾向の中では“アクションスリップ”、特に“もの忘れ”と弱いながら正の相関を示し、アクションスリップ傾向の高い者ほど誤りぐせによる誤答が出やすいのではないかと考えられた。

以上のような特徴は数名の参加者では顕著に認められたが、全体として失敗傾向と誤答の特徴との相関を求めた時には、その関係はごく弱いものであった。0.20から0.30という相関係数は、ミッシェル(1992)がいう「パーソナリティ係数」の大きさに一致する。彼は質問紙によって測られるパーソナリティ特性と質問紙以外の手段で得られる外的基準との間に見られる相関が低いことを指摘し、更にそれらの相関も知能や教育程度に媒介されている可能性を示唆している。この点については異なる課題を用いて引き続き検討しなければならない。

なお、“アクションスリップ”のもう一つの下位項目群である“放心”は、以上に述べてきた誤答の指標と殆ど相関がなかったことに注意しておこう。“放心”は「何かを聞いていなければならない時にぼんやりしてしまう」、「本を読みながらぼんやりしてしまう」、「何かしている時に、つい他のことがしたくなってしまう」など、アクションスリップが起こるとされている absent-minded な状態を直接的に表現した項目から構成されている。UKでの誤答がアクショ

ンスリップに似た性質のものであるなら、なぜこの失敗傾向との間に相関が見られなかったのだろうか。

おそらくこれは、検査という状況の強さのせいであろう。長時間単純な作業を続けることで単調感や疲労をおぼえ、「途中でやめたくなくなった」と答える多くの参加者をして最後まで作業を続けさせる力が検査場面には働いている。このような状況では「ぼんやりしてしまう」と自覚できるほど持続する注意の散逸は起こりにくいと想像できる。一方“もの忘れ”を構成する項目は「物を置いた場所を忘れる」、「何をするためにそこに行ったか忘れる」、「言おうと思っていたことを忘れる」などで、現象としてはもの忘れであるが、その動作を行っていた時に自身の意図や行動にあまり注意が向けられていなかったことを表す内容になっている。“もの忘れ”は言わば自覚されない放心の傾向を示すもので、それが UK における誤答の生起状態に似ているのかもしれない。

7-4 熟慮－衝動の認知スタイル課題における遂行との関係

2, 3 節で用いた課題はいずれも、時間内にどれぐらい多くの正答を出すかによって知能や行動の特徴を測ろうとする最高値検査であった。このような検査では、少なくともある程度の動機づけをもって検査に臨んだ参加者の多くではより早く・より正確な遂行が目指されることになり、それ以外の遂行の特徴は現れにくくなる。つまりこれらの検査は「どれぐらい行えるか」を捉えるには適しているが、「どのように行うか」は捉えにくいのである。

人が外界の情報を処理する際に、「どれぐらいたくさん」ではなく「どのように」処理するかに注目したのが認知スタイル概念である。従って認知スタイルを測定するためには、遂行にバリエーションが出やすく、個人の情報処理パターンの質的な違いを捉えられるような課題が用いられる。Mischel (1977) の表現で言えば行動を規制する力が比較的弱い状況である。認知スタイル研究は 1960～1970 年代は非常に盛んに行われていたが、その後は認知スタイルを用いた研究は減少しつつあった (Globerson & Zelniker, 1989)。しかし Sternberg & Grigorenko (1997) は、認知とパーソナリティの 2 領域をつなぐ概念とし

て、また教育場面や仕事場面での遂行を予測する手段として、認知スタイルが依然として有用であると述べている。

4, 5 節では認知スタイルの指標を用いて、「どのように行うか」の観点から失敗傾向の特徴を探ることを目的とする。これまでにいくつかの認知スタイル次元が提案されているが、その中から本節では熟慮－衝動の次元を取り上げる。これは Kagan, Rosman, Day, Albert, & Phillips (1964) による子どもの概念的テンポに関する研究から導かれた次元である。この次元は、どの反応が正答かが不確かである状況 (response uncertainty) において自分の仮説の妥当性を熟考する程度だと定義されており、測定には主に Matching Familiar Figures Test (MFFT) が用いられる。この課題では人形や家などよく知っている対象の線画を呈示し、参加者は複数の選択肢の中から標準刺激と同じものを選ぶことが要求される。結果の処理としては、初発反応の反応時間と誤答数の 2 変数による中央値分割を行って参加者を 4 群に分け、このうち反応時間が長く誤答が少ない者を熟慮型、反応時間が短く誤答の多い者を衝動型と定義する方法がよく用いられる。

その後、熟慮－衝動概念は成人を対象とした研究でも用いられるようになった。これまでのところ MFFT における反応のメカニズムは次のように解釈されることが多い。即ち、熟慮型は間違ってしまうことへの不安が強いために反応する前に反応選択肢について熟考し、衝動型は反応が遅れてしまうことへの不安が強いか、もしくは脅威的な課題状況から早く逃げ出したいために、不十分な検討だけで反応してしまう (Messer, 1970; Santostefano, 1978; Wapner & Conner, 1986)。

認知スタイルは本来ある程度の通状況間一貫性を持つことを仮定されており、実際に認知的指標の一般性と安定性が比較的高いことは知られているが、課題状況をわずかに変えるだけでその相関が大きく減少することもある (ミッシェル, 1992)。MFFT で測定された熟慮－衝動についても、日常場面で見られる行動の特徴とは一致しないという批判もある (Block, Block, & Harrington, 1974)。MFFT を用いた場合の熟慮－衝動は、反応の不確かさが高く (Kagan, 1987)、比較的単純で早い (highly speeded) 状況で捉えられる行動の特徴であること (Sternberg & Grigorenko, 1997) を考慮しておく必要があるだろう。

従って、質問紙で測られる“衝動的失敗”と MFFT における衝動的遂行との関係はあまり強くないのではないかと予測される。一方、MFFT の課題状況で不安が強く喚起されるとすれば、不安によって認知が妨害されやすいことを示す“認知の狭窄”と遂行の失敗の間に何らかの関係が見出されるかもしれない(山田, 1993b)。

【 方 法 】

参加者：コンピュータ実習を履修している女子短大生 1, 2 回生を対象として、約 1 ヶ月の間隔をおいて失敗傾向質問と Matching Familiar Figures Test (以下 MFFT) を実施した。MFFT 終了後には課題・遂行に対する評価を求めた。どちらにも参加して有効データが得られたのは 50 名である(グループ 18)。平均年齢は 18.8 才 (SD=0.4) である。

刺激：Kagan らの使用したオリジナル図版 12 枚を使用した。標準刺激に対して変形操作を加えた 6 個の比較刺激が提示され、参加者はその中から標準刺激と同じものを選ぶ。

実験装置：刺激呈示の統制や反応時間の記録には NEC の PC9801VX を用いた。MFFT ではカード式の刺激図版を呈示し、ストップウォッチなどで反応時間を計測する方法が用いられることが多いが、今回は反応時間を正確に記録するためにコンピュータを用いた。比較刺激の配列(横 3 列×縦 2 行)に合わせてキーボードのテンキー部分の 7・8・9・1・2・3 にカラーテープを貼り、反応に用いた。参加者には図 7-4-1 を見せて比較刺激とキーの位置の対応を説明し、理解を確かめるために幾何学図形を用いて練習を 3 試行行った。

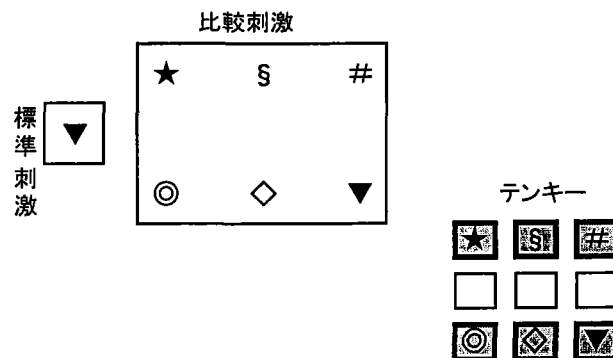


図 7-4-1 刺激の配列とテンキーの位置的対応

試行の手順：まず試行開始の合図として短いビーブ音と共に画面中央に「+」が呈示され、参加者のリターンキー入力によって刺激画面が呈示される。刺激画面は参加者のキー押し反応があるまで呈示され、反応時間は ms 単位で測定される。参加者の反応が正しければマスキングのためにランダムドットパターンが 100ms 呈示され、次の試行を始める合図の「+」画面に戻る。もし参加者の反応が誤答であれば、長いビーブ音と共に「まちがっています。もう一度やってください。」というエラーメッセージが画面に呈示され、「+」画面に戻る。一つの図版について正答するまでこのように反応を続ける。

手続き：コンピュータ実習室で 10 名程度の集団で実験を行ったが、互いに十分に間隔をおいて座らせた。練習試行が終了した時点で画面に全反応の正誤と反応時間を表示し、遂行のフィードバックを行った。また本試行でも同様に、各試行のすべての反応時間が測定されることを参加者に説明した。12 図版の試行順は参加者によってランダムに決定した。試行は参加者ペースで行われ、実験と課題評価を合わせると所要時間は最も長い者で約 25 分だった。

【 結 果 と 考 察 】

1. 各測度の基本統計量

グループ 18 における失敗傾向得点の偏差値を表 7-4-1 に示した。“放心”と“衝動的失敗”がやや低いが、あまり大きな差ではない。

表7-4-1 グループ18における失敗傾向質問紙の尺度得点

	平均値	SD	得点偏差値
アクションスリップ	19.96	5.02	49
もの忘れ	13.06	3.90	50
放心	6.90	1.80	48
認知の狭窄	19.60	4.64	51
妨害されやすさ	11.88	3.07	52
とらわれ	7.72	2.13	50
衝動的失敗	6.70	2.87	48

MFFT については、まず参加者ごとに 12 図版の初発反応時間の平均と誤答の合計を求めた。下表に示したのは MFFT を実施した 54 名全員における初発反応時間と誤答総数のグループ平均及び SD である¹。この際、反応時間は ms 単位のローデータの分布が正の歪みを持つことが確認されたので (歪度=1.83), 対数変換を行った値を用いて平均値を算出した。

表7-4-2 MFFTにおける各指標の基本統計量

(N=54)			
	平均値	SD	レンジ
初発反応時間	3.85 (7079ms)	0.20	3.47~4.37
誤答数	7.09	3.08	2~14

MFFT における誤答数の分布は 2, 3 節での誤答の指標とは異なり歪みも小さく, 全体に生起頻度も高い。全反応中に誤答が占める割合は, 最も誤答が少ない者で 14%, 最も多かった者では 54%に及ぶ。なお誤答数と初発反応時間の相関は $r=-.60$ ($p<.01$) であった。

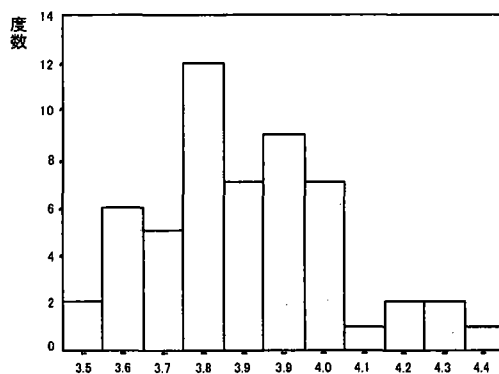


図7-4-2 平均初発反応時間(logRT)の分布

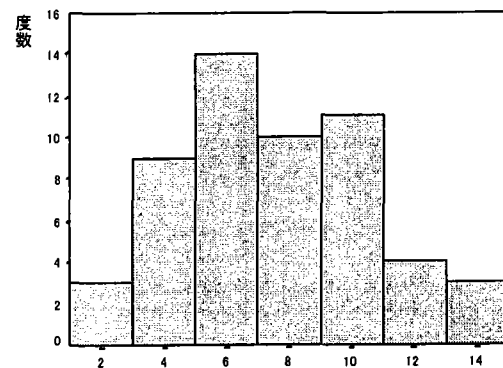


図7-4-3 誤答数の分布

次に、従来の分類方法に従って初発反応時間と誤答数の 2 変数について中央値分割を行い, その組合せから参加者を 4 群に分けた。

¹ 以降の分析ではグループの中央値を用いるので, より多くの参加者のデータを含めた。

表7-4-3 誤答数・反応時間の中央値分割による
参加者の分類と平均値

		誤答数	
		H	L
初 発 反 応 時 間	H	N = 10 RT ₁ = 9120 Err = 8.7	N = 17 RT ₁ = 11220 Err = 3.9
	L	N = 18 RT ₁ = 4786 Err = 10.1	N = 9 RT ₁ = 5370 Err = 5.2

※ RT₁: 平均値をmsに再変換した値.

分類の結果、衝動型は 18 名、熟慮型は 17 名となった。また反応時間が長く誤答が多い者 (Slow Inaccurate, 以下 SI 群) は 10 名、反応時間が短く誤答が少ない者 (Fast Accurate, 以下 FA 群) は 9 名となった。

中央値折半法ではこのように熟慮-衝動に分類できない参加者が少なくとも 25%程度は出ると言われており (Kogan, 1976), 今回の結果でも約 35%にあたる参加者が分類できなかった。SI 群と FA 群は認知スタイルではなく反応効率の次元を表していると考えられる研究者もおり、衝動的スタイルと反応効率の指標を別々に算出する試みも行われている。ここではその中から Salkind & Wright (1977) や Broek, Bradshaw, & Szabadi (1987) が提案した方法を用いて、衝動性と反応効率性のスコアも算出した。衝動性スコア (I) は $I = zERR - zRT$, 反応効率性スコア (E) は $E = -(zER + zRT)$ で求められる。

表7-4-4 衝動性と反応効率性のスコア (N=54)

	平均値	SD	レンジ
衝動性(I)	0.00	1.77	-5.00~3.09
反応効率性(E)	0.00	0.93	-2.35~1.81

Broek et al. (1987) の結果では衝動性スコアは $M=0.02$ ($SD=1.71$), 反応効率性は $M=0.00$ ($SD=0.98$) であり、今回もこれに近い値となった。また 2 つのスコアの相関は $r=0.00$ であった (Broek et al. では $r=0.03$)。

このスコアを求めることで、衝動型は I スコアの高さ、熟慮型は I スコアの

低さによって、また FA 群は E スコアの高さ、SI 群は E スコアの低さによって記述することができる (Kogan, 1976)。

表7-4-5 4群の衝動性・反応効率性スコアの平均値(下段はSD)

	衝動型	熟慮型	FA群	SI群	
衝動性スコア	1.70 (0.76)	-1.95 (1.44)	0.00 (0.26)	0.26 (0.73)	衝動型>FA, SI>熟慮型*
反応効率性スコア	-0.26 (0.60)	0.09 (0.97)	1.21 (0.37)	-0.78 (0.60)	FA>衝動型, 熟慮型>SI*

1 要因分散分析を行って4群の衝動性・反応効率性スコアを比較したところ、どちらのスコアでもグループの主効果が1%水準で認められ ($F_s=40.42, 13.70$)、多重比較を行ったところ Kogan の述べた群間の差が5%水準で有意であった。

2. 失敗傾向と MFFT における遂行との関係

失敗傾向と MFFT における遂行の指標との相関を求めたところ、反応効率性と“認知の狭窄”及び“とらわれ”の間に有意な相関がみられた ($r_s=-0.33, -0.32; p<.05$)。また、誤答数と“衝動的失敗”の間にはごく弱い正の相関が認められた ($r=0.24, p<.10$)。

表7-4-6 失敗傾向得点とMFFTにおける遂行の指標との相関係数

(N=50)

MFFT	失敗傾向	アクションスリップ		認知の狭窄		衝動的失敗	
		もの忘れ	放心	妨害されやすさ	とらわれ		
誤答数	-0.15	-0.20	0.01	0.14	0.12	0.13	0.24 +
初発反応時間	0.20	0.19	0.14	0.12	0.12	0.10	-0.14
衝動性スコア	-0.23	-0.23	-0.12	-0.01	-0.01	-0.02	0.20
反応効率性スコア	-0.11	-0.02	-0.25 +	-0.33 *	-0.27 +	-0.32 *	-0.15

※ **: $p<.01$, *: $p<.05$, $p<.10$.

予測していたように“認知の狭窄”と反応効率性の間には正の相関が認められ、“認知の狭窄”得点が高い者は MFFT の課題状況では正確に、かつ速く反応することが困難であったことを示している。もともと MFFT の課題状況では「間違ふこと」と「反応が遅れること」への不安が喚起されると考えられているが、

課題状況における緊張の原因を特定した参加者の回答を調べてみると、27人中11人が「反応時間を測られていること」をあげ、10人が「間違うとブザーが鳴ること」をあげている。今回の課題では間違うとピープ音が鳴るという手続きをとったために、エラーに対する課題状況における不安や緊張は一層高められた可能性がある。こうした課題状況では、外界からのストレスに妨害されやすい“認知の狭窄”の特徴が遂行の失敗につながったと考えられる。

また、MFFTにおける衝動性の指標と“衝動的失敗”との関係が認められなかったことも先行研究と一致する結果であった。先に紹介したBlockの批判以外にも、MFFTで測られる衝動性とその他の衝動性指標の間に相関を見出せないとする研究はいくつか報告されている。Davidson (1984)は大学生を対象としてMFFTとPersonality Research FormやCalifornia Psychological Inventoryを実施したが、MFFTにおける遂行と、衝動性に関する尺度との間に相関は見られなかった。またGerbing, Ahadi, & Patton (1987)は大学生の参加者にMFFT、時間評価課題、単純反応時間課題などを行わせ、更にEysenckの衝動性尺度、16PF、Barratt Impulsiveness Scale、Guilford-Zimmerman Temperament Scaleなどを実施して、衝動性の行動的指標と質問紙による指標の間に共通の要素が見出せるかどうかを検討している。項目レベルの因子分析を行ったところ、質問紙に関する因子としてはスリルの追求、決定の速さ、計画を避ける、精力的、楽天的、衝動の追及、落ち着きのなさなど12因子が見出され、3種類の行動的指標はそれぞれ単独で1つの因子として抽出された。以上の先行研究から、衝動性概念を構成する要素が非常に多様であることがわかる。他の特徴においても行動的指標と質問紙による指標の相関の低さは指摘されているが(Mitchell, 1992)、衝動性の場合には多様な側面を捉えるために測定手段が領域特異的な発展を遂げてきたことも、指標間の相関の低さの一因になっていると思われる。

なお、MFFTの誤答数を概念的テンポの指標として用いることに疑問を呈し、反応時間とは別に取り扱うことを主張する研究者もいる(Block, Gjerde, & Block, 1986)。ここでも反応時間と誤答数から算出した衝動性スコアと“衝動的失敗”の間には相関がなかったが、誤答数を単独で用いた場合には弱い相関が認められている。“衝動的失敗”は決定の速さよりは熟考の不足の側面を表

しているのかもしれない。

3. MFFTにおける衝動的遂行の検討

ここではまずMFFTで用いる12枚の図版それぞれについて、初発反応時間の平均と誤答数を算出した。

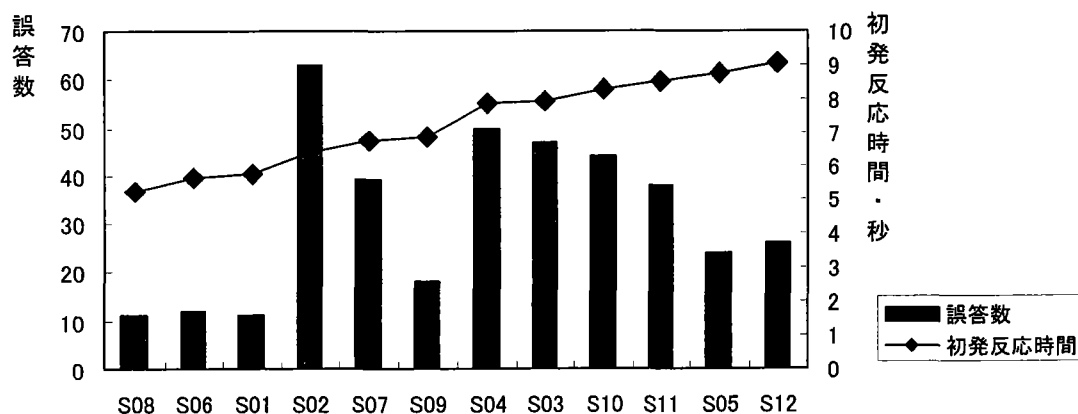


図7-4-4 刺激別の初発反応時間と誤答数

図7-4-4には初発反応時間が短い図版から順に呈示した。この図からは誤答数と初発反応時間が必ずしも比例関係にあるわけではなく、反応時間は短いが誤答が多い図版(2, 7など)や反応時間は長いが誤答の少ない図版(5, 12など)があることがわかる(これらの図版の一部は資料として添付した)。そこで図版ごとに比較刺激の種類や誤答の度数などを調べてみた。

比較刺激は標準刺激の一部を変形させたものであるが、その操作は図形のある一部分の(1)大きさの変化、(2)形の小さい変化(輪郭線の変更:直線⇔曲線)、(3)位置の変化(左⇔右)、(4)角度の変化、(5)形の大きい変化に分けられる。それぞれの例を次にあげておく。

表7-4-7の結果から、(1)図形が単純で細かい部分が少ない図版(01, 06, 08)では反応時間が短く誤答が少ないこと、(2)誤答は、形態そのものが変わるような大きな変化よりも、変形箇所が小さい比較刺激で多く見られること、(3)図形が複雑で比較刺激の変形が小さくても、正答が標準刺激に近い位置に呈示される場合は誤答が少ない(図版05, 12)ことなどがわかる。

表7-4-7 比較刺激の変形操作と呈示位置、及び誤答数

a. 反応時間が短く誤答が少ない図版								
図版01	形小 0/11 位置 0/11	形小 5/11 形大 1/11	大 5/11 正答	図版06	形大 1/12 大 7/12	正答 位置 0/12	形小 1/12 形小 3/12	
図版08	形小 6/11 位置 0/11	形小 4/11 形小 1/11	大 0/11 正答	図版09	正答 大 1/18	形小 1/18 位置 7/18	形小 4/18 角度 5/18	
b. 反応時間が短く誤答が多い図版								
図版02	形小 31/63 大 13/63	形小 4/63 位置 6/63	正答 形大 9/63	図版07	形大 2/39 位置 1/39	形小 19/39 正答	大 9/39 角度 8/39	
c. 反応時間が長く誤答が多い図版								
図版03	形小 19/47 大 0/47	形小 23/47 位置 2/47	正答 形大 3/37	図版04	形小 22/50 大 11/50	正答 位置 3/50	形小 9/50 角度 5/50	
図版10	形小 8/44 正答	形小 15/44 位置 7/44	大 11/44 形大 3/44	図版11	形小 14/38 位置 8/38	形小 12/38 正答	大 3/38 形大 1/38	
d. 反応時間が長く誤答が少ない図版								
図版05	正答 形小 13/23	形小 4/23 位置 5/23	形小 0/23 形大 1/23	図版12	形小 8/26 正答	形小 12/26 位置 3/26	大 1/26 形大 2/26	

※ 大:大きさの変化, 形小:形の小さい変化, 位置:位置の変化
 角度:角度の変化, 形大:形の大きい変化

このように図形の複雑さ, 変形箇所の種類, 正答の位置によって図版ごとの困難度に違いがあると考えられたので, 参加者ごとに 12 図版に対する初発反応時間の変動係数を求めた (山田, 1998b). 変動係数 (CV) は平均値の大きさに影響されずにデータの散布度を比較できる相対的値であり, $CV = SD/Mean \times 100$ の式で求められる. 変動係数の分布は図のようになり. 反応時間のばらつきの大きさにはある程度個人差があることがわかる.

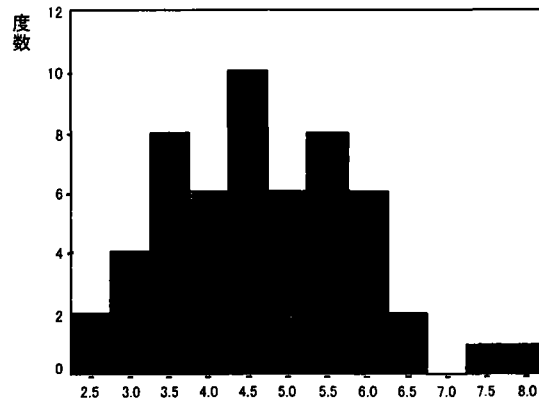


図7-4-6 初発反応時間の変動係数の分布

この変動係数は失敗傾向とは有意な相関はなく“アクションスリップ”及び“放心”とごく弱い相関を示した ($r_s=.24, .26$, いずれも $p<.10$) のみであるが, MFFT における誤答数とは有意な負の相関を示した ($r=-0.37, p<.01$). つまり初発反応時間にばらつきがある参加者では誤答が少なく, 一律の速さで反応する傾向が大きいほど誤答が多いことを示している. このことから, MFFT における誤答はそれぞれの図版の困難度に応じた検討を行わないことによって生じやすくなるのではないかと考えられる. このことを確認するために, 初発反応時間とその変動係数の2変数の中央値折半法を用いて各群の誤答数を比較した.

表7-4-8 初発反応時間とその変動係数の中央値分割による誤答数の比較

		初発反応時間(RT ₁)	
		H	L
RT ₁ 変動係数	H	N = 19 Err = 5.0 (SD=2.5)	N = 8 Err = 9.3 (SD=2.9)
	L	N = 8 Err = 7.4 (SD=2.2)	N = 19 Err = 8.2 (SD=2.9)

2 要因分散分析を行ったところ, 初発反応時間の主効果および2 要因の交互作用が有意であった ($F_s(1,50)=9.91^{**}, 4.70^*$). 単純主効果の検定を行い, 変動係数の上位群における初発反応時間の主効果と, 初発反応時間の上位群にお

ける変動係数の主効果 ($F_s(1,50)=14.13^{**}, 4.20^*$) が有意であったことから、初発反応時間が長く変動係数の大きい群で誤答が少ないことが交互作用の原因であると考えられる。従って MFFT では、図版に応じて検討の時間にばらつきがあり、全体として反応時間が長い者ほど誤答が少ないと言える。

反対に、個々の図版の困難度に関わらず一律的に素早く反応し、結果として誤答が増えるというやり方は“衝動的失敗”で想定している失敗の特徴とよく似ているが、ここでは反応時間に関する指標と“衝動的失敗”の間に関連は認められなかった。

【 全 体 の 考 察 】

MFFTにおける反応時間の短さと誤答の多さから定義される衝動型の認知スタイル及び衝動性の指標と、質問紙で測られる“衝動的失敗”傾向との間に関連は認められなかった。ここでのサンプルの“衝動的失敗”得点は大学生全体の平均に比してやや低く(表 7-4-1 参照)、得点の高い者の遂行を明らかにできなかった可能性はあるものの、この結果はこれらの指標が衝動性の異なる側面を捉えていることを示すものと考えられる。

MFFTでの衝動性はこの検査に固有の状況、即ち比較的単純な課題で正答がわかりにくく、急がされるような状況で(Sternberg & Grigorenko, 1997; Kagan, 1987)、よく考えないで反応する特徴を表している。また MFFTにおける遂行は検査状況での不安に媒介されると考えられており、自身の全般的な能力に対して不安を持つ者ほど、検査状況から回避するために十分な検討を行わないで素早く反応してしまうと解釈されている。

一方、“衝動的失敗”を構成する項目は「何を買うか迷って結局いいかげんに決めてしまう」、「予定を確かめずに約束してしまう」、「行き先を確かめずにちょうど来た電車に乗ってしまう」などであり、不安や行動の速さよりも、状況を把握しないで行う決定の拙さの方が強く表現されている。また6章での検討から、“衝動的失敗”は不安の強さではなく統制性の低さによって特徴づけられることが示されている。従って MFFTにおける反応時間を用いた衝動性の指標と関連がなかったことは、このような“衝動的失敗”の性質を考えれば尤もな結果であろう。

また、反応時間が短く誤答が少ないことから定義される反応効率性と“認知の狭窄”の間に負の相関があったことから、“認知の狭窄”得点の高い者ほど MFFT における遂行は時間がかかり、誤答も多かったことが示された。“認知の狭窄”の特徴は不安によって情報処理が妨害されやすいことであるが、これが強いほど MFFT の課題状況では遂行の速さと正確さが共に損なわれやすくなるものと思われる。

7-5 場独立一場依存の認知スタイル課題における遂行との関係

本節では場独立一場依存の認知スタイルを測る 2 種類の課題を用いて、その遂行と失敗傾向との関連を探る。場独立一場依存の認知スタイルについてはウィトキンとグッドイナフ（1985）に詳しく著されているが、その研究の起源は 1940 年代にウィトキンが行った垂直知覚における個人差の研究に遡る。初期の研究は、水平な床や垂直な壁などの外部座標系と、身体感覚や姿勢などの内部座標系の間的人為的に不一致を生じさせ、参加者がどちらの手がかりを用いて垂直定位を行うかを調べるものであった。この結果から、外的な手がかりをより多く用いる場依存型と、内的手がかりを用いる場独立型の二極をもつ次元の存在が示された。更にその後の研究の中で、場独立一場依存は心理学的分化という上位概念を構成する下位次元の一つであると考えられるようになった。それによると場依存的な者は心理学的分化度が低いために刺激の場に対してより全体的なアプローチを行い、場独立的な者は分化度が高く、より分節的なアプローチを行うと考えられている。

場独立一場依存の測定には主に Rod and Frame Test（RFT）と Embedded Figures Test（EFT）が用いられる。RFT は先に述べた垂直定位の研究で用いられるもので、四角い枠の中にある棒が呈示され、参加者はその棒を垂直に調整するように求められる。この際、参加者の身体の傾きと枠組の傾き以外の手がかりは利用できないように、実験室は完全暗室で枠組と棒のみが明るく光っている。

EFT は埋没図形テストとも呼ばれ、心理学的分化度の次元としての場独立一場依存を捉えるための課題で、複雑な図形の中から単純図形を探し出すように

求めるものである。そのためには複雑で全体的な刺激に分節的にアプローチし、単純図形を分離させることが必要になるが、場依存的な人は場に影響されやすいので単純図形を分離することが困難であり、場独立的な人は複雑な場の影響を容易に克服し、単純図形を早く抽出できることが明らかにされた。

また加藤（1979）は場依存－場独立の概念が「文脈にとらわれて全体の中から当該の刺激を抽出できるか否か」に関するものであると解釈し、文章の中から誤りを探し出す文章校正課題をこの認知スタイルの測定手段として用いることの可能性を示唆している。

本節では特に失敗傾向との関連を探るという目的のために、集団式の EFT と文章校正課題とを用いる。場独立－場依存の認知スタイルと失敗傾向の間には概念的な共通点はないから、スタイルの指標と失敗傾向の間の相関は低いであろうと予測される。しかしこれまでと同じく、これらの課題状況の特徴を考慮した上で、遂行と失敗傾向との関係についていくつか予測を立てることができる。

まず EFT 及び文章校正課題では抽出すべき刺激が標準刺激として参加者に常に示されているから、反応に際して記憶や問題解決に頼る必要はなく、この点で課題負荷は NX ほど高くないと考えられる。また集団実施であり、制限時間がやや長く、更に MFFT のように 1 試行ごとの反応時間が測定されたり、UK のように一定時間ごとに合図されるといった手続きを含まないので、時間的プレッシャーはこれらの課題ほど強くないと思われる。また特に文章校正課題の場合、刺激や課題内容は日常的なもので困難度もそれほど高くないと思われるので、“認知の狭窄”は遂行の失敗と結びつきにくいだろう。また刺激内容は一定ではなく、習慣的な反応が形成できたり単調感を覚えるほど長くは続けないので“アクションスリップ”の性質を持つ失敗も起こりにくいと予測される。他方、4 節での検討から、“衝動的失敗”は不安の高さとはあまり関係がなく、状況の把握を十分にしないで反応してしまう傾向であることが示唆されるので、ここで用いる課題でも同様の遂行が見られるのではないかと考えられる。

【 方 法 】

実施期間：1995 年 10 月～12 月。

参加者：心理学関連の講義を受講する女子大学生 3～4 回生。失敗傾向質問紙，K-EFT，文章校正課題を講義中に集団で，3～5 週の間隔をおいて実施した。参加人数は失敗傾向質問紙で 63 名，K-EFT では 71 名，文章校正課題では 67 名で，すべての指標が有効であるのは 42 名である（グループ 19）。年齢は 20～22 才で平均は 20.73 才（SD=0.54）であった。

K-EFT：加藤（1979）によって作成された埋没図形テスト（Embedded Figures Test）。参加者は複雑な図形の中に単純図形が含まれているかどうかを判断し，○×で回答する。表紙及び 5 枚の用紙からなる冊子形式で実施した。34 種類の単純図形につき各 4 個の複雑図形を呈示する。集団で実施する際は 8 分の制限時間内に正しく判断された単純図形の数を個人の得点とする。教示は加藤に従い，「できるだけ速く，かつ正確に行ってください」とした。

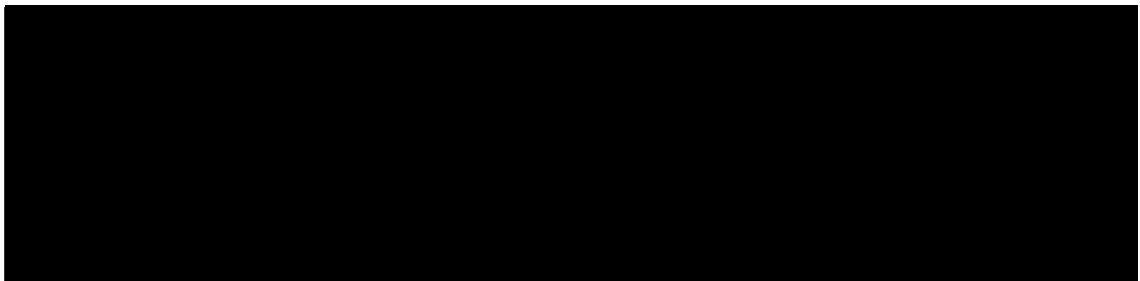


図 7-5-1 K-EFT の刺激図形例

文章校正課題：刺激材料には小説から抜粋した 2 種類の文章を用いた¹。文字数はいずれも 1014 文字であった。これらの文章はそれぞれ A4 用紙 1 枚に縦置き・横書き，1 行文字数 35 文字の書式で明朝体フォントを用いて印刷した。またこれらの文章に変形を加えた校正用の課題文も同様に印刷した。変形操作は加藤（1979）を参考にして 7 種類を設定した。文章 1，2 におけるそれぞれの変形箇所の個数は表に示した。課題の文章は，同じ種類の変形が続かず，またできるだけ変形箇所が均等に現れるように作成した。課題の文章の長さは 1，2 とも脱字の 10 文字分を差し引いた 1004 字である。

¹ 文章 1:「2001 年宇宙の旅」アーサー・C・クラーク著・伊藤典夫訳，ハヤカワ文庫 211～213，文章 2:「滴る汗」藤沢周平著，新潮文庫『闇に生きる』pp.478～479

表7-5-1 文章校正課題における変形操作の種類と個数

変形操作	例	個数
(1) 文字の向き	明 → 𠄎	10
(2) 活字の種類(明朝体→ゴシック体)	意 → 意	10
(3) 脱字	しまうのは → しまのは	10
(4) 文字の順序入れ替え	本体 → 体本	10
(5) 同音で異なる漢字	乱気流 → 乱木流	6
(6) 形が類似した文字	輝き → 輝さ	10
(7) 句読点の省略・入れ替え	違いは、 → 違いは。	4
	合計	60

参加者には見本（元の文章）と課題（校正すべき文章）の用紙を配布し、見本と異なる箇所があれば課題用紙のその箇所にアンダーラインを引くように教示した。実際に使用した見本と課題の文章は資料として添付する。制限時間はどちらの文章とも5分間とし、終了の合図があった時に読んでいた箇所に「」を記入させた。参加者の半数には文章1を先に、残りの半数は文章2を先に実施した。教示は加藤に従い、「できるだけ正確に、またできるだけ速くやって下さい」とした。また課題終了後には課題や遂行に対する評価と校正作業の方略の記述を行わせた。

【 結 果 と 考 察 】

1. 各測度の基本統計量

グループ19における失敗傾向の得点偏差値を表7-5-2に示した。

表7-5-2 グループ19における失敗傾向質問紙の尺度得点 (N=42)

	平均値	SD	得点偏差値
アクションスリップ	22.02	4.13	53
もの忘れ	14.02	3.37	52
放心	7.98	1.66	53
認知の狭窄	20.45	4.97	53
妨害されやすさ	11.98	3.17	52
とらわれ	8.48	2.65	53
衝動的失敗	7.17	3.72	49

このサンプルでは“アクションスリップ”と“認知の狭窄”の得点が女子学

生の標準データよりもやや高くなっている。

K-EFT 及び文章校正課題については加藤（1979）で検討されている指標を求めた。K-EFT では反応数，正答数，誤答数をカウントし，得点（正答数－誤答数），甘さ得点（本来×なのに○をつけた数－本来○なのに×をつけた数）を算出した。文章校正課題では見終わったところまでの文字数をカウントし，その範囲内で検出できた変形箇所を正答，見落としした変形箇所を誤答として，同様に得点を求めた。

K-EFT における誤答とは，単純図形を含まないのに誤って○をつけた答と，単純図形を含むのに誤って×をつけた答の 2 種類がある。文章校正課題では正しい文章にチェックをつけている反応はなかったので，ここでの誤答は検出すべき箇所を見落とししたものに限られる。

表7-5-3 K-EFT及び文章校正課題における各指標の基本

	平均値	SD	レンジ
K-EFT			
反応数	79.12	21.51	44 ~ 136
正答数	68.74	18.24	41 ~ 115
誤答数	10.38	7.28	0 ~ 33
得点	58.36	17.58	15 ~ 94
甘さ得点	-0.76	5.42	-19 ~ 11
文章校正課題			
終了文字数1	855.71	158.88	520~1004
検出数1	33.55	6.31	19 ~ 48
見落とし数1	18.60	6.40	9 ~ 35
得点1	14.95	8.81	-10 ~ 38
終了文字数2	894.40	137.46	520~1004
検出数2	33.93	6.79	19 ~ 53
見落とし数2	20.36	8.00	5 ~ 41
得点2	13.57	12.74	-22 ~ 48

※ EFTでは得点＝正答数－誤答数。

文章校正課題では得点＝検出数－見落とし数

※ 甘さ得点＝誤った○の数－誤った×の数

この 2 つの課題では誤答の生起は稀な事象ではなく，K-EFT では全反応中の 17～58%が誤答であり，文章校正課題でも 0～68%と個人によってかなり差がみられる。

次に反応数（校正課題では校正終了文字数）と得点の分布を図に示した。

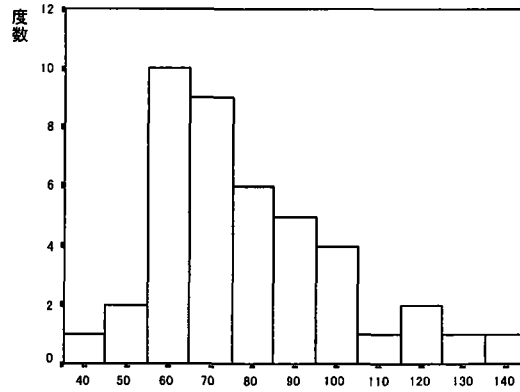


図7-5-2a K-EFTにおける反応数の分布

文章校正課題では制限時間に最後まで校正を終えた参加者が文章 1, 2 で十数名ずつおり、校正終了文字数には天井効果が見られる。加藤（1979）では 76 名の工専男子学生に 1,000 文字程度の文章校正を 5 分間行わせた場合の校正終了文字数は 500 字前後であったので、今回のサンプルは全体に加藤の参加者よりもかなり速く校正作業を行ったことになる。

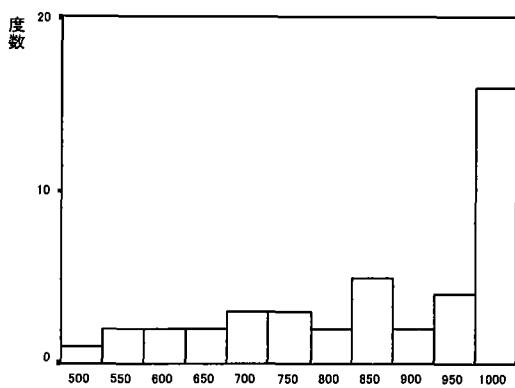


図7-5-3a 文章1における校正終了文字数の分布

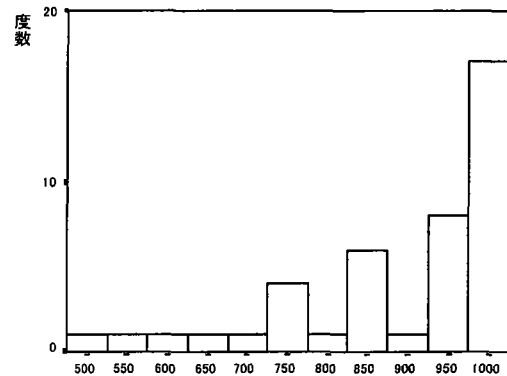


図7-5-4a 文章2における校正終了文字数の分布

得点分布に関しては、K-EFT で尖度が低くなっている（.08）が、文章校正課題では正規分布に近い形となった（歪度は-.23, -.30 で尖度 1.55, 1.91）。

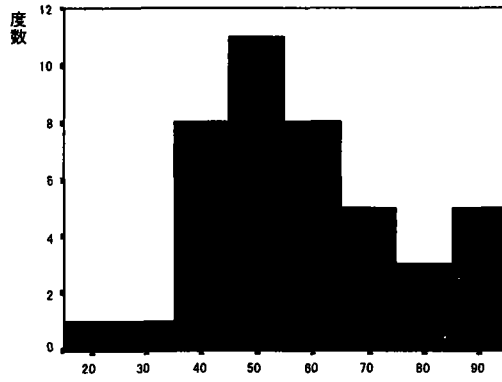


図7-5-2b K-EFTにおける得点の分布

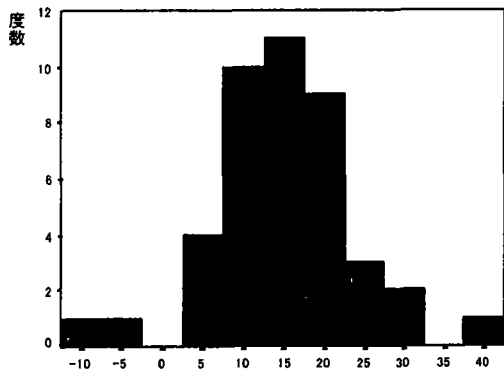


図7-5-3b 文章1における得点の分布

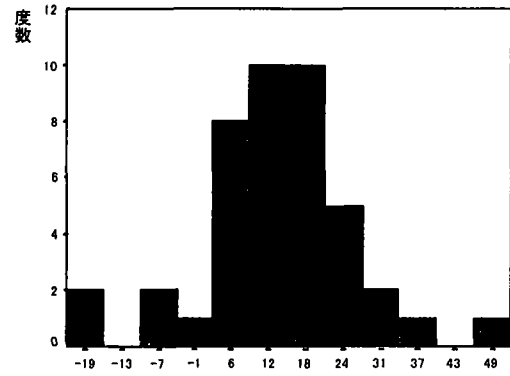


図7-5-4b 文章2における得点の分布

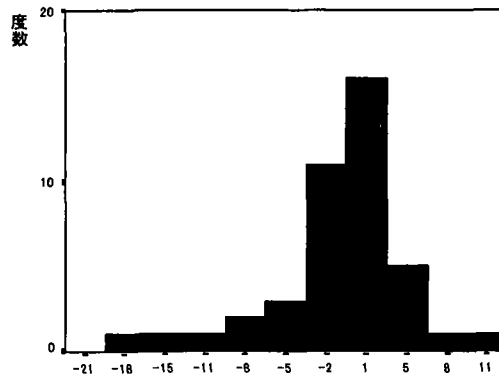


図7-5-2c K-EFTにおける甘さ得点の分布

K-EFTにおける甘さ得点とは、タイプ1エラー（×なのに○と答える）からタイプ2エラー（○なのに×と答える）の度数を差し引いたもので、加藤はY-G性格検査の暢気さ、衝動性などとの相関を調べているが、いずれも有意ではな

かった。今回のサンプルで全誤答中に占めるタイプ1エラーの割合を調べたところ、その範囲は0~100%で平均は48.95%となり、誤答の傾向にかなり顕著に個人差が見られることがわかる。

次に、K-EFTと文章校正課題の指標間の相関を調べた(表7-5-4)。文章完成課題が場独立-場依存の測度として妥当であるなら、K-EFTの指標との間に相関が認められるはずである。加藤(1979)では制限時間内の反応数ではなく、K-EFTの全問題を終了するまでの所要時間を反応の速さとして用いているが、この所要時間と文章校正課題の終了文字数との間に $r=-.30$ 前後の相関が得られている。

今回の結果ではK-EFTの反応数と校正課題の終了文字数の間に $r=.28\sim.31$ の相関が得られており、これらの2種類の課題が反応の速さという点では共通の要素を持つことのみが確認された。しかしこの2つの課題は、反応の速さと確実さの関係において相違が見られる。ここでの反応の確実さとは、正答が多く誤答が少ないという特徴を指す。K-EFTでは反応数と得点(=正答-誤答)の間に $r=.74$ ($p<.01$)の相関があるので、速く反応するほど反応の確実さも高くなっていることがわかるが、文章校正課題では終了文字数と得点はほぼ無相関であり(文章1, 2で $r_s=-.05, -.11$)、反応の速さと確実さの間には関連がない。

表7-5-4 K-EFTと文章校正課題の指標間の相関係数

(N=42)

	K-EFT				文章1				文章2			
	正答数	誤答数	得点	甘さ得点	文字数	正答数	誤答数	得点	文字数	正答数	誤答数	得点
K-EFT 反応数	0.95 **	0.58 **	0.74 **	-0.07	0.31 *	0.18	0.26 +	-0.06	0.28 +	0.16	0.13	0.00
正答数		0.29 +	0.92 **	0.11	0.30 *	0.19	0.23	-0.04	0.22	0.15	0.09	0.02
誤答数			-0.11	-0.50 **	0.17	0.06	0.19	-0.10	0.26	0.10	0.17	-0.05
得点				0.32 *	0.24	0.17	0.16	0.00	0.13	0.11	0.02	0.05
甘さ得点					-0.01	0.04	-0.04	0.06	-0.11	-0.15	0.02	-0.10
文章1 終了文字数						0.68 **	0.75 **	-0.05	0.85 **	0.37 **	0.49 **	-0.11
検出数							0.04	0.69 **	0.57 **	0.73 **	-0.06	0.42 **
見落とし数								-0.70 **	0.69 **	-0.16	0.78 **	-0.57 **
得点									-0.10	0.63 **	-0.61 **	0.72 **
文章2 終了文字数										0.37 **	0.64 **	-0.21
検出数											-0.48 **	0.83 **
見落とし数												-0.88 **

※ **:p<.01, *:p<.05, +:p<.10.

2. 失敗傾向と K-EFT 及び文章校正課題における遂行との関係

表には失敗傾向と 2 種類の課題における遂行の指標との相関係数を示した。先に述べたように文章校正課題の終了文字数には天井効果が認められたため、この分析からは除いた。

表7-5-5 失敗傾向と、K-EFT及び文章校正課題における遂行との相関 (N=42)

失敗傾向	アクションスリップ			認知の狭窄			衝動的失敗	
		もの忘れ	放心		妨害されやすさ	とらわれ		
K-EFT	反応数	-0.21	-0.20	-0.11	-0.23	-0.30 *	-0.08	-0.14
	正答数	-0.18	-0.16	-0.12	-0.27 +	-0.29 +	-0.16	-0.19
	誤答数	-0.18	-0.19	-0.04	-0.02	-0.17	0.17	0.09
	得点	-0.11	-0.09	-0.11	-0.27 +	-0.23	-0.24	-0.24
	甘さ得点	0.14	0.11	0.13	0.19	0.39 **	-0.11	0.01
文章1	検出数	-0.19	-0.30 *	0.15	-0.14	-0.09	-0.15	-0.43 **
	見落とし数	-0.20	-0.13	-0.21	-0.25	-0.27 +	-0.15	-0.07
	得点	0.01	-0.12	0.26 +	0.08	0.13	0.00	-0.25
文章2	検出数	-0.15	-0.27 +	0.16	-0.18	-0.15	-0.15	-0.39 **
	見落とし数	-0.20	-0.18	-0.12	-0.09	-0.12	-0.02	0.12
	得点	0.05	-0.03	0.16	-0.04	-0.01	-0.07	-0.28 +

※ **:p<.01, *:p<.05, +:p<.10.

文脈の中から当該刺激を速くかつ正確に抽出できることで場独立一場依存スタイルを捉えるならば、これらの課題では正答数から誤答数を差し引いた得点とその指標となるだろう。しかし表 7-5-4 からわかるように K-EFT と文章校正課題の得点間の相関は非常に低く、また失敗傾向との相関もごく弱いながら K-EFT では“認知の狭窄”，文章校正課題では“衝動的失敗”というように特異性を示しており、場独立一場依存のスタイルと失敗傾向との一貫した関連は見出されなかった。

遂行の他の指標を見ると、K-EFT では反応数と“妨害されやすさ”の間に負の相関が認められた ($r=-.30$, $p<.05$)。これは“妨害されやすさ”得点の高い者ほど回答できた図形の数が少ないことを示している。また“妨害されやすさ”は K-EFT の甘さ得点とも有意な正の相関を示した ($r=.39$, $p<.01$)。甘さ得点は、誤答のうち実際には単純図形が含まれていない複雑図形に○をつけた誤答が多いことを示すものである。

Leon (1989) は情報処理の包括性 (inclusiveness) と不安の関係を実験的

に検討し、不安が高い者は課題遂行中に処理容量が損なわれることで情報処理が遅くなり、却って課題に無関係な情報まで含めて課題解決を行ってしまう *inclusive error* が低不安者より多くなることを明らかにしている。K-EFT では×となる複雑図形でも単純図形の一部は必ず含んでいるから、正しく×と反応するためには、単純図形とは異なる部分を見つけなければならない。しかし不安が高くなり情報処理の幅が狭くなるとそれが困難になり、単純図形と共通の部分によって○と判断してしまうためにタイプ1エラーが増えるのかもしれない。Leon (1989) の知見からは“妨害されやすさ”と甘さ得点の間の相関をこのように解釈することができる。

一方、文章校正課題における検出数は“もの忘れ”とも弱い相関を示したが、より顕著であったのが“衝動的失敗”との相関である（文章1, 2でそれぞれ $r_s = -.43, -.39$; いずれも $p < .01$ ）。これは“衝動的失敗”得点が高い者ほど検出できた変形箇所が少ないことを示している。

見落とし数と失敗傾向の間には有意な相関は見られなかったが、これらの課題では反応数と見落とし数に高い相関が認められているので、反応数の影響を除いた上で失敗傾向と見落とし数との偏相関係数を求めてみた。その結果、“衝動的失敗”とK-EFTにおける誤答数及び文章2における見落とし数との間のみ弱い正の相関が認められた ($r_s = .26, .25$; いずれも $p < .10$)²。

以上の結果から、K-EFTでは“妨害されやすさ”と反応が遅いことや判断基準が甘いこととの間に関連が見られ、文章校正課題では“衝動的失敗”が見落としの多さと関連していることが示された。

3. 文章校正課題の課題分析

(1) 変形操作による校正困難度の違い

文章校正課題では変形操作の種類によって検出の困難度が異なると思われるので、その比較を行った。文章校正課題を行った67名の参加者全員が校正を終了した箇所までを対象とすると、文章1, 2を合わせて58個の変形箇所が含まれていた。内訳は(1)文字の向きが11個、(2)活字の種類が10個、(3)脱字と

² 正答数との相関係数は同じ大ききで負の値となる。

(4)文字の順序が 9 個ずつ, (5)同音で異なる漢字が 6 個, (6)形の類似が 9 個, (7)句読点の省略・入れ替えが 4 個である。これらの操作ごとに正しく検出した参加者の数を全参加者数で割って検出率を求めた。

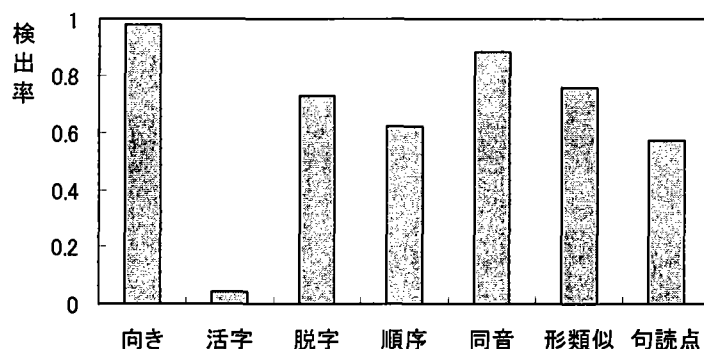


図7-5-5 変形操作ごとの検出率

図からわかるように変形箇所の見つけやすさは操作の種類によってかなり差があり, 文字の向きを変えた箇所では約 98%が検出されているのに対して, 活字の種類を変えた箇所では全体の 4%しか検出されていない。参加者ごとに見ると, 10 箇所ある活字の変化のうち, 半数以上を検出できたのは 67 名中 3 名のみであった。

(2) 文章校正課題における反応方略の分析

方略の記述を求めた際に, 特に見本の文章をどのように用いたかについて詳しく報告するように求めたところ, その回答は 2 種類に大別できることがわかった。多くの参加者で見られたのが, 「見本の一文を読んでから課題の一文を読んだ」「見本の区切りのいいところまで目を通してから課題の文章をチェックした」のように, まず見本を見てから次に課題を見て校正作業を行ったことを示す記述である。(1)で最も検出が困難だと思われる活字の変化を半数以上検出できた 3 名はいずれも, 「文章を読んで内容を理解してから課題を見た。課題を読んでおかしいと思ったらもう一度見本を見直した」, 「見本と課題の文章の同じところをそれぞれ指と鉛筆で追いながら見ていった」, 「20 字ずつくらい区切って何度か見比べた。印字の濃さも気になった」というように更に丁寧な方略を報告している。

方略のもう一つのタイプは「課題の文章を読み、文が通らない場合にだけ見本を見てチェックした」、「課題を先に読み、ひっかる所が来た時だけ見本でチェックした」などのように、まず課題の文章から読み、変形箇所らしく思えるところでだけ見本との照合を行うやり方である。67名の参加者のうち、前者の方略を報告した者が54名、後者の方略を報告した者が13名であった。後者の方略は、見本と課題の両方を照合しながら作業を行うよりも負担は少ないが、変形箇所の見落としは多くなると予測できる。そこで文章校正課題における方略の種類で参加者を照合群と検出群の2群に分け、文章校正課題とK-EFTにおける遂行を比較した。用いた指標は文章校正課題の校正終了文字数と得点³、及びK-EFTにおける反応数、得点、甘さ得点である。

表7-5-6 照合群・検出群の文章校正課題及びK-EFTの遂行比較

遂行の指標	照合群 平均(SD)	検出群 平均(SD)	
文章校正課題			
文字数合計	1741.93 (273.88)	1775.08 (267.72)	n.s.
得点合計	30.39 (20.89)	18.00 (16.67)	*
K-EFT			
反応数	76.67 (20.96)	82.27 (23.59)	n.s.
得点	54.40 (19.17)	63.18 (18.51)	n.s.
甘さ得点	-1.18 (5.27)	1.91 (3.62)	+

※照合群N=54, 検出群N=13(K-EFTでは照合群N=45, 検出群N=11).

予想したように、検出群より照合群のほうが文章校正課題の得点は有意に高かった ($t=1.99$, $p<.05$)。文字数では群間の差は見られないため、方略の違いは校正の速さではなく正確さに影響するようである。

また文章校正課題における方略はK-EFTにおける甘さ得点ともやや関連があり、照合群よりも検出群の甘さ得点が高い傾向が見られた ($t=1.83$, $p<.10$)。先に述べたようにK-EFTにおける甘さ得点とは、誤答中に占めるタイプ1エラーの数が多きこと、即ち刺激を誤って正事例に含めてしまう判断基準の甘さを示す指標である。文章校正課題において見本をあまり照合せず、自分の判断に頼って校正作業を行う者は、K-EFTにおいても同様に単純図形(=見本)と

³ いずれも文章1, 2の結果を合計したものをを用いた。

の照合を確実に行わず、部分的な一致のみで○と答えてしまうのかもしれない。

【 全 体 の 考 察 】

本節では場独立―場依存の認知スタイルを捉えるとされる2種類の課題を用いて、その遂行と失敗傾向との関連を検討した。この認知スタイル概念の中核をなすのは、全体的な場から当該の刺激を抽出する際に見られる個人のアプローチの違いであり、場独立的な者ほど分節的なアプローチを行い、刺激の抽出が容易であると考えられている。失敗傾向の概念的内容とこのような特徴はあまり重複する部分がなく、スタイルと失敗傾向の関係はあまり強くないことが予測されていた。実際にそれらの課題における遂行と失敗傾向との相関は弱く、また課題によってどの失敗傾向と関連があるかも異なっていたため、課題別にその状況と失敗傾向との関連について考察することが必要であろう。

まず K-EFT (Kato's Embedded Figures Test) は複雑図形の中に埋没した単純図形を抽出する課題で、場独立の者ほどその抽出が容易であるとされている。この課題では、“認知の狭窄”の下位因子である“妨害されやすさ”と反応数及び甘さ得点との間に有意な相関が認められた。甘さ得点とは実際には単純図形が含まれていないのに○と答える誤答が多いことを示す指標である。このことから、K-EFTでは“妨害されやすさ”得点の高い者ほど不安によって認知が妨害されて反応が遅くなり、単純図形が含まれていないという判断に到達する前に○と答えてしまうのではないかと考えられる。おそらく K-EFT においては、4 節で用いた MFFT と同様に、自分の反応が正しいかどうかはわかりにくく (response uncertainty), また遂行が “veridical” かどうかという基準で評価されるため (Kogan, 1976), 能力テストを受ける時に類似した不安や緊張が喚起されるのではないかと考えられる。課題が困難で不安が喚起されるような状況において“妨害されやすさ”と反応効率の低さの間に関連が見られたことは、京大 NX 式知能検査 (2 節) の図形分割課題や MFFT (4 節) を用いた場合の結果と整合するものであった。

一方、文章校正課題では“アクションスリップ”の下位因子である“もの忘れ”及び“衝動的失敗”が見落としの多さと関連していることが示された。この課題は K-EFT に較べると刺激材料や内容がより日常的なものに近く、また

「課題文を先に読んで、おかしいと思ったところだけ見本と照合する」といった方略をとる参加者がいたことからわかるように、見本と一致するかどうかではなく、文章の意味が通じるかどうかという日常的な判断基準で作業を行うことも可能である。ここで遂行の失敗として取り上げた見落としも、それが失敗であるというフィードバックは与えられないため、参加者にとっては見落とすことへの脅威や不安もそれほど強くなかったと考えられる（山田，1999b）。これらの点で、文章校正課題は課題状況に対する認識や用いられる方略に個人差が現れやすく、K-EFTよりも課題状況が弱かったのではないかと考えられる。「もの忘れ」は3節で考察したように、自覚されない放心の傾向を示すと考えられるため、1 試行ごとの区切りもなく連続的に文章を読んでいくという課題ではそれが見落としにつながったのではないだろうか。また“衝動的失敗”は状況の把握が不十分なまま行動してしまう傾向であるが、これが見本との照合を十分に行わないまま先に進んでしまう遂行として現れたと思われる。なおこの2つの失敗傾向は、問題解決に時間がかかるNXのソシオグラムでは省略反応率（答えないで先に進む）と弱い相関を示しており（2節）、持続して作業を行うことの困難さの要素を含むことがここでも示唆された。

7-6 失敗傾向と課題状況の認知から遂行を説明するモデルの検討

第IV部では知能や認知スタイルを捉える課題を用いて、その測定概念以外に課題遂行に現れる、「予期されなかった特徴（Rubin，1989）」を事後的に分析し、失敗傾向との関連を調べた。本節ではそれらに参加者自身による課題評価の指標を加えて、それぞれの遂行を予測するモデルの構築を試みる。

1. 課題状況の比較

まず課題状況の特徴を表7-6-1に、参加者による課題状況の評価を表7-6-2にまとめた。この評価は、第IV部の初めに述べた方法で各課題の終了時に実施した。なおK-EFTについては課題状況の評価を行わなかったため、ここではそれ以外の4種類の課題について検討する。

表7-6-1 第三部で取り上げた課題とその特徴

課題	測定概念	課題内容	教示	正誤フィードバック	時間制限	実施時間
京大NX式知能検査	知能(空間性,言語性,数的推理,日常記憶)	(12種類の下位検査から構成)	「一生懸命に」	無	有	約60分
内田クレペリン精神検査	心的活動性	数字の連続加算作業	「まじめに」 「熱心に」	無	有	30分
Matching Familiar Figures Test (MFFT)	熟慮—衝動の認知スタイル	図形の照合, 多肢選択	特になし	有	無	個人ペース (~約20分)
文章校正	場独立—場依存の認知スタイル	文中の変形部分の検出	「できるだけ速く, 正確に」	無	有	5分×2

課題状況の評価については項目ごとに課題の種類を要因とした分散分析を行い、すべての項目において 1%水準で課題の主効果が認められた。多重比較の結果からは、NX と MFFT では課題が困難で不安や緊張が高く自身の遂行は失敗だったと評価されており、反対に文章校正では課題が容易で不安や緊張も低く、自身の遂行は成功だったと評価されていることになる。UK はそれほど困難度は高くないが、時間的なプレッシャーは高かったようである。

表7-6-2 各課題の課題状況・遂行に対する評価

課題	NX	UK	MFFT	校正	多重比較の結果 (p<.05)
項目	(N=125)	(N=54)	(N=54)	(N=67)	
課題困難度	67.78	46.96	62.69	35.39	NX,MFFT>UK>校正
時間的プレッシャー	70.62	65.80	58.78	50.60	NX,UK>校正, NX>MFFT
エラー不安	59.52	59.87	74.02	47.36	MFFT>UK,NX>校正
遂行の成功	41.09	52.09	45.78	64.46	校正>UK,MFFT>NX
緊張	50.24	53.15	46.22	38.18	UK,NX>校正
正確さ重視	46.05	48.11	61.48	52.73	MFFT>NX,UK

次に、課題場面における緊張の原因を自由記述で求めた結果を図 7-6-1 に示した。回答は 57.4% (MFFT) ~ 74.1 (UK) % の参加者から得られた。

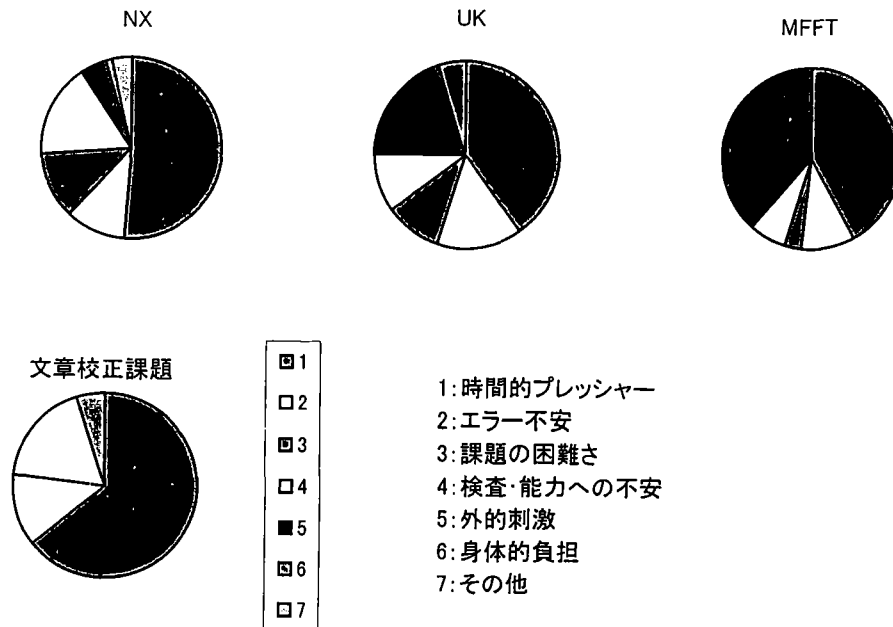


図 7-6-1 各課題における緊張の原因

いずれの課題においても最も多かったのは、「制限時間があること」、「速くしなければならなかったから」など時間的なプレッシャーに関する記述であった。次いで「まちがえるかもしれないと思ったから」、「できるだけ正確にやろうとしたから」など反応の正誤に関する不安や、「難しかったから」、「何が正しいかわかりにくかったから」など課題そのものの困難さや反応の不確かさ(response uncertainty)をあげている者が多い。外的な刺激に関する記述はUKとMFFTで多かったが、UKでは他人の鉛筆の音や静かすぎることで、MFFTではまちがった時のブザー音をあげる者が多かった。

これ以降は、課題の困難度や不安、緊張、また参加者が自分の遂行をどのように評価しているかを表わすこれらの指標をまとめて、課題状況の認知と呼ぶことにする。

2. 失敗傾向、課題状況の認知によって遂行を説明する基本モデル

ここでは共分散構造分析の手法を用いて、各課題において特徴的であった遂行を失敗傾向と課題状況の認知から説明するモデルの検討を行う。この分析は、失敗傾向と課題状況の認知が共に遂行に影響し、課題状況の認知は評価に用いた6項目すべてに反映されるとする基本モデル(図 7-6-2)から始める。参加者数はNXで104名、あとの課題では50~60名と共分散構造分析で通常想定されている参加者数よりかなり少ないが、最近では100名以下のデータを用いた研究も散見されており、今回は失敗の生起に関するモデルの叩き台としてこれらの分析結果を報告しておく。分析

には Amos4.0 を使用した。

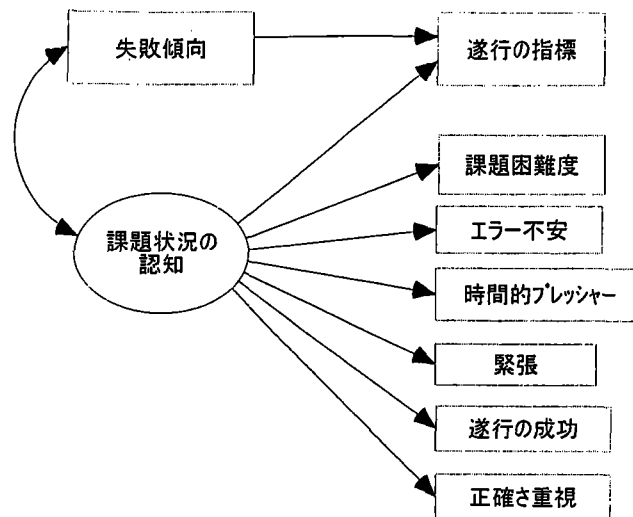


図 7-6-2 失敗傾向と課題状況の認知によって遂行を説明する基本モデル a

3. 図形分割課題(京大 NX 式知能検査)における誤答率

NX では図形分割課題において“認知の狭窄”と誤答率の間に有意な相関が見られたため、モデルにはこの指標を用いた。

“認知の狭窄”得点と課題状況の認知が共に誤答率に影響することを想定したモデル a では $\chi^2(19)=33.06 (p<.05)$ となり、モデルそのものが受容できないことがわかった。そこで有意でないパスを順に除き、モデル全体が受容できるまで修正を加えていった。最初に除かれたのは課題状況の認知→誤答率のパスである。NX では検査全体に対して上記の評価を行わせたので、図形分割における課題状況の認知をうまく反映していないとも考えられる。しかし χ^2 検定ではこのモデル b も受容できないことが示された。

次に有意でなかった課題状況の認知→正確さの重視を除き、更に課題状況の認知→遂行の成功へのパスを除いたところ、 $\chi^2(9)=12.75, p=.17$ となってモデル自体は受容できるレベルのものになり、またすべてのパス係数が有意であった(モデル c)。

このモデルでは困難度、時間的プレッシャー、エラー不安、緊張の 4 項目が課題状況の認知を反映していることになるが、あとの 3 項目が課題状況に対する情動的評価の側面であるのに較べると、困難度はより認知的な評価であると考えられる。そこで課題状況の認知→困難度のパスを除いたのがモデル d である。

この2つのモデルの適合度指標を下表に示した。

表7-6-3 モデルc, dの適合度指標の比較

	モデルc	モデルd
適合度指標(GFI)	0.962	0.978
修正適合度指標(AGFI)	0.912	0.935
RMSEA	0.064	0.043
赤池情報基準量(AIC)	36.75	25.94

GFI はどちらのモデルでも基準とされる 0.9 を超えており、AGFI も十分高い。また RMSEAも適合度が高いとされる基準(0.08 以下)を満たしている。しかしここではAICの比較から、モデル d を採用することにした。このモデルではすべてのパス係数が 1% 水準で有意である。

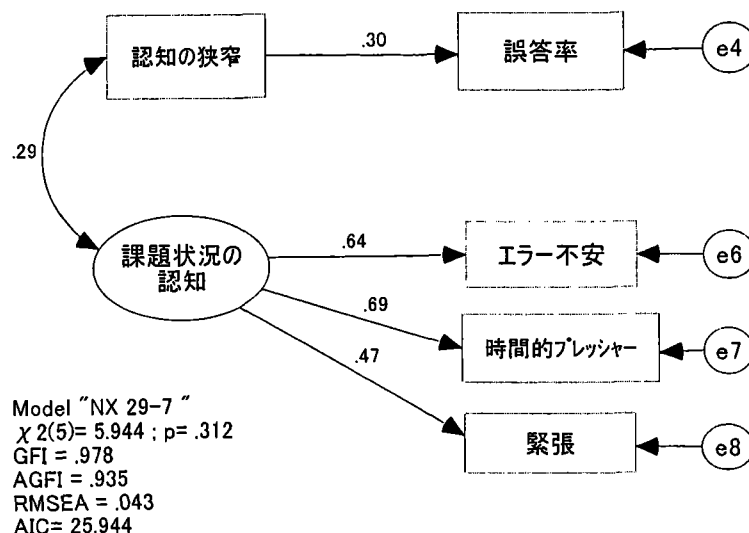


図 7-6-3 図形分割課題(NX)における誤答率を説明するモデル

モデル d は次のように解釈できる。時間的な切迫感やエラー不安、緊張などに現れる NX の課題状況の認知は“認知の狭窄”とは弱い正の相関関係にある。従って“認知の狭窄”得点の高い者ほど、課題状況を不安や緊張が高いものだと受け取っているこ

とになる。このような課題状況の認知は、“認知の狭窄”との関係を通して間接的に図形分割課題における誤答率の高さに影響している。

以上の解釈は、反応の不確かさの高い状況では遂行に対する不安が喚起されやすく、“認知の狭窄”得点の高い者では十分な正答の検討が行われず誤答率が高くなるという2節での考察とも一致する。

4. 内田クレペリン精神検査における誤答数

UK では誤答の生起に“アクションスリップ”の“もの忘れ”傾向が関わっている可能性が示されたので、これを変数として用いた。

すべての変数を含めたモデル a は χ^2 検定の結果受容できないことが示されたので、ここでも有意でなかった課題状況の認知→誤答数のパスを除いて再度分析を行った(モデル b)。“もの忘れ”は自覚されない放心の傾向を示すのではないかと先に述べたが、UK での誤答があまり意識されずに起こっているとすれば、評定結果に現れる(即ち意識される)課題状況への認知ともあまり関連がないことは尤もであるように思われる。

モデル b もやはり受容可能なレベルには達しなかったので、弱いパスを順に1つずつ除いた3つのモデルを比較した。除かれたパスは課題状況の認知→課題困難度、正確さ重視、エラー不安である。これら3つのモデルは χ^2 検定ではいずれも受容可能とされたので、次に適合度指標を比較した。

表7-6-4 モデルc, d, eの適合度指標の比較

	モデルc	モデルd	モデルe
適合度指標(GFI)	0.892	0.935	0.936
修正適合度指標(AGFI)	0.785	0.849	0.809
RMSEA	0.111	0.070	0.126
赤池情報基準量(AIC)	64.61	35.18	28.95

モデル c は GFI が 0.9 に満たなかったため、モデル d, e を比較する。AIC ではモデル e の方が望ましいが、AGFI がより大きいこと、また RMSEA が 0.1 以上のモデルは採択すべきでないとされていることから(山本, 1999)、ここではモデル d が適当であると判断した。

UK においては、エラー不安、時間的プレッシャー及び緊張が高いほど自身の遂行は失敗であったと評価されている。しかしこの課題状況の認知は“もの忘れ”とは殆ど相関がなく、誤答の生起にも影響を及ぼさないようである。

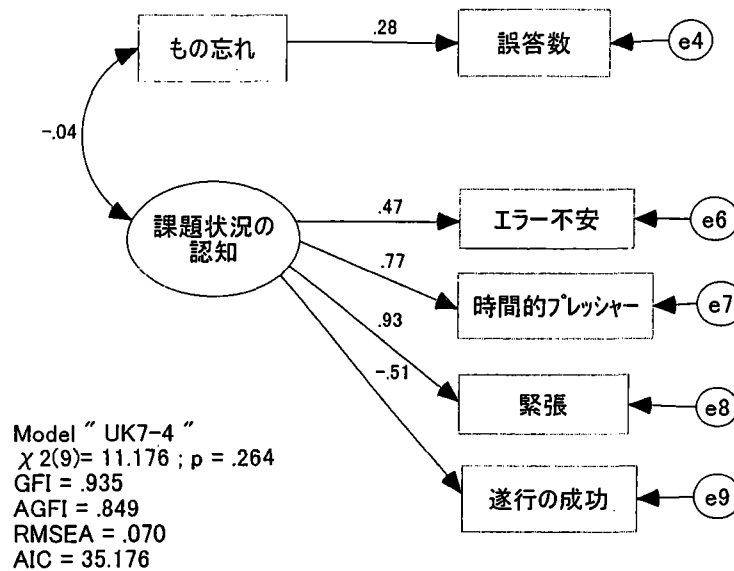


図 7-6-4 UK における誤答数を説明するモデル

5. Matching Familiar Figures Test における反応効率性

この課題では“認知の狭窄”と反応効率性の中に負の相関が認められた。すなわち“認知の狭窄”が高いほど、速くかつ正確に反応できないという性質の失敗が見られる。“認知の狭窄”と反応効率性を取り入れたモデル a は χ^2 検定では棄却されなかったが、有意ではないパスをいくつか含んでいたために、パス係数の小さいものからそれらを順に除いていき、モデルの修正を行った。

課題状況の認知→正確さ重視、次に課題状況の認知→反応効率性のパスを除いた時点で、モデルに含まれるすべてのパスが有意となった(モデル c)。このモデルと、次にパス係数の低い課題状況→エラー不安のパスを除いたモデル d を比較した。

モデル d は GFI(AGFI)が高く、AIC が小さい。しかしモデル c の方が RMSEA は小さい。このように適合度指標からはどちらが優れたモデルかが決め難いが、前節で述べたように MFFT ではエラーに対する不安が他の課題に較べて非常に高く、それが遂行を妨害している可能性が示唆されるため、エラー不安の変数を含めたモデル c を採

用することにした。

表7-6-5 モデルc, dの適合度指標の比較

	モデルc	モデルd
適合度指標 (GFI)	0.910	0.931
修正適合度指標 (AGFI)	0.819	0.840
RMSEA	0.084	0.093
赤池情報基準量(AIC)	46.75	36.70

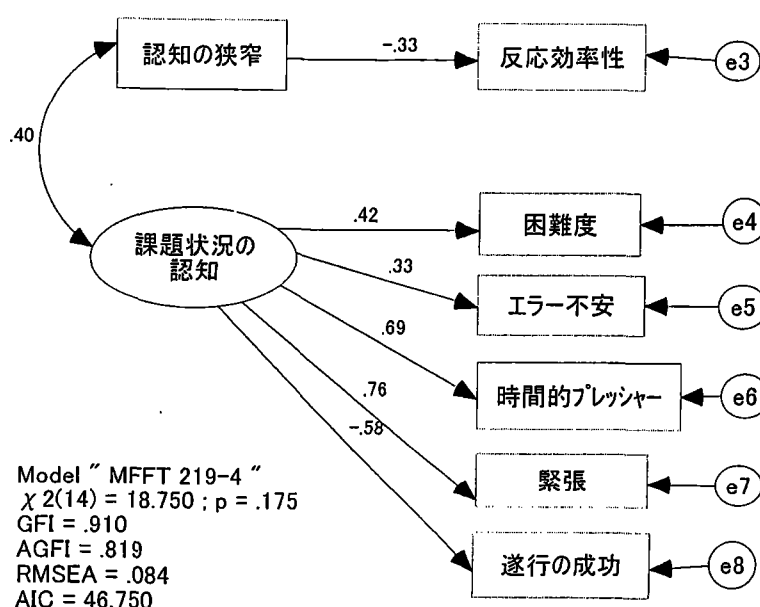


図 7-6-5 MFFT における反応効率性を説明するモデル

このモデルによれば、MFFT の課題状況に対する認知は困難度、エラー不安、時間的プレッシャー、緊張の項目に反映され、それらが高いほど遂行は失敗だったと見なされている。“認知の狭窄”はこのような課題状況の認知とは中程度の正の相関を示し、更に反応効率性に負の影響(パス係数は-.327, $p < .05$)を及ぼしている。

6. 文章校正課題における検出数

文章校正課題では変形箇所をチェックした検出数と“衝動的失敗”の間に有意な負の相関が認められ、見本との照合を十分に行わないで先に読み進める方略との関

係が示唆された。

“衝動的失敗”と検出数を用いたモデル a から分析を始め、モデル全体が受容できるレベルになるまで有意でないパスを順に除いていく作業を行った。除かれたのは課題状況の認知から正確さ重視、検出箇所、困難度、遂行の成功へ向かうパスである。これらのパスを除いたモデル e では $\chi^2(5)=1.32$ (n.s.)となり、GFI=0.989, AGFI=0.968, RMSEA= 0.000 と適合度も十分に高くなった。

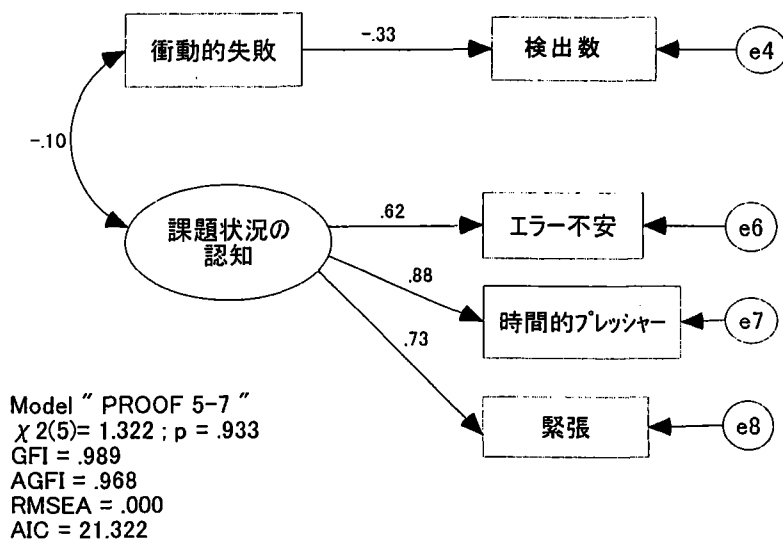


図 7-6-7 文章校正課題における検出数を説明するモデル

このモデルによれば文章校正の課題状況の認知はエラー不安、時間的プレッシャー、緊張の項目に反映されるが、この認知は“衝動的失敗”とは殆ど相関がない。従って“衝動的失敗”が変形箇所を見落とすという失敗につながるメカニズムには、不安や緊張はあまり関与していないことがうかがえる。

【 全体の考察 】

まず、いずれの課題においても採択されたモデルではそれぞれの失敗傾向が遂行の失敗にある程度の影響を及ぼしていることが確認された。次にこれらの課題では共通して、時間的なプレッシャー、緊張、及びエラー不安によってその状況の認知が特徴づけられていた。これはいずれの課題も時間制限か反応時間の計測を行うという手

続きをとっていることを考えれば尤もな結果である。また課題場面に臨めば、緊張や自分の遂行が正しいかどうかという懸念が多少なりとも喚起されるのも当然であろう。しかしこれらの認知から遂行へのパスはすべて除外されたので、課題状況への認知がそれのみで直接的に遂行に影響を及ぼすことはないようである。また課題の困難度や遂行の失敗、反応に際して速さと正確さのどちらを重視するかといった方略に関する指標は他にもいくつかのモデルで検討してみたが、受容可能なモデルにはうまく取り入れることができなかった。

次に課題間の比較からわかったことは、失敗傾向が遂行の失敗に結びつくメカニズムには不安や緊張といった課題状況の認知が関わっている場合と、そうでない場合があることが示された。つまり課題状況が困難で不安や緊張が高いと評価される NX や MFFT では、その不安や緊張によって“認知の狭窄”や“妨害されやすさ”が持つ認知的な脆弱さ(vulnerability)が発現しやすくなり、速く・正確に反応できないといったタイプの失敗が起こる。これらに較べて文章校正課題や UK など課題そのものが容易で正誤のフィードバックも与えないというような場合には、課題状況に対する不安や緊張とは関係なく“アクションスリップ”や“衝動的失敗”が見落としや誤答に影響するようである。

以上のように、失敗傾向と課題状況から実際の失敗の生起を説明しようとする試みにおいて、失敗傾向は失敗の生起にある程度影響を及ぼすこと、また課題状況によってどの失敗傾向が影響を及ぼすかが異なることが示された。今後このような検討を行う際には、課題状況やその認知を捉える方法を改善する必要があるだろう。ここで用いた課題については、例えば実際に標準刺激との照合が不十分なのかを捉えるために眼球運動を計測したり、疲労や単調感の指標として生理的指標を用いるなどの工夫もなされてよい。またここでの知見を基にして人為的に失敗の生起を高めるような課題を設定し、失敗傾向、状況、遂行の失敗という三項の関係をより確証的に調べていくことも可能である。

7-7 まとめ

本章では、質問紙で測られる 3 つの失敗傾向がどのような状況において実際に失敗として現れやすいのかを探り、それぞれの失敗が起こるメカニズムにつ

いて考察することを目的とした。1 節ではそのための方法論的な枠組について述べた。本章で用いたのは知能検査や作業検査、認知スタイル課題などであり、まずこれらが測定する構成概念（知能や認知スタイル）と失敗傾向が独立の概念であることを確認した上で、それぞれの課題状況における失敗と失敗傾向との関係を検討することを述べた。また参加者自身による課題状況や緊張・不安、自身の遂行の成否などに対する認知の評価も求め、遂行との関係を調べることにした。

2 節では集団式知能検査（京大 NX 式知能検査）を用いて、まず 3 つの失敗傾向が知能とは殆ど相関を持たないことを確認した。次に各下位検査で反応数、誤答率、省略率などの指標と失敗傾向の相関を調べた。この結果、反応選択肢がなく回答が困難であったと思われる課題では、“認知の狭窄”と誤答率の間に相関があることがわかり、このような課題状況に伴う反応の不確かさ（response uncertainty）によって不安や緊張が高まることで、“認知の狭窄”の高い者では十分な正答の吟味が行われなくなることを示すのではないかと考えられた。

3 節では集団式作業検査（内田クレペリン精神検査）を用いた。この検査における作業量、曲線変動値（定型からのずれを示す）などの作業の特徴と失敗傾向との間には目立った関連は見られなかったが、誤答数は“アクションスリップ”及びその下位項目群である“もの忘れ”と有意な相関を示し、“アクションスリップ”が高いほど誤答数が多いという結果が得られた。UK では誤答そのものの頻度はあまり高くないが、一人の参加者が繰り返し同じ誤答を出す例がいくつか見られた。このような誤りぐせの強さを示す、同じ誤答の最大頻度と“アクションスリップ”の間には弱いながらやはり相関が認められた。以上の結果から、一桁の加算という単純な課題を長時間続けることで慣れや疲労が生じ、“アクションスリップ”が高い者では注意が逸れやすくなり機械的な誤答の産出につながったのではないかと考えられた。

2, 3 節で用いた課題はいずれも、時間内にどれぐらい多くの正答を出すかによって知能や行動の特徴を測ろうとする最高値検査であるが 4, 5 節では「どれぐらいたくさんできるか」ではなく「どのように行うか」を捉える認知スタイル課題を用いた。

4 節では熟慮－衝動の認知スタイルを測る Matching Familiar Figures Test (MFFT) を用いた。MFFT では、変形操作を加えた比較刺激の中から標準刺激と同じ図形を探し出すことが求められる。参加者の遂行から、反応が早く正確なことを示す反応効率性、反応が早く誤答が多いことを示す衝動性の 2 つの指標を求めて失敗傾向との関係を調べたところ、MFFT における反応効率性と“認知の狭窄”の間に負の相関が認められた。つまり“認知の狭窄”得点の高い者ほど MFFT における遂行は時間がかかり、誤答も多かったことが示された。MFFT の課題状況では反応の不確かさが高く不安が喚起されやすいとされており、不安によって情報処理が妨害されやすい“認知の狭窄”傾向が高いほど MFFT の課題状況では遂行の速さと正確さが共に損なわれやすくなるものと思われる。

5 節では埋没図形テスト (K-EFT) と文章校正課題を用いた。これらの課題ではいずれも全体的な場から当該の刺激の抽出が求められるが、場独立的な者は全体的な場に対して分節的なアプローチを行うので刺激の抽出が容易であると考えられている。しかし失敗傾向と遂行の関係は 2 つの課題の間で異なっていた。まず K-EFT では“認知の狭窄”の下位因子である“妨害されやすさ”と反応数及び甘さ得点との間に有意な相関が認められた。甘さ得点とは実際には単純図形が含まれていないのに○と答える誤答が多いことを示す指標である。このことから、K-EFT では“妨害されやすさ”得点の高い者ほど不安によって認知が妨害されて反応が遅くなり、単純図形が含まれていないという判断に到達する前に○と答えてしまうのではないかと考えられる。

一方、文章校正課題では“アクションスリップ”の下位因子である“もの忘れ”及び“衝動的失敗”が見落としの多さと関連していることが示された。この課題は K-EFT に較べると刺激材料や内容がより日常的なものに近く、また見落としが誤答であることのフィードバックも与えられないため不安もそれほど強くなかったと考えられるので、こうした課題状況ではあまり注意を払わず、見本との照合を充分行わないで読み進めていくことで見落としが増えるのではないかと考えられる。

6 節では 2 節から 5 節で検討された失敗傾向と遂行の関係を、更に課題状況の認知という要因を加えて検討し、課題間の比較を行った。ここから、失敗傾

向が遂行の失敗に結びつくメカニズムには不安や緊張といった課題状況の認知が関わっている場合と、そうでない場合があることが示された。つまり課題状況が困難で不安や緊張が高いと評価されるNXやMFFTでは、その不安や緊張によって“認知の狭窄”や“妨害されやすさ”が持つ認知的な脆弱さ(vulnerability)が発現しやすくなり、速く・正確に反応できないといったタイプの失敗が起こる。これらに較べて文章校正課題やUKなど課題そのものが容易で正誤のフィードバックも与えないというような場合には、課題状況に対する不安や緊張とは関係なく“アクションスリップ”や“衝動的失敗”が見落としや機械的な誤答といった意識されにくい誤答の出現に影響するようである。以上のように、課題自体の困難度や不安といった課題状況によって、失敗の内容や、その失敗の生起に関与する失敗傾向が異なることが示された。

8章 失敗傾向と適応

7章では人為的に設定した課題状況の中で参加者に問題解決を要求し、その遂行を検討するという方法をとったが、本章では状況の統制は行わず、自然に生じた状況において失敗傾向と健康状態や対処行動との関係を検討した。

8-1 失敗傾向と健康状態

失敗傾向質問紙で捉えているような集中の困難、もの忘れ、衝動的行動、不安によって行動が阻害されることなどは、ある程度の頻度と強度を伴う場合にはしばしば臨床的問題の存在を示唆する特徴にもなりうる。本研究では健常者の失敗を対象としているが、健常者を対象とした場合でも一時的にストレスが高まるような状況では精神的健康の低下と失敗行動が関連しているという調査結果もある (Broadbent et al., 1982)。忙しい時や疲れている時にいつもより失敗しやすくなることは日常的にも経験される。

ここでは 7-6 節で用いたモデルを援用して、精神的・身体的な健康状態を内的な状況として捉え、ふだんの失敗傾向と健康状態がある期間における失敗の頻度に影響を及ぼすのではないかと考えた。また“認知の狭窄”はその概念的特徴の中にストレスフルな状況に影響されやすい性質を含んでいるので、健康状態の変化によって最も影響されやすいことが予測される。

【 方 法 】

調査期間：1998年11月及び1999年1月。

参加者：心理学関連の講義を受講する女子短大生 35名、女子大学生 123名に通常の傾向を尋ねる教示で失敗傾向質問紙を実施し(以下 usual と表記)、約 2ヵ月後に、過去 3週間の状態 (actual) を尋ねる教示で失敗傾向質問紙と General Health Questionnaire (GHQ) を実施した。すべての調査において有効データが得られたのはこのうち 123名で、年齢は 18~22才(平均 20.19才, SD=1.07)である(グループ 20)。

GHQ：原著は Goldberg (1978) によるもので、日本語版の作成及び標準化は中川・大坊 (1985) によって行われた。神経症的症状の発見と評価におい

て有効だとされる，スクリーニングのための質問紙である。「頭が重いように感じたことは」「心配事があってよく眠れないようなことは」など 60 項目の質問に対して、「まったくなかった」－「あまりなかった」－「あった」－「たびたびあった」，あるいは「多かった」－「いつもと変わらなかった」－「少なかった」－「ずっと少なかった」といった 4 件法で回答する。採点法には症状の程度に従って左の回答から順に 0, 1, 2, 3 点を与えるリックカート法と，0, 0, 1, 1 点を与える GHQ 法があるが，ここでは日本語版のマニュアルに従い，GHQ 法によって 60 項目すべての合計である GHQ 得点と，身体的症状，不安と不眠，社会的活動障害，うつ状態の 4 下位尺度（各 7 項目）の得点を求めた。これらの得点が高いほど，ふだん通りの精神的機能が持続できなくなっていることを示すと解釈される。

調査対象期間について：ある期間の状態や症状をできるだけ正確に思い出させるには，目立った出来事や日付をランドマークとして用いるとよいという Larsen (1992) に従い，調査日から 3 週間前がちょうど 1 月 1 日であったため，「1 月 1 日から昨日までの 3 週間のことを思い出して下さい」という教示で調査を実施した¹⁾。

【 結 果 と 考 察 】

1. 各尺度の基本統計量

失敗傾向質問紙における usual, actual の 2 種類の得点を表 8-1-1 に示した。

	usual		actual		相関係数
	平均値	SD	平均値	SD	
アクションスリップ	21.51	5.07	15.99	4.98	0.60 **
もの忘れ	13.62	3.84	9.33	3.66	0.52 **
放心	7.89	2.12	6.66	2.16	0.58 **
認知の狭窄	19.69	5.58	12.04	6.16	0.33 **
妨害されやすさ	11.52	3.48	6.27	3.65	0.33 **
とらわれ	8.17	2.82	5.77	3.40	0.32 **
衝動的失敗	7.31	3.15	4.65	3.19	0.28 **

2つの得点間の相関係数はすべての失敗傾向において1%水準で有意であった。また対応のあるt検定を行ったところ、これもすべての失敗傾向で usual 得点のほうが有意に高いことがわかった（すべて $p < .01$ ）。

そこで項目ごとに actual 得点から usual 得点を差し引いたところ、「テストや面接であがってしまい、落ち着いていたらもっとうまくできたのにと後悔する」で-1.44、「責任の重い仕事をまかされると緊張してふだんの力が出せない」で-1.40と、調査対象期間中にその状況にあること自体がなかったのではないかと思われる項目において actual 得点が特に低くなっていた（それ以外の項目では得点差は-1.0より小さい）。教示では過去3週間という比較的短い期間を限定して想起させるので、項目が表わしている状況そのものがその間に経験されなければ、それだけ経験される失敗の頻度（actual 得点）は低くなるのだと考えられる。

次の表には GHQ における各得点の平均値，SD，得点レンジを示した。

表8-1-2 GHQにおける各得点の記述統計量

	平均値	SD	レンジ
GHQ得点	19.74	10.86	2~51
身体的症状	3.65	1.96	0~7
不安・不眠	3.04	1.95	0~7
社会的活動障害	1.65	1.67	0~7
うつ状態	0.93	1.65	0~7

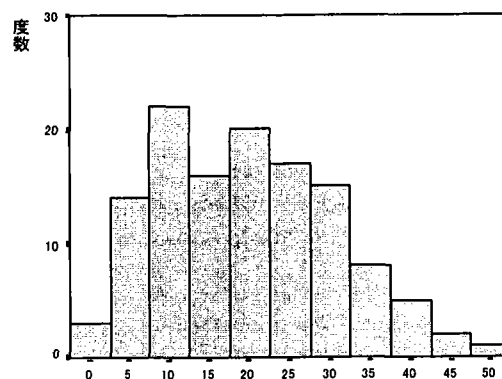


図8-1-1 GHQ得点の分布

¹ GHQ 日本語版では本来は「ここ数週間の健康状態」を尋ねる。

日本語版マニュアルに記載されている大学生の GHQ 得点の平均は 15～18 点であるから今回のサンプルの平均値はやや高いが、得点分布はその大学生の「平坦な分布」と似た形となった（尖度-.453）。

2. 失敗傾向と健康状態の関連

本節では 7-6 節で用いたモデルを援用し、共分散構造分析の手法を用いて失敗傾向の usual 得点と健康状態が actual 得点に影響を及ぼすようなモデルの検討を行った。健康状態は GHQ の 4 つの下位尺度得点に反映されるような潜在変数としてモデル（図 8-2-1）に取り入れた。

まず χ^2 検定の結果から、すべての失敗傾向においてモデルが受容可能なレベルのものであることが確認されたので、ここではこの共通のモデルにおいて usual 得点及び健康状態から actual 得点へのパス係数の大きさを比較してみる。以下の表には、各失敗傾向におけるモデルの適合度指標とパス係数をまとめた。それぞれのパス図は資料として添付する。

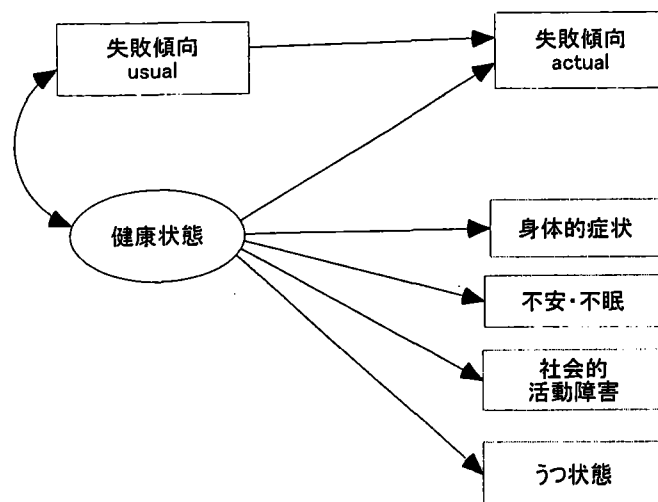


図 8-1-2 失敗傾向の usual 得点と健康状態から actual 得点を説明する基本モデル

適合度指標（表 8-1-3）からも、すべての失敗傾向においてモデルが受容可能であると言える。また usual 得点及び健康状態から actual 得点へのパスが有意であることはすべてのモデルにおいて確認された（すべて $p < .01$ ）。従ってふだんの失敗傾向が高く、健康状態が低下しているほど、ある期間の失敗の頻度

は高くなることが示された。

表8-1-3 各モデルにおける適合度指標とパス係数

	適合度指標			パス係数	
	GFI	AGFI	RMSEA	usual→actual	健康→actual
アクションスリップ	0.978	0.941	0.018	0.499	0.323
もの忘れ	0.973	0.930	0.051	0.434	0.306
放心	0.978	0.943	0.008	0.517	0.255
認知の狭窄	0.986	0.963	0.000	0.197	0.596
妨害されやすさ	0.978	0.942	0.022	0.232	0.493
とらわれ	0.993	0.979	0.000	0.763	0.555
衝動的失敗	0.963	0.902	0.083	0.281	0.340

失敗傾向ごとにこれらのパスの強さを比較すると、usual 得点からの影響は“とらわれ”で最も高い。この下位因子は状況が変わっても自分の考え方や行動を変えない硬さを表わすので、その変わらなさが失敗傾向そのものを安定させることも考えられる。これを除くと全体としては“アクションスリップ”及びその下位因子において usual 得点からのパスが強く、これに較べると“認知の狭窄”や“妨害されやすさ”では弱くなっている。また健康状態からのパスは、全体に“認知の狭窄”及びその下位因子において強い。

【 全 体 の 考 察 】

期間を特定して調査を行った場合、その期間における失敗の頻度はその時の健康状態とふだんの失敗傾向からかなりよく説明されることがわかった。健康状態が低下しているほど、またふだん失敗しやすいほど、その期間中の失敗の頻度は高くなる。ただしその関連の強さは失敗傾向によっていくらか異なり、“認知の狭窄”とその下位因子では健康状態からのパスが他に較べて強く、健康状態の低下によって失敗が増えやすいことが示された。もともとこの失敗傾向は状況のストレスに弱く、思考や行動を妨害されやすい性質を表わすものなので、健康状態という内的な状況からの影響も強く受けるのではないかと考えられる。一方、ふだんの失敗傾向からの影響は“アクションスリップ”とその下位因子、及び行動が変えられないことを示す“とらわれ”で強く見られた。“ア

クシヨンスリップ”はよく慣れた日常的な状況で起こる失敗であるから、限定された調査対象期間の中でもそれらの状況を経験することは多いと思われるので、ふだんの失敗傾向と一致しやすいのではないかと思われる。

ここでは対象期間の終わりに自己報告形式の質問紙を用いて健康状態を捉えたため、その得点は健康状態という潜在変数を反映するものとしてモデルに含めた。しかしこれを回想 (retrospective) によるのではなく、例えば Larsen (1992) のようにさまざまな症状の有無について1日3回、8週間にわたってチェックリストを用いて答えさせるといった同時的 (concurrent) な方法を用いてある期間中の健康状態をより正確に捉え、観測変数としてモデルに含めるといった方法も考えられる。更に actual な失敗の指標としては、質問紙ではなく行動観察や日記法などを用いて実際の失敗行動を用いることで、今回の結果をより精細に検討することができると思われる。

8-2 失敗傾向と災害時の行動

本節では阪神・淡路大震災という実際に起こった災害場面で人々がどのように行動したかを調べた (山田, 1995)。1995年1月17日早朝に起こった阪神・淡路大震災はマグニチュード7.2の都市直下型の地震であり、震度7の激震地域を中心として広範囲にわたり激甚な被害をもたらした。この地震の規模は死者6,430名、負傷者43,782名、家屋の損傷は全半壊を合わせると約25万棟 (平成10年12月現在, 防災白書) とされる被害にも現われているが、地震の少ない関西地方の人々にとっては地震に対する知識も心構えもないところに降りかかった、まさしく未曾有の災害であった。

安部 (1979, p.243) はこうした災害場面で起こる人間の心理的・行動的な変化について次のように述べている。「突発的かつ圧倒的であり、またこれまで一度も経験したこともないといった災害場面の急襲では、人間は一時的に退行し、時間的・空間的にも定位を失い、未分化な精神状況に転落すると考えられる。従って時間的展望を失って刹那的・直接的となり、近視眼的となる。また空間的枠組みの崩壊は馬車馬的な狭隘な視野しか持たなくなる。なさねばならぬ対応策の優先度、順序や臨機応変の融通性は失われるか、大幅に低減する」。

ここで述べられている時間的・空間的な視野の狭窄や行動の硬直化は、失敗傾

向質問紙で“認知の狭窄”として概念化した失敗の特徴に通じるものでもある。こうした状況では、例えば Fischhoff, Svenson, & Slovic (1987) が危機的状況で行うべき意思決定のプロセスとして述べているような、「いくつかの可能な行動がどのような経過を辿るかを明確にし、それぞれの行動がとられた時に起こりうる結果の長所と短所を評価し、それらの結果が実際に起こる確率を評価し、これらの評価を総合して最善の行動を選択する」といった幅広い行動の検討は非常に困難になる。適切でない行動も多く見られるだろう。

そこで本節では、阪神・淡路大震災の際にどのような行動がとられたか、またその中で行為者自身が適切でなかったと思う行為はどのようなものかを調べる。更にそれらの行動と、質問紙で捉えたふだんの失敗傾向に関連が見られるかどうかを合わせて検討する。

【 方 法 】

調査日時：1995年2月及び4月。

調査方法：調査ではまず失敗傾向質問紙を実施した後、地震の際にとった行動について、(1)「地震に気づいてまず一番にあなたがしたことは何ですか?」、(2)「あとから（あの行動はおかしかったな）と自分で思うような、状況に合わないことをしましたか?それはどんなことですか?」という2項目に対する自由記述を求めた。

参加者：兵庫県下の短大でコンピュータ実習を受講する1回生171名で、そのうち53名は2月に、翌年同じ講義を履修した118名には4月に調査を行った。4月に調査を行ったグループの中には震災当時に関西地区に居住していなかった者が19名、「(地震の時に何をしたか) 忘れた」と答えた者が1名いるため、有効回答は2月調査分と合わせると151名となった(グループ21)。平均年齢は18.30才(SD=0.46)である。これらの参加者は後に震度4~7と報告された地域に居住していた。

【 結 果 と 考 察 】

1. 失敗傾向得点の基本統計量

グループ 21 の失敗傾向得点は表 8-2-1 に示した. “アクションスリップ” とその下位因子の得点偏差値がやや低い.

表8-2-1 グループ21における失敗傾向質問紙の尺度得点
(N=171)

	平均値	SD	得点偏差値
アクションスリップ	18.63	5.11	46
もの忘れ	12.11	3.87	47
放心	6.52	1.94	45
認知の狭窄	18.51	5.32	49
妨害されやすさ	11.18	3.52	49
とらわれ	7.34	2.52	49
衝動的失敗	7.05	3.50	48

2. 地震時の行動の分類

地震に気づいてまず一番にした行動(質問(1))については, 安部(1979)が1968年の宮崎県えびの地震の際に付近住民に行った調査結果を基にして分類を試みた.

表8-2-2 地震直後の行動の分類 (%)

	えびの地震	今回の調査	
外に避難した	38.9	4.0	外に飛び出した
慌てた	14.0	6.6	泣く・叫ぶ・祈る
	—	1.3	放心状態
火の始末をした	11.2	4.0	火の始末をした
	—	0.7	物を押さえた
じっとしていた	12.1	5.3	じっとして何もしなかった
	—	44.4	布団にもぐった
防衛反応 (机の下にもぐるなど)	4.4	5.3	防衛反応 (机の下にもぐるなど)
避難準備 (両親の名を呼ぶなど)	3.5	10.6	避難準備 (身支度, 家族の確認)
	—	8.6	状況確認
その他	6.7	9.3	その他

えびの地震における調査結果との大きな違いは, 今回の調査では「外に出た」という報告が少なく, 「布団にもぐった」という反応が全体の 40%を超えたこ

とである。これは、えびの地震が発生した午前8時には既に起きていた人が多く、外へ避難するという行動をとりやすかったためと思われる。一方阪神・淡路大震災は発生が早朝であったため、まだ寝ていた人の多くはそのまま布団にもぐるという行動をとったようである。従って「布団にもぐる」という回答の中には身を守るための安全確保行動（三上, 1986）としてそれを行ったものと、「動けなくなった」反応（安部, 1988）であったものが混在している可能性がある²。また発生時刻が早かったために食事の支度などでガスが使われることも少なかったのか、えびの地震に較べると「火やガスの始末をした」という回答が少ない。なお回答の中には「泣く」、「祈る」、「ぼんやりしてしまう」など、どのような対処行動をも取れなかったことを示すものがいくらか見られた。

次の質問(2)で、行為者自身が状況にとって不適切であったと感じる行動の有無とその内容を尋ねたところ、151名中99名は「特になかった」と答えた。次の表は52名の回答を、できるだけ行動の多様さを失わないようにまとめ、人数の多かった順に並べたものである。

最も多かったのは「何もしないで寝続けた」という行動である。中には震源地のごく近く（淡路島北部）に居住していた参加者がこのように答えるケースもあった。寝ている場合ではないのに寝ていた（何もしなかった）という言わば不作為の失敗であろうか。これらの回答の中には災害後の情緒的反応として無関心やエネルギーレベルの低下が生じたために、そのまま眠ってしまった者も含まれているかもしれないが、殆どの参加者は自身のこの行動を「のんきすぎる」、「よく無事だったとあきれる」と捉えている。

次に多かったのは「まだ揺れている間に部屋を出てしまった」、「誰も外に出ていないのに外に飛び出してしまった」、「家族のところに行こうとして裸足で割れたガラスの上を走った」など状況の見通しが十分でないままに慌てて行動してしまったものである。また「停電に気づかずに何度も電気のスイッチを入れようとした」という回答をした者の一人は「あんな地震の後で停電にならない訳がないのに、その状況がわからなかったのがおかしい」と述べている。

² 「頭を守るために」「怪我しないように」などの理由を書いたものは防衛反応に分類した。

表8-2-3 地震時にとつた不適切な行動

行 動	人数
何もしないで寝続けた	11
状況を確認めないで行動した(外に飛び出す, 裸足で走るなど)	8
停電に気づかず電気やテレビをつけようとした	4
家の中をうろろうろしてしまった	3
ぼんやりしてしまった・腰が抜けた	3
変なものを手に持って行動していた	3
ひとり言を言っていた	2
祈った	2
感情が昂ぶった(ハイ, ヒステリック)	2
身につける物をまちがえた	2
学校に行くために制服に着替えようとしていた	2
怖くないように一緒に揺れた	1
揺れるベッドを押さえようとした	1
揺れがひどいのに起きようとした	1
頭だけ隠していた	1
ドアの開け方がわからなくなった	1
まずトイレに行った	1
いつも通りにストーブをつけようとした	1
雨戸を閉めた	1
地震のことを聞こうと天気予報に電話をかけた	1
学校があるかどうかいろんな人に尋ねた	1
合計	52

「訳もなく家の中をうろろうろした」「ぼんやりしてしまった」「ひとり言を言っていた」「祈った」「感情が昂ぶった」というように、対処行動に至らない無意味な行動や情緒的反応も見られる。「祈る」は例えばイタリア・ナポリ地震では20.6%も報告されており、この場合は文化や宗教に根ざした一種の対処行動であることも考えられるが、日本ではこの種の報告は1~2%と少なく(安部, 1986)、しかも今回の調査では「祈る」と答えた参加者自身が、その行動を状況に合わないおかしい行動であると評価している。

他には「枕と時計を持って机の下にもぐった」、「起きようとして母親のコンタクトレンズをつけてしまった」、「逃げる時に片方ずつ別の種類の靴を履いてしまった」のように何らかの対処行動をとろうとしたが、その実行の一部に不適切な部分が含まれる場合がある。また「制服に着替える」、「トイレに行く」などは行動そのものは日常的で正しいものであるが、緊急事態なのにいつものように行動しようとしたことが、参加者自身におかしいという感じを与えたの

だろう。

3. 失敗傾向と地震時の行動との関連

先に述べたように今回の地震の直後では半数近くが「布団にもぐる」という行動をとっており、それらの行動の内容が対処行動であったのか、何もできずに布団の中に残っていたのかが明らかではないため、ここではそれ以外の特徴的な行動をとりあげ、それらの行動を報告した参加者の失敗傾向プロフィールを比較してみる。プロフィールは大学生女子の標準データを用いて得点偏差値で示した。

まず最初は適切な対処行動がとれず、どちらかいうと情動的な反応を報告した参加者のグループである（図 8-2-1）。参加者 A, B は共に地震の最中に祈り、それを不適切な行動であったと答えた者である。C は泣きながらドアを開けようとし、動揺していたためになかなか開けられなかった。D はヒステリックになり、家族の元に走ったり、電話をかけようとしたりと家の中を走り回った。E は死ぬ覚悟をしてじっとしていた。

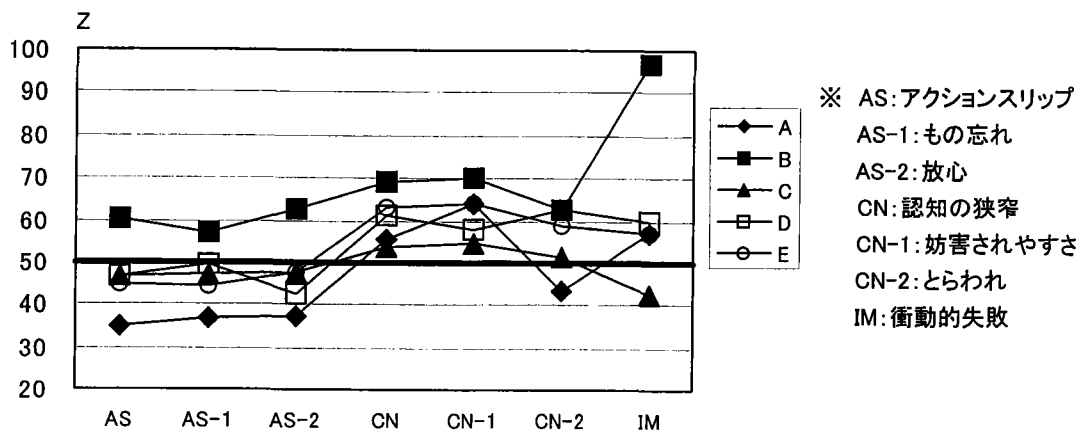


図8-2-1 情緒的反応をした者の失敗傾向プロフィール

B 以外の参加者では“アクションスリップ”はやや低く，“認知の狭窄”の特に“妨害されやすさ”が高いという傾向が見られる。

次は何らかの対処行動をとったものの、その行動（少なくともその一部）があまり適切でないという参加者のグループである（図 8-2-2）。参加者 F は間違

えて母親のコンタクトレンズをつけ、Gは左右別々の靴を履いて外に出た。Hは「ワーツと叫んで机の下に隠れた」ものの、足やお尻は机の外に出ていたという。Iも机の下に隠れたが、なぜか時計と枕を持っていた。Jは揺れがおさまると、授業があるのかどうか、あちこちに電話をかけて尋ねた。Kも揺れがおさまったあとで地震のことを詳しく聞こうと思って天気予報のダイヤルにかけ、何も言わないので次は時報にダイヤルしている。

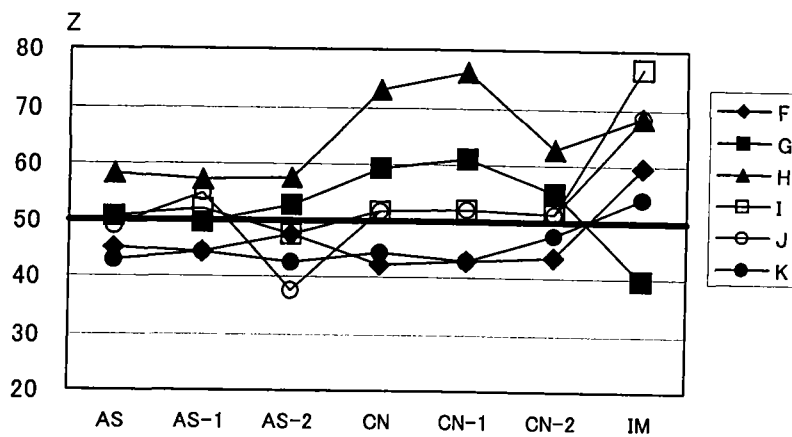


図8-2-2 行動の一部に誤りがあった者の失敗傾向プロフィール

このグループでは“衝動的失敗”の得点が高い者が多い。また、まずワーツと叫んでから行動したH、「急いでいたから」靴をまちがえたGでは“妨害されやすさ”の得点も高くなっている。

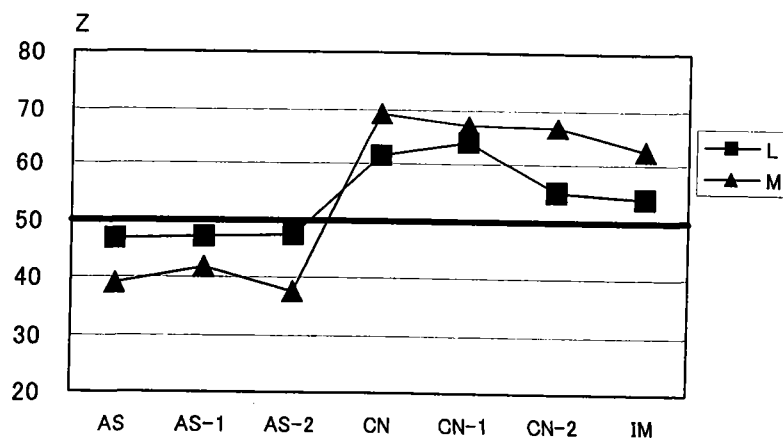


図8-2-3 うろろう動き回った者の失敗傾向プロフィール

特に何をするというのでもなく、家の中をうろうろと歩き回った参加者は 2 名いた (図 8-2-3)。これら 2 名の失敗傾向プロフィールは非常によく似ており、“認知の狭窄”と“衝動的失敗”が共に高くなっている。

反対に、地震に際して適切な行動をとれた者では失敗傾向はどうなっているだろうか。図 8-2-4 は地震に気づいてすぐにガスやストーブなどの火元を消したと報告した参加者のプロフィールである。

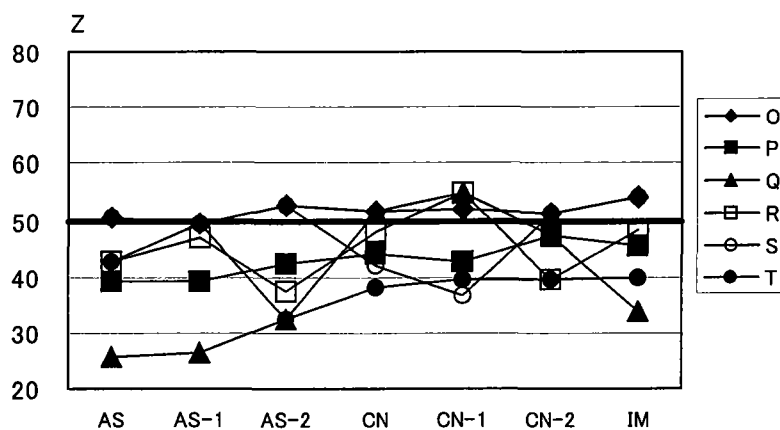


図8-2-4 火やガスの始末をした者の失敗傾向プロフィール

個人間でプロフィールにいくらか差はあるが、全体としてはどの失敗傾向も偏差値 55 以下と低いことが特徴であろう。

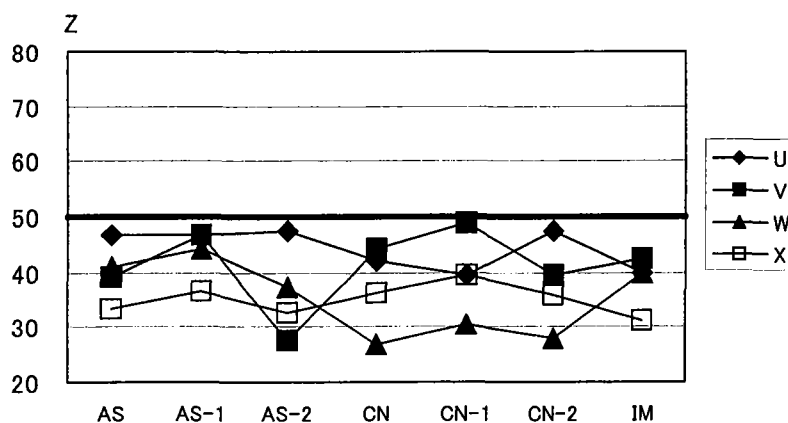


図8-2-5 すぐに避難準備をした者の失敗傾向プロフィール

このことは、少し揺れがおさまるとすぐに避難の準備をするために行動した参加者のプロフィールにも共通している（図 8-2-5）。このグループではすべての参加者において、どの失敗傾向の偏差値も 50 を下回った。

このグループの中で W, X は、すぐに荷物をまとめた自分の行動を「結局部屋を片付けることになった」、「家が壊れてもいないのに逃げる準備をした」という理由で適切ではなかったのではないかと振り返っている。しかし地震直後には被害状況が最終的にどの程度になるかは把握できないのであるから、これを失敗と言うにはあたらないだろう。

【 全 体 の 考 察 】

今回の調査結果では、地震直後に情緒的な反応が先に立って対処行動がとれなかった者では“妨害されやすさ”得点が平均よりも高い（ $Z=54\sim 69$ ）という特徴が共通して見られた。また何らかの対処行動はとろうとしたものの、それが適切ではなかった者の中では“衝動的失敗”の得点が高いことが多かった（ $Z=54\sim 77$ 。一名のみ $Z=40$ ）。以上のことから“妨害されやすさ”が高い者は、大地震のように驚愕、恐怖、不安などを強く喚起する緊急場面では、これらの情緒的要因によって適切な行動をとるための資源が他の者より強く阻害されてしまい、「動けない」状態（安部，1988）、即ち対処行動をとれない状態になりやすいのではないかと推測される。一方“衝動的失敗”の傾向が高い者はこうした場面では状況の見通しが不十分なままで行動しやすくなり、状況にそぐわない短絡的行動や一見でたらめな反応をとることが多くなるのかもしれない。

“アクションスリップ”は、このような緊急場面での行動とは顕著な関係を示さないようであるが、これは本来アクションスリップがよく慣れた状況で起こるものであることを考えれば尤もであろう。一方、とっさに火元の始末をした者や、すぐさま避難の準備をはじめたものではどの失敗傾向においても全体に得点は低かった。

注意すべき点は、“妨害されやすさ”や“衝動的失敗”得点の高い者がすべて対処行動に失敗した訳ではないことである。勿論得点の低い者がすべて適切な対処行動をとれた訳でもない。言うまでもなく地震は自然に発生したもので人為的な操作は全く行われる余地がなかったため、今回それぞれの参加者が置か

れた状況は統制されていない。震度が4から7という地域差も無視できない違いをもたらすだろうし、同じ地域でも個々の家によって揺れの程度や被害状況には違いがあったと思われる。そのような個々の状況に関する情報がここでは不足しているため、対処行動の失敗に関わるような状況要因を特定することはできなかった。

またここでは行為者自身が調査時に「あの行動は状況に合わなかった」と答えたものを対処の失敗と見なしているが、報告されたような一見でたらめな行動によって、実際に命が助かったという場合もあったかもしれない。このような場合、それらの行動は生存という目的を果たしている点では十分に適応的であるし、行為者自身も後に「ああしておいてよかった」と再評価する可能性はある。1章で述べたように、「失敗」の基準が時によって、また人によって変わりうることを示す一例であろう。

8-3 まとめ

本章では設定された課題状況で遂行の特徴を調べるのではなく、日常生活の中での健康状態と失敗の多さ（1節）や災害場面での対処行動（2節）を取り上げて失敗傾向との関係を調べた。

1節では日常のある期間を限定して、その期間中の失敗の頻度が、その時の健康状態とふだんの失敗傾向からどの程度説明できるかを調べた。この結果、健康状態が低下しているほど、またふだんの失敗傾向が高いほど、その時の失敗の頻度は高くなることがわかった。“認知の狭窄”とその下位因子では健康状態からのパス係数が他に較べて高く、健康状態の低下によって失敗が増えやすいことが示された。もともとこの失敗傾向は状況のストレスに弱く、思考や行動を妨害されやすい性質を表わすものなので、健康状態という内的な状況からの影響も強く受けるのではないかと考えられる。一方、ふだんの失敗傾向からの影響は“アクションスリップ”とその下位因子、及び行動が変えられないことを示す“とらわれ”で強く見られた。“アクションスリップ”はよく慣れた日常的な状況で起こる失敗であるから、限定された調査対象期間の中でもそれらの状況を経験することは多いと思われるので、ふだんの失敗傾向と一致しやすい

いのではないかとと思われる。

2節では阪神・淡路大震災の際に見られた対処行動の失敗と、質問紙で捉えたふだんの失敗傾向に関連が見られるかどうかを検討した。その結果、地震直後に情緒的な反応が先に立って対処行動がとれなかった者では“妨害されやすさ”得点が平均よりも高いという特徴が共通して見られた。また何らかの対処行動はとろうとしたものの、それが適切ではなかった者の中では“衝動的失敗”の得点が高いことが多かった。以上のことから“妨害されやすさ”が高い者は、大地震のように驚愕、恐怖、不安などを強く喚起する緊急場面では、これらの情緒的要因によって適切な行動をとるための資源が他の者より強く阻害されてしまい、適切な対処行動をとれない状態になりやすいのではないかと推測される。一方“衝動的失敗”の傾向が高い者はこうした場面では状況の見通しが不十分なままで行動しやすくなり、状況にそぐわない短絡的行動や一見でたらしめな反応をとることが多くなるのかもしれない。なお“アクションスリップ”は、このような緊急場面での行動とは顕著な関係を示さなかった。

第V部 総括

9章 総括

9-1 本研究のまとめ

1. 失敗に関する考察

本研究では「失敗」を取り上げ、失敗に関わる人と状況の要因の検討を行った。1章では日常で経験されるさまざまな性質の失敗について考察し、これらの失敗が成立する共通の要件を、(1)適切な行為からずれること、(2)そのずれに気づくことであると定義した。また本研究で扱う失敗が、課題場面や災害場面における適切な行為からずれた行為であることにも言及した。

失敗生起のメカニズムについて考察する際には、従来の認知心理学的研究の知見や方法論に負うところが大きい。2章では、日常で経験される失敗現象の分類に始まり、失敗生起のメカニズムをモデル化する試みや実験的に失敗を誘発する手続きなど、主な先行研究の成果を概観した。

しかしこれらの研究では失敗が生起する際の個人内のプロセス、もしくは一般に失敗が起こりやすい状況といったものが扱われることが殆どである。そこで3章では、まず失敗に関わる個人要因の測定方法を精錬し、次に個々の状況において生起する失敗の特徴を詳細に観察し、その上で人と状況の相互作用について考察するという本研究の目的について述べた。

1章で述べたように本研究で扱う失敗の範囲は非常に限定されている。そこで第II部(4章)では具体的な検討に入る前に、それ以外の失敗について、それらが心理学の近隣領域でどのように扱われているか、また本研究で取り上げる失敗とどのように関連しているかを考察した。

2. 失敗に関する個人要因について

第III部では個人要因としての失敗傾向—ある状況での失敗しやすさ—を失敗傾向質問紙によって捉えることを目的とした。5章ではまず Cognitive Failures Questionnaire (CFQ; Broadbent et al., 1982) の日本語版の作成と、信頼性及び妥当性の検討を行った。この結果から、質問紙で測られる失敗傾向が時間

をおいてもかなり安定しており、これを個人要因として用いることが可能であることが示された。しかし CFQ で測っているのは慣れた状況でよく習熟した行為をつい間違ってしまうスリップの多さであり、日常生活で経験される多様な失敗を網羅していないのではないかと考えられた。実験的検討の結果もこの解釈と一致するもので、CFQ 得点の高さは実験場面での失敗には必ずしも結びつかないことが示された。

そこで 6 章ではより広範な失敗傾向の測定を目的として新しい尺度を作成し、その検討を行った。1 節で作成された失敗傾向質問紙は“アクションスリップ”、“認知の狭窄”、“衝動的失敗”という 3 つの失敗傾向を捉えるものである。“アクションスリップ”はもの忘れや言い間違いなど、よく慣れた状況で自己の行為にあまり注意が向けられなくなることで起こる失敗であり、“認知の狭窄”は緊張や時間的切迫、不安など、内外のストレスに影響されて認知的プロセスが妨害されるために起こる失敗である。また“衝動的失敗”は計画性のなさや見通しを立てないで行動する特徴を表わす。

2 節では更に分析を行い、“アクションスリップ”が“もの忘れ”と“放心”という 2 つの下位項目群から構成されることが示された。同様に“認知の狭窄”は“妨害されやすさ”と“とらわれ”の要素を含むと考えられる。

3, 4, 6 節では失敗傾向とパーソナリティ特性及び注意のスタイルとの関連を検討した。その結果、“アクションスリップ”では空想性、注意の逸れやすさと関係があり、“認知の狭窄”は情動性や注意が過負荷になりやすいこと、また他者の存在に注意が向きやすい傾向との関係が顕著であった。そして“衝動的失敗”は統制性の低さから特徴づけられることがわかった。これらの結果から 3 つの失敗傾向の概念的妥当性はほぼ確認されたが、同時に失敗傾向とこれらの指標との関係にはやや性差が認められることがわかり、男子大学生では情動性の中でも抑鬱や自己批判といった自己に対するネガティブな評価が失敗傾向の報告に影響する可能性が示唆された。そこで 5 節において抑鬱や自己批判、自己評価と失敗傾向の関係を更に検討したところ、やはり男子大学生では失敗の種類に関わらず、その報告がネガティブな自己評価に影響される傾向があることが示された。

次に 7 節で、行動の特徴を表わす性格記述語を用いて失敗に対する評価の構

造を調べたところ、男子大学生と成人女子では「ドジな」、「おっちょこちょいの」、「不注意な」などの言葉がまとまる“失敗”因子に「無能な」という言葉が入り、失敗の多さを示す特徴がネガティブに評価されていることが示されたが、女子学生ではこのような結果は得られなかった。しかし8節で同じ性格記述語に対する望ましき評定を求めて自己評価や失敗傾向との関係を調べたところ、男子学生と女子学生では“失敗”因子の望ましき評定には差はなく、またその評定が失敗傾向の報告に影響するといった反応バイアスも認められなかった。ただし私的自己意識特性の高低で参加者を二分して性格記述語の自己評定と失敗傾向の関係を調べると、男子の低得点群でのみ“失敗”因子とすべての失敗傾向の間に有意な相関が認められたことから、自己の行動傾向にあまり注意を向けず内省力に乏しい人では、全体的な自己イメージに影響されて失敗傾向室への報告が一律的になる可能性があるのではないかと考えられる。調査実施の際には自己の行動への内省を深めるような手続きを用いることが有効であろう。

3. 失敗傾向と状況要因の相互作用について

第IV部では状況別にそこで起こる失敗と失敗傾向との関係を調べた。まず7章では知能検査、作業検査、認知スタイルの課題などを用いて、その遂行と失敗傾向との関係を詳細に検討した。用いた検査は京大NX式知能検査(2節)、内田クレペリン精神検査(3節)、Matching Familiar Figures Test(4節)、及び埋没図形テストと文章校正課題(5節)である。この結果、反応の不確実性が高く、制限時間や検査場面というプレッシャーが不安を喚起すると思われる課題では“認知の狭窄”と遂行の失敗の間に相関が見られた。また1試行の区切りがなく連続的に反応するような課題では“衝動的失敗”の高い者の遂行が低下し、“アクションスリップ”は容易で単純な課題を長時間続ける場合にエラーと結びつきやすいことが示された。

6節ではこれらの課題状況に対する認知の指標を加えて、失敗傾向と課題状況の認知から遂行を説明するモデルの検討を行い、課題間の比較を行った。ここから、失敗傾向が遂行の失敗に結びつくメカニズムには不安や緊張といった課題状況の認知が関わっている場合と、そうでない場合があることが示された。

課題状況が困難で不安や緊張が高いと評価される NX や MFFT では、その不安や緊張によって“認知の狭窄”や“妨害されやすさ”が持つ認知的な脆弱さ（vulnerability）が発現しやすくなり、速く・正確に反応できないといったタイプの失敗が起こる。これに較べて文章校正課題や UK など課題そのものが容易で正誤のフィードバックも与えない場合には、課題状況に対する不安や緊張とは関係なく“アクションスリップ”や“衝動的失敗”が見落としや機械的な誤答といった意識されにくい誤答の出現に影響するようである。注目すべきなのは、不安や緊張などの課題状況への認知が直接的に遂行の失敗に影響を与えるパスはいずれも有意ではなく、NX や MFFT においてさえ“認知の狭窄”との関係を通して失敗の生起に影響を及ぼしているという点である。

8 章の 1 節では、ある期間における失敗の多さが、その期間の精神・身体的健康状態とふだんの失敗傾向からどの程度説明されるかを調べた。この結果、3 つの失敗傾向の中では“認知の狭窄”が最も健康状態に影響されやすく、健康状態の低下によってこれらの失敗が増えることが示唆された。

2 節では阪神・淡路大震災の発生時にどのような行動がとられたかを調べ、その中でも適切な対処行動でなかったと行為者自身が答えたものについて失敗傾向との関係を検討した。この結果、情緒的な混乱を呈し適切な行動がとれなかった者では“認知の狭窄”得点が高く、短絡的に動いてしまった者では“衝動的失敗”得点が高い者が多かった。反対に適切な対処行動をとれた者では、すべての失敗傾向得点は平均的な数値を下回った。

このように、人為的に設定された課題場面でも自然に生起した災害場面でも、そこで生起する失敗の内容と、状況の特徴（課題の困難度、持続時間など）や状況への認知（不安、緊張など）、個人の失敗傾向との間に説明可能な関係を見出すことができた。失敗傾向と状況要因の相互作用としての「失敗」のデータを集積し、これらの要因間の関係を探るという本研究の目的は、ひとまず達せられたと考えてよいだろう。

9-2 今後の課題

本研究では失敗研究における状況論的アプローチの叩き台となる枠組を提供

することができたが、当然のことながら今後検討を加えてゆくべき課題も残されている。以下にそのいくつかを上げておいた。

1. 失敗傾向を含めた遂行モデルの精練

失敗傾向と遂行の指標の間との相関は全体に低く、高いものでも $r = \pm .40$ 程度であった。これはミッシェル（1992）の言う「人格係数」（彼は質問紙による指標と行動的指標の相関をこう呼んだ）の値にほぼ等しい結果であるが、遂行の分散全体から見るとその 10% 前後しか説明できていないことになる。今後は 7-6 節で検討した基本モデルを更に精練して予測力を高めることと、そのモデルを用いた仮説検証的研究が必要になるだろう。その際にはより厳密に状況进行操作し、可能な変数の統制を行うことが求められる。例えば本研究では課題ごとに異なるサンプルを用いており、統制されていない個人要因が結果に影響している可能性も否定できない。状況要因と個人要因の相互作用をより明確に捉えるためには、同一サンプルに異なる課題を与える個人内デザインを用いる必要があると考えられる。

2. 失敗の評価における性差

第Ⅲ部での検討から、男子では自己報告形式で失敗の頻度を調べる場合には全般的な自己評価の影響が女子よりも強く働くと考えられる。第Ⅳ部で失敗傾向と遂行の関連を調べた際には参加者はすべて女子学生であったが、このことを確かめるにはやはり男子の参加者が必要である。失敗傾向の自己報告が男子において歪みやすいとすれば、遂行との関係が見出しにくくなることが予測される。またこの性差がどのような基盤を持つものなのか、本研究ではそれが社会的な要請によるものだと推測するに留まっており、具体的な検討が望まれる。

3. 加齢と失敗しやすさの関係

同様に成人を対象として今回の結果と比較することも必要である。特にもの忘れなどは年齢を重ねるにつれて多くなるという通念が人々の間に浸透しているが、実際に加齢に伴ってもの忘れが多くなるのかどうかを確かめている研究は多くない。たとえば Rabbitt & Abson（1990）は、加齢に伴う記憶の低下を

実験課題と質問紙の両方を用いて検討しているが、年齢が高くなるにつれて知能や記憶成績は低下することがわかったが、CFQ スコアはそれを反映せず、むしろ年齢とともに失敗の報告は少なくなることがわかっている。これは度忘れしたことそのものを忘れるという現象を表わしているのかもしれないし、年長者では日常場面では記憶力の低下を補うような外部記憶装置の利用に長じていくことを示しているのかもしれない。

4. 失敗の後に起こること

本研究では主に失敗の生起に関わる個人要因と状況要因の検討を行い、失敗した後に何が起こるかについては殆ど言及しなかった。この領域に関しては、例えば人が失敗した時に原因をどこに求めるかを調べる原因帰属研究がある。個人の帰属スタイルを重視するものもあるし、北山ら（1995）のように文化的視座を取り入れて日本的な自己と失敗の帰属の関係を調べるものもある。また、起こるかもしれない失敗への対処法略としてのセルフ・ハンディキャッピング、実際に失敗が起こった後の方略の変化や情緒的变化への対処など、興味深い材料が残されている。

引用文献

- 安部北夫 1979 災害 望月衛・大山正 (編) 環境心理学 朝倉書店 Pp.238-258.
- 安部北夫 1986 パニックの人間科学 —防災と安全の危機管理— ブレーン出版.
- 安部北夫 1988 危機場面における人間行動 安部北夫・三隅二不二・岡部慶三 (編) 自然災害の行動科学 福村出版 Pp.10-25.
- 安達圭一郎・上地安昭・浅川潔司 1985 男性性・女性性・心理的両性性に関する研究(I) —日本版 BSRI 作成の試み— 日本教育心理学会第 27 回大会発表論文集, 484-485.
- 青木孝悦 1971 性格表現用語における個人的望ましさの因子分析的研究 心理学研究, 42, 87-91.
- 青木孝悦 1974 個性表現辞典 ダイアモンド社.
- Atkinson, J. W. 1957 Motivational determinants of risk-taking behavior. *Psychological Review*, 64, 359-372.
- オースティン J. L. 坂本百大 (訳) 1978 言語と行為 大修館書店 (Austin, J. L. 1960 *How to do things with words*. Oxford Univevrsity Press.).
- Benet-Martinez, V., & Waller, N. 2002 From Adorable to Worthless: Implicit and self-report structure of highly evaluative persoality descriptors. *European Journal of Personality*, 16, 1-41.
- Biggs, S.H. 1995 Neuropsychological and psycho-educational testing in the evaluation of the ADD adults. In K.G.Nadeau (Ed.), *A comprehensive guides to Attention Deficit Disorder in adults*. Bruner/Mazel Publishers: New York. Pp.109-131.
- Block, J., Block, J. H., & Harrington, D. M. 1974 Some misgivings about the Matching Familiar Figures Test as a measure of Reflection- Impulsivity. *Developmental Psychology*, 10, 611-632.
- Block, J., Gjerde, P. F., & Block, J. H. 1986 More misgivings about the Matching Familiar Figures Test as a measure of Reflection- Impulsivity: Absence of construct validity in preadolescence. *Developmental Psychology*, 22, 820-831.
- Bloem, K. A., & Damos, D. L. 1985 Individual differences in secondary task performance and subjective estimation of workload. *Psychological Reports*, 56, 311-322.

防災白書 平成 11 年度版 国土庁.

van den Bosch, Rombouts, R. P., & van Asma, M. J. O. 1993 Subjective cognitive dysfunction in schizophrenic and depressed patients. *Comprehensive Psychiatry*, 34, 130-136.

Brandt, J., & Provost, D. G. 1985 On the dissimilar effects of alcohol and aging on the perception of cognitive failings. *Alcohol*, 2, 633-635.

Broadbent, D. E., Cooper, P. F., Fitzgerald, P., & Parkes, K. R. 1982 The Cognitive Failures Questionnaire (CFQ) and its correlates. *British Journal of Clinical Psychology*, 21, 1-16.

Broadbent, D. E., Broadbent, M. H. P., & Jones, J. 1986 Performance correlates of self-reported cognitive failure and of obsessionality. *British Journal of Clinical Psychology*, 25, 285-299.

van den Broek, M. D., Bradshaw, C. M., & Szabadi, E. 1987 Performance of normal adults on the Matching Familiar Figures Test. *British Journal of Clinical Psychology*, 26, 71-71.

ブルーナー J. 岡本夏木・仲渡一美・吉村啓子 (訳) 1999 意味の復権
— フォークサイコロジーに向けて — ミネルヴァ書房 (Bruner, J. 1990
Acts of meaning. Harvard University Press).

Costa, P. T. Jr., & McCrae, R. R. 1992 *Revised NEO Personality Inventory and NEO Five-Factor Inventory: Professional Manual*. Odessa, FL.: Psychological Assessment Resource.

Davidson, W. B. 1984 Personality correlates of the Matching Familiar Figures Test in adults. *Journal of Personality Assessment*, 48, 478-482.

Dickman, S. J. 1990 Functional and dysfunctional impulsivity: Personality and cognitive correlates. *Journal of Experimental Psychology*, 58, 95-102.

Eysenck, H. J., & Eysenck, M. W. 1985 *Personality and individual differences*. Plenum Press.

Fischhoff, B., Svenson, O., & Slovic, P. 1987 Active Responses to environmental hazards: Perceptions and decision making. In D. Stokols & I. Altman (Eds.), *Handbook of environmental psychology vol.2*. John Wiley & Sons Inc. Pp.1089-1133.

FFPQ 研究会 (編) 1998 FFPQ (5 因子性格検査) 北大路書房.

- フロイト S. 池見西次郎・高橋義孝 (訳) 1970 日常生活の精神病理学
人文書院 (Freud, S. 1901 Zur Psychopathologie des Alltagslebens.).
- フロイト S. 高橋義孝・下坂幸三 (訳) 1977 精神分析入門(上) 新潮文庫
(Freud, S. 1916 Vorlesungen zur Einführung in die Psychoanalyse).
- 麓信義 1992 スポーツ競技における状況判断と認知地図 佐々木正人 (編)
現代のエスプリ, 298 : エコロジカル・マインド Pp.87-97.
- ギブソン, J. J. 古崎敬・古崎愛子・辻敬一郎・村瀬旻 (訳) 1985 生態学的視覚論
— ヒトの知覚世界を探る — サイエンス社 (Gibson, J. J. The ecological
approach to visual perception. Houghton Mifflin, Co. 1979).
- Gerbing, D. W., Ahadi, S. A., & Patton, J. H. 1987 Toward a
conceptualization of impulsivity: Components across the behavioral and
self-report domains. *Multivariate Behavioral Research*, 22, 357-379.
- Globerson, T., & Zelniker, T. (Eds.), 1989 *Cognitive style and cognitive
development: Human Development vol.3* Ablex Publishing Corp.
- Goldberg, D. P. 1972 The detection of psychiatric illness by questionnaire.
Maudsley Monograph, 21. Oxford University Press.
- Goldberg, L. R. 1992 The development of markers for the Big-Five factor
structure. *Psychological Assessment*, 4, 26-42.
- Hampshire, S. 1993 Some difficulties in knowing. In T. Honderich & M.
F. Burnyeat (Eds.), *Philosophy as it is*. London: Penguin Books Ltd..
- Hart, S. G., & Staveland, L. E. 1988 Development of NASA-TLX (Task
Load Index): Results of empirical and theoretical research. In P.
A. Hancock & N. Meshkati (Eds.), *Human mental workload*. North
Holland : Elsevier Science Publishers.
- 畑村洋太郎 2000 失敗学のすすめ 講談社.
- Herrmann, D. J. 1982 Know the memory: The use of questionnaire to assess
and study memory. *Psychological Bulletin*, 92, 434-452.
- Horner, M. S. 1974 The measurement and behavioral implications of fear
of success in women. In J. W. Atkinson, & J. O. Raynor (Eds.),
Motivation and achievement. Washington, D. C. : Winston Pp.91-117.
- 堀野緑 1995 成功恐怖研究の再検討 心理学研究, 38, 301-319.

- Humphreys, M. S., & Revelle, W. 1984 Personality, motivation, and performance: A theory of the relationship between individual differences and information processing. *Psychological Review*, **91**, 153-184.
- 今井四郎 2001 適応と進化とエラー(口頭発表) 日本心理学会第 65 回大会
シンポジウム:「見落とし」・「し落とし」から認知を考える.
- Ingram, R. E. 1990a Self-focused attention in clinical disorders: Review and a conceptual model. *Psychological Bulletin*, **107**, 156-176.
- Ingram, R. E. 1990b Attentional nonspecificity in depressive and generalized anxious affective states. *Cognitive Therapy & Research*, **14**, 25-35.
- 伊藤裕子 1978 性役割の評価に関する研究 教育心理学研究, **26**, 1-11.
- ジェイムズ W. 比屋根安定 (訳) 1957 宗教経験の諸相 誠信書房 (James, W. 1902 *Varieties of religious experience*).
- 次良丸睦子・五十嵐一枝 2002 発達障害の臨床心理学 北大路書房.
- Kagan, J., Rosman, B. L., Day, D., Albert, J., & Phillips, W. 1964 Information processing in the child: Significance of analytic and reflective attitudes. *Psychological Monographs*, **78**(No.578), 1-37.
- Kagan, J. 1987 Misgivings about the Matching Familiar Figures Test: A brief reply to Block, Gjerde, and Block(1986). *Developmental Psychology*, **23**, 738-739.
- 海保博之 1999 人はなぜ誤るのか -ヒューマンエラーの光と影- 福村出版.
- 海保博之・田辺文也 1996 ヒューマン・エラー -誤りからみる人と社会の深層- 新曜社.
- 柿崎祐一 1993 心理学的知覚論序説 培風館.
- 鎌原雅彦・樋口一辰・清水直治 1982 Locus of Control 尺度の作成と, 信頼性, 妥当性の検討 教育心理学研究, **30**, 302-307.
- 鎌原雅彦・樋口一辰 1987 Locus of Control の年齢的变化に関する研究 教育心理学研究, **35**, 177-183.
- 鹿島晴雄・加藤元一郎・本田哲三 1999 認知リハビリテーション 医学書院.

- 加藤義明 1979 FD 測定テストの試作 —新 EFT と校正テスト— 東京都立大学人文学報 (心理学 20), 133, 75-89.
- 加藤孝義・細川徹 1995 TAIS—注意・対人スタイル診断テスト— 日本版マニュアル システムパブリカ.
- 加藤隆勝・高木秀明 1980 青年期における自己概念の特質と発達傾向 心理学研究, 51, 279-282.
- 川口 潤 1993 スリップと意識 箱田裕司 (編) 認知科学のフロンティアⅢ サイエンス社 Pp.9-37.
- 木村敏 1972 人と人との間 —精神病理学的日本論— 弘文堂.
- Kitayama, S., Markus, H. R., Matsumoto, H., & Norasakkunkit, V. 1997 Individual and collective processes in the construction of the self: Self-enhancement in the United States and self-criticism in Japan. *Journal of Personality & Social Psychology*, 72, 1245-1267.
- 北山忍・高木浩人・松本寿弥 1995 成功と失敗の帰因：日本的自己の文化心理学 心理学評論, 38, 247-289.
- Klumb, P. L. 1995 Cognitive failures and performance differences: validation study of a German version of the cognitive failures questionnaire. *Ergonomics*, 38, 1456-1467.
- Koffka, K. 1935 *Principles of Gestalt Psychology*. Routledge & Kegan Paul Ltd..
- Kogan, N. 1976 *Cognitive styles in infancy and early childhood*. Lawrence Erlbaum Association.
- 子安増生 1984 知能検査のコンピュータ化に関する基礎開発的研究 —京大 NX15-知能検査を素材として— 日本教育心理学会第 26 回大会発表論文集, 414.
- 桑原知子 1986 人格の二面性測定の試み —NEGATIVE 語を加えて— 教育心理学研究, 34, 31-38.
- Larsen, R. L. 1992 Neuroticism and selective encoding and recall symptoms: Evidence from a combined concurrent-retrospective study. *Journal of Personality & Social Psychology*, 62, 480-488.
- Larson, G. E., Alderton, D. L., Neideffer, M., & Underhill, E. 1997 Further evidence on dimensionality and correlates of the Cognitive Failures

- Questionnaire. *British Journal of Psychology*, 88, 29-38.
- レイヴ J・ウェンガー E. 佐伯胖 (訳) 1993 状況に埋め込まれた学習
 - 正統的周辺参加 - 産業図書 (Lave, J. & Wenger, E. 1991 *Situated learning: Legitimate Peripheral Participation*. Cambridge University Press).
- Leon, M. R. 1989 Anxiety and the inclusiveness of information processing. *Journal of Research in Personality*, 23, 85-98.
- Markus, H. R., & Kitayama, S. 1991 Culture and the self: Implications for cognition, emotion, and motivation. *Psychological Review*, 98, 224-253.
- Matthews, G., Coyle, K., & Craig, A. 1990 Multiple factors of cognitive failure and their relationships with stress vulnerability. *Journal of Psychopathology and Behavioral Assessment*, 12, 49-65.
- Maylor, E. A. 1993 Minimized prospective memory loss in old age. In J. Cerella, J. Rybash, W. Hoyer, & M. L. Commons (Eds.), *Adult information processing: Limits on loss*. Academic Press: San Diego Pp.529-551.
- Merckelbach, H., Muris, P., Nijman, H., & de Jong, P. J. 1996 Self-reported cognitive failures and neurotic symptomatology. *Personality & Individual Differences*, 20, 715-724.
- Messer, S. 1970 The effect of anxiety over intellectual performance on Reflection- Impulsivity in children. *Child Development*, 41, 723-735.
- 三上俊治 1986 災害警報への対応行動 東京大学新聞研究所(編) 災害と情報 東大出版会 Pp.63-99.
- 箕浦康子 1999 フィールドワークと解釈的アプローチ 箕浦康子 (編著) フィールドワークの技法と実際 - マイクロ・エスノグラフィー入門 - ミネルヴァ書房 Pp.2-20.
- 箕浦康子 1997 文化心理学における<意味> 柏木恵子・北山忍・東洋 (編) 文化心理学 - 理論と実証 - 東京大学出版会 Pp. 44-63.
- Mischel, W. 1977 The interaction of personality and situation. In D. Magnusson, & N. S. Endler (Eds.), *Personality at the crossroad: Current issues in interactive psychology*. Lawrence Erlbaum Association. Pp.333-352.
- ミッシェル, W. 詫摩武俊 (監訳) 1992 パーソナリティの理論 - 状況主義的アプ

- ローチー 誠信書房 (Mischel, W. 1968 *Personality and assessment*. John Wiley & Sons Inc.).
- 宮下一博 1987 Rasmussen の自我同一性尺度の日本語版の検討 教育心理学研究, 35, 253-258.
- MPI 研究会 (編) 1984 新・性格検査法 —モーズレイ性格検査— 誠信書房.
- 村越真 1992 オリエンテーリングにおける「地図読み」 佐々木正人 (編) 現代のエスプリ, 298: エコロジカル・マインド Pp.77-86.
- 村田純一 1992 錯誤行為の「意味」 新田義弘 (編) 他者の現象学Ⅱ —哲学と精神医学のあいだ— 北斗出版 Pp.181-202.
- Nadeau, K. G. 1995 Life management skills for the adult with ADD. In K. G. Nadeau (Ed.), *A comprehensive guide to Attention Deficit Disorder in adults*. Bruner/Mazel Publishers: New York. Pp.191-217.
- 長島貞夫・藤原喜悦・原野広太郎・斎藤耕二・堀洋道 自我と適応の関係についての研究(2) —Self-Differential の作製— 東京教育大学教育学部紀要, 13, 59-83.
- 中川泰彬・大坊郁夫 1985 日本版 GHQ 精神健康調査票手引 日本文化科学社.
- 中村雄二郎 2000 共通感覚論 岩波書店.
- 中塚善次郎 1991 内田クレペリン検査の新評価法 風間書房.
- Nideffer, R. M. 1977 *Test of Attentional and Interpersonal Style interpreter's manual*. San Diego: Enhanced Performance Associates.
- 仁平義明 1990 からだと意図が乖離するとき —スリップの心理学的理論— 佐伯胖・佐々木正人 (編) アクティブ・マインド —人間は動きのなかで考える— 東京大学出版会 Pp.55-86.
- 仁平義明 1991 急速反復書字によるスリップの発生メカニズム 東北大学教養部紀要(人文・社会編)45, 190-172.
- 日本・精神技術研究所(編) 1988 内田クレペリン精神検査・基礎テキスト.
- 西川泰夫 1971 連続加算作業における誤りの発生機構 日本心理学会第 35 回大会発表論文集, 105-106.
- 野村幸正 (編著) 2002 行為の心理学: 認識の理論—行為の理論 関西大学出版部

- Norman, D. A. 1981 Categorization of action slips. *Psychological Review*, 88, 1-15.
- ノーマン D. A. 野島久雄 (訳) 1990 誰のためのデザイン? - 認知科学者のデザイン原論 - 新曜社 (Norman, D. A. 1988 *The psychology of everyday things*. Basic Books).
- ノーマン D. A. 佐伯胖 (監訳) 岡本明・八木大彦・藤田克彦・嶋田敦夫(訳) 1993 テクノロジー・ウォッチング - ハイテク社会をフィールドワークする - 新曜社 (Norman, D. A. 1992 *Turn signals are the facial expressions of automobiles.*).
- ノーマン D. A. 佐伯胖 (監訳) 岡本明・八木大彦・藤田克彦・嶋田敦夫(訳) 1996 人を賢くする道具 - ソフトテクノロジーの心理学 - (Norman, D.A. 1993 *Things that makes us smart.*).
- 小倉千加子 1994 女の人生すごろく 筑摩書房.
- 荻阪直行 (編著) 2000 脳とワーキングメモリ 京都大学学術出版会.
- Parkes, K. R. 1984 Locus of control, cognitive appraisal, and coping in stressful episodes. *Journal of Personality & Social Psychology*, 46, 655-668.
- Payne, D. 1989 *Coping with failure: The therapeutic uses of rhetoric*. Columbia : University of South Carolina Press.
- Pollina, L. K., Greene, A. L., Tunick, R. H., & Puckett, J. M. 1992 Dimensions of everyday memory in young adulthood. *British Journal of Psychology*, 83, 305-321.
- Pollina, L. K., Greene, A. L., Tunick, R. H., & Puckett, J. M. 1993 Dimensions of everyday memory in late adulthood. *Current Psychology: Research & Reviews*, 12, 46-56.
- Rabbitt P., & Abson, V. 1990 'Lost and Found': Some logical and methodological limitations of self-report questionnaires as tools to study cognitive ageing. *British Journal of Psychology*, 81, 1-16.
- Reason, J. 1979 Actions not as planned: The price of automatization. In G. Underwood, & R. Stevens (Eds.), *Aspects of consciousness, volume 1: Psychological Issues*. London Academic Press Pp.67-89.
- Reason, J. 1987 GenericError-Modelling System(GEMS): A cognitive

- framework for locating common human error human. In J. Rasmussen, & K. Duncan (Eds.), *New technology and human errors*. John Wiley & Sons Inc. Pp.63-83.
- Reason, J. T. 1988 Stress and cognitive failure. In S. Fisher, & J. T. Reason (Eds.), *Handbook of life stress, cognition and health*. John Wiley & Sons Inc. Pp.405-421.
- Reason, J. T. 1990 *Human Error*. Cambridge University Press: Cambridge.
- リード E. S. 細田直哉 (訳)・佐々木正人 (監修) 2000 アフォーダンスの心理学 -生態心理学への道- 新曜社 (Reed, E. S. 1996 *Encountering the world: Toward an ecological psychology*. Oxford University Press).
- Robertson, I. T. 1985 Human information-processing strategies and style. *Behaviour and Information Technology*, 4, 19-29.
- Rosenberg, M. 1965 *Society and the adolescent self-image*. Princeton University Press.
- Rubin, D. C. 1989 Issues of regularity and control: Confessions of a regularity freak. In L.W. Poon, D. C. Rubin, B. A. Wilson (Eds.), *Everyday cognition in adulthood and late life*. Cambridge University Press. Pp.84-103.
- 桜井茂男 2000 ローゼンバーグ自尊感情尺度日本語版の検討 筑波大学発達臨床心理学研究, 12, 65-71.
- 齊藤智 1999 実験的スピーチ・エラーの分析による作動記憶研究 文部省科学研究費補助金研究成果報告書 (課題番号 09710088).
- Salkind, N. J., & Wright, J. C. 1977 The development of Reflection-Impulsivity and cognitive efficiency. *Human Development*, 20, 377-387.
- Santostefano, S. 1978 *A biodevelopmental approach to clinical child psychology: Cognitive controls and cognitive control therapy*. John Wiley & Sons Inc..
- 佐々木正人 1994 アフォーダンス -新しい認知の理論- 岩波書店.
- 佐々木正人・松野孝一郎・三嶋博之 1997 複雑系・アフォーダンス・内部観測. アフォーダンス 青土社 Pp.27-151.
- Shiffrin, R. M., & Schneider, W. 1977 Controlled and automatic human

information processing II. Perceptual learning, automatic attending, and a general theory. *Psychological Review*, 84, 127-190.

島宗理 1997 行動分析学からの文書理解(口頭発表) 日本心理学会第61回大会シンポジウム:現代における認知主義的アプローチと行動主義的アプローチ.

下條信輔 1999 <意識>とは何だろうか 一脳の来歴, 知覚の錯誤一 講談社現代新書.

下仲順子・中里克治・権藤恭之・高山緑 1999 NEO-PI-R 人格検査・NEO-FFI 人格検査 東京心理.

Sternberg, R. J., & Grigorenko, E. L. 1997 Are cognitive styles still in style? *American Psychologist*, 52, 700-712.

鈴木健太郎 2001 行為の推移に存在する淀み 一マイクロスリップ一 佐々木正人・三嶋博之(編著) アフォーダンスと行為 金子書房 Pp.47-84.

鈴木健太郎・三嶋博之・佐々木正人 1997 アフォーダンスと行為の多様性 一マイクロスリップをめぐる一 日本ファジィ学会誌, 9, 826-837.

高木光太郎 1992 「状況論的アプローチ」における学習概念の検討 一正統的周辺参加 (Legitimate Peripheral Participation)概念を中心として一 東京大学教育学部紀要, 32, 265-273.

高木光太郎 2000 行為・知覚・文化 一状況的認知アプローチにおける文化の実体化について一 心理学評論, 43, 43-51.

瀧本孝雄・山田耕嗣・臼井博晤 1985 内田クレペリン精神検査に関する誤答分析(3) 一性差について一 日本心理学会第49回大会発表論文集, 703.

寺沢浩一 2000 日常生活の法医学 岩波新書.

Tipper, S. P., & Baylis, G. C. 1987 Individual differences in selective attention: The relation of priming and interference to cognitive failures. *Personality & Individual Differences*, 8, 667-675.

辻平治郎 1993 自己意識と他者意識 北大路書房.

辻平治郎・藤島寛・辻斉・夏野良司・向山泰代・山田尚子・森田義宏・秦一士 1997 パーソナリティの特性論と5因子モデル: 特性の概念, 構造, および測定 心理学評論, 40, 239-259.

辻平治郎(研究代表者) 2001 日本語での語彙アプローチによるパーソナリティ

特性次元の分析 平成 10-12 年度科学研究費補助金 (基盤 C) 研究成果報告書 (課題番号 10610151).

梅田聡・小谷津孝明 1998 展望的記憶研究の理論的考察 心理学研究, 69, 317-333.

和田さゆり 1996 性格特性用語を用いた Big Five 尺度の作成 心理学研究, 67, 61-67.

Wapner, J. G., & Connor, K. 1986 The role of defensiveness in cognitive impulsivity. *Child Development*, 57, 1370-1374.

渡辺はま・川口潤 2000 予定の記憶における時間的特性 心理学研究, 71, 113-121.

渡邊芳之 1999 相互作用論・状況論から性格を捉える 杉山憲司・堀毛一也(編著) 性格研究の技法 福村出版 Pp.152-159.

Williams, J. M. G. 1997 Attention to emotional stimuli, I : Causes and correlates. In J. M. G. Williams, F. N. Watts, C. MacLeod, & A. Mathews (Eds.), *Cognitive psychology and emotional disorders 2nd Edition*. :England : John Wiley & Sons, Inc. Pp.72-105.

ウィトキン, H. A.・グッドイナフ, D. R. 島津一夫・塚本伸一 (訳) 1985 認知スタイル : 本質と起源 ブレーン出版 (Witkin, H. A., & Goodenough, D. R. 1981 Cognitive styles: Essence and origins. International Universities Press, Inc.).

山田耕嗣・瀧本孝雄 1989 内田クレペリン精神検査の再テスト変動について 日本心理学会第 53 回大会発表論文集, 338.

山田尚子 1991 CFQ (Cognitive Failures Questionnaire) に関する検討(1) 甲南女子大学大学院心理学年報, 9, 1-20.

山田尚子 1992 ドット数の比較判断課題における遂行の個人差 —CFQ スコアとの関連— 日本心理学会第 56 回大会発表論文集, 536.

山田尚子 1993a CFQ (Cognitive Failures Questionnaire) とターゲットに対する探索・注意の焦点づけ方略との関係 心理学研究, 63, 414-418.

山田尚子 1993b 個人差研究における認知スタイル概念の意義 大野晋一(編著) 認知の発生と発達 行路社 Pp.133-189.

山田尚子 1994 失敗行動に対する自己報告の検討 —異なる年齢の女性被験者群の比較— 発達研究, 10, 47-56.

- 山田尚子 1995 アクションスリップと災害時の行動 日本心理学会第 59 回大会
発表論文集, 934.
- 山田尚子 1997 失敗行動と性格特性の関係 日本心理学会第 61 回大会発表論文
集, 974.
- 山田尚子 1998a 特性のタキソノミーとしての FFPQ —失敗行動質問紙(CFQ)
との関係— 辻平治郎 (編著) 5 因子性格検査の理論と実際 北大路書房
Pp.239-244.
- 山田尚子 1998b 認知的衝動性の検討 日本心理学会第 62 回大会発表論文集,
641.
- 山田尚子 1999a 失敗傾向質問紙の作成及び信頼性・妥当性の検討 教育心理学
研究, 47, 91-100.
- 山田尚子 1999b 失敗傾向質問紙の検討 —文章校正課題におけるエラーとの関
連— 日本教育心理学会第 41 回大会発表論文集, 248.
- 山田尚子・藤島寛 2001 よく使われる性格記述語による特性次元の検討 辻平治郎
(研究代表者) 日本語での語彙アプローチによるパーソナリティ特性次元の
分析 平成 10-12 年度科学研究費補助金(基盤 C) 研究成果報告書(課題番号
10610151) Pp.43-58.
- 山本嘉一郎 1999 共分散構造分析とその適用 山本嘉一郎・小野寺孝義 (編著)
Amos による共分散構造分析と解析事例 ナカニシヤ出版 Pp.1-22.
- ゾルタン B. 河内十郎 (監訳) 2001 失行・失認の評価と治療 第 3 版 医学書院
(Zoltan, B. 1996 *Vision, Perception, and cognition. A manual for the
evaluation and treatment of the neurologically impaired adult.* Thorofare,
NJ: Slack Incorporated).

資料 1

失敗傾向質問紙作成のための調査に用いた質問紙(45 項目)

非よ か 時 あ ま
 常く な 々 ま っ
 にありあ あ りな たな
 る る る い くい

- 何かを思い出そうとしていて、のどまで出かかっているのに、どうしても出てこないことが..... |-----|
- 何を買いにその店に来たか、とっさに思い出せないことが..... |-----|
- 物をなくしてしまうことが..... |-----|
- 言おうとしていたことを思い出せないことが..... |-----|
- 期限までに間に合わせようとして急いだために、仕事が雑になってしまうことが..... |-----|
- テストなどで、いろいろ考えすぎて、時間が足りなくなってしまうことが..... |-----|
- 早く決めるように急がされると、かえって迷って決められなくなってしまうことが..... |-----|
- 時間に遅れそうになってあせってしまい、忘れ物をすることが..... |-----|
- テストや面接の時にあがってしまい、落ちついていたらもっとうまくできたのに、と後悔することが..... |-----|
- コンピュータやワープロが突然動かなくなり、原因を確かめる前にあわてて電源を切ってしまうことが..... |-----|
- 駅のホームに駆け上がり、行き先を確かめずにちょうど来た電車に乗ってしまうことが..... |-----|
- 買い物に行って、どれを買おうか迷ってしまい、結局いかげんに決めてしまうことが..... |-----|
- 用事が2つ重なると、一度に両方の用事を片づけようとして、かえって時間がかかることが..... |-----|
- 責任の重い仕事をまかされると、緊張してふだんの力が出せないことが..... |-----|
- 早く決めるように急がされると、よく考えずに決めてしまい、後で後悔することが..... |-----|
- もう少し待てば増えるとわかっているのに、つい目先の利益を選んで損をすることが..... |-----|
- 細かいことにこだわりすぎて、物事の全体的な局面を見すごしてしまうことが..... |-----|
- ある考えが頭に浮かぶと、それ以外の可能性について考えられなくなってしまうことが..... |-----|
- その日の予定が空いているかどうか、確かめないうで約束してしまうことが..... |-----|
- 頭に浮かんだことを、そのまま言ったり、したりしてしまうことが..... |-----|
- 残りのお金のことはよく考えないで、買い物をすることが..... |-----|
- 状況の変化に合わせて、自分の態度や考え方を柔軟に変えるのがむずかしいことが..... |-----|
- ささいなことが気になって、かんじんなことを考えるのに集中できないことが..... |-----|
- 単純な作業を繰り返して慣れてくると、気を抜いてしまってかえってミスすることが..... |-----|

資料 1 失敗傾向質問紙作成のための調査に用いた質問紙(45項目)

人は誰でも、毎日の生活の中で、いろんな失敗や間違いをします。いつもなら簡単にできるような慣れたことでも、ちょっとした原因で間違えてしまうこともあります。この調査は、いろいろな間違いや失敗が、どのぐらいの頻度で起こるのかを調べるためのものです。それぞれの項目を読んで、それらの出来事が、日頃のあなたにどれぐらいよく起こることかを答えて下さい。答は「非常によくある」「かなりある」「時々ある」「あまりない」「まったくない」の5つのうちから、当てはまるものを1つだけ選んで、○で囲んで下さい。○は必ずポイントの上につけて下さい。



非よ か 時 あ ま
 常く な ヲ々 ま っ
 にありあ あ りな たな
 る る る い くい

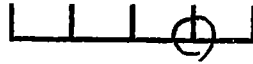
- 本や新聞を読みながらぼんやりしてしまい、内容を理解するためにもう一度読み直すようなことが……………
- 何か用事があってその部屋に行ったのに、何をするためだったのか思い出せないことが……………
- 道路に出ている看板や標識に気がつかないことが……………
- 左と右をまちがえることが……………
- 歩いている人とぶつかることが……………
- 出かけた後で、自分がちゃんと電気やガスを消したか、鍵をかけたかどうか思い出せず気になることが……………
- 人と会った時に、その人の名前を聞きのがしてしまうことが……………
- 失礼なことを言ってしまったかもしれないと後になって気づくことが……………
- 何かに熱中している時に人から話しかけられると、聞きのがしてしまうことが……………
- かんしゃくを起こして後悔することが……………
- 大事な手紙に何日も返事を書かないでおいておくことが……………
- 久しぶりにある場所に行こうとした時に、どこで曲がればいいのか思い出せないことが……………
- スーパーマーケットに行って、ほしい品物が目の前にあるのに、すぐに見つけれないことが……………
- 話している時に、自分が正しい意味で言葉をつかっているかどうか、急に気になることが……………
- 決心するまでに、あれこれ迷ってしまうことが……………
- 人との約束を忘れてしまうことが……………
- 手に持っていたものをなにげなくそこに置き、後になってどこに置いたか思い出せなくなるのが……………
- 次々にピーナッツやチョコを食べているうちに、うっかり殻や包紙の代わりに中身を捨ててしまうことが……………
- 何かを聞いていなければならない時に、ぼんやり他のことを空想してしまうことが……………
- 人の名前を思い出せないことが……………
- 何か一つのことをしている時に、つい他のことがしたくなってしまうことが……………

人は誰でも、毎日の生活の中で、いろいろな失敗やまちがいをします。いつもなら簡単にできることでも、ちょっとした原因でまちがえてしまったり、その時はこれで良いと思ってしたことでも、あとになって後悔することもあります。

この調査は、いろいろなまちがいや失敗が、人々の日常生活においてどのぐらいよく起こるのかを調べるためのものです。次の項目を読んで、それらのできごとが、日頃のあなたにどれぐらいよく起こることかを答えて下さい。

答は5つの選択肢のうちから当てはまるものを1つだけ選んで、○で囲んで下さい。○は必ずポイントの上につけて下さい。また行を間違えないように注意して下さい。

記入例



※ポイントの間に○をつけないで下さい。

非常に
よくある
かなりある
時々ある
あまりない
まったくない

手に持っていたものをなにげなくそこに置き、後になってどこに置いたか思い出せなくなることが.....

--	--	--	--	--

早く決めるように急がされると、よく考えずに決めてしまい、後で後悔することが.....

--	--	--	--	--

その日の予定が空いているかどうか、確かめないう約束してしまうことが.....

--	--	--	--	--

何か用事があるってその部屋に行ったのに、何をするためだったのか思い出せないことが.....

--	--	--	--	--

責任の重い仕事をまかされると、緊張してふだんの力が出せないことが.....

--	--	--	--	--

残りのお金のことはよく考えないで、買い物をするのが.....

--	--	--	--	--

何かを思い出そうとしていて、のどまで出かかっているのに、どうしても出てこないことが.....

--	--	--	--	--

細かいことにこだわりすぎて、物事の全体的な局面を見すごしてしまうことが.....

--	--	--	--	--

何を買いにその店に来たか、とっさに思い出せないことが.....

--	--	--	--	--

ささいなことが気になって、かんじんなことを考えるのに集中できないことが.....

--	--	--	--	--

人の名前を思い出せないことが.....

--	--	--	--	--

早く決めるように急がされると、かえって迷って決められなくなってしまうことが.....

--	--	--	--	--

非常に
よくある
かなりある
時々ある
あまりない
まったくない

駅のホームに駆け上がり、行き先を確かめずにちょうど来た電車に乗ってしまうことが.....

物をなくしてしまうことが.....

決心するまでに、あれこれ迷ってしまうことが.....

買い物に行って、どれを買おうか迷ってしまい、結局いかげんに決めてしまうことが.....

スーパーマーケットに行って、ほしい品物が目の前にあるのに、すぐに見つけれないことが.....

テストや面接の時にあがってしまい、落ちついていたらもっとうまくできたのに、と後悔することが.....

もう少し待てば増えるとわかっているのに、つい目先の利益を選んで損をすることが.....

何かを聞いていなければならぬ時に、ぼんやり他のことを空想してしまうことが.....

状況が変わっているのに、自分の態度や考え方を柔軟に変えられないことが.....

本や新聞を読みながらぼんやりしてしまい、内容を理解するために、もう一度読み直すようなことが.....

ある考えが頭に浮かぶと、それ以外の可能性について考えられなくなってしまうことが.....

コンピュータやワープロが突然動かなくなり、原因を確かめる前にあわてて電源を切ってしまうことが.....

何か一つのことをしている時に、つい他のことがしたくなってしまうことが.....

資料3-1 グループ10(女子短大生)における性格記述語の
パターン行列(主因子法・プロマックス回転)

	因子1	因子2	因子3	因子4	因子5
のんびりした	0.82	0.18	0.10	-0.17	0.08
のんきな	0.78	0.13	-0.17	-0.10	-0.23
ぼんやりした	0.72	-0.10	-0.17	0.07	-0.05
おっとりした	0.71	-0.17	-0.27	-0.08	0.13
ぬけた	0.64	-0.07	0.11	-0.02	-0.05
うっかりした	0.62	-0.11	-0.03	0.09	-0.08
てきばきした	-0.52	0.40	0.05	0.13	-0.03
ぐずぐずした	0.50	-0.17	0.09	0.21	0.16
おちよこちよいの	0.49	-0.05	0.14	0.10	0.12
ドジな	0.49	-0.21	-0.06	-0.05	-0.12
忘れっぽい	0.49	0.07	0.30	0.00	-0.02
不注意な	0.41	0.07	0.14	0.24	0.01
だらだらした	0.38	-0.06	0.27	0.36	-0.01
ルーズな	0.38	-0.02	0.37	0.09	0.05
だらしない	0.31	0.08	0.30	0.30	-0.26
頭の回転が早い	-0.16	0.69	0.10	-0.10	-0.02
もの覚えのいい	0.08	0.65	0.04	-0.20	-0.09
臨機応変な	0.04	0.63	0.03	-0.05	-0.14
決断力のある	-0.22	0.61	0.06	0.22	0.07
能率的な	-0.17	0.59	0.36	-0.23	0.03
判断力のある	-0.22	0.58	-0.06	0.31	0.05
有能な	0.06	0.53	-0.08	0.08	0.10
自分に厳しい	0.04	0.48	-0.10	0.01	0.27
無能な	0.03	-0.45	0.15	0.11	-0.09
分別のある	0.10	0.39	-0.11	0.06	0.21
不器用な	0.11	-0.34	0.12	0.12	0.04
器用な	-0.04	0.33	-0.17	-0.16	0.01
無責任な	0.09	0.13	0.75	-0.04	0.05
ていねいな	0.10	0.13	-0.72	0.19	0.06
無気力な	0.19	-0.09	0.67	-0.07	0.30
努力家	0.19	0.23	-0.65	0.28	0.03
なまけた	0.23	0.09	0.55	0.13	-0.07
ふざけた	-0.10	0.28	0.53	0.05	-0.13
せかせかした	-0.27	0.10	0.46	0.22	0.45
きちんとした	-0.03	0.02	-0.44	0.06	0.24
まじめな	0.28	0.19	-0.35	0.11	0.25
正確な	0.04	0.16	-0.31	-0.24	0.24
短気な	-0.22	-0.27	-0.10	0.69	0.14
感情的な	-0.01	0.06	-0.01	0.65	0.06
気の長い	0.37	0.37	0.06	-0.57	0.00
衝動的な	0.18	0.04	-0.05	0.57	0.14
大胆な	0.03	0.13	-0.21	0.54	-0.10
積極的な	-0.04	0.46	-0.31	0.52	-0.12
冷静な	0.06	0.35	0.03	-0.44	0.14
むこうみずな	0.23	0.12	0.08	0.38	0.07
軽はずみな	0.10	0.03	0.30	0.37	-0.08
なげやりな	0.21	0.07	0.31	0.32	0.00
神経質な	-0.09	-0.26	-0.09	0.30	0.82
用心深い	0.04	-0.04	-0.06	-0.17	0.68
完全主義の	-0.05	0.24	0.17	0.08	0.51
慎重な	0.01	0.16	-0.13	-0.20	0.46
注意深い	-0.18	0.07	-0.06	-0.18	0.40
思い切りの悪い	0.20	-0.36	0.08	-0.19	0.36
勤勉な	0.21	0.19	-0.26	0.16	0.31
確実な	-0.03	0.27	-0.21	-0.18	0.28

資料3-2 グループ11(女子会社員)における性格記述語の
パターン行列(主因子法・プロマックス回転)

	因子1	因子2	因子3	因子4	因子5
判断力のある	0.83	0.11	0.04	0.08	-0.02
大胆な	0.82	-0.12	0.02	0.28	-0.03
決断力のある	0.70	0.03	0.03	-0.02	-0.04
能率的な	0.66	0.08	-0.14	-0.01	-0.06
頭の回転が早い	0.64	0.14	-0.19	-0.20	-0.01
むこうみずな	0.61	-0.14	-0.19	0.36	0.17
ふざけた	0.55	-0.20	-0.10	0.24	0.13
有能な	0.53	0.19	0.14	-0.33	0.16
積極的な	0.52	-0.12	0.00	-0.27	0.14
臨機応変な	0.52	0.07	-0.05	0.17	-0.07
衝動的な	0.50	-0.11	-0.04	0.36	0.20
感情的な	0.47	-0.21	-0.25	0.22	0.27
分別のある	0.46	0.26	0.08	0.17	-0.19
もの覚えのいい	0.45	0.18	0.00	-0.26	0.04
思い切りの悪い	-0.42	0.37	-0.28	0.25	0.28
慎重な	-0.11	0.80	0.02	0.37	-0.07
完全主義の	-0.03	0.67	-0.31	-0.04	0.32
用心深い	-0.28	0.67	0.05	0.10	-0.04
注意深い	-0.11	0.66	0.00	-0.02	0.08
きちんとした	-0.09	0.64	-0.06	0.11	-0.25
ていねいな	-0.08	0.59	0.15	-0.37	0.04
勤勉な	0.31	0.58	0.02	-0.09	-0.06
努力家	0.35	0.50	0.31	0.18	-0.30
自分に厳しい	0.33	0.50	0.08	0.07	-0.18
確実な	0.14	0.49	-0.05	-0.32	0.16
器用な	0.24	0.48	0.05	0.03	-0.12
神経質な	-0.08	0.47	-0.33	-0.17	0.17
正確な	0.23	0.46	0.06	-0.20	0.02
まじめな	0.05	0.44	-0.12	0.19	-0.22
不器用な	-0.16	-0.37	-0.05	0.25	0.03
せかせかした	-0.16	0.12	-0.80	0.22	-0.10
のんびりした	-0.02	0.09	0.76	0.20	0.28
のんきな	-0.11	-0.18	0.74	0.32	0.04
おっとりした	0.01	-0.03	0.73	0.17	0.19
気の長い	-0.08	0.08	0.61	0.03	0.07
短気な	0.18	0.01	-0.57	-0.08	0.20
てきばきした	0.50	-0.06	-0.50	-0.05	-0.11
ぐずぐずした	-0.28	0.03	0.47	-0.03	0.45
冷静な	0.34	0.17	0.46	-0.27	0.12
ぼんやりした	-0.39	0.04	0.42	0.33	0.14
ぬけた	0.19	0.12	0.27	0.80	-0.05
ドジな	0.12	0.09	0.19	0.74	0.06
うっかりした	0.09	0.03	0.13	0.63	0.00
無能な	-0.20	0.02	-0.16	0.60	0.00
忘れっぽい	0.17	-0.02	0.14	0.56	0.07
不注意な	0.09	0.03	-0.04	0.54	0.21
軽はずみな	0.26	-0.01	-0.21	0.54	0.18
おちよこちよいの	-0.18	-0.02	0.05	0.46	-0.23
なげやりな	-0.20	-0.09	0.03	-0.06	0.75
だらしない	0.19	-0.04	0.13	0.09	0.71
だらだらした	-0.09	-0.09	0.16	-0.06	0.70
なまけた	0.17	0.00	0.34	-0.07	0.57
無気力な	-0.20	0.37	-0.13	0.37	0.54
ルーズな	0.06	-0.16	0.10	0.18	0.46
無責任な	0.10	-0.32	0.05	0.05	0.43

資料3-3 グループ12(男子大学生)における性格記述語の
パターン行列(主因子法・プロマックス回転)

	因子1	因子2	因子3	因子4	因子5
判断力のある	0.73	0.01	0.01	0.03	0.08
決断力のある	0.72	-0.11	-0.14	0.05	-0.02
積極的な	0.69	0.04	-0.24	0.20	0.00
頭の回転が早い	0.64	0.07	0.10	-0.14	0.14
大胆な	0.63	0.32	-0.21	0.25	-0.10
臨機応変な	0.60	0.25	0.05	-0.20	0.03
能率的な	0.59	-0.10	0.22	-0.04	0.08
てきぱきした	0.53	-0.25	-0.03	0.19	-0.05
有能な	0.53	0.10	0.13	-0.12	0.07
器用な	0.51	0.19	0.14	-0.23	0.03
思い切りの悪い	-0.50	0.05	0.31	0.10	0.13
もの覚えのいい	0.44	-0.22	0.10	-0.09	0.09
確実な	0.35	-0.26	0.35	0.05	0.12
なまけた	-0.01	0.77	0.13	-0.09	0.00
だらだらした	0.04	0.73	0.00	-0.14	0.12
ルーズな	0.12	0.64	-0.04	0.11	0.08
なげやりな	-0.06	0.61	0.13	0.06	-0.07
ふざけた	0.30	0.53	-0.17	0.07	0.03
だらしない	0.00	0.53	-0.12	0.15	-0.03
無責任な	0.01	0.49	-0.13	0.16	-0.08
自分に厳しい	0.22	-0.45	-0.02	0.37	0.09
勤勉な	0.18	-0.42	0.19	0.35	0.08
忘れっぽい	0.16	0.41	-0.03	0.34	0.10
ぐずぐずした	-0.17	0.41	0.15	0.20	0.29
衝動的な	0.08	0.38	0.23	0.31	-0.28
努力家	0.16	-0.34	0.24	0.29	-0.06
無気力な	-0.24	0.26	0.18	0.07	0.18
神経質な	-0.28	0.09	0.67	0.02	-0.33
慎重な	-0.06	0.06	0.65	-0.02	0.11
用心深い	-0.25	0.00	0.59	0.07	-0.02
まじめな	-0.02	-0.16	0.57	0.06	0.16
完全主義の	0.02	0.07	0.52	0.01	-0.23
正確な	0.32	-0.10	0.51	-0.05	0.08
ていねいな	0.03	-0.03	0.50	-0.06	0.03
きちんとした	0.17	-0.25	0.48	0.01	-0.11
注意深い	0.07	-0.04	0.47	0.02	0.30
冷静な	0.23	0.19	0.47	-0.35	0.05
分別のある	0.28	0.15	0.41	-0.24	0.11
ドジな	-0.21	-0.10	-0.08	0.73	0.26
おっちょこちょいの	-0.17	-0.10	0.04	0.59	0.03
うっかりした	-0.04	0.14	0.03	0.57	0.04
せかせかした	0.19	-0.04	0.03	0.48	-0.23
ぬけた	-0.08	0.26	-0.11	0.46	0.13
不注意な	0.08	0.43	0.00	0.46	-0.13
無能な	-0.29	0.06	0.01	0.40	0.00
不器用な	-0.38	-0.07	0.01	0.38	0.09
むこうみずな	0.18	0.06	-0.12	0.37	0.05
軽はずみな	0.02	0.31	-0.04	0.36	-0.26
ぼんやりした	-0.16	0.31	0.07	0.34	0.32
のんびりした	0.08	0.16	0.01	0.29	0.69
気の長い	0.20	-0.08	0.02	-0.02	0.55
おっとりした	-0.04	0.02	0.12	0.03	0.54
のんきな	0.12	0.32	0.14	0.19	0.51
感情的な	0.07	0.03	0.32	0.25	-0.48
短気な	0.06	0.10	0.28	0.32	-0.43

資料3-4 グループ13(女子大学生)における性格記述語の
パターン行列(主因子法・プロマックス回転)

	因子1	因子2	因子3	因子4	因子5
頭の回転が早い	0.69	0.32	-0.06	0.12	0.14
臨機応変な	0.65	-0.01	0.00	0.12	-0.12
積極的な	0.64	-0.09	0.25	-0.13	0.13
判断力のある	0.62	-0.07	-0.02	-0.12	-0.06
決断力のある	0.61	-0.20	-0.08	-0.09	0.01
不器用な	-0.59	0.08	0.28	-0.06	0.10
能率的な	0.58	0.26	-0.08	0.06	0.05
冷静な	0.52	0.25	-0.14	0.15	-0.38
有能な	0.49	0.40	0.14	-0.15	-0.04
大胆な	0.49	-0.24	0.33	-0.07	0.09
思い切りの悪い	-0.49	0.43	0.17	0.13	-0.10
てきぱきした	0.47	0.13	-0.19	-0.02	0.31
ぐずぐずした	-0.47	0.27	0.25	0.26	-0.09
もの覚えのいい	0.46	0.20	-0.14	0.03	0.18
器用な	0.44	0.13	-0.23	0.09	-0.05
衝動的な	0.33	-0.11	0.26	0.33	0.32
無能な	-0.33	-0.14	-0.08	0.31	0.17
慎重な	-0.05	0.73	-0.05	0.00	-0.08
注意深い	0.07	0.71	-0.13	0.06	0.02
完全主義の	-0.02	0.69	-0.10	0.12	0.31
用心深い	-0.21	0.64	-0.13	0.09	-0.08
きちんとした	0.02	0.61	-0.07	-0.18	0.03
神経質な	-0.29	0.59	-0.08	0.03	0.34
ていねいな	0.12	0.55	0.09	-0.03	-0.12
まじめな	0.07	0.54	0.17	-0.32	-0.04
分別のある	0.27	0.46	0.18	0.14	-0.07
自分に厳しい	-0.03	0.45	0.13	-0.25	-0.04
勤勉な	0.03	0.44	0.11	-0.42	-0.05
確実な	0.12	0.43	-0.30	-0.18	0.11
むこうみずな	0.18	-0.40	0.37	-0.02	0.17
正確な	0.05	0.33	-0.25	-0.22	0.13
おっちょこちょいの	0.05	0.02	0.74	-0.08	0.01
うっかりした	-0.07	-0.04	0.69	-0.07	0.11
ぬけた	-0.19	-0.04	0.69	-0.02	0.02
ドジな	-0.39	0.02	0.68	-0.22	0.08
不注意な	-0.08	-0.03	0.55	0.21	0.04
のんきな	0.06	-0.05	0.53	0.10	-0.36
ぼんやりした	-0.26	0.14	0.51	0.16	-0.10
忘れっぽい	0.02	-0.09	0.48	0.22	-0.03
だらだらした	0.02	0.12	0.11	0.73	0.00
ルーズな	0.14	0.01	0.30	0.62	-0.10
なまけた	-0.08	0.02	0.15	0.62	0.17
だらしない	0.08	0.03	0.18	0.59	0.12
無気力な	-0.24	0.15	-0.21	0.58	0.11
努力家	-0.01	0.30	0.34	-0.57	0.22
無責任な	0.03	-0.14	0.04	0.55	0.12
なげやりな	-0.12	-0.04	-0.08	0.45	0.22
軽はずみな	0.03	-0.23	0.21	0.27	0.27
気の長い	0.10	-0.09	0.07	-0.23	-0.62
おっとりした	-0.15	0.08	0.28	-0.08	-0.61
せかせかした	0.18	0.33	0.27	-0.01	0.61
のんびりした	-0.03	0.09	0.49	0.12	-0.56
短気な	-0.03	-0.05	0.15	0.24	0.47
感情的な	-0.06	-0.11	0.31	-0.03	0.42
ふざけた	0.10	-0.13	0.02	0.25	0.34

資料 4

京大 NX 式知能検査における反応指標の分布図

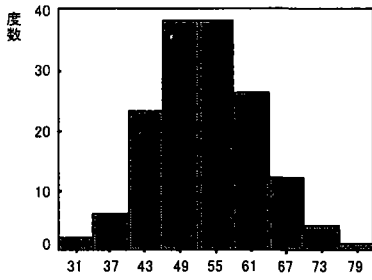


図7-2-1a 類似反対語・偏差値の分布

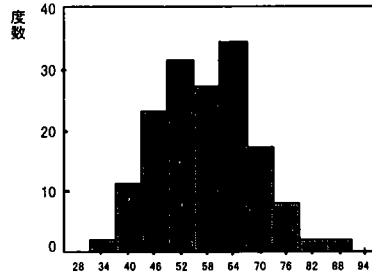


図7-2-2a 重合板・偏差値の分布

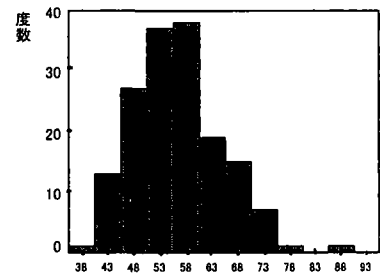


図7-2-3a 計算法・偏差値の分布

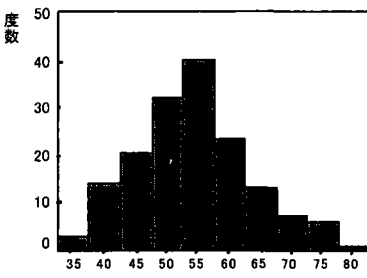


図7-2-4a マトリックス・偏差値の分布

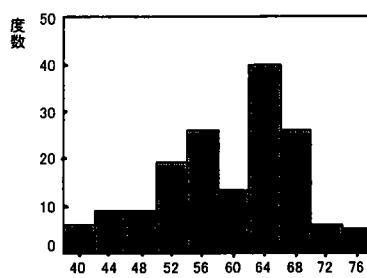


図7-2-5a 文章完成・偏差値の分布

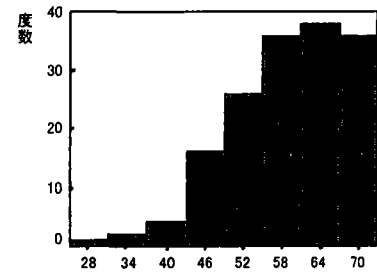


図7-2-6a 日常記憶・偏差値の分布

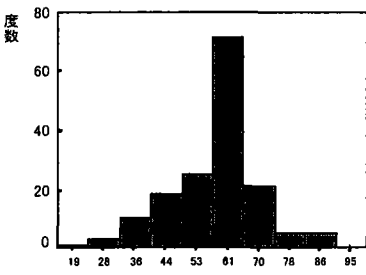


図7-2-7a 折紙パンチ・偏差値の分布

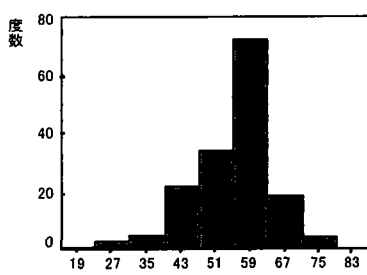


図7-2-8a 符号交換・偏差値の分布

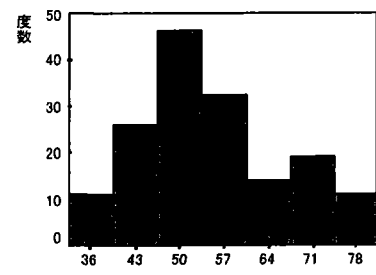


図7-2-9a 図形分割・偏差値の分布

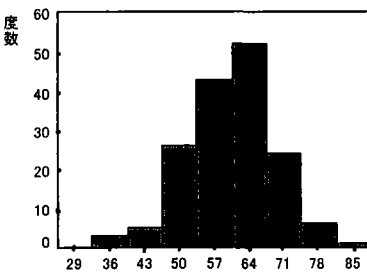


図7-2-10a 乱文構成・偏差値の分布

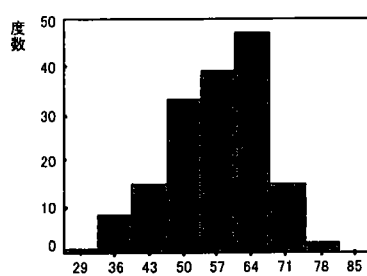


図7-2-11a ソシオグラム・偏差値の分布

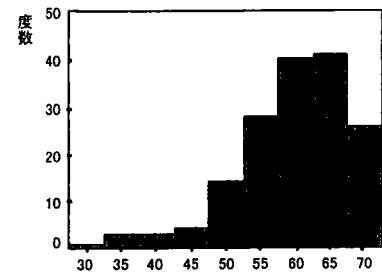


図7-2-12a 単語完成・偏差値の分布

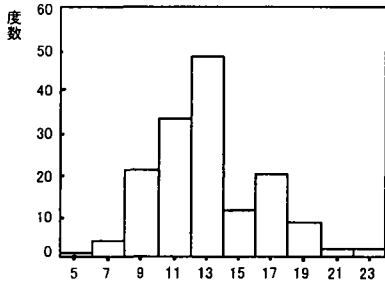


図7-2-1b 類似反対語・反応数の分布

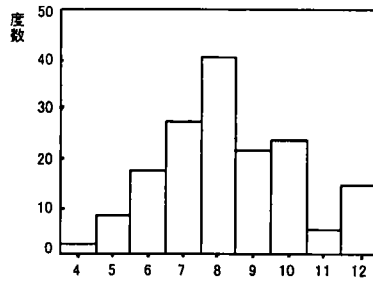


図7-2-2b 重合板・反応数の分布

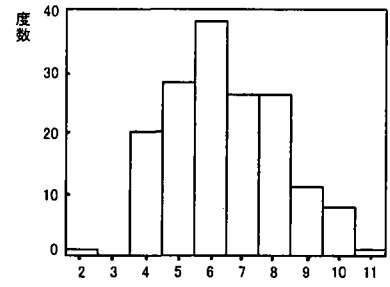


図7-2-3b 計算法・反応数の分布

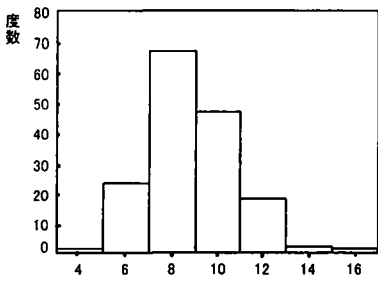


図7-2-4b マトリックス・反応数の分布

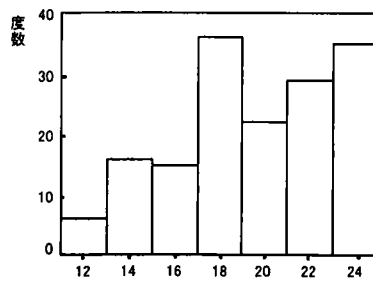


図7-2-5b 文章完成・反応数の分布

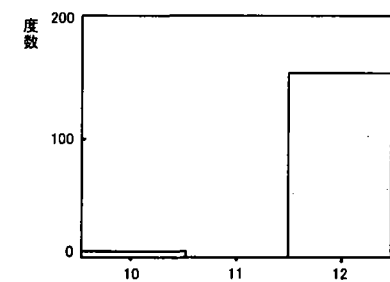


図7-2-6b 日常記憶・反応数の分布

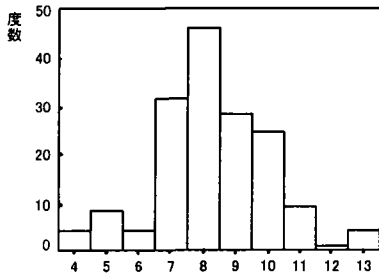


図7-2-7b 折紙パンチ・反応数の分布

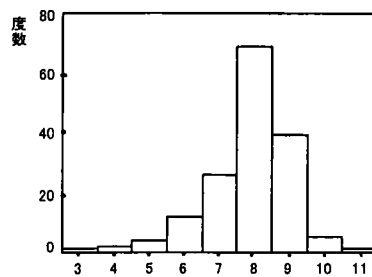


図7-2-8b 符号交換・反応数の分布

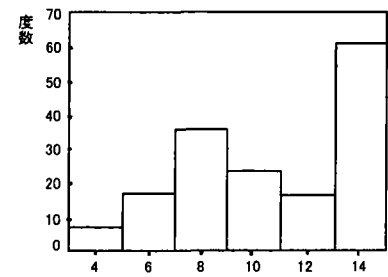


図7-2-9b 図形分割・反応数の分布

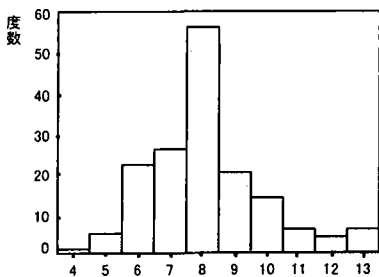


図7-2-10b 乱文構成・反応数の分布

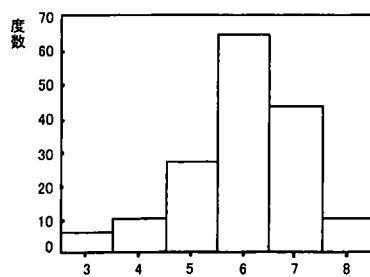


図7-2-11b ソシオグラム・反応数の分布

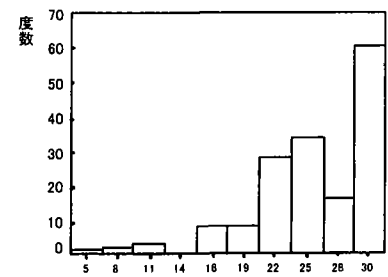


図7-2-12b 単語完成・反応数の分布

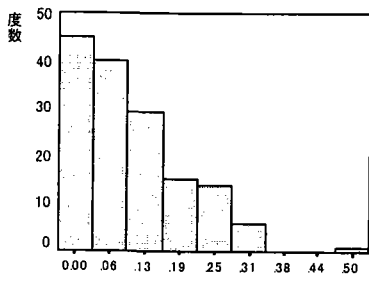


図7-2-1c 類似反対語・エラー率の分布

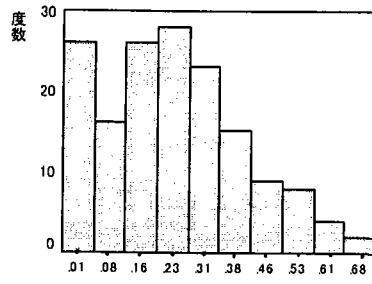


図7-2-2c 重合板・エラー率の分布

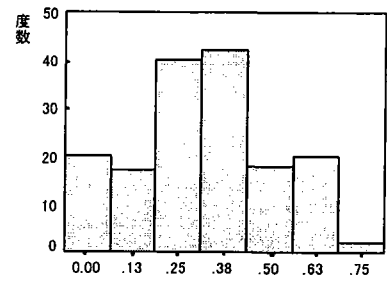


図7-2-3c 計算法・エラー率の分布

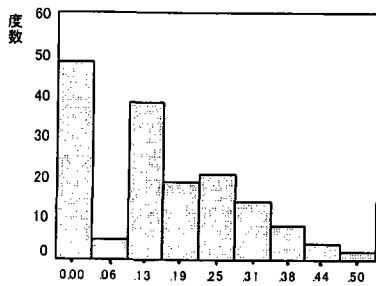


図7-2-4c マトリックス・エラー率の分布

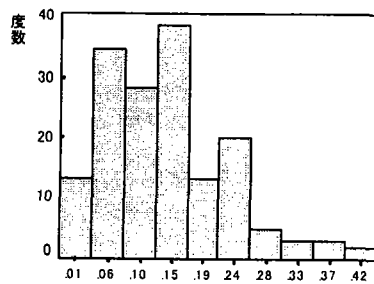


図7-2-5c 文章完成・エラー率の分布

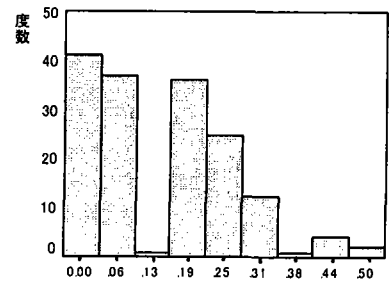


図7-2-6c 日常記憶・エラー率の分布

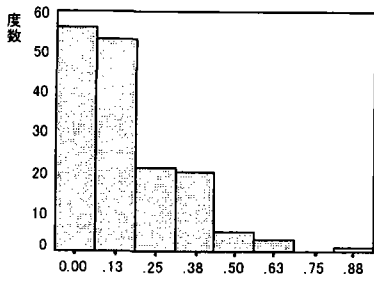


図7-2-7c 折紙パンチ・エラー率の分布

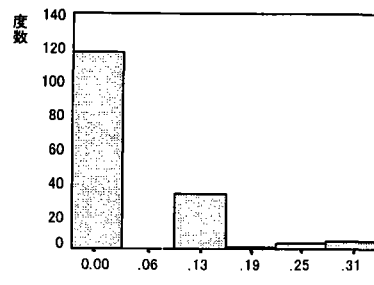


図7-2-8c 符号交換・エラー率の分布

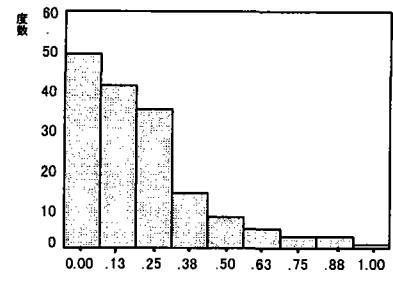


図7-2-9c 図形分割・エラー率の分布

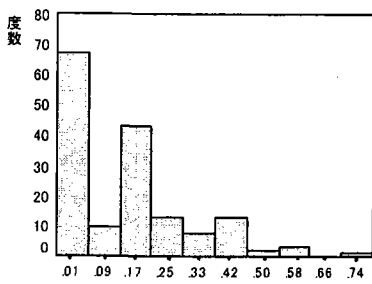


図7-2-10c 乱文構成・エラー率の分布

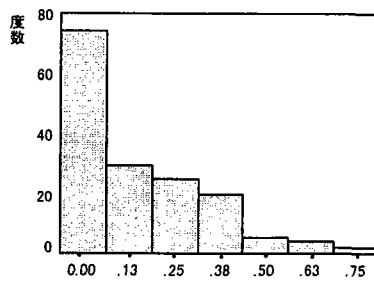


図7-2-11c ソシオグラム・エラー率の分布

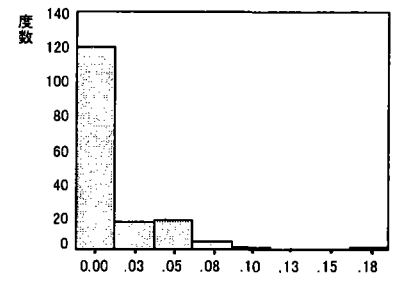


図7-2-12c 単語完成・エラー率の分布

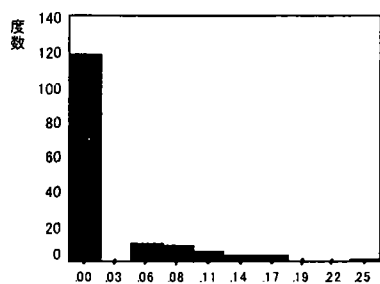


図7-2-1d 類似反対語・省略率の分布

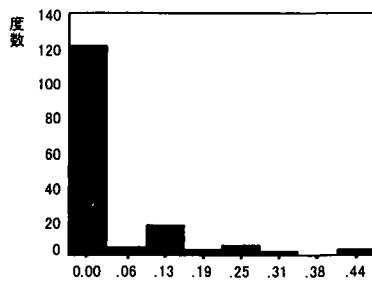


図7-2-2d 重合板・省略率の分布

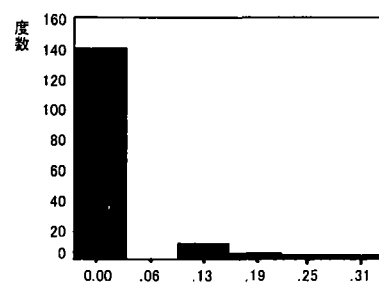


図7-2-3d 計算法・省略率の分布

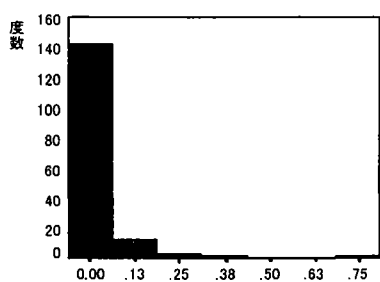


図7-2-4d マトリックス・省略率の分布

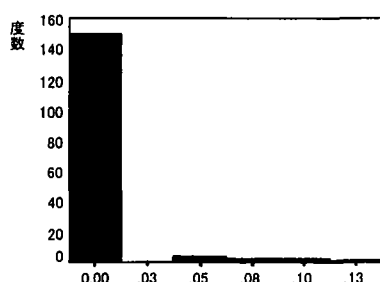


図7-2-5d 文章完成・省略率の分布

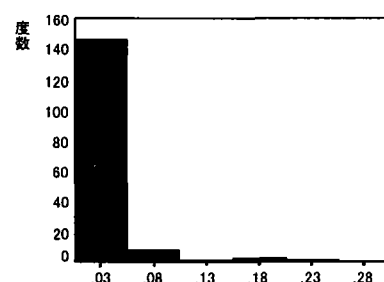


図7-2-6d 日常記憶・省略率の分布

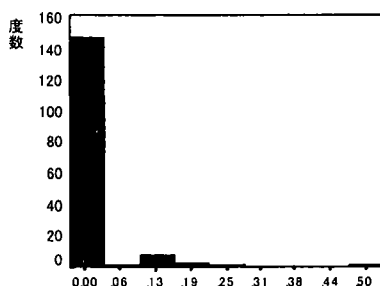


図7-2-7d 折紙/パンチ・省略率の分布

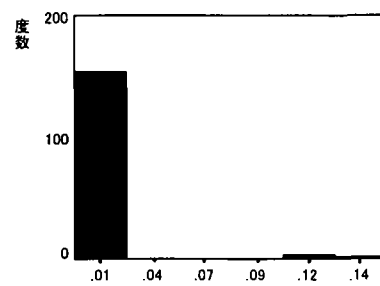


図7-2-8d 符号交換・省略率の分布

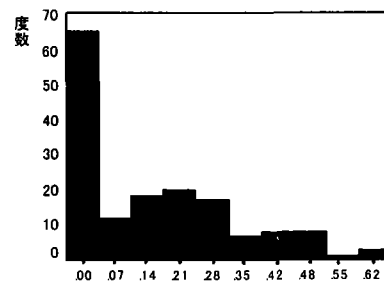


図7-2-9d 図形分割・省略率の分布

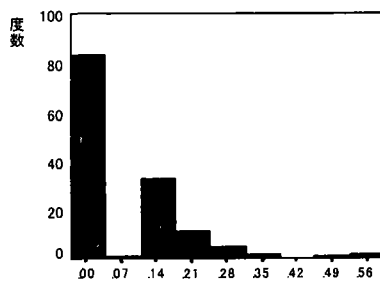


図7-2-10d 乱文構成・省略率の分布

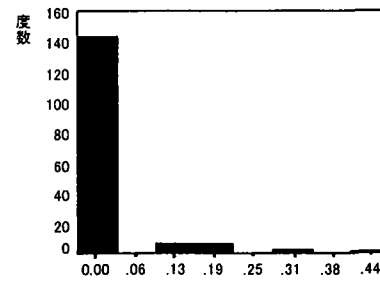


図7-2-11d ソシオグラム・省略率の分布

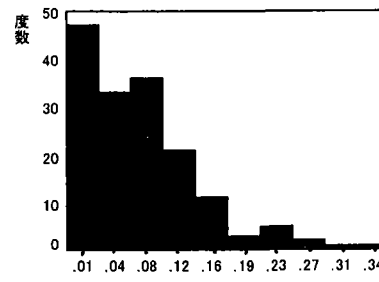
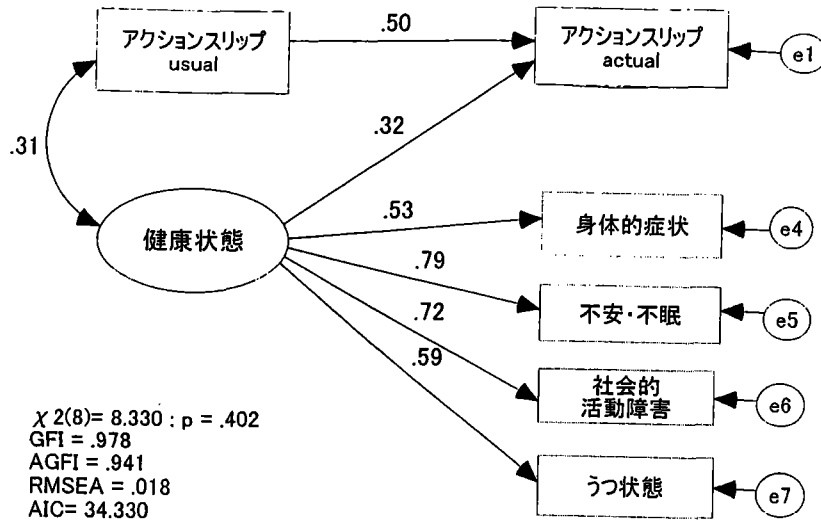


図7-2-12d 単語完成・省略率の分布

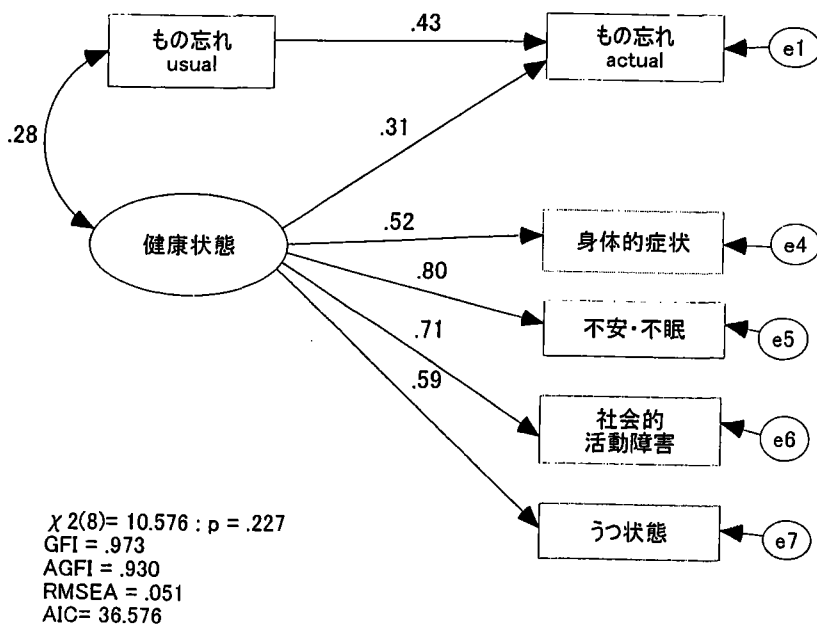
※ 資料 5 : 京大 NX 式知能検査における誤答の種類とその頻度は著者に直接請求して下さい。

資料 9

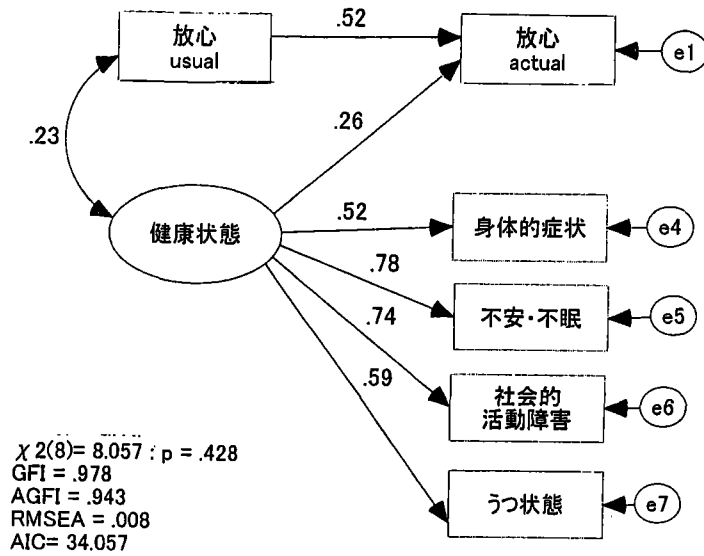
失敗傾向の usual 得点と健康状態から actual 得点を説明するパス図



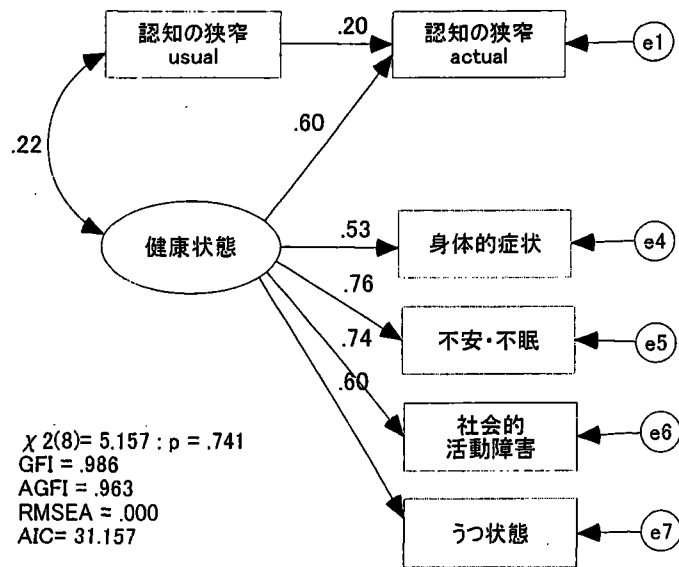
資料 9-1 “アクションスリップ”のパス図



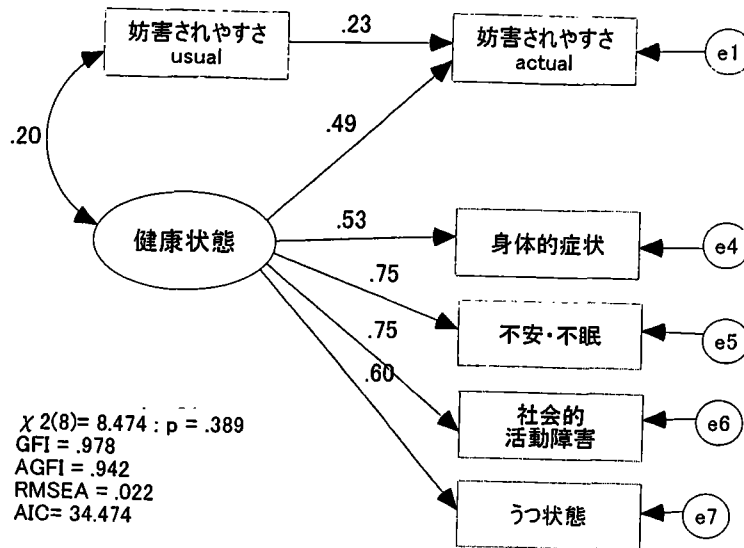
資料 9-2 “もの忘れ”のパス図



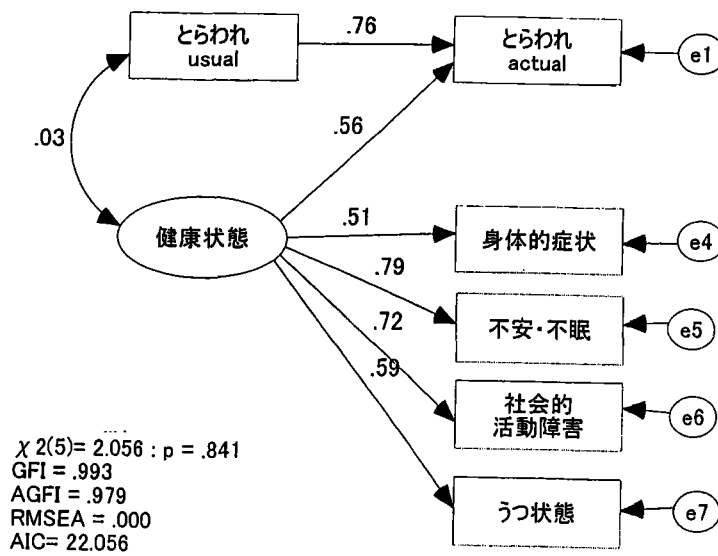
資料 9-3 “放心”のパス図



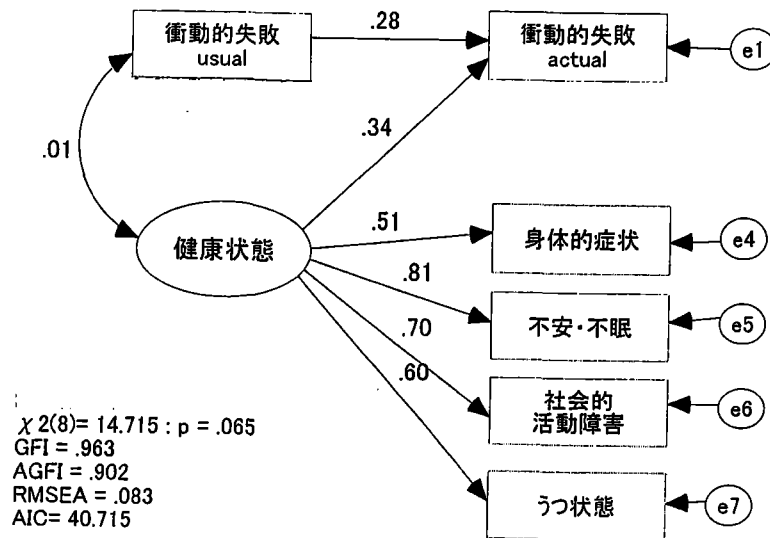
資料 9-4 “認知の狭窄”のパス図



資料 9-5 “妨害されやすさ”のパス図



資料 9-6 “とらわれ”のパス図



資料 9-7 “衝動的失敗”のパス図

謝 辞

本論文をまとめるにあたり、主査の秦 一士先生、副査の辻 平治郎先生、大倉正暉先生には御多忙中にも関わらず格別の御指導を頂きました。また心理学教室の先生方には拙い予稿を丹念に読んで頂き、数々の貴重なコメントを頂きました。ここに記して感謝を捧げます。辻先生にはいくつかの共同研究に加えて下さったこと、筆者が勤務する甲南女子大学心理相談研究センターのセンター長として相談業務と研究の両立が可能になるよう御配慮下さいましたことにも御礼を申し上げます。またその共同研究を通して藤島 寛先生からは、研究者として広い視野を持つことの重要性を教えて頂きました。

博士後期課程に進んでからこの論文がまとまるまでに十数年の時間を要したのはひとえに筆者の不勉強によるものです。中でも学部時代から御指導頂いた大野晋一先生、梅本堯夫先生に完成した論文をお目につけられなかったことが悔やまれます。梅本先生は昨年九月に急逝されましたが、五月に論文作成に取りかかったことをご報告し、構成に関するご助言と暖かい励ましを頂いたことが今も思い出されます。また大学院で大野先生の厳しく且つ暖かい御指導を受けられたことは、執筆中の大きな支えとなりました。お二人にはここで改めて感謝を捧げたいと思います。

平成 15 年 1 月

山田 尚子